茨城県教育財団文化財調査報告第17集

石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2

新池台遺跡

寄贈図書
1983年 8月18日 受領
筑波大学歴史・人類学系

昭和58年3月

財団法人　茨城県教育財団

石岡都市計画事業南台土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書　2

正　　誤　　表

ページ	行	誤	正
目　　次	16	2. 堅　穴	2. 竪　穴
5	26	テスピット	テストピット
13	16	堅　高	壁　高
23	5	住　居	住居跡
23	15・29	貢　岩	頁　岩
38	11	踏みかけめ	踏みかため
39	図　中(ゴシック)	SI−15	SI−16
39	〃（　〃　）	SI−16	SI−15
66	18	遺　物	遺　跡
68	11	除　々	徐　々
94	1	拓影図	拓影図（2）
107	3	第78図2	第77図2
153	1	住居跡	方形周溝遺構
154	1	方形周溝墓	方形周溝遺構
155〜156	1	方形周溝墓	方形周溝遺構
159〜160	2	黒　浜	黒浜期
159〜160	3	諸　磯	諸磯期
161〜162	1	□　弥生	▩　弥生
173	21	助　骨	肋　骨
174	2	孤	弧

210.231
I 81
NB
寄贈
歴史・人類学系
平成 年 月 日

茨城県教育財団文化財調査報告第17集

石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2

新池台遺跡

昭和58年3月

財団法人　茨城県教育財団

96605119

序

住宅・都市整備公団による「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業」は，昭和49年度に計画され，石岡市の市街化整備の一端を担うものとして期待されております。

この事業地内に存在する埋蔵文化財について記録保存するため，財団法人茨城県教育財団が住宅・都市整備公団から委託を受けて，昭和54年度から発掘調査を実施してきましたが，新池台遺跡については，昭和56年度に発掘調査を行い，昭和57年度に整理し，前年度に刊行された兵崎遺跡・大谷津Ａ遺跡・対馬塚遺跡・大谷津Ｂ遺跡・大谷津Ｃ遺跡・外山遺跡に次いで報告書を発刊することになりました。

原始・古代の遺構・遺物等数多くの資料が発見され，郷土の歴史の解明に大きな成果を挙げることができました。ここに本書が教育・文化の向上の一環として広く活用されることを希望いたします。

なお，調査及び整理にあたりましては，委託者の住宅・都市整備公団をはじめ，御指導，御協力をいただいた茨城県教育委員会，石岡市教育委員会及び地元関係者各位に対し深く感謝の意を表します。

昭和５８年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　**大　金　新　一**

例　　言

1　本書は，財団法人茨城県教育財団が住宅・都市整備公団との委託契約に基づいて，昭和56年4月から昭和57年2月にわたって調査した茨城県石岡市に所在する「新池台遺跡」の発掘調査報告書である。

2　昭和56年度の新池台遺跡に関する組織は，下表のとおりである。

理事長		竹内　藤男	（～昭和56年11月）
		大金　新一	（昭和56年12月～）
副理事長		古橋　　靖	
常務理事		川野辺四郎	（～昭和57年3月）
		綿引　一夫	（昭和57年4月～）
事務局長		小林　義久	
調査課長		寺内　　寛	
企画	班長	圷　　秀雄	班長（～昭和57年5月）
	班長	今村　信夫	〃（昭和57年6月～）

管理班	主任調査員	加藤　雅美	
	主事	鈴木　三郎	
	主事	海老沢一夫	
	主事	綿引　良人	
調査第一班	班長	倉本冨美男	（昭和56年度　班長）
	主任調査員	安蔵　幸重	（昭和56年度　調査）
	主任調査員	和田　雄次	（昭和56年度　調査　昭和57年度　執筆）

3　出土遺物の整理及び本報告書の編集は，発掘担当者の協力を得て和田雄次が行った。

4　本文中および挿図に使用した記号は，次のとおりである。

ＳＩ－住居跡　　ＳＫ－土壙　　ＳＸ－方形周溝遺構　　Ｐ－柱穴

5　本報告書で使用したスクリーントーンの表示は，次のとおりである。

－炉跡　－焼土　－内黒土器　－朱彩土器

－石器磨痕

6　土層解説および土器の色調については，小山正忠・竹原秀雄編「新版標準土色帖」日本色研事業株式会社　昭和42年発行　を用い，記号化して表した。

7　本書で使用したレベル値は海抜高であり，住居跡・土壙・ピット等の深さは，それぞれの確認面からの計測値である。

8　発掘調査や出土遺物の整理等に際して，御指導や御協力を賜わった関係諸機関及び関係各位に深く感謝の意を表したい。

目　　次

序

例　言

目　次

第１章　調査の経緯……1

　　１　調査に至る経過……1

　　２　調査の経過……1

　　（１）調査区画と調査方法……1

　　（２）調査経過……3

第２章　位置と環境……5

　　１　地理的環境……5

　　２　遺跡の地質（テストピット）……5

　　３　歴史的環境……6

第３章　遺構と遺物……10

　　１　層序及び遺構について……10

　　２　竪穴住居跡……13

　　３　土壙……125

　　４　方形周溝遺構……148

第４章　まとめ……158

　　１　住居跡について……158

　　２　土壙について……167

　　３　方形周溝遺構について……168

　　４　遺物について……168

第1章　調　査　の　経　緯

1　調査に至る経過

「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査は，昭和54年12月から財団法人茨城県教育財団が行ってきた。

当事業区内には，茨城県教育委員会が昭和49年に埋蔵文化財の分布調査及び昭和53年に再度分布調査を兼ねた確認調査によって，７か所の遺跡が確認されたが，現状保存が困難になったので，発掘調査を行うこととなった。昭和54年度に「兵崎遺跡」・「大谷津Ａ遺跡」を調査し，昭和55年度は「対馬塚遺跡」・「大谷津Ｂ遺跡」・「大谷津Ｃ遺跡」・「外山遺跡」を調査している。(注)

昭和56年度は，４月から昭和57年の３月までの期間で，一部継続調査の「外山遺跡」と，新たに,「新池台遺跡」の調査を実施することで日本住宅公団と茨城県教育財団との間で委託契約を締結し，当教育財団が前年度に引き続き調査第１班を配置して調査業務を進めてきた。

なお，日本住宅公団は昭和56年10月１日付をもって宅地開発公団と統合し，新たに「住宅・都市整備公団」として発足した。これに伴い，従来の契約によって生じた権利・義務はそのまま新公団に承継されることになった。

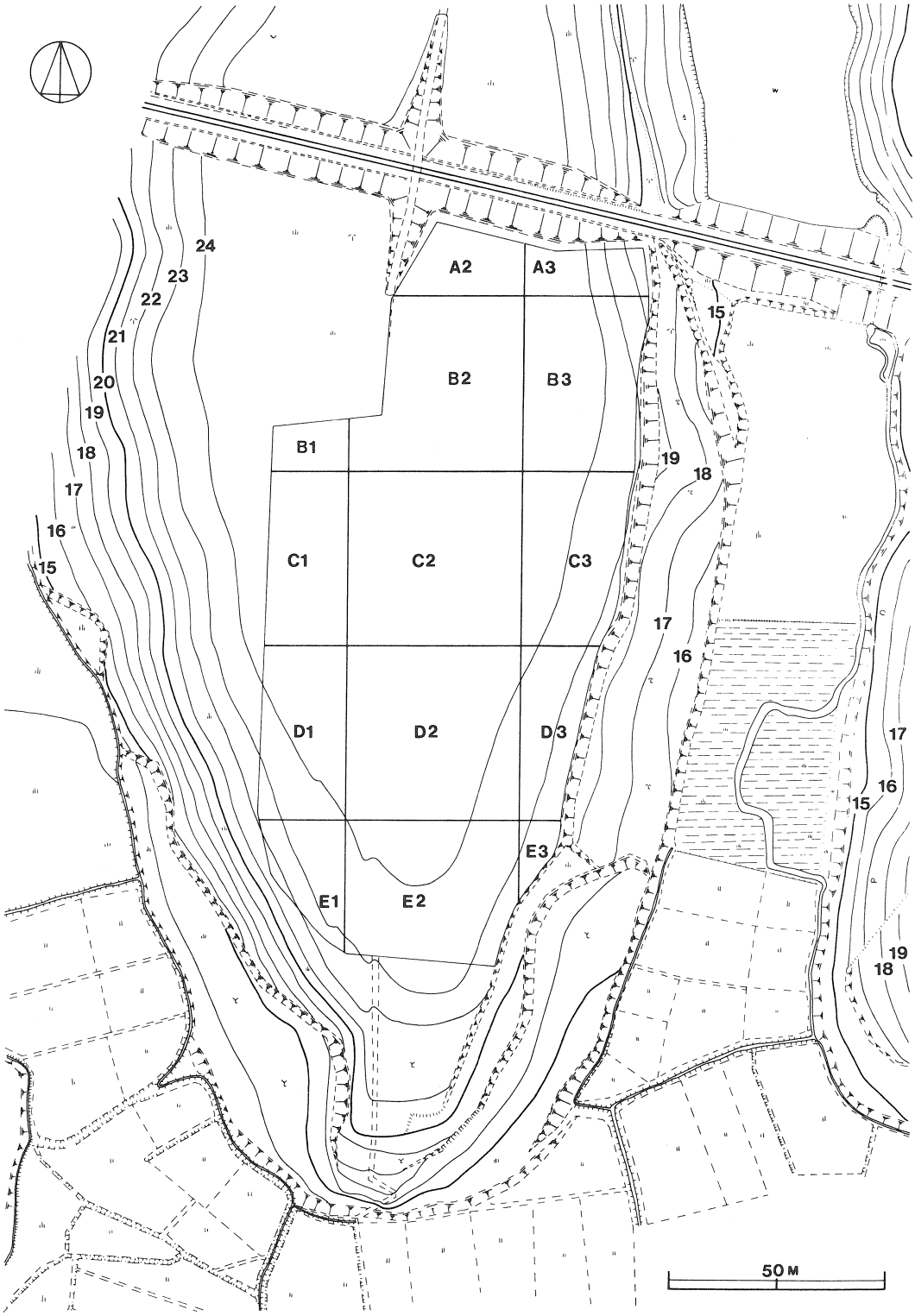
注　「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」　財団法人茨城県教育財団　昭和57年３月

2　調査の経過

(1)　調査区画と調査方法

調査区設定は日本住宅公団の杭（IP４，Ｘ軸20.112km，Ｙ軸41.491.50km）を平行移動し，平面直角座標系ＩＸ座標，Ｘ軸20.120km，Ｙ軸41.600kmの交点に基準杭を打ち，南北のＸ軸，東西のＹ軸に各々40ｍずつ移動して，遺跡内に14個の大調査区を設定した。さらにその大調査区内を４ｍ四方の小調査区に分割した。すなわち，40ｍ四方の一大調査区内に100個の小調査区が設定されるわけである。

また，調査区名称は，大調査区において北から南へアルファベット大文字で「Ａ」・「Ｂ」・「Ｃ」…「Ｉ」・「Ｊ」,西から東へ数字で「１」・「２」・「３」…「９」・「０」と表現し,小調査区においても北から南へアルファベット小文字で「ａ」・「ｂ」・「ｃ」・……「ｉ」・「ｊ」とし，西から東へ数字で「１」・「２」・「３」……「９」・「０」と表示した。小調査区のグリット固有名称を大調査区と，

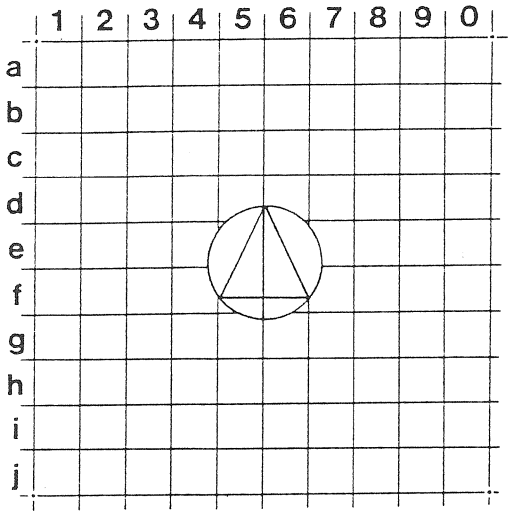


第1図　新池台遺跡全体図

小調査区の名称を合わせた４桁で「A1a$_1$」・「B2c$_3$」・「C3f$_9$」のように表現した。

発掘方法は分層調査で実施し，住居跡は原則として四分法，土壙は二分法で実施した。記録の行程は土層断面写真撮影→土層断面図作成→平面写真撮影→平面図作成→断面図作成の順で行い，出土遺物については原位置でレベル値を出し，平面図作成を行った。

さらに，表土中に篠根がはびこり，手掘りが困難なため，重機を導入し，表土のみを排除した。



第２図　小調査区名称図

(2)　調査経過

発掘担当者は大谷津所在の調査事務所を前年度に引き続き使用し，石岡市教育委員会，住宅・都市整備公団南台地区開発課事務所等と連絡を取りながら，発掘調査に携わる作業員の募集・発掘器材の搬入・調査区設定等の諸準備を進め，昭和56年４月から作業員を投入して，工事用道路に係る北西部1,000㎡を先行調査した。その後，前年度から継続の外山遺跡を調査終了させ，新池台遺跡調査を７月から再開した。以下経過を簡単に記したい。

昭和56年４月　13日から伐開及び清掃，杭打ち作業後，21日から幅２ｍ，長さ８ｍのトレンチで遺構確認の試掘を行う。方形周溝と思われる溝２条を確認する。月末，溝の精査を完了する。

７月　６月末の草刈り後，幅１ｍ，長さ12ｍのトレンチで遺構確認を行う。篠根の張りが著しいため，重機によって表土排除の作業を行った。中旬に杭打ち，下旬にはＡ区より遺構の調査を開始した。

８月　Ａ・Ｂ区（住居跡及び土壙）の精査を行う。中旬，盆休業のため調査を中断する。

９月　方形周溝遺構の精査（２号から５号まで）を行う。２・３号は，小規模の方形周溝遺構であった。また，溝内の精査は後日にまわした。

10月　上旬にＡ・Ｂ区の住居跡15軒，土壙11基の調査を終了。中旬にＥ区の住居跡２軒，土壙６基，下旬にＣ区の住居跡のみ17軒の精査を始める。また，中旬には東

京電機大学附属高校教諭鈴木敏弘氏を招いて「方形周溝遺構」の班内研修を行い，下旬には同遺構の調査を終了する。

11月　中旬にＥ区の調査を終了する。続いて，Ｄ区の精査を始めると同時にＣ区を一段掘り下げて遺構（主に土壙）を確認する。

12月　中旬にＤ区の調査（住居跡のみ８軒）を終了。また，Ｄ区の土壙群の調査を終了させ，Ｃ区の土壙群の精査に入る。23日から年末年始の休業に入り，調査を一時中断する。

昭和57年１月　７日から調査を再開，中旬にＣ区の土壙群調査を終了。下旬に清掃を始め，29日に遺跡全体の写真撮影を行った。

２月　上旬に図面，写真の整理及び補足調査を実施した。中旬に現地説明会を行い，２月16日にすべての発掘調査を終了した。

第2章　位　置　と　環　境

1　地理的環境

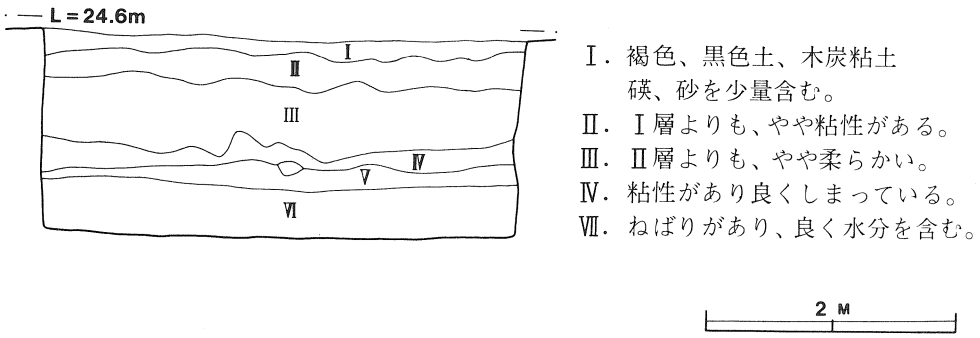
石岡市は茨城県のほぼ中央にあり，筑波山系の東方霞ヶ浦の北西端に位置し，東西12.9km・南北10.4km・総面積63.3km²を有し，北は八郷町・美野里町，南は出島村・玉里村・霞ヶ浦，西は千代田村に接し，国道6号線が市の中央部を通っている。

当地は，常総台地の北部に連なり，北西部にある竜神山から霞ヶ浦沿岸へ東方に伸びた石岡台地と，筑波山系の南端が霞ヶ浦に突出した出島台地の北端部にある三村・関川台地と，この二つの台地にはさまれた恋瀬川沿岸の低地を含めた地域からなっている。また，石岡台地は恋瀬川と北方の園部川とにはさまれた標高20～30mの広範囲な平坦面をもつ洪積台地であるが，北西部の柏原池を水源として市内中央部を流れ，高浜地区で恋瀬川に合流し霞ヶ浦に流れこむ山王川によって二分されている。さらに，石岡台地は恋瀬川・山王川の河川の支谷によって複雑な樹枝状に刻まれた浅い沖積低地が形成されており，谷頭にも水田が開かれている。

このたび発掘調査を実施した新池台遺跡は，上記の石岡台地の一部で，東京都心から北東約70km，水戸から南西約27km，石岡市街地中心から南東約1kmの位置にあって，山王川流域の小谷津に北から突出した標高24～25mほどの舌状台地の南端に立地する。遺跡の北側に接して関東鉄道鉾田線が走り，南は山王川をはさんで「ばらき台団地」に対し，水田面との比高は約14mを測る。

本遺跡の西側には小支谷を隔てて一昨年度調査した「兵崎遺跡」，東側には約300m離れて「大谷津A遺跡」が所在している。

2　遺跡の地質



第3図　テスピット断面図

3　歴史的環境

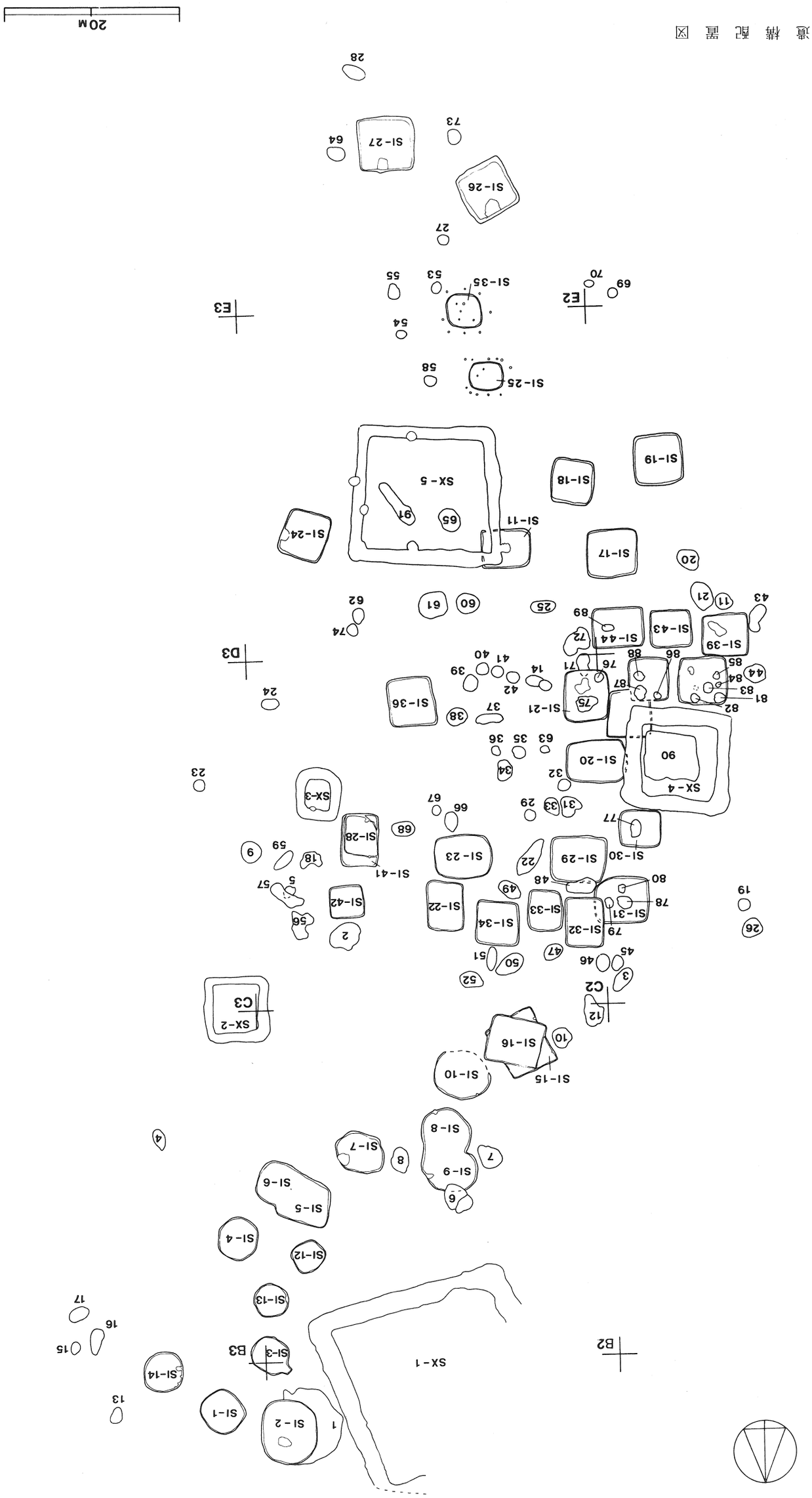
霞ヶ浦沿岸は歴史の宝庫といわれ，古くから考古学的調査の対象となり，先史文化の解明に大きな役割を果たしてきた。

石岡市史によると，洪積世の先土器時代の遺物が「宮平遺跡」から発見されており,「正月平遺跡」からもナイフ形石器が採集されている。

洪積世から沖積世に移り縄文時代に入ると，支谷の奥部や三村・関川台地の縁辺部に遺跡の存在がみられる。昭和54年度に茨城県教育財団（以下「当財団」という）によって発掘調査がなされた「宮部遺跡」からは縄文草創期の表裏縄文土器が出土している。縄文早期の遺跡としては，田戸下層式土器を出土した「染谷遺跡」,茅山式土器を出土した「高根貝塚」や「三村地蔵窪貝塚」が存在し，縄文前期の遺跡としては，当財団が昭和55年度に調査した「対馬塚遺跡」からは関山式土器が出土し，同じく昭和54年度調査の「大谷津Ａ遺跡」からは浮島式土器,「大谷津Ｂ遺跡」から浮島・諸磯式の土器が出土している。縄文中期の遺跡としては，前述の「対馬塚遺跡」からは阿玉台式が出土しているほか，恋瀬川にのぞむ台地上の「餓鬼塚遺跡」(昭和54年７月，茨城県道路公社調査）などがあり，阿玉台～加曽利Ｅ式土器を出土している。また，園部川右岸の「東大橋原遺跡」(昭和52年～石岡市教委調査）はフラスコ状土壙群を有する遺跡で，阿玉台・加曽利Ｅ式土器を出土している。縄文後期は，霞ヶ浦周辺の台地上に貝塚を伴って営まれ，広範囲にわたって土器の散布が認められている。堀の内式土器を出土している「御前山遺跡」・「海老坪遺跡」・「下宮遺跡」などの存在がみられる。しかし縄文晩期の遺跡，遺物は現在確認されていない。

弥生時代の遺跡は，昭和54年度に当財団が調査した「兵崎遺跡」,昭和55・56年度調査の「外山遺跡」からは弥生期の住居跡が検出されている。現状では，弥生時代の遺跡数は少ないが，今後の調査によって増加するであろう。

古墳時代から奈良時代にかけては，霞ヶ浦北部地域一帯が茨城県下でも遺跡の最も密なところとして知られ，特に石岡市は，常陸国府として栄え,「国衙」・「国分寺」・「国分尼寺」などがおかれたところで，常陸国の政治文化の中心であった。古墳時代では前述の「外山遺跡」から五領・鬼高期の住居跡を検出したほか「餓鬼塚遺跡」でも鬼高期の住居跡を検出している。恋瀬川に面する台地には，県内最大の大きさを誇る前方後円墳の国指定史蹟「舟塚山古墳」,そこから約300ｍ離れて相対している前方後円墳の「愛宕山古墳」がある。歴史時代では，飛鳥時代末期に建立されたと推定される小目代の「茨城廃寺」,昭和54年度当財団調査の「鹿の子Ａ遺跡」,また，昭和54年～56年調査の「鹿の子Ｃ遺跡」は，８世紀～９世紀の国府関係遺跡とみられる。


SX－1
B2
SI－1
SI－2
SI－3
B3
SI－4
SI－5
SI－6
SI－7
SI－8
SI－9
SI－10
SI－11
SI－12
SI－13
SI－14
SI－15
SI－16
SX－2
C3
C2
SI－17
SI－18
SI－19
SI－20
SI－21
SI－22
SI－23
SI－24
SI－25
SI－26
SI－27
SI－28
SI－29
SI－30
SI－31
SI－32
SI－33
SI－34
SI－35
SI－36
SI－39
SI－41
SI－42
SI－43
SI－44
SX－3
SX－4
SX－5
D3
E2
E3
20m

第5図　遺構配置図

参考文献

「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」　当財団　昭和57年３月

「日本地誌５」　関東地方総編　茨城県　栃木県　昭和50年３月

「石岡市東大橋原遺跡」　石岡市教育委員会　昭和55年３月

「常陸国餓鬼塚遺跡調査報告」　茨城県道路公社　昭和55年９月

「語りかける古代のいしおか」　石岡ロータリークラブ　昭和57年３月

「石岡市史」　石岡市史編纂委員会　昭和54年２月

「茨城県遺跡地図」　茨城県教育委員会　昭和52年３月

第3章　遺　構　と　遺　物

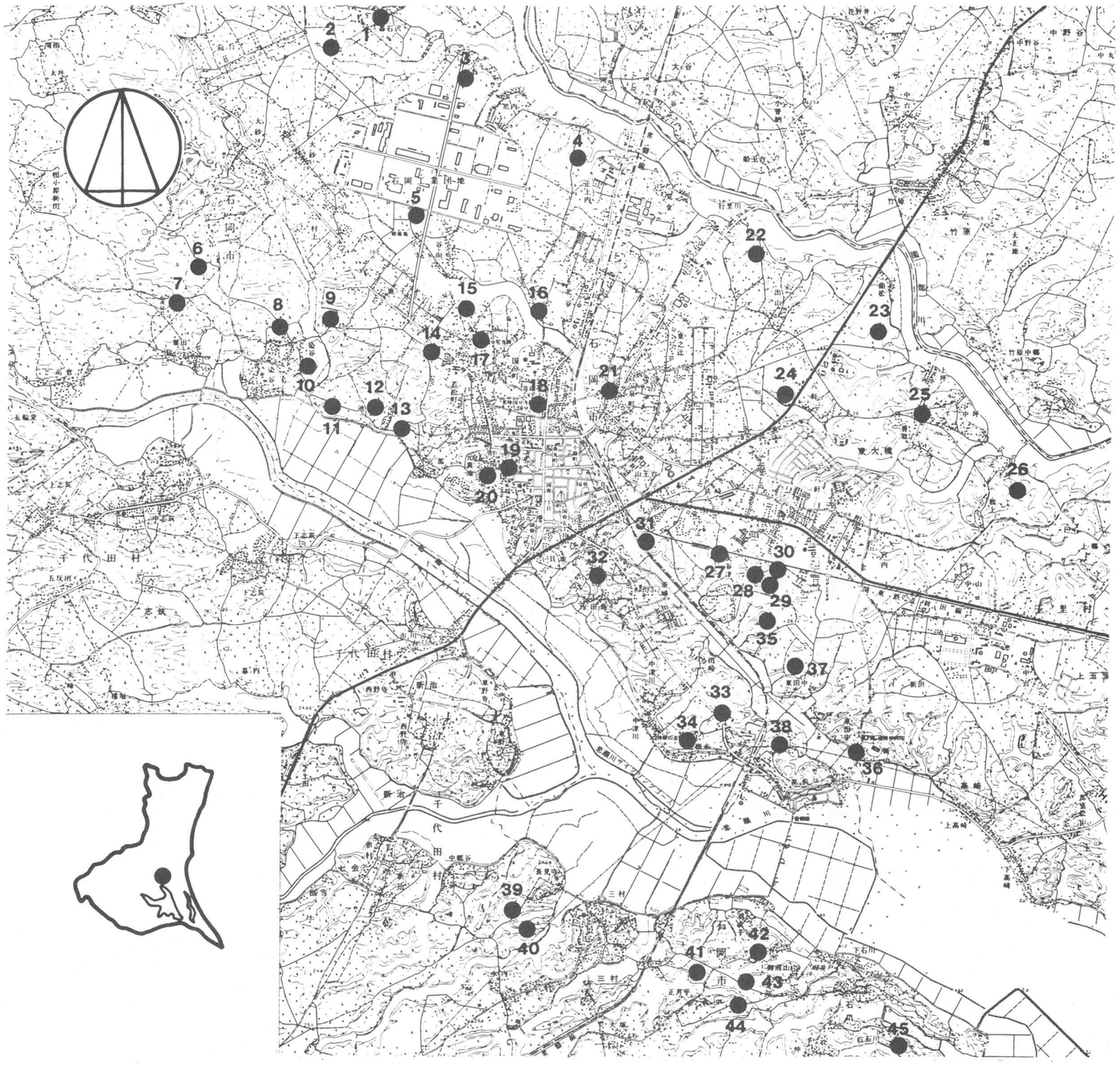
1　層序及び遺構について

(1)　層序

検出された遺構の覆土の層は，下記のように分類して，挿図中に数字とアルファベット小文字で表記した。なお，層の締まり，粘性については，遺構の説明文の中で述べた。

番号	土　色	色　調	番号	土　色	色　調
1	褐　色　土	Hue7.5YR4/3 4/4 4/6	9′	赤 褐 色 土	Hue2.5YR4/6 4/8
1′	〃	Hue10YR4/6	10	にぶい赤褐色土	Hue 5 YR4/3 4/4
2	暗 褐 色 土	Hue7.5YR3/3 3/4	10′	〃	Hue2.5YR4/4 5/3
3	黒 褐 色 土	Hue7.5YR2/2 3/1 3/2	11	明 赤 褐 色 土	Hue 5 YR5/6
4	黒　色　土	Hue7.5YR2/1	12	極暗赤褐色土	Hue 5 YR2/4
5	極 暗 褐 色 土	Hue7.5YR2/3	13	赤　色　土	Hue10R4/8
6	にぶい褐色土	Hue7.5YR5/3 5/4 6/3	14	黄 褐 色 土	Hue10YR5/6
7	明 褐 色 土	Hue7.5YR5/6 5/8	15	にぶい黄褐色土	Hue10YR6/3
8	暗 赤 褐 色 土	Hue 5 YR 3/3 3/4 3/6	16	橙　色　土	Hue7.5YR6/6
8′	〃	Hue2.5YR3/3 3/6	17	灰 褐 色 土	Hue7.5YR4/2
9	赤 褐 色 土	Hue 5 YR4/6 4/8			

記号	含　有　物	記号	含　有　物
a	ローム粒子	o″	ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子(物)，ロームブロック
a′	ローム粒子，焼土粒子	p	ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子(物)，黒色土粒子
a″	ローム粒子，炭化粒子(物)	p′	ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子(物)，暗褐色土粒子
j	ローム粒子，ロームブロック	p″	ローム粒子，炭化粒子(物)，黒色土粒子，パミス
j′	ローム粒子，黒色土粒子	Q	ローム粒子，ロームブロック，暗褐色土粒子，暗褐色土ブロック
j″	ローム粒子，黒色土ブロック	Q′	ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子(物)，ロームブロック，黒色土粒子
k	ローム粒子，暗褐色土粒子	Q″	ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子(物)，黒色土粒子，パミス
k′	ローム粒子，粘土粒子	b	焼土粒子
k″	ローム粒子，粘土ブロック	b′	焼土粒子，炭化粒子(物)
l	ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子(物)	b″	焼土粒子，ロームブロック
l′	ローム粒子，焼土粒子，ロームブロック	r	焼土粒子，炭化粒子(物)，黒色土粒子
l″	ローム粒子，焼土粒子，黒色土粒子	r′	焼土粒子，炭化粒子(物)，砂
m	ローム粒子，焼土粒子，暗褐色土粒子	r″	焼土粒子，粘土粒子，砂
m′	ローム粒子，炭化粒子(物)，ロームブロック	s	焼土粒子，炭化粒子(物)，ロームブロック，黒色土粒子
m″	ローム粒子，炭化粒子(物)，黒色土粒子	s′	焼土粒子，炭化粒子(物)，ロームブロック，黒色土ブロック
n	ローム粒子，炭化粒子(物)，暗褐色土粒子	s″	焼土粒子，炭化粒子(物)，粘土粒子，砂
n′	ローム粒子，炭化粒子(物)，粘土ブロック	c	炭化粒子(物)
n″	ローム粒子，ロームブロック，黒色土粒子	c′	炭化粒子(物)，ロームブロック
o	ローム粒子，ロームブロック，暗褐色土粒子	c″	炭化粒子(物)，黒色土粒子
o′	ローム粒子，ロームブロック，パミス	t	炭化粒子(物)，焼土塊



番号	遺跡名	種類	時代
1	碁石沢遺跡	包蔵地	縄文(中)
2	村上遺跡	製鉄跡	土師・須恵
3	根当西遺跡	集落跡	縄文(前)
4	正上内遺跡	包蔵地	縄文(前)
5	柏原西遺跡	包蔵地	縄文
6	宮平遺跡	集落跡	先土器・縄文(中・後)
7	波付岩遺跡	包蔵地	縄文(中)
8	染谷古墳群	古墳	古墳
9	染谷遺跡	包蔵地	縄文(早)
10	狐塚遺跡	包蔵地	縄文(前)・土師・須恵
11	高根貝塚	貝塚	縄文(早)
12	餓鬼塚遺跡	集落跡	縄文(早)
13	宮部遺跡	集落跡	縄文(草創・早・前)
14	鹿の子A遺跡	集落跡	歴史
15	鹿の子C遺跡	集落・工房跡	歴史
16	北ノ谷遺跡	包蔵地	縄文(前)・土師・須恵
17	常陸国分尼寺跡	寺院跡	歴史
18	常陸国分僧寺跡	寺院跡	歴史
19	元真地遺跡	集落跡	縄文(中)
20	国府跡	国衙跡	歴史
21	泉台遺跡	包蔵地	土師・須恵
22	行里川遺跡	包蔵地	縄文(前)
23	根小屋遺跡	包蔵地	縄文(中)
24	上人塚遺跡	包蔵地	縄文(前)
25	東大橋原遺跡	集落跡	縄文(中)
26	下坪遺跡	包蔵地	土師・須恵
27	新池台遺跡	集落跡	縄文(前)
28	大谷津A遺跡	集落跡	縄文(前)
29	大谷津B遺跡	集落跡	縄文(前)
30	対馬塚遺跡	集落跡	縄文(前)
31	兵崎遺跡	集落跡	縄文(前)・歴史
32	茨城廃寺跡	寺院跡	歴史
33	舟塚山古墳	古墳	古墳
34	愛宕山古墳	古墳	古墳
35	外山遺跡	集落跡	縄文(前)・弥生・古墳
36	ぜんぶ塚古墳	古墳	古墳
37	東田中貝塚	貝塚	縄文
38	関戸遺跡	包蔵地	縄文・弥生
39	地蔵平遺跡	包蔵地	縄文
40	三村地蔵窪貝塚	貝塚	縄文(早)
41	正月平遺跡	集落跡	先土器・縄文(中・後)
42	下宮遺跡	包蔵地	縄文(後)
43	御前山遺跡	包蔵地	縄文(中・後)
44	海老坪遺跡	包蔵地	縄文(中・後)
45	冨士台遺跡	包蔵地	縄文・弥生・土師

第4図　石岡市内遺跡位置図および遺跡名一覧表

記号	含　　有　　物	記号	含　　有　　物
t′	炭化粒子(物), パミス	e″	黒色土粒子, パミス
d	ロームブロック	f	焼土塊
d′	ロームブロック, 黒色土粒子	f′	焼土塊, 暗褐色土ブロック
d″	ロームブロック, 黒色土ブロック	f″	暗褐色土粒子
u	ロームブロック, 粘土粒子	g	パミス
u′	ロームブロック, 粘土ブロック	g′	粘土(粒子)
u″	ロームブロック, 暗褐色土ブロック	h	砂
e	黒色土粒子	i	ローム層
e′	黒色土粒子, 粘土粒子		

(2)　竪穴住居跡

○方向の表示は，主軸方向の明確なものは主軸方向，方形・長方形を長軸方向，楕円形を長径方向とした。

○プランの不明確なものは，推定で……と表した。

○断面図のレベルは，同一遺構内は同じレベルを使用している場合が多い。

○竪高は，70°～90°の角度で外傾して立ち上がる場合を「垂直」とした。

○関連図版は，文頭に（第○図）と示した。

(3)　土壙

○概説は，一覧表で表記した。

○形状・規模は，開口部の状態とその計測値である。

○レベル・壁高・方向・プランは，竪穴住居跡と同じ方法で示した。

○関連図版は欄末に示した。

(4)　遺物について

ア．土器・土製品

○実測したものについては，遺構別に一覧表にまとめ，次のように表記した。

法量＝A－口径，B－現存高，C－底径。単位＝cm。(　　) 内は推定値である。

(　　) 内は推定値を表わし，備考に完存率，関連図版ページ数を記した。

○遺物拓影図断面の [▨] は，繊維を含んでいることを示している。

イ．遺物写真の縮尺は原則として¼とし，それ以外は末尾に表記した。

2　竪穴式住居跡

当遺跡から検出された住居跡は44軒であり，調査区の全域にわたって確認されている。

第1号住居跡（第6図）

本住居跡は，遺跡北端の$A3i_1$・$A3i_2$・$A3j_1$・$A3j_2$ 区に確認され，第2号住居跡の南東に位置

している。

規模・形状は長径4.94m，短径4.52mの不整円形を呈し，長径方向はN－35.5°－Wである。壁は，比較的しっかりして堅く，やや外傾して立ち上がり，壁高は28～36cm程である。床は平坦であるが，中央から南東にかけて傾斜を示し，南東壁際では4～10cm程中央に比べて低くなっている。なお，住居跡の位置する周辺は，地形が西から東にかけてゆるやかに傾斜をしており，壁高にも差が出ている。炉・貯蔵穴は確認されなかった。柱穴はP_1～P_{14}の14本が検出され，径20～30cmの円形で，深さ28～48cm程であるが，P_{13}・P_{14}を除いて残り12本は円形に配列されている。主柱穴はP_1・P_2・P_7・P_{10}か，P_2・P_6・P_9・P_{12}の4本と考えられる。増築・建て替え等によって，柱穴の数が増えて検出されたものと考えられる。

覆土は3層に分かれ，褐色土・明褐色土が堆積していた。Ⅰ層がやわらかく，Ⅱ・Ⅲ層に粘性がある。自然堆積である。

遺物は出土しない。

第2号住居跡（第7図）

本住居跡は，遺跡北端の$A2h_9$・$A2h_0$・$A3h_1$・$A2i_9$・$A2i_0$・$A3i_1$区に確認され，第1号住居跡の北西に位置している。西部から南の一部にかけて第1号土壙と重複している。第1号土壙の床を切って構築しているので，新旧関係は第1号土壙が古く本住居跡が新しい。

規模・形状は長径7.4m，短径6.18mの楕円形を呈し，長径方向はN－2°－Eである。壁は比較的しっかりして堅く，壁高は20cm程でやや外傾して立ち上がるが，西壁と北・南壁の一部が第1号土壙と重なるため低壁高で検出された。床は平坦なロームだが，さほど硬くない。中央より北へ約1m寄ったところに炉を持ち，長径約100cm・短径約60cmの楕円形で，皿状に25cm程掘りこまれた地床炉である。また，炉床の東部に段を有しているほか比較的上部にレンガ状に硬く焼けた層をなしていた。柱穴はP_1～P_{17}の17本が確認され，炉跡の付近にかたまっている。P_1・P_2・P_3・P_4が主柱穴と考えられる。柱穴の規模は径26～30cmの円形で，大きさがほぼ一定しており，深さは21～50cm程である。

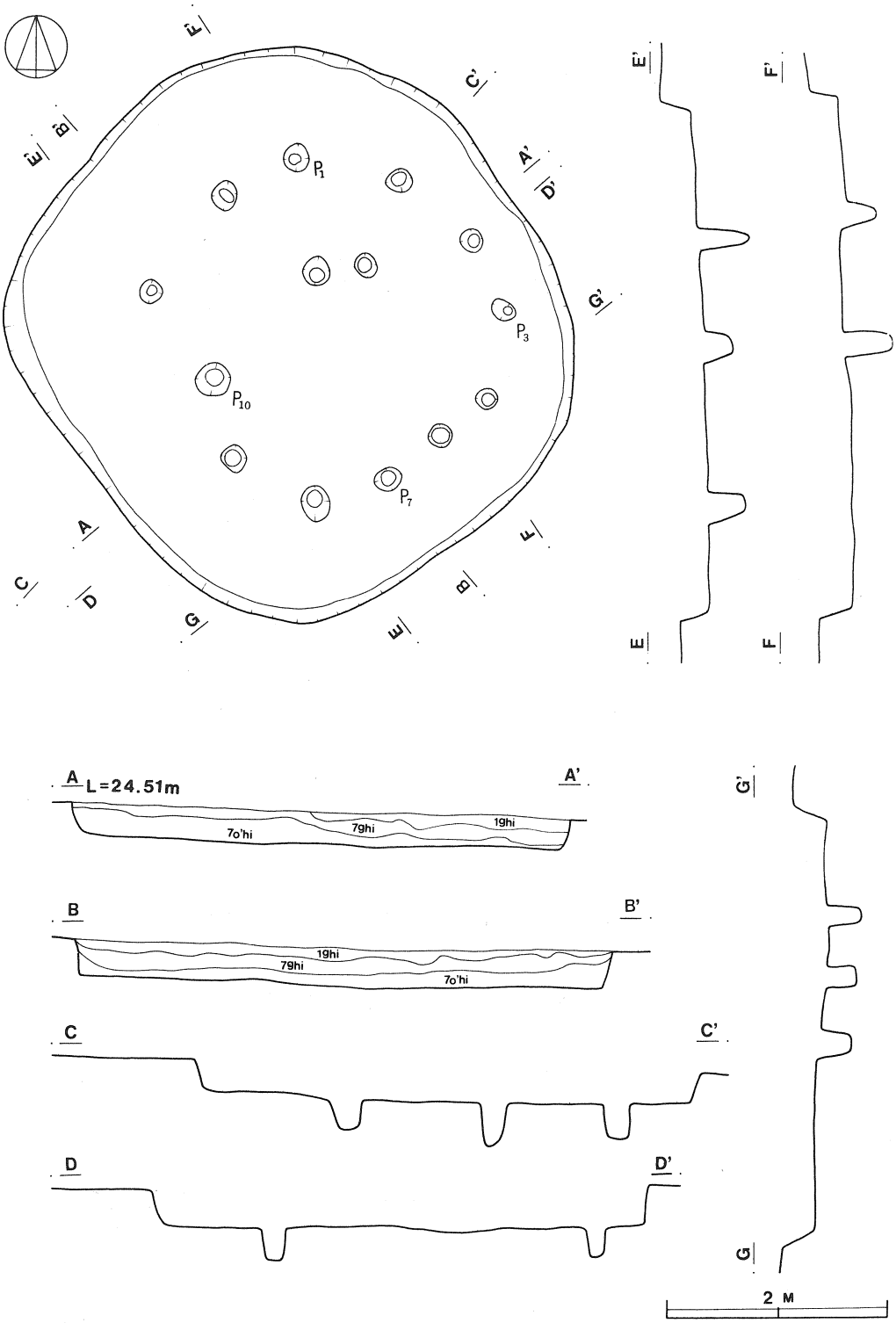
覆土は3層で褐色土・明褐色土に分かれ，自然堆積である。また，Ⅰ層はやわらかく，Ⅱ・Ⅲ層は粘性を持っている。

遺物はⅢ層に集中して15点，炉覆土より5点出土した。大部分が黒浜式の土器片である。

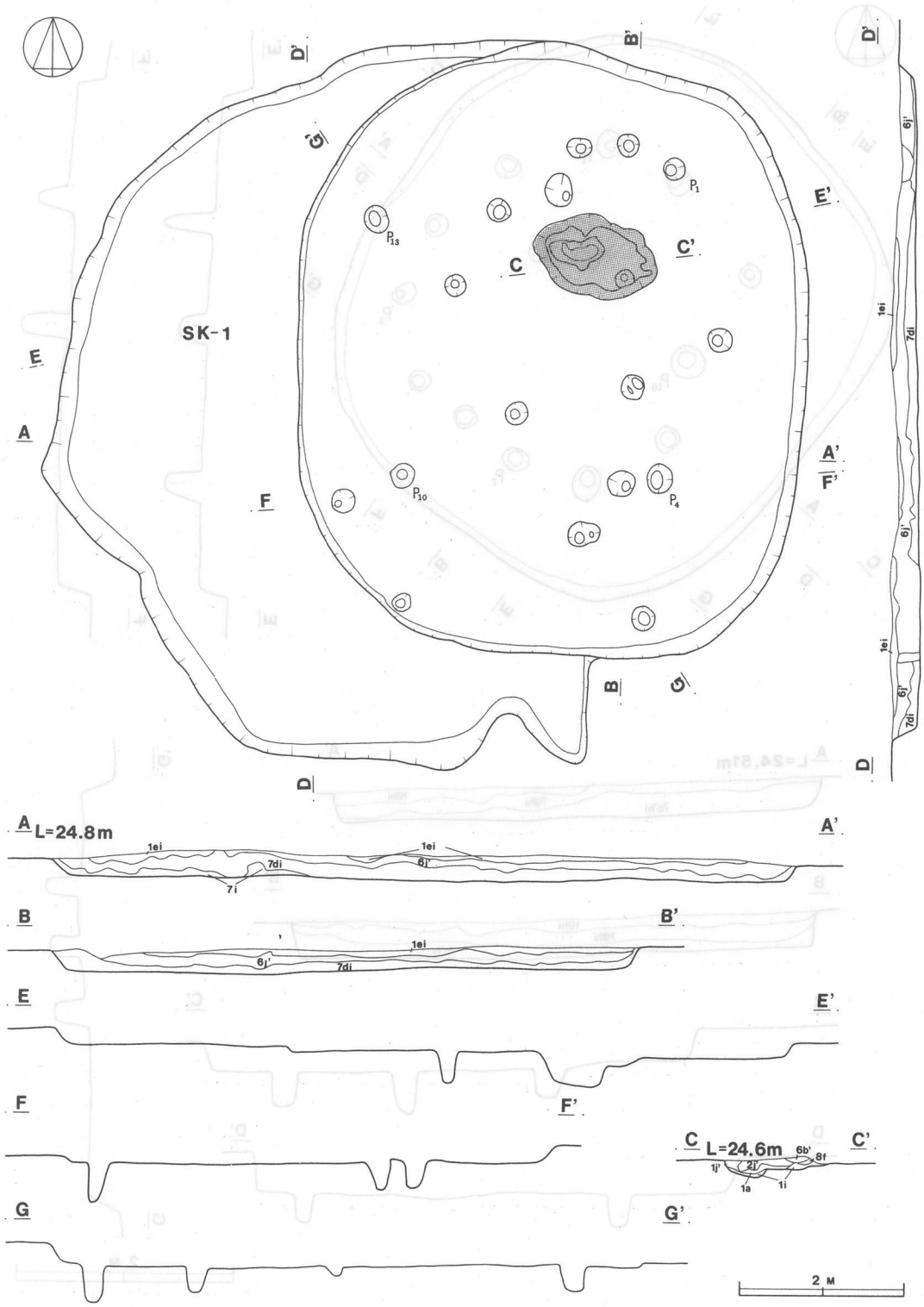
第3号住居跡（第8図）

本住居跡は，遺跡北部の$A2j_0$・$A3a_1$・$B2a_0$・$B3a_1$区に確認され，第2号住居跡の南に位置している。

規模・形状は長径4.36m，短径3.88mの不整円形を呈し，長径方向はN－48.5°－Wである。北西部に80×60cmの長方形状にとび出した突起状のものが付いている。突起状にはみ出した部分の



第6図　第１号住居跡実測図



第7図　第2号住居跡第1号土壙実測図

壁は垂直に立ち上っているが，他の壁はゆるやかに外傾して立ち上がり，壁高は20～30cmで比較的硬い壁である。床はソフトロームで平坦だが，さほど硬くない。柱穴は，P_1 ～P_{10} の10本確認された。径16～42cmの円形で深さ18～70cmとまちまちであり，不規則にならんでいる。主柱穴は不明である。また，炉・貯蔵穴も検出されなかった。

覆土は４層に分かれ，Ⅰ層が暗褐色土であったため，プラン確認が容易であった。Ⅱ～Ⅳ層は明褐色土で，Ⅲ・Ⅳ層がよくしまっている。自然堆積である。

遺物は，Ⅱ層に数点出土し，黒浜式系の土器片が多い。

第３号住居跡出土遺物（第10図）

１は撚糸文を施す。砂・礫を含む，荒い縄文を施す。胎土に繊維を含みにぶい褐色をしている。

第４号住居跡（第９図）

本住居跡は，遺跡北部のB3d_1・B3d_2・B3e_1・B3e_2 区に確認され，第１号住居跡の東側約15ｍのところに位置する。

規模・形状は径4.5ｍで，ほぼ円形をしている。壁は比較的しっかりした硬い壁で，外傾して立ち上がっている。壁高は20～32cmである。床はロームでよく踏みかためられていて固く，平坦である。炉・貯蔵穴は検出されない。柱穴はP_1～P_{10}の10本検出され，２～３本ずつかたまって点在している。径22～56cmの円形で深さ23～72cm程である。主柱穴は深さ・形状・位置から，P_1・P_2・P_5・P_8 と考えられるが，正確ではない。

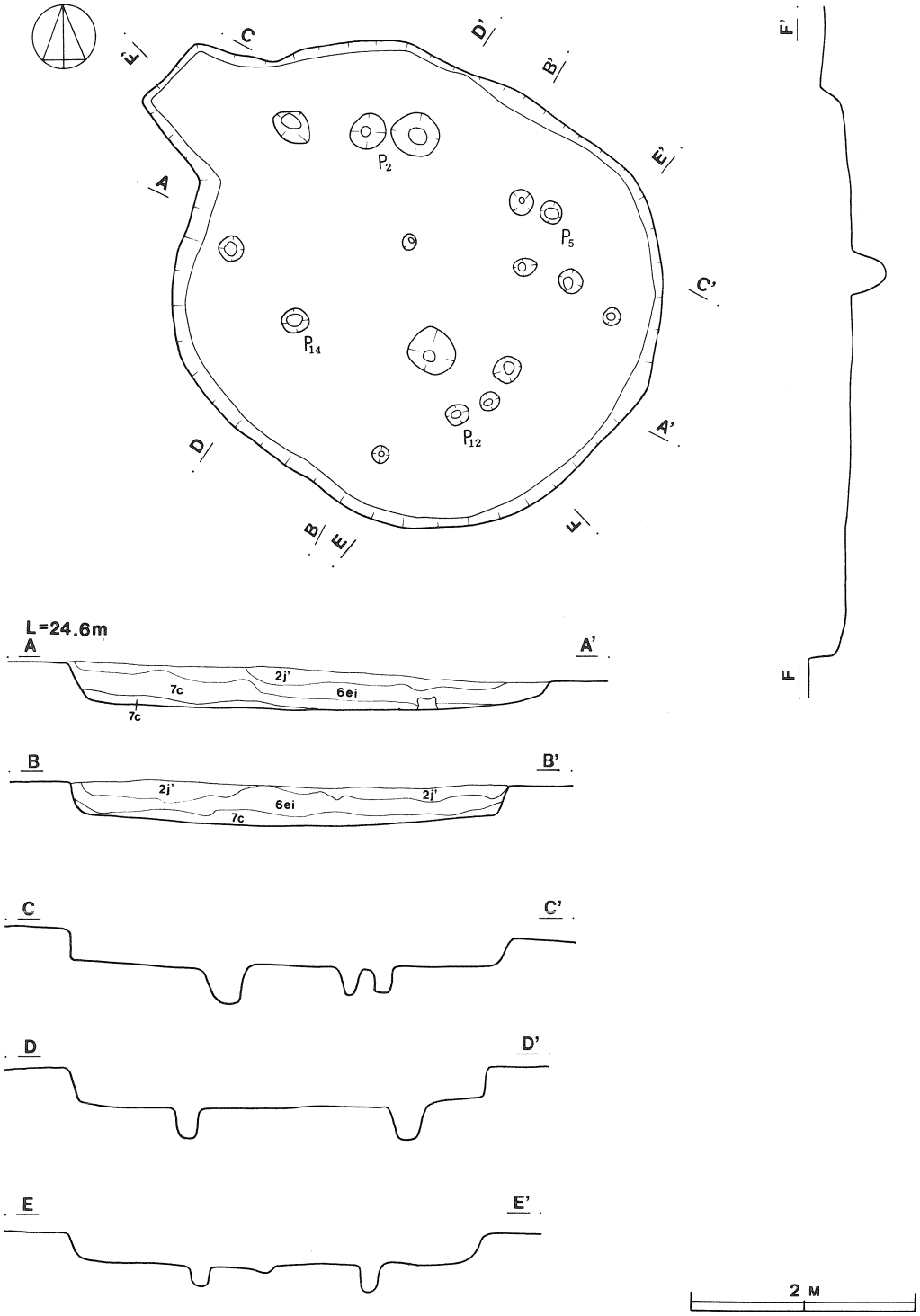
覆土は４層で，暗褐色土・褐色土・明褐色土に分かれる。Ⅲ・Ⅳ層に粘性を持っていた。自然堆積である。

遺物は，Ⅱ，Ⅲ層に集中して13点出土した。大半が諸磯式系であるが，他に黒浜式の土器も少量出土している。

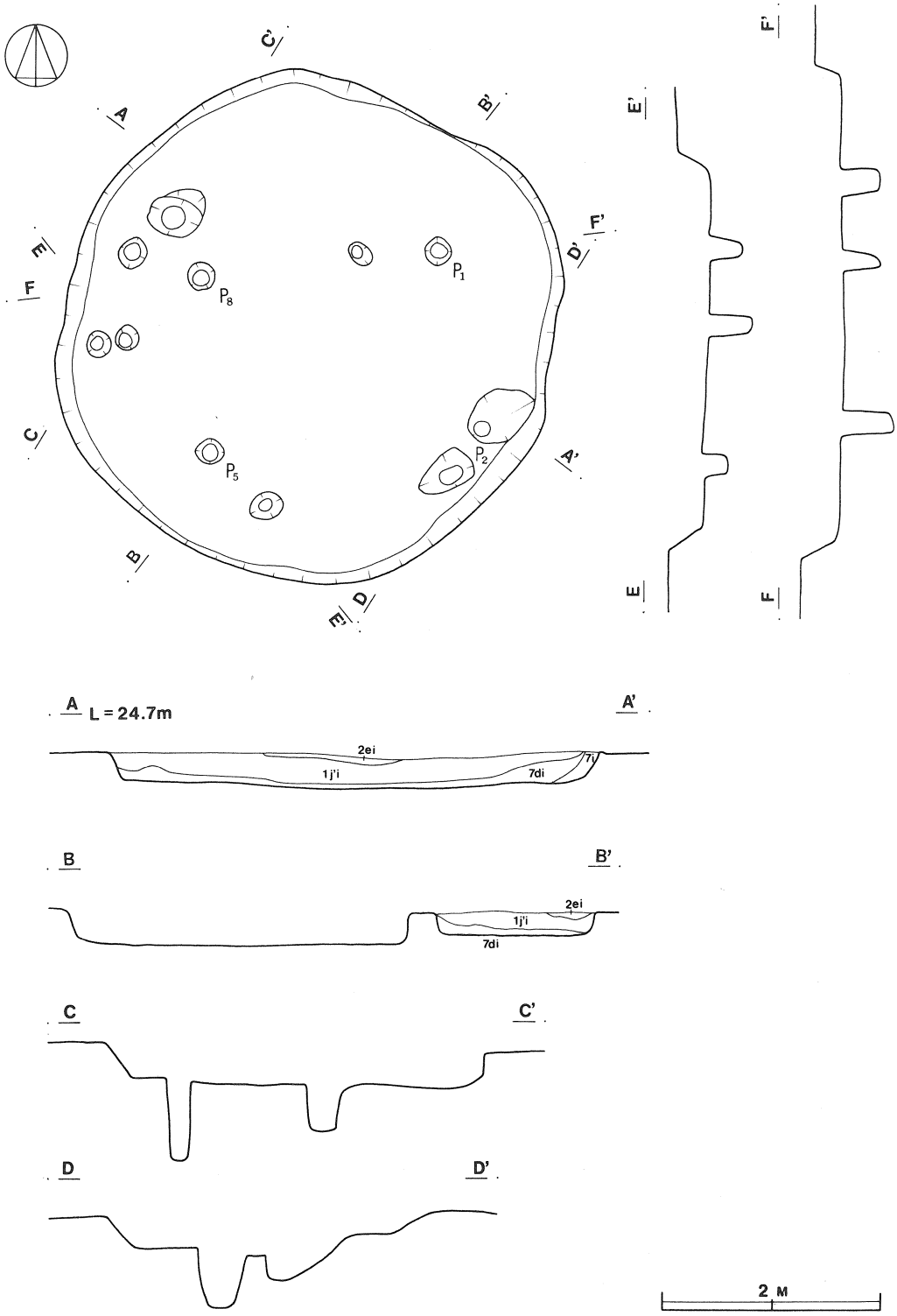
第４号住居跡出土遺物（第10図）

１と13は半截竹管による沈線を施す。２・３・９は箆による沈線，12は箆の沈線と連続押圧文を施している。４は斜めの縄文，11も縄文だが４よりも薄く単節である。10は横の撚糸文を施している。１・４・11は，胎土に繊維を含む。また，４・５・７・８は礫を含んでいる。

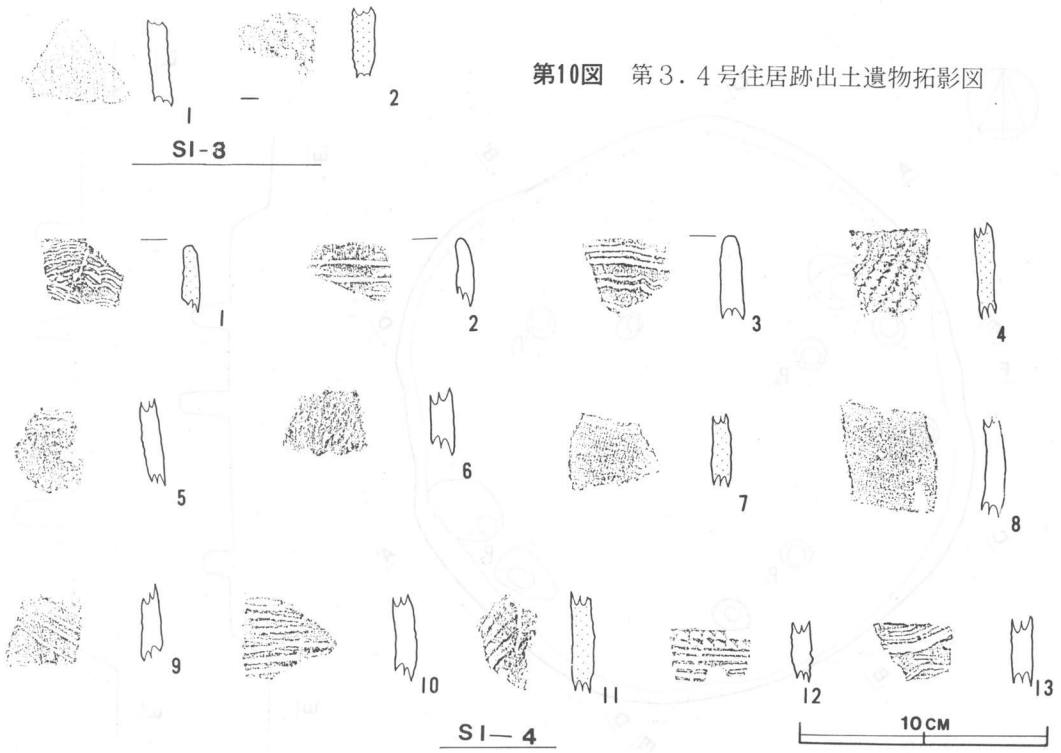
１・２・10・12が明黄褐色，３・４・５・13が橙色，７・８がにぶい黄褐色，他は明赤褐色である。



第8図　第3号住居跡実測図



第9図　第４号住居跡実測図



第10図　第３．４号住居跡出土遺物拓影図

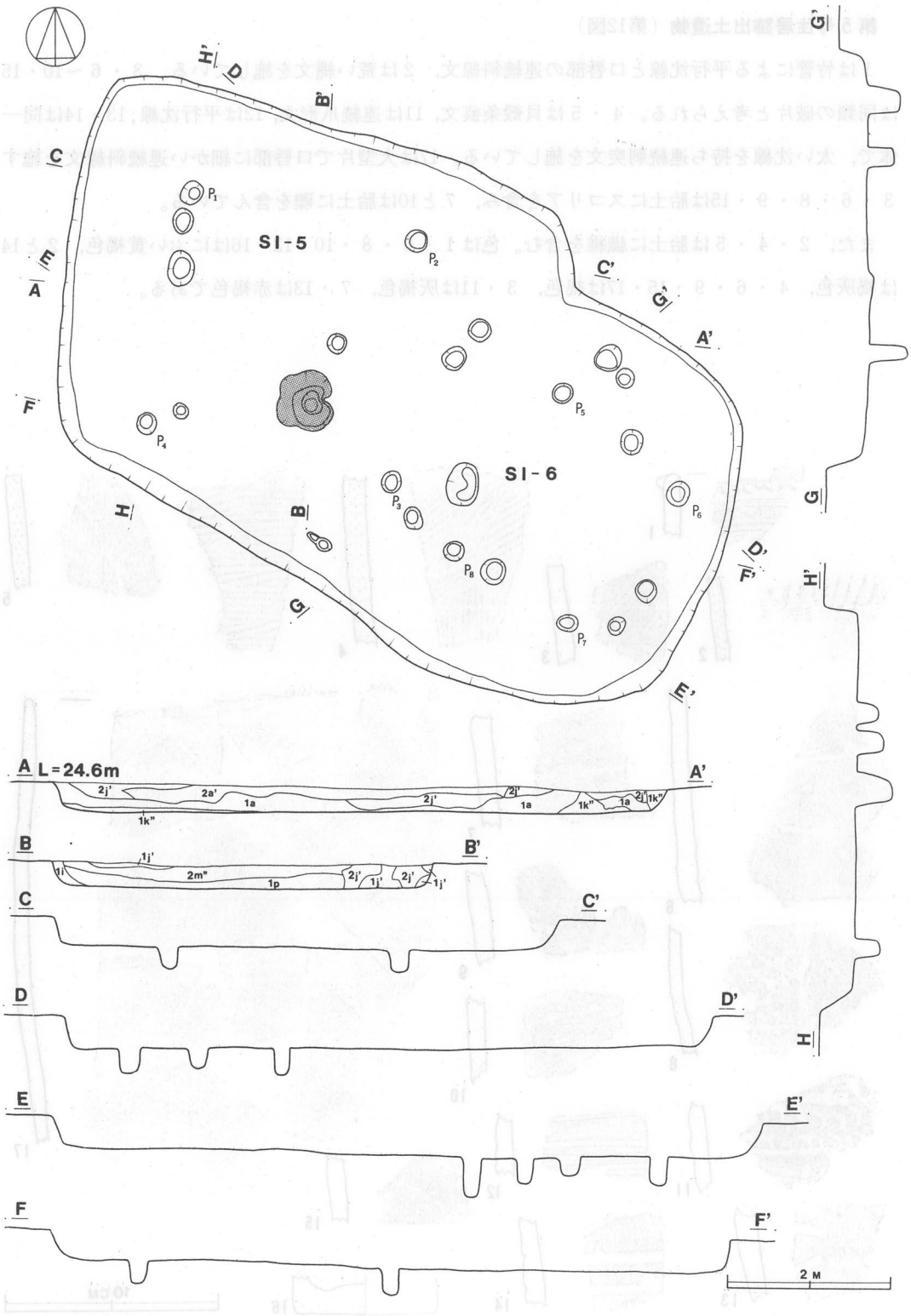
第５号住居跡（第11図）

本住居跡は，遺跡北部のB2d$_9$・B2d$_0$・B2e$_9$・B2e$_0$・B2f$_0$区に確認され，第４号住居跡の南西に位置している。

平面形は不整長方形というよりも台形に近く，規模は上底4.8ｍ・下底5.4ｍ・高さ6.0ｍである。長軸方向はＮ－65°－Ｗであり，東側で第６号住居跡と重複している。両住居跡とも同じレベルの床面を持つので，新旧関係は不明である。壁は垂直な立ち上がりで，35～45cmの高さを持っている。さほど硬くはなく，第６号住居跡と接するため，東壁が欠損している。床はロームだが，比較的硬くしっかりしている。また，平坦ではあるが，西から東にかけて傾斜を示し，３～５cm程低くなっている。炉は中央よりも南へ１ｍ離れたところにあり，径76cmの不整円形で，床を10cm程皿状に掘りこんだ後，中央をさらに深く50cm掘りこんでいる。Ｐ$_1$～Ｐ$_4$・Ｐ$_9$～Ｐ$_{12}$の８本の柱穴が検出された。径18～28cm・深さ26～46cmの円形が主であるが，１本だけ長径44cm・短径32cmの楕円形を呈しているものがある。Ｐ$_1$～Ｐ$_4$が主柱穴と考えられる。

覆土は５層で，暗褐色土・褐色土に分かれる。Ⅱ層を除いて，どの層にもしまりがある。また，東壁近くの覆土以外は，自然堆積である。

遺物はⅣ層に集中して多量に出土したが，浮島式の土器が多い。石器では石鏃・石匙が出土している。また，床面出土の土器も浮島式である。

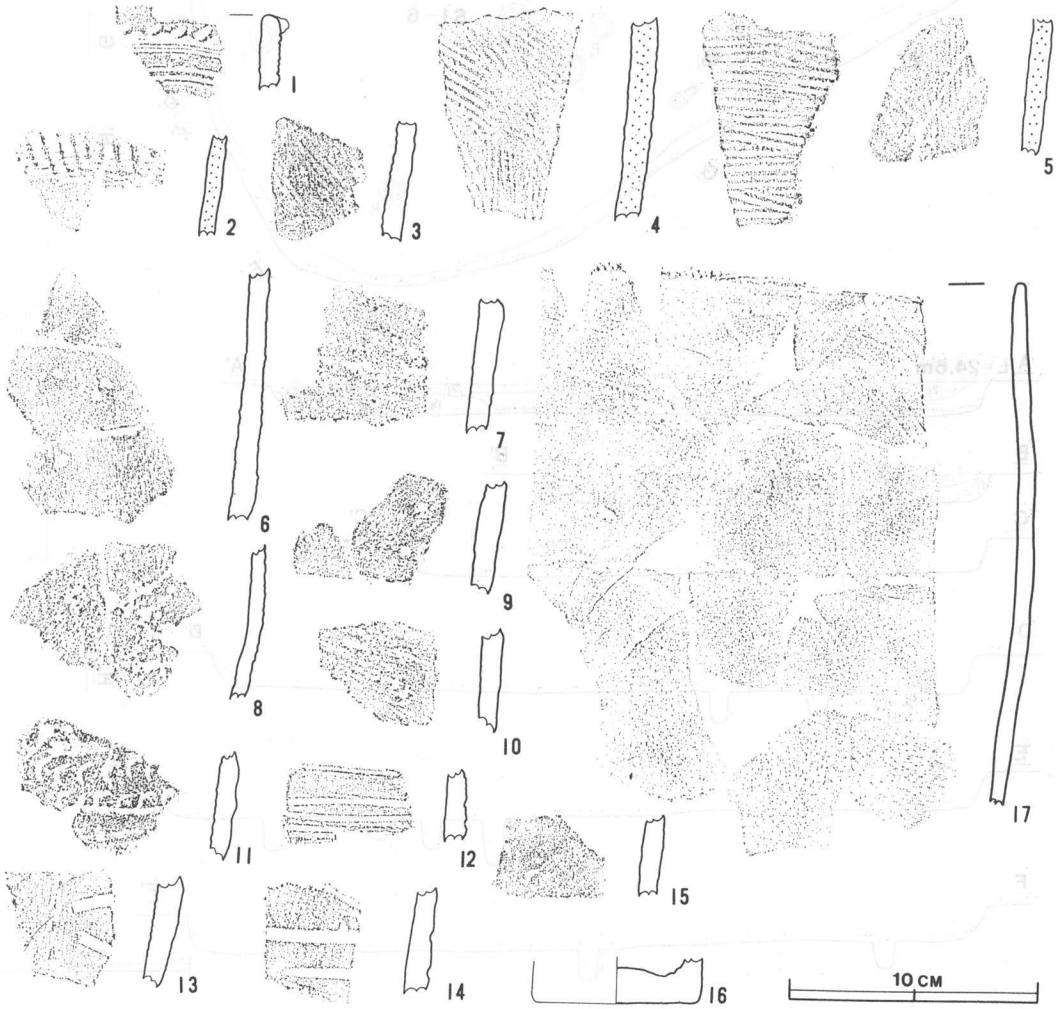


第11図　第５．６号住居跡実測図

第５号住居跡出土遺物（第12図）

１は竹管による平行沈線と口唇部の連続斜線文，２は荒い縄文を施している。３・６～10・15は同類の破片と考えられる。４・５は貝殻条痕文，11は連続爪形文，12は平行沈線，13・14は同一体で，太い沈線を持ち連続刺突文を施している。17は大型片で口唇部に細かい連続斜線文を施す。３・６・８・９・15は胎土にスコリアを含み，７と10は胎土に礫を含んでいる。

また，２・４・５は胎土に繊維を含む。色は１・５・８・10・12・16はにぶい黄褐色，２と14は褐灰色，４・６・９・15・17は褐色，３・11は灰褐色，７・13は赤褐色である。



第12図　第５号住居跡出土遺物拓影図

第６号住居跡（第11図）

本住居跡は，遺跡北部のB2c_0・B3e_1・B2f_0・B3f_1区に確認され，第４号住居跡の南西に位置している。

規模・形状は一辺が約5.0ｍの隅丸方形でＮ－22°－Ｅの長軸方向を持っている。西側で第５号住居と接し，重複している。壁は垂直な立ち上がりで，あまり硬くはない。35～45cmの高さを持っている。また，西壁は第５号住居跡と重複のため欠損している。柱穴は住居跡の中心を囲むように，P_5～P_8，P_{13}～P_{21}の13本確認された。径22～34cm・深さ22～48cmの円形で，主柱穴はP_5～P_8と考えられる。床は比較的しっかりしていて硬く，平坦ではあるが南から北にかけて傾斜を示し，３～５cmの差がある。炉は検出されてないが,中央より西へ80cm寄ったところに，長径54cm・短径40cm（P_{22}）の楕円形の柱穴がある。

覆土も第５号住居跡と同じく５層で，暗褐色土・褐色土に分かれる。ただ，Ⅲ層以下にしまりを持っており，第５号住居跡と違って人為的な埋めもどしによる堆積である。

遺物はⅣ層に集中して多量に出土したが，第５号住居跡に同じく浮島式の土器片が多い。床面出土も浮島式である。石器では石鏃・石匙・磨石を出土している。また，第５・６号住居跡は，Ⅱ・Ⅲ層よりかなりの剝片・石核を出土している。黒曜石・貢岩が主で，第４章で考察を述べることにする。

第７号住居跡（第14図）

本住居跡は，遺跡北西部のB2f_7・B2f_8・B2g_7・B2g_8区に確認され，第５・６号住居跡の南西に位置している。

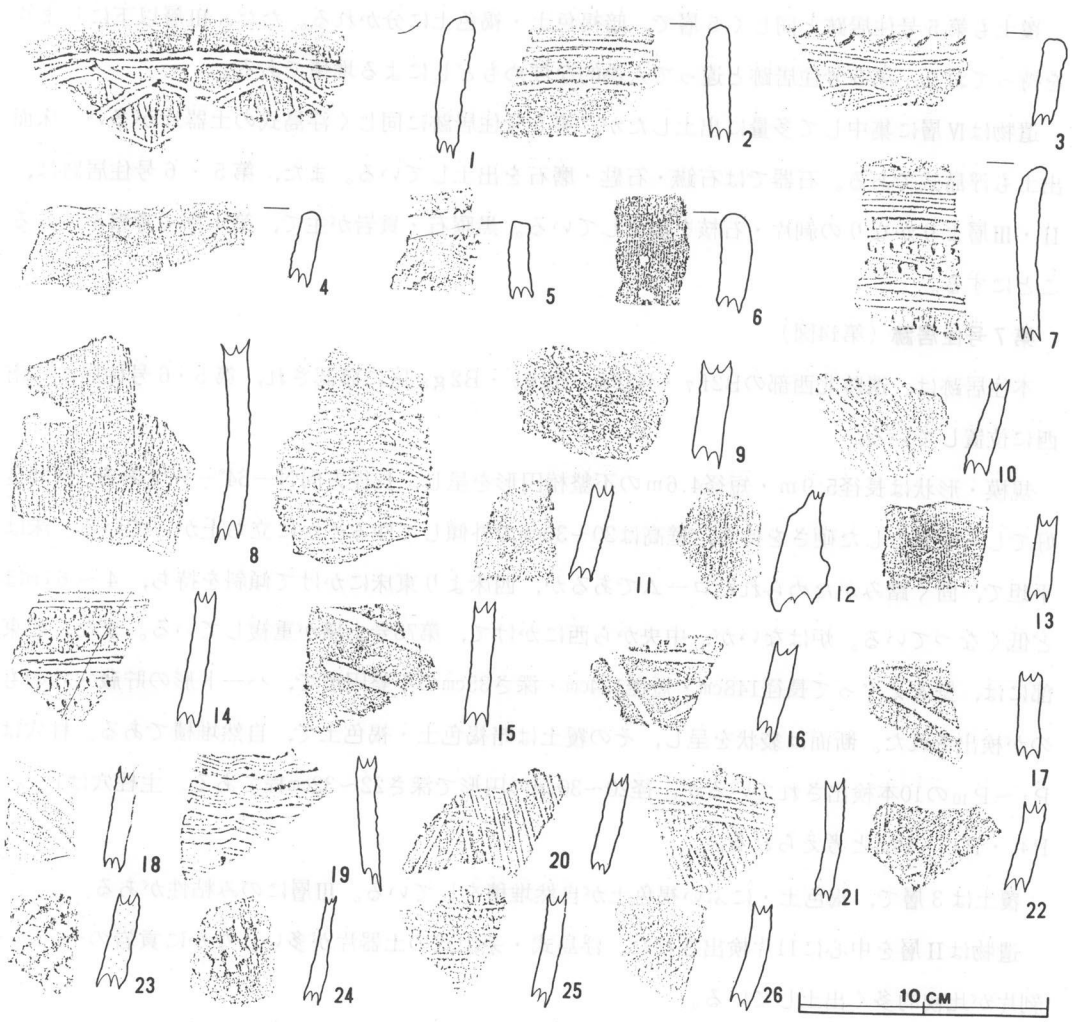
規模・形状は長径5.9ｍ・短径4.6ｍの不整楕円形を呈し，長径方向Ｎ－64°－Ｗである。壁は良好でしっかりとした硬さを持ち，壁高は20～30cmで外傾してゆるやかに立ち上がっている。床は平坦で，固く踏みかためられたロームであるが，西床より東床にかけて傾斜を持ち，４～６cmほど低くなっている。炉はないが，中央から西にかけて，第75号土壙が重複している。また，北東部には，壁をえぐって長径148cm・短径124cm・深さ35cmの不整円形で，ハート形の貯蔵穴状のものが検出された。断面は袋状を呈し，その覆土は暗褐色土・褐色土で，自然堆積である。柱穴はP_1～P_{10}の10本検出されているが，径20～30cmの円形で深さ22～32cm程である。主柱穴はP_2・P_4・P_8・P_{10}と考えられる。

覆土は３層で，褐色土・にぶい褐色土が自然堆積をしている。Ⅲ層にのみ粘性がある。

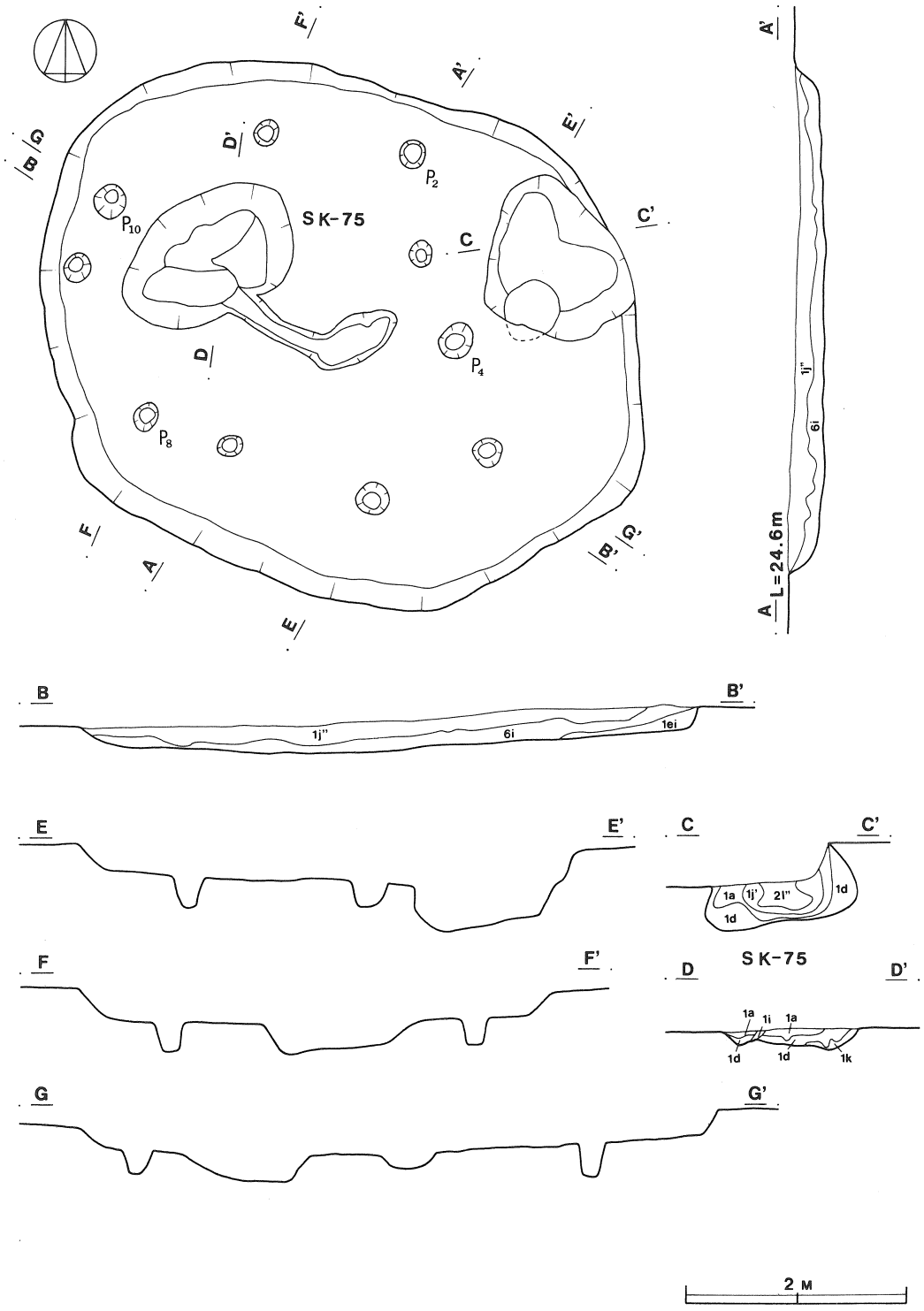
遺物はⅡ層を中心に11片検出された。浮島式・茅山式の土器片が多い。なかに貢岩のチップ・剝片が比較的多く出土している。

第６号住居跡出土遺物（第13図）

１は撚糸文を地文にし，竹管による平行・山形沈線文を施している。２は有節平行沈線文である。３は１と同類だが口唇に斜めの連続押型文が付いている。５は貝殻腹縁の押型文，７は平行沈線と連続押型文，８は表裏に貝殻条痕がある。14は平行沈線の間に２列の連続爪形文を施す。15～18は同一体で太い沈線を施し連続爪形押圧文を付けている。19は半截竹管による沈線文,20・21は細かい斜線の沈線を施す。23・25・26は縄文を施している。９は礫を多量に含み，11・23は胎土に繊維を含んでいる。色調は，１・３・６・９・12・13・17～20・23が橙色，２・４・15・16が明褐色，他がにぶい橙色である。



第13図　第６号住居跡出土遺物拓影図



第14図　第７号住居跡実測図

第８号住居跡（第15図）

本住居跡は，遺跡北西部の B2f$_5$ ・B2g$_4$ ・B2g$_5$ ・B2h$_5$ ・B2h$_6$区に確認され，第７号住居跡の南西に位置している。

規模・形状は径5.6ｍの円形で，北側で第９号住居跡と重複している。同じレベルの床面を持つので新旧関係が不明確である。壁はさほど硬くなく，やわらかい。壁高は12～22cmで，ゆるやかに外傾して立ち上がる。第９号住居跡と重複しているため，北壁が欠損している。床はロームで比較的硬く平坦である。中央が周辺より低くなって８cm程落ちこんでいる。北側に三日月形の第76号土壙が重複し，また，その南側に径74cm・深さ34cmの円形のピットが検出されている。ピットは，廃絶後に柱穴がかく乱されて大きくなったものと考えられる。炉は検出されない。柱穴はＰ$_9$～Ｐ$_{27}$の18本確認された。ほとんどが円形で，径24～32cm・深さ22～44cmの規模である。壁にそうように円形にめぐらしてある。

覆土は２層で，褐色土である。人為的な埋めもどしの状態である。Ｉ層はしまりがあったが，II層はやわらかい。

遺物はII・III層から３点出土していて，すべて関山式の土器片である。

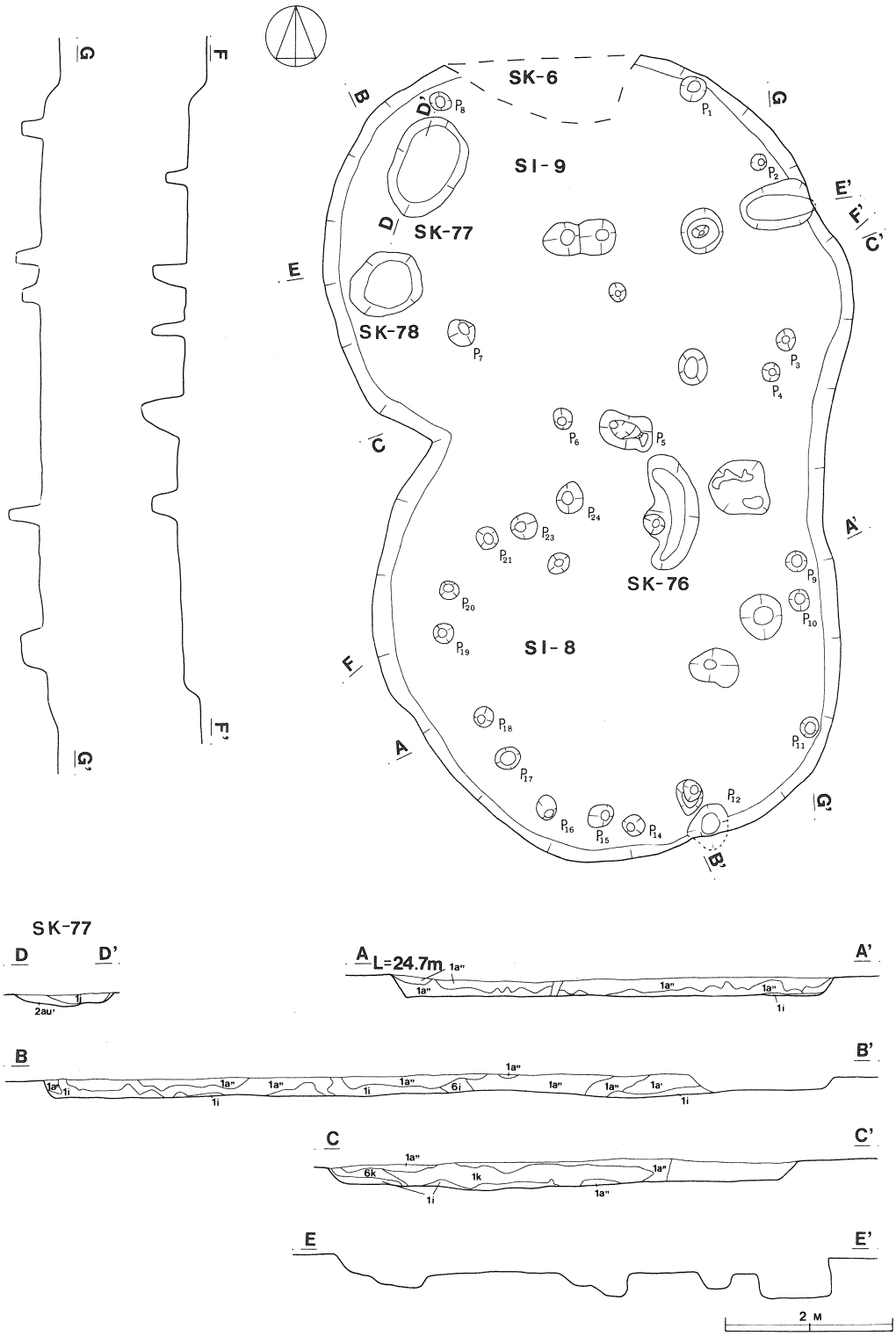
第９号住居跡（第15図）

本住居跡は，遺跡北西部のB2e$_4$ ・B2e$_5$ ・B2e$_6$ ・B2f$_4$ ・B2f$_5$ ・B2f$_6$区に確認され，第７号住居跡の西側に位置している。

規模・形状は長径6.3ｍ・短径5.0ｍの楕円形で，長径方向はＮ－22.5°－Ｗを指している。北で第６号土壙と，南で第８号住居跡と重複している。壁は比較的しっかりしていて硬く，ゆるやかに外傾して立ち上がっている。壁高は第８号住居跡と同じく12～22cmで，北壁の一部を第６号土壙によって切られ，南壁は，第８号住居跡と重複のため欠損している。床はロームで比較的硬く平坦だが，西側が２～３cm程低くなっている。炉はない。柱穴はＰ$_1$～Ｐ$_8$ ・Ｐ$_{27}$～Ｐ$_{29}$の11本確認されたが，壁にそって柱をたてたと考えられる。また，柱穴の規模はまちまちで，径24～32cmの円形が多いが，長径88cm・短径50cmの楕円形で貯蔵穴状のものもある。深さは18～36cm程である。西側に第77号土壙・第78号土壙が重複しており，本住居跡との関連はないものと判断される。

覆土は６層あって，褐色土・にぶい褐色土に分かれる。II層はやわらかいが，他の層はすべてしまりを持っている。人為的な埋めもどしによる堆積である。

遺物は，II・III層から17点出土した。浮島式系が多い。



第15図　第８．９号住居跡実測図

第７号住居跡出土遺物（第16図）

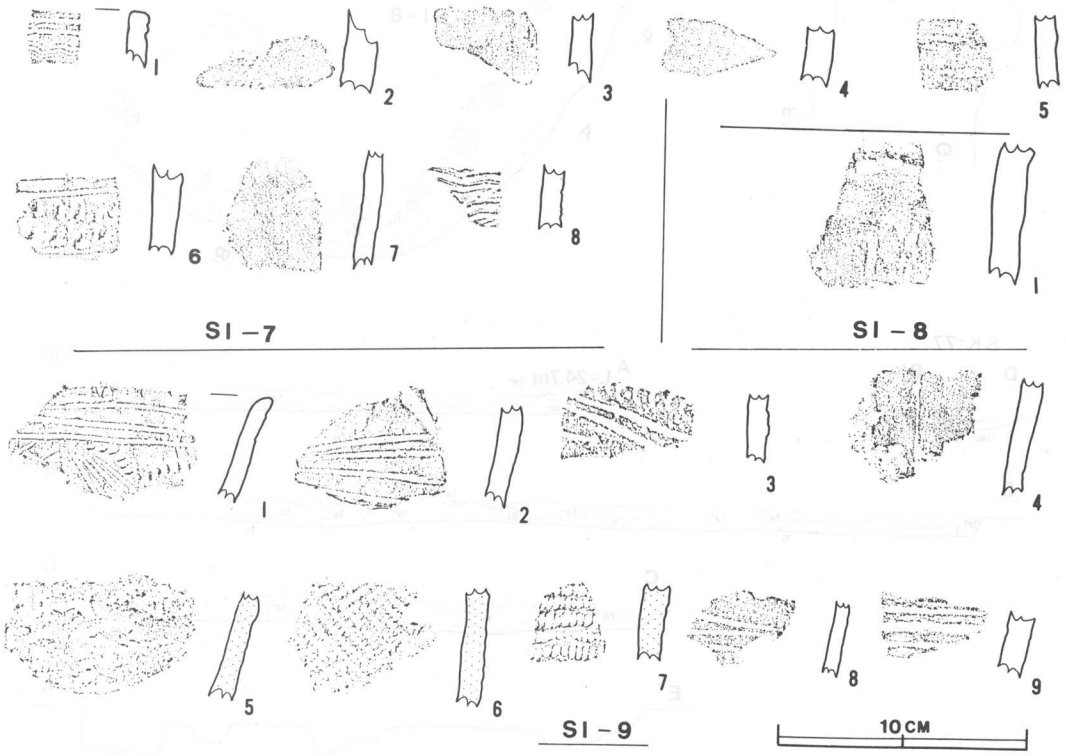
１は有節平行沈線文，６は平行沈線の間に連続爪形の押型文を施す。８は竹管による波形沈線，５は礫を多量に含んでいる。１・５・６がにぶい橙色，２・８が橙色である。３・４が灰黄褐色，７がにぶい赤褐色である。

第８号住居跡出土遺物（第16図）

１は，胴部にかすかに縄文を施している。胎土にパミス・砂を含み，裏面を横なでしている。色は灰褐色である。

第９号住居跡出土遺物（第16図）

１は横と斜めの平行沈線と連続刺突文，２は薄い平行沈線文，３は平行沈線に連続爪形文，５～７は縄文が施されている。８は摩滅しているが薄い沈線があり，９は竹管による平行沈線がある。５～７は胎土に繊維を含む。１・７が橙色，２・３がにぶい橙色，５・６が灰褐色，４がにぶい黄橙色，８・９が浅黄橙色である。



第16図　第７～９号住居跡出土遺物拓影図

第10号住居跡（第17図）

本住居跡は，遺跡北西部のB2h$_4$・B2h$_5$・B2i$_4$・B2i$_5$区に確認され，第８号住居跡の南側に位置している。

規模・形状は長径6.52ｍ・短径5.48ｍの楕円形で，長径方向Ｎ－62.5°－Ｗを指している。壁は良好な硬さを持ち，南西の一部が消失して不明確になっている。どの壁もゆるやかに外傾して立ち上がり，28～40cmの壁高を持っている。床は比較的硬く平坦であるが，南側にくらべて北側が低く，２～５cmの差を持っている。炉はない。柱穴はP$_1$～P$_{15}$の15本確認されたが，P$_1$～P$_{11}$は壁にそって位置し，壁柱穴として使用したものと考えられる。規模は径28～30cm，深さ18～43cmの円形である。

覆土は５層あり，暗褐色土・にぶい褐色土・褐色土に分かれる。全層ともしまりがあるが，人為的な埋めもどしによる堆積をしている。なお，Ⅰ・Ⅱ層に焼土が多量に含まれていたが，後世のものが混じったものと考えられる。

遺物はⅤ層を中心に出土したが，黒浜式の土器片が多い。南西側の床面より出土した土器片も黒浜式である。また，覆土中に弥生の土器片も混じっていた。

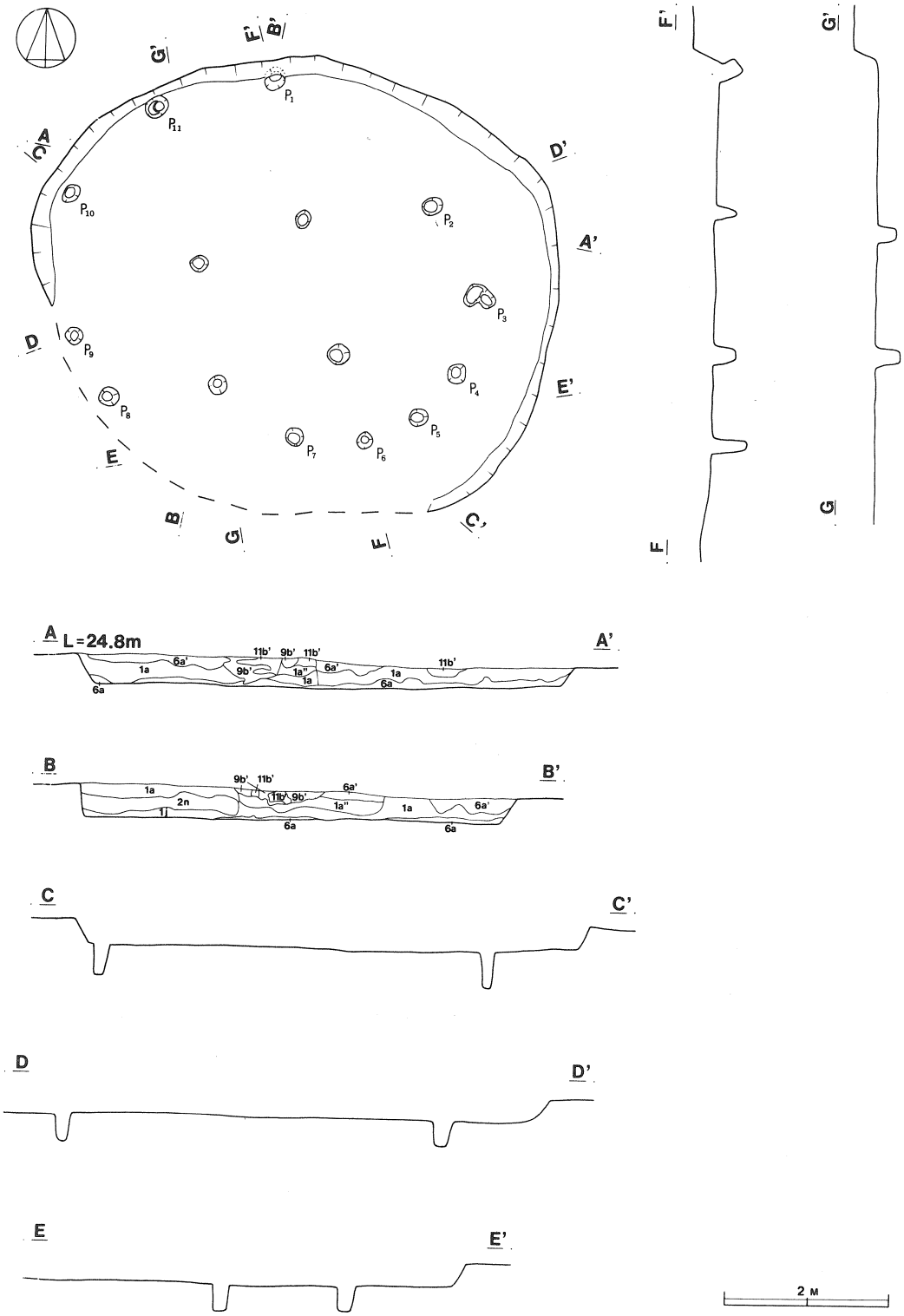
第11号住居跡（第11図）

本住居跡は，遺跡南西部のD2c$_2$・D2c$_3$・D2c$_4$・D2d$_2$・D2d$_3$・D2d$_4$区に確認され，第17号住居跡の東側に位置する。

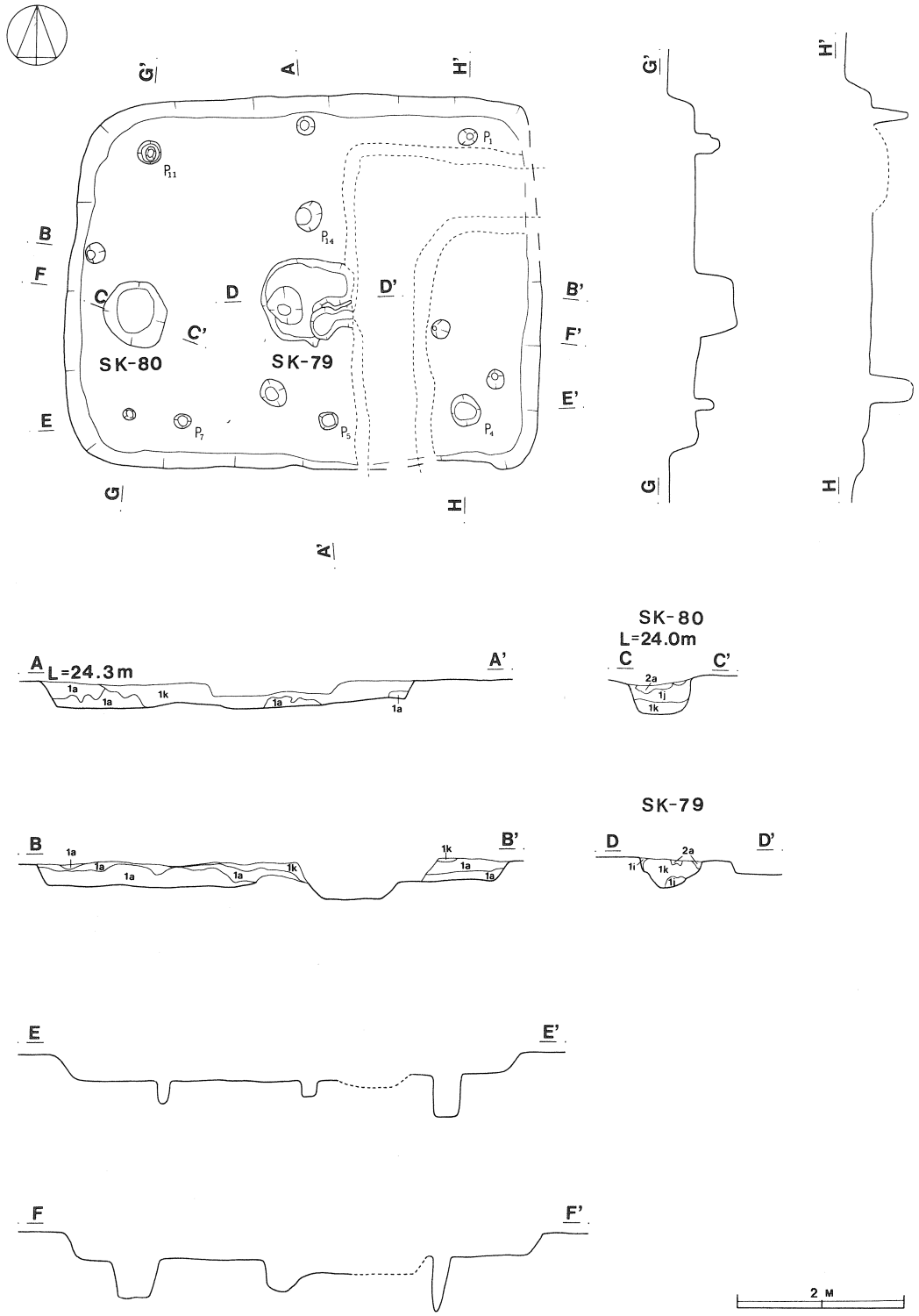
規模・形状は長辺5.7ｍ・短辺4.8ｍの隅丸長方形で，長軸方向はＮ－90°－Ｗである。北東から南にかけて約$\frac{1}{3}$を第５号方形周溝遺構の溝で切られている。壁は比較的しっかりした硬い壁で，ゆるやかに外傾して立ち上がっている。壁高は24～25cmと高さが一定している。床には平坦なローム だが，よく踏みかためられて固い。第５号方形周溝遺構の溝のため，床が切られている。柱穴はP$_1$～P$_{12}$の12本確認されたが，径16～32cm・深さ18～54cmの円形が多い。主柱穴は形状・深さ・位置から，P$_1$・P$_4$・P$_5$・P$_7$・P$_{11}$と考えられる。炉はないが，第５号方形周溝遺構の溝で破壊されたものと考えられる。中央に第79号土壙，西側に第80号土壙が重複して存在する。ともに本住居跡との関連はない。P$_9$の底面は不整形で，中段を有している。

覆土は３層で，すべて褐色土よりなり，よくしまっている。Ⅰ層に暗褐色土粒子を多量に含んでいる。人為的な埋めもどしによる堆積である。

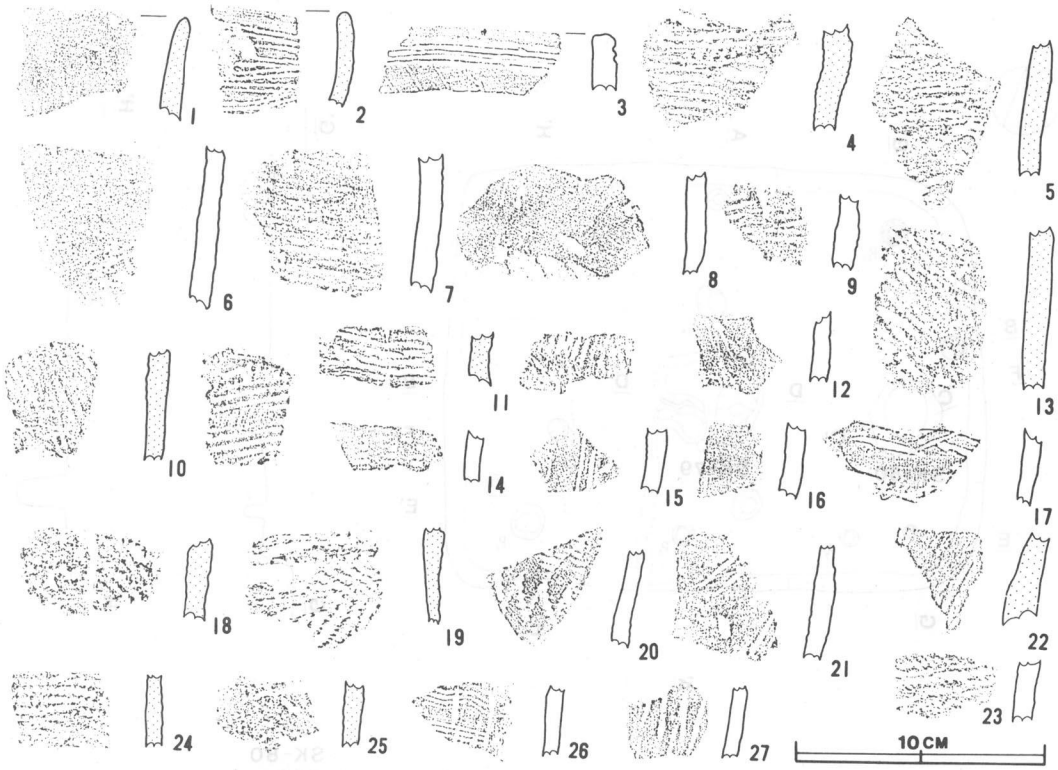
遺物は，Ⅲ層に集中して多量の土器片が出土したが，中でも弥生時代の土器片が多い。北壁下の床に出土した大型土器片は，弥生時代後期（十王台式）の土器片である。



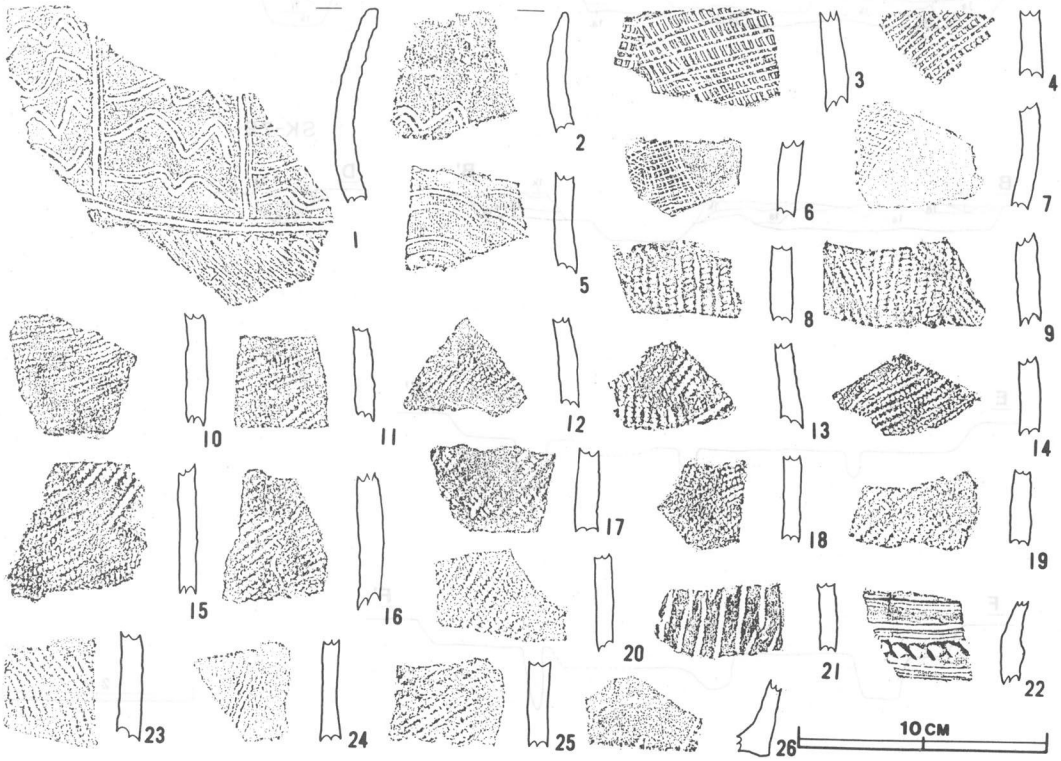
第17図　第10号住居跡実測図



第18図　第 11 号 住 居 跡 実 測 図



第19図　第10号住居跡出土遺物拓影図



第20図　第11号住居跡出土遺物拓影図

第10号住居跡出土遺物（第19図）

2・15は竹管による平行沈線文，3は口縁部でまばらな撚糸文を地文に2本の平行沈線を施している。4・5・10・11・13・18は貝殻条痕を施している。17・21・27は薄い沈線文を施している。14・23・24は薄いが縄文を施す。1・2・4・5・10・11・13・18・19・22・24・26は胎土に繊維を含んでいる。また，6・7・10は礫を多量に含んでいる。9・20はスコリアを含む。色調は，1・2・5・6・12・15・16・19・20・25が褐灰色，3は黒褐色，4・7・9・10・14・18・23・24・26はにぶい橙色，8・17・27は橙色，11・21はにぶい黄褐色，13・22は明赤褐色である。

第11号住居跡出土遺物（第20図）

1は竹管による波状文を施し，その下に斜めの撚糸を押圧し施文をしている。2も同類と思われる。3は斜線による格子目をつけている。4も同類であるが格子目が荒い。5は平行の波状文がみられ，6・7は3と同じ格子目を部分的に付けている。8～20・23～25は撚糸による施文だが，8・9・20・25は目が広く羽状を呈している。21はまばらな撚糸文，22は竹管による2本の沈線の間に連続刺突文を充塡している。26は底部が少し残っている。どれも砂を含み，礫を少々含んでいる。色は，1が黒褐色，2が灰白色，3・4・7・8が褐灰色，5・11・12・15・20が灰褐色，6・10・13・16・18・19・21～24がにぶい褐色，9・14がにぶい橙色，17がにぶい黄橙色，25が橙色，26が黄橙色である。

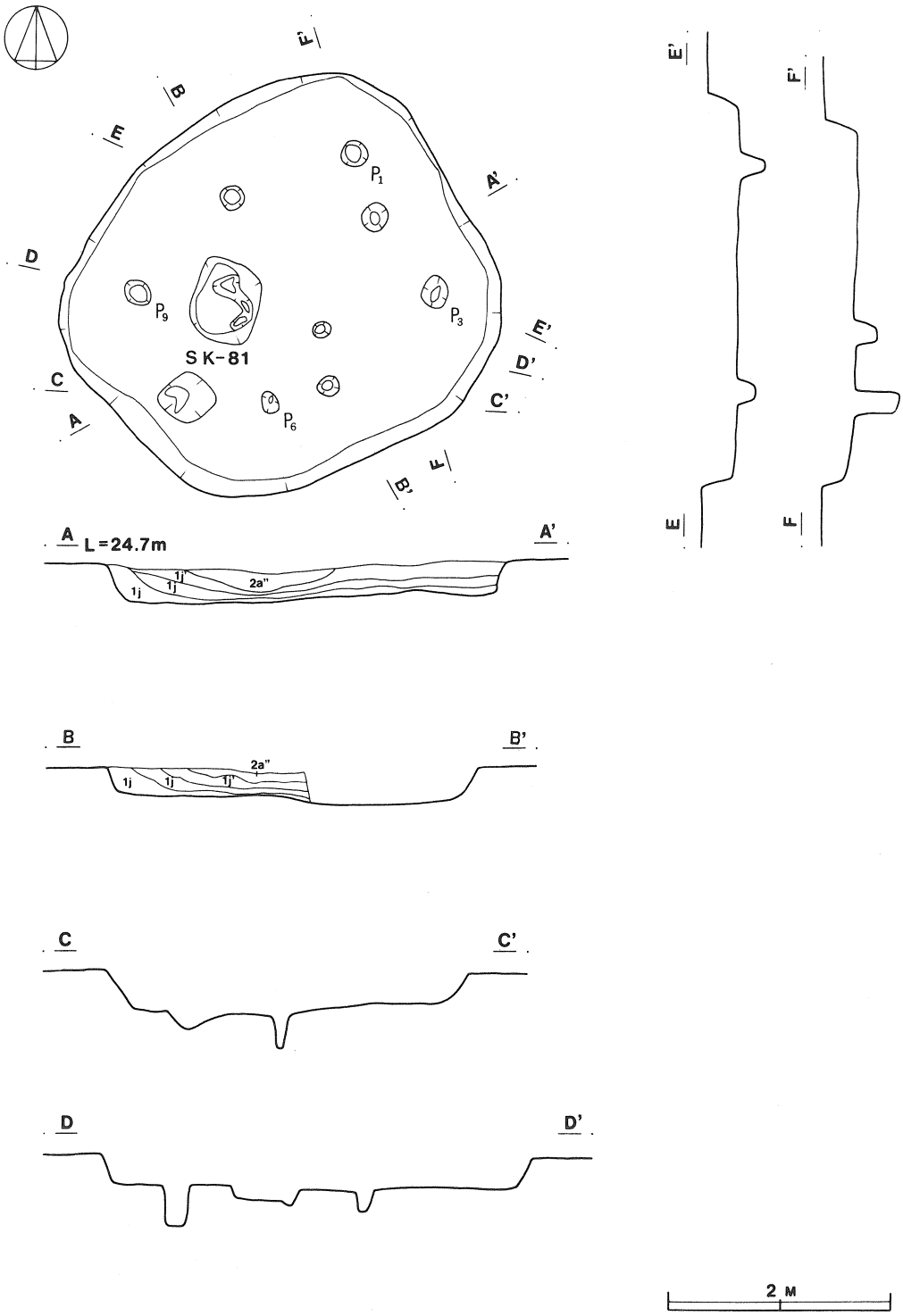
第12号住居跡（第21図）

本住居跡は，遺跡北部の$B2c_9$・$B2c_0$・$B2d_9$・$B2d_0$区に確認され，第5号住居跡の北側に位置している。

規模・形状は径3.96mの不整円形で，比較的小型の住居跡である。壁は良好な硬さを持ち，ほぼ垂直な立ち上がりを示している。壁高は18～32cm程である。床は平坦なロームだが，さほど硬くはなく，南東部のピットを有する部分が低く，2～3cm程差がある。炉は検出されない。柱穴はP_1～P_9の9本が検出され，径16～24cm・深さ16～40cmの規模を持つ比較的小型な浅い柱穴である。主柱穴はP_1・P_3・P_6・P_9と考えられる。中央部に第81号土壙が重複して検出された。本住居跡との関連はなく，また南側に径約50cm・深さ20cmの円形の大ピット（P_7）が確認された。このピットは柱穴が廃絶後にかく乱を受けて開口部が広がったものと考えられる。

覆土は4層からなり，暗褐色土と褐色土に分かれる。II層はやわらかいが，他の層はよくしまっている。自然堆積である。

遺物はIII・IV層に，しかも，北東側に集中して出土した。花積下層式系・関山式系の土器片が多い。



第21図　第12号住居跡実測図

第12号住居跡出土遺物（第25図）

２は竹管による沈線，９は従，横の細い沈線を交互に施している。10は，荒い縄文を施している。３～８は無文で厚さも一定しているところから，同一体と思われる。１が礫を多量に含み，10が繊維を含んでいる。色は，１が黒褐色，２が橙色，３～８が灰褐色，９がにぶい橙色，10が明褐色である。

第13号住居跡（第22図）

本住居跡は,遺跡北部の$B2b_0$・$B3b_1$・$B2c_0$・$B3c_1$区に確認され,第３号住居跡の南に位置している。

規模・形状は径3.9ｍの円形で,比較的小型の住居跡である。壁は良好な硬さを持つしっかりした壁で，ほぼ垂直で比較的急な立ち上がりをし，10～22cmの壁高をもっている。なお，床面が段を有しているので西壁が高く（22cm),他の三壁が低い。床は平坦で比較的硬いが，西側が一段落ちこんで，10～14cm程低くなっている。床は西部と東部に分けた形になっている。炉は検出されなかった。柱穴は，P_1～P_{11}の11本確認されたが，小規模のもので，径20～28cm・深さ13～43cmの円形が主である。主柱穴はP_1・P_4・P_8・P_{11}と考えられる。西側と，中央に大ピットが検出された。西側のP_{10}は長径70cm・短径44cm・深さ40cmの不整楕円形で，西壁の下を掘りこんだ袋状のピットである。形状から貯蔵穴と考えられる。床は直線的な立ち上がりである。中央のP_3は，径約60cmの不整円形で，深さは11cmである。本住居跡の廃絶後に柱穴がかく乱を受け開口部が広がったものと考えられる。

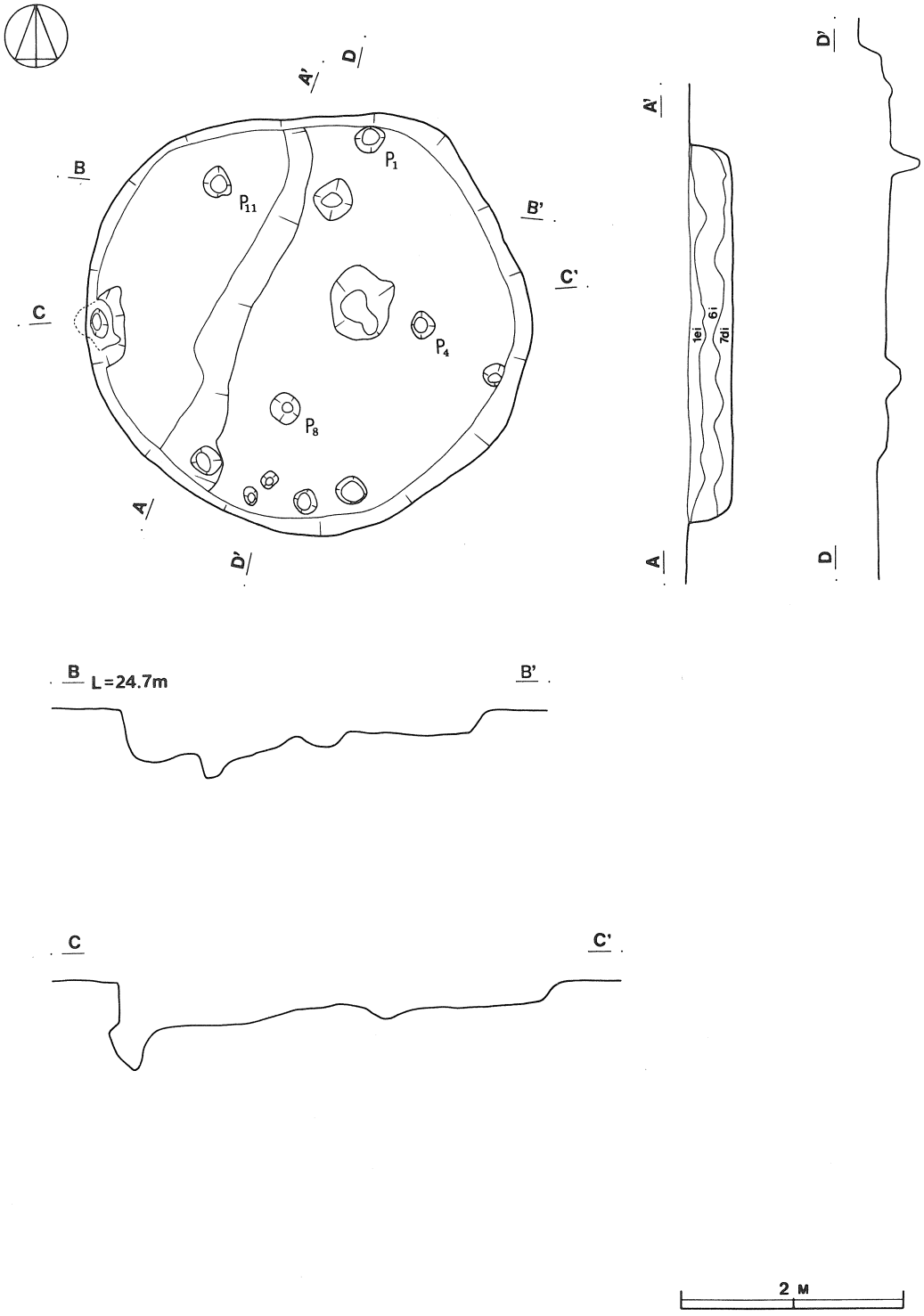
覆土は３層で，褐色土・にぶい褐色土・明褐色土で自然堆積である。II層に粘性があり，III層がよくしまっている。

遺物は出土しない。

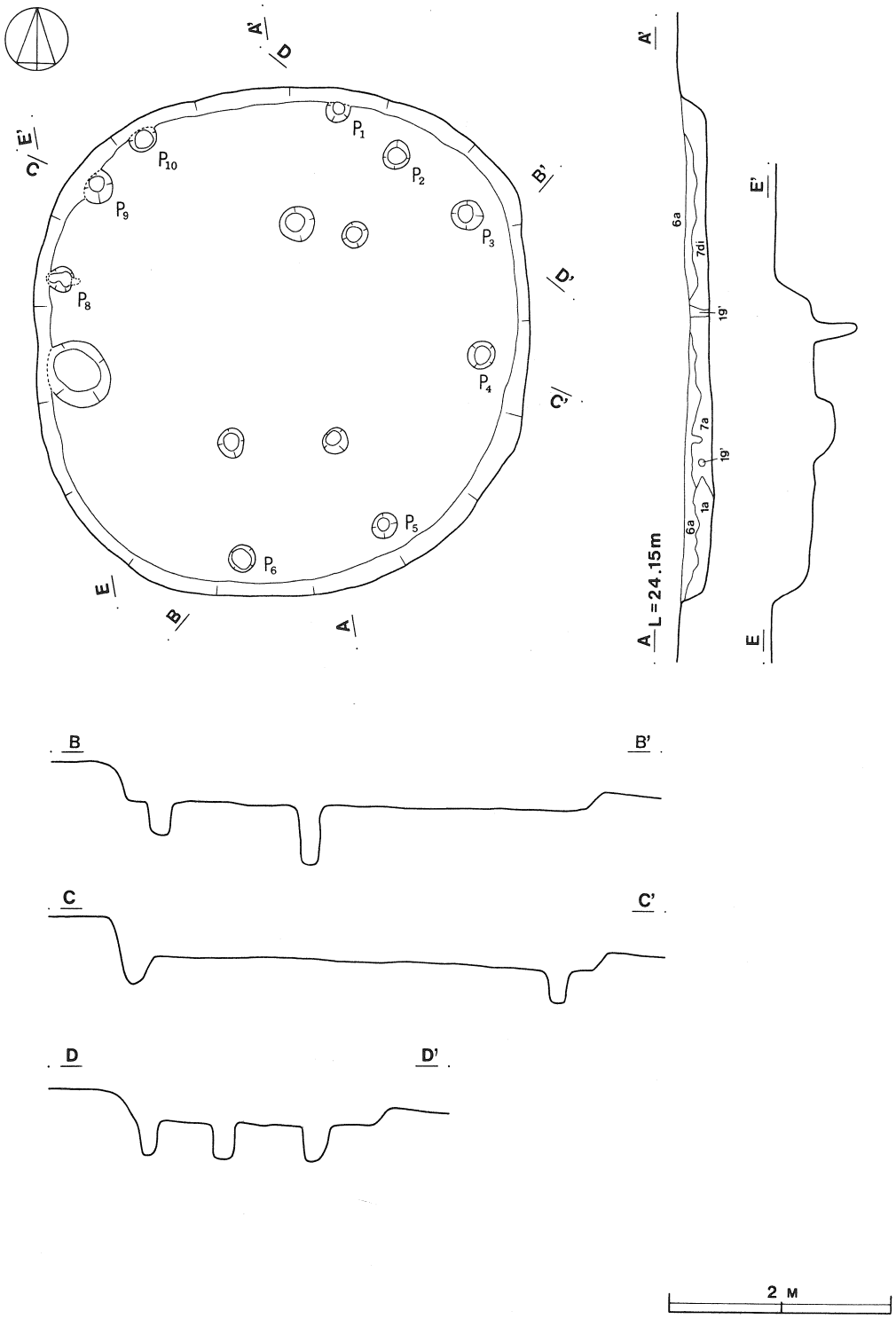
第14号住居跡（第23図）

本住居跡は，遺跡北部の$A3j_3$・$A3j_4$・$B3a_3$・$B3a_4$区に確認され，第１号住居跡の南東に位置している。

規模・形状は径約4.5ｍの円形である。壁は比較的良好な硬さを持ち，ゆるやかに外傾して立ち上がっている。壁高は14～34cm程である。西から東にかけて傾斜している場所に確認されたので,西壁が高く（34cm）東壁が低くなっている。床はロームだが，さほど硬くはない。また，平坦であるが，やはり西から東にかけて傾斜をしており，その差は４～12cm程である。炉は検出されていない。柱穴はP_1～P_{13}の13本確認され，径22～32cm・深さ19～52cmの円形が主である。P_1～P_6・P_8～P_{10}と壁にそって柱を巡らせたと考えられる。西壁のP_7は径40cmの円形で,深さ21cmの規模である。東壁をえぐって，長径64cm・短径54cmの貯蔵穴と思われるピットが確認されている。



第22図　第13号住居跡実測図



第23図　第14号住居跡実測図

覆土は２層で，ともに明褐色土で自然堆積である。Ⅰ層に黒色土粒子が含まれ，Ⅱ層に粘性が少しある。

遺物は出土しない。

第15号住居跡（第24図）

本住居跡は，遺跡北西部のB2h_3・B2i_2・B2i_3・B2j_2・B2j_3・B2j_4区に確認され，第10号住居跡の南西に位置している。

平面プランはほぼ台形状をしており，その規模は上底5.3ｍ・下底5.8ｍ・高さ6.6ｍである。長軸方向はＮ－25°－Ｗである。第16号住居跡と接し，第16号住居跡の床を切って築かれているので，本住居跡が新しいと考えられる。確認面から３～７cm程の壁高しかなく，非常に浅い。ほぼ垂直な壁の立ち上がりで，壁そのものもさほど硬くはない。ロームの床で平坦であるが，比較的固く踏みかけめられたようである。柱穴は25本確認され，内17本（P_1～P_6・P_{10}～P_{19}）が壁にそって検出された。規模は径15～20cm・深さは20～30cmで，太さ・深さともほぼ一定した円形の柱穴である。17本を壁柱穴のようにして柱を築いたのではないかと考えられる。炉・貯蔵穴の類は検出されなかった。

覆土は２層あり，ともに明褐色土である。Ⅱ層にわずかだが粘性がみられる。南北のベルトの一部に人為的埋めもどしによる堆積がみられるが，他の部分はすべて自然堆積である。

遺物は極少量出土しており，黒浜式が２片出土した。石器では磨製石斧が１点出土している。

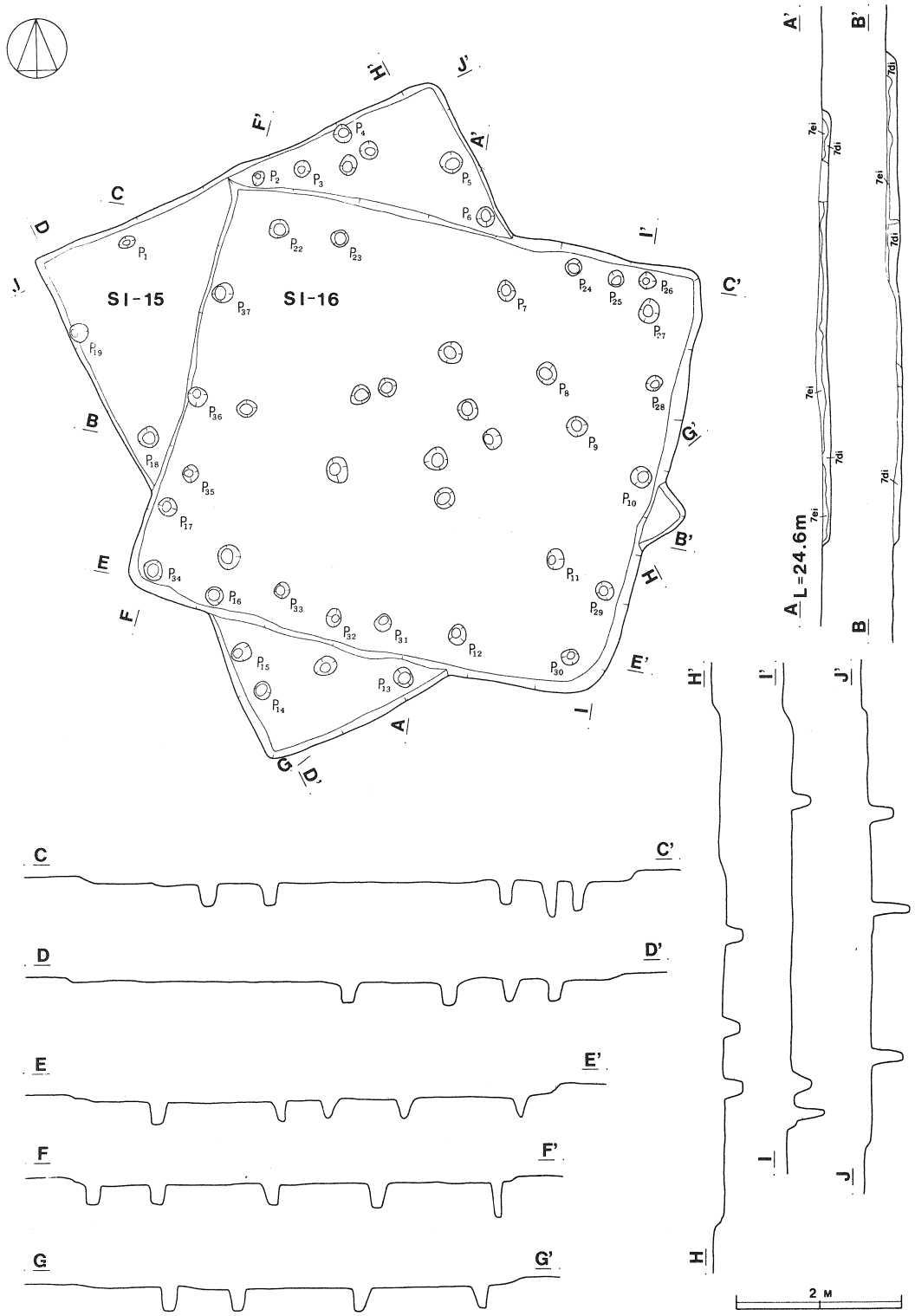
第16号住居跡（第24図）

本住居跡は，遺跡北西部のB2j_2・B2j_3・B2j_4・B2i_2・B2i_3・B2i_4区に確認され，第10号住居跡の南西に位置している。

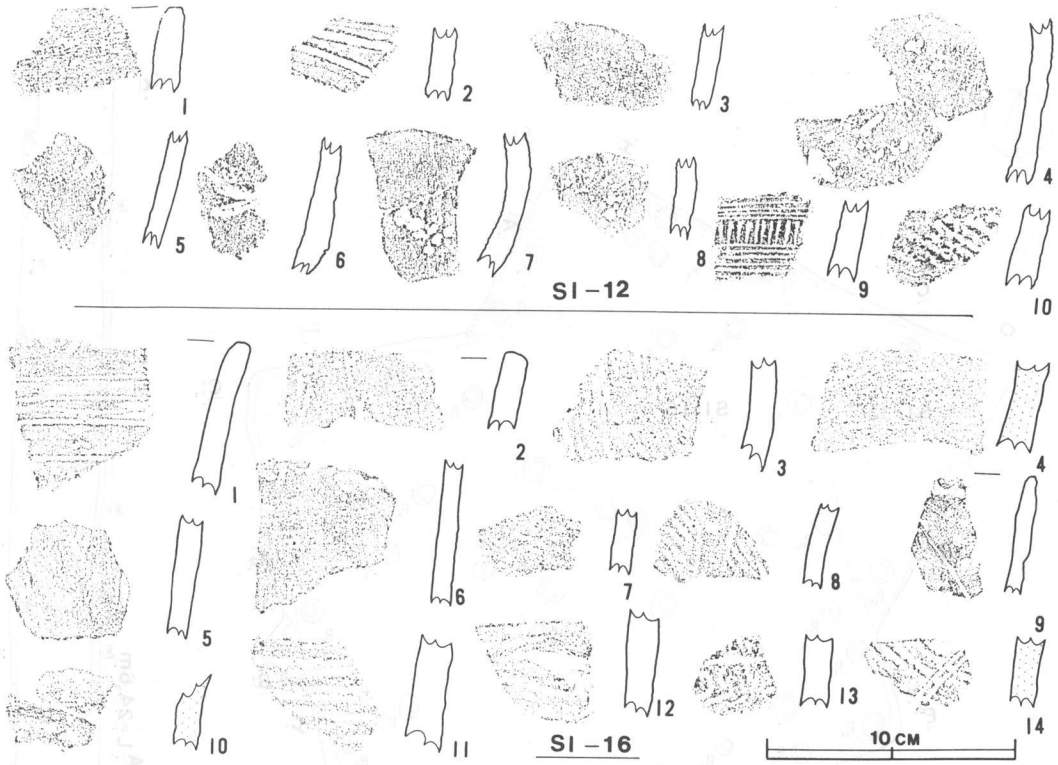
規模・形状は長辺5.9ｍ・短辺5.2ｍの長方形で，長軸方向はＮ－74°－Ｗである。第15号住居跡が本住居跡を斜めに切りこんでいる。第15号住居跡と同じく確認面から浅く，５～10cmの壁高である。壁そのものはさほど硬くはなく，垂直な立ち上がりをしている。床はローム床で，平坦かつ踏みかためられたように固い。柱穴は22本検出された。内17本（P_{22}～P_{28}・P_{29}～P_{34}・P_{35}～P_{37}）が壁にそうように巡っている。第15号住居跡と同じく壁柱穴として柱を築いたと考えられる。柱穴規模・形状は径20～28cmの円形・深さ22～24cm程で，太さ・深さがほぼ一定している。炉・貯蔵穴の類は検出されなかった。

覆土は２層で，ともに明褐色土が堆積している。第15号住居跡と同じくⅡ層に粘性が認められ，南北ベルトの一部に人為的な埋めもどしによる堆積がみられるが，他の箇所は自然堆積である。

遺物は少量出土したが，中でも黒浜式の土器片が多い。



第24図　第15. 16号住居跡実測図



第25図　第12.15.16号住居跡出土遺物拓影図

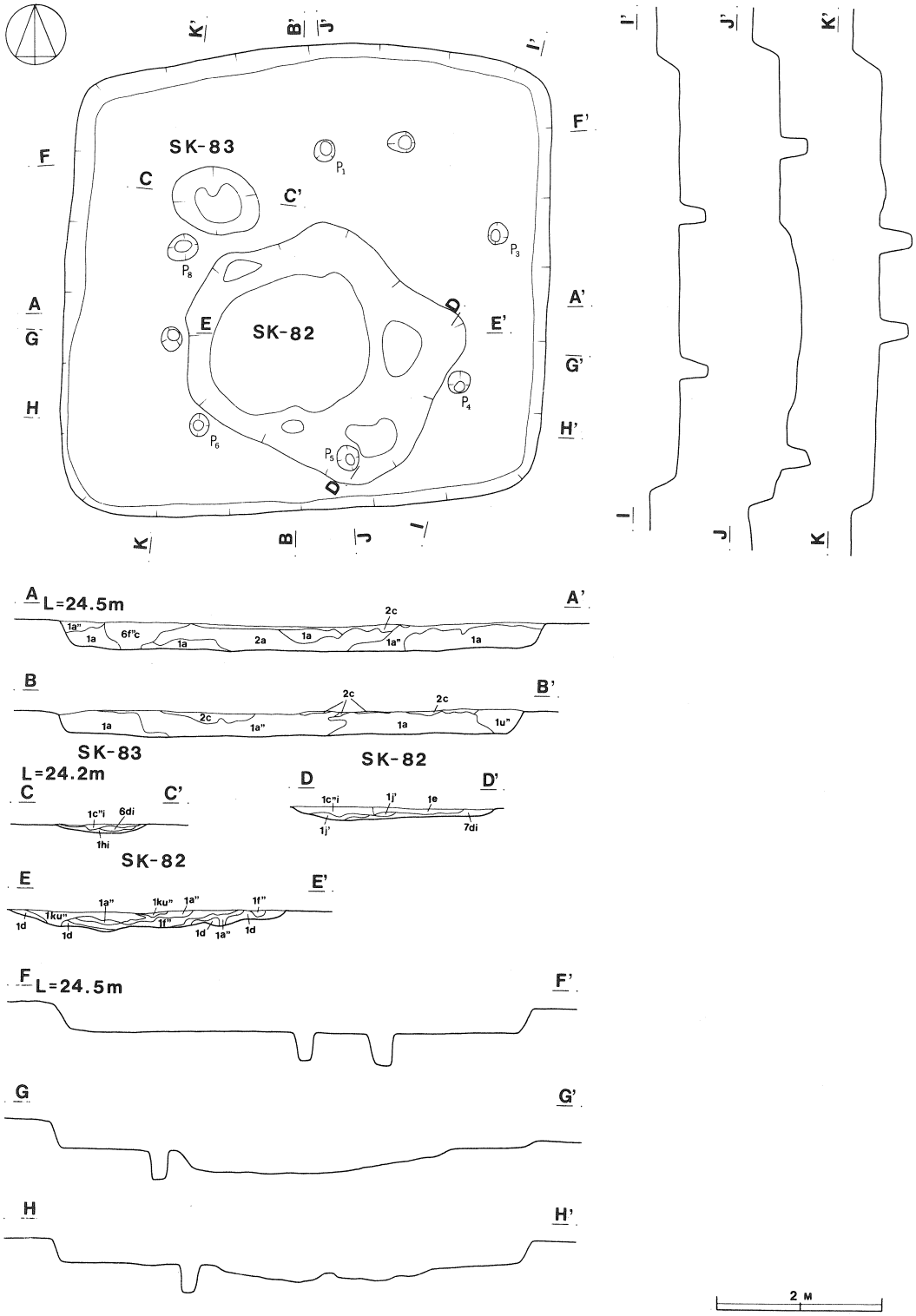
第17号住居跡（第26図）

本住居跡は，遺跡南西部のDlc$_9$・Dlc$_0$・D2c$_1$・D1d$_9$・D1d$_0$・D2d$_1$ 区に確認され,第11号住居跡の西側に位置する。

規模は一辺約5.5ｍの隅丸方形で，北東と南西のコーナーが外側に伸び,ややひし形のようにゆがんだプランを持っている。長軸方向Ｎ－０°で北を指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり,26～30cmの壁高を持っている。南西コーナーの一部が最も急な立ち上がりを示す。どの壁もしっかりした硬さを持っている。床は平坦であるが，ソフトロームで比較的やわらかいほうである。また,松根によるかく乱もある。中央から南にかけて，床全体の$\frac{1}{3}$ほどを大きなピットが占めている。本住居跡との関連はみられず第82号土壙とした。また，北西には第83号土壙が確認された。この土壙は本住居跡廃絶後に築かれたようである。柱穴はP_1～P_7 の７本確認され，前述の第82号土壙をとり囲むように検出された。径26～32cm・深さ33～42cmの規模で,主柱穴はP_1 ・P_3 ・P_5 ・P_6 ・P_8 と考えられる。炉は確認されなかったが，第82号土壙の底面に少量の焼土塊を確認した。

覆土は６層で，暗褐色土・ 褐色土・にぶい褐色土の順で堆積しており，人為的な埋めもどしによるものである。

遺物はⅠ・Ⅱ層から出土したが，長岡式の弥生土器が多く出土し，その他，花積式・茅山式・田戸下層式・関山式・浮島式・諸磯式の土器も併せて出土している。鉄製品も１点出土した。



第26図　第17号住居跡実測図

第18号住居跡（第27図）

本住居跡は，遺跡南西部のD1e$_0$・D2e$_1$・D2e$_2$・D1f$_0$・D2f$_1$・D2f$_2$区に確認され，第17号住居跡の南東に位置している。

規模・形状は一辺約５ｍの隅丸方形である。長軸方向はＮ－14°－Ｅである。壁はしっかりとして硬く，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は26～32cmで，一部桑の根によるかく乱が残っていた。床はソフトロームで平坦であるが，南東のコーナー一部がやや落ちこみ，他の床面と５cm程の落差がある。炉･貯蔵穴は検出されなかった。柱穴はP$_1$～P$_7$の７本確認された。径26～32・深さ27～31cmの円形で，太さ・深さがほぼ一定している。P$_1$（54cm）･P$_2$（79cm）･P$_7$（72cm）は，後世の植物根のかく乱でより深くなったようである。なお，主柱穴はP$_1$～P$_4$と考えられる。

覆土は西側で一部人為的な埋めもどしによる堆積がみられるが，他は自然堆積である。10層に分かれ，暗褐色土・明褐色土・暗赤褐色土・褐色土の順である。なお，Ⅳ・Ⅴ・Ⅸ・Ⅹ層はしまりを持っている。

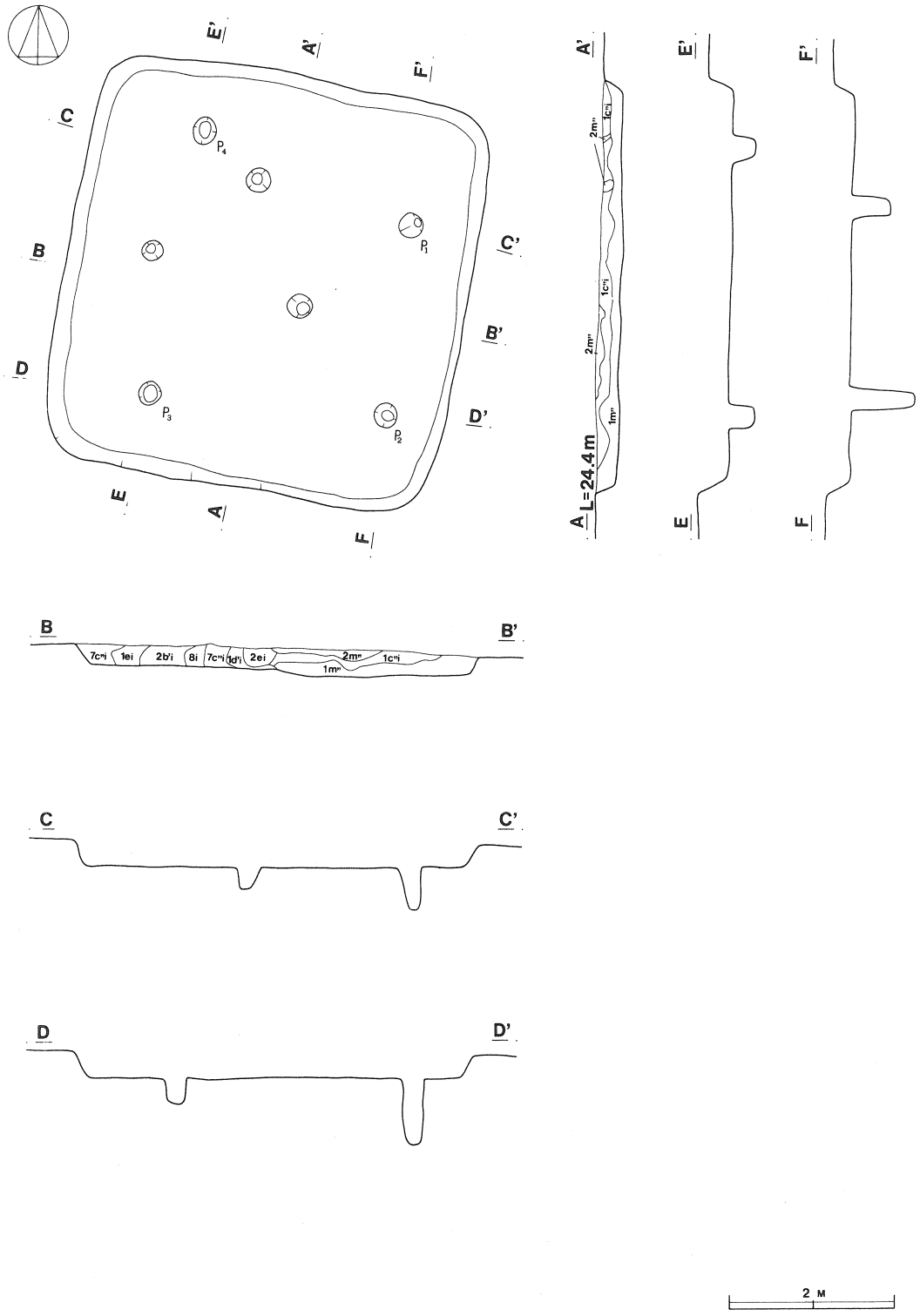
遺物はⅢ層に集中して多量に出土したが，諸磯式・浮島式の土器片が多い。床面から出土したものも諸磯式である。また，弥生土器も若干出土した。

第15・16号住居跡出土遺物（第25図）

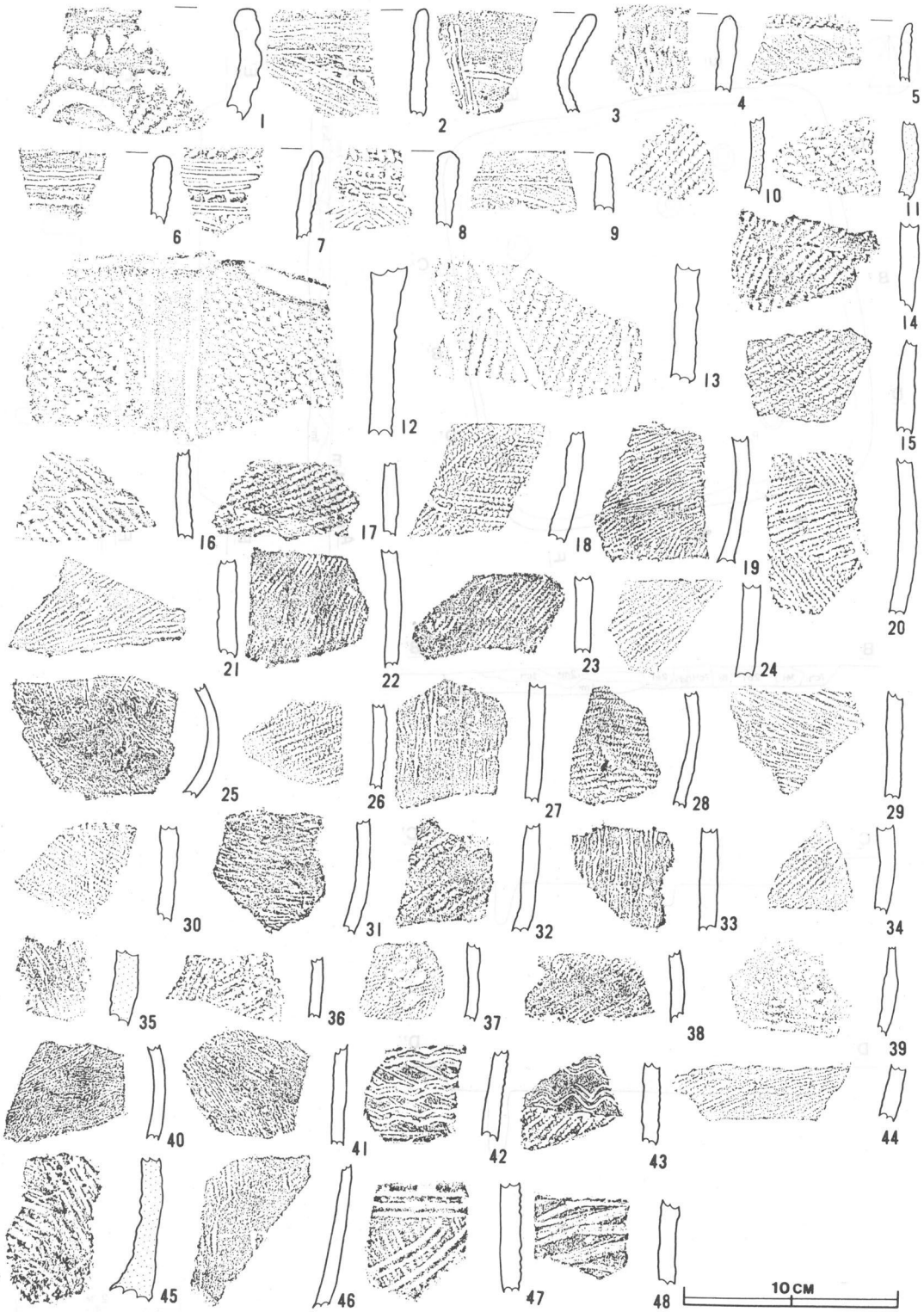
１は平行沈線，８は縦の沈線を２本付け沈線の間に摩滅はしているが縄文を施している。11は太く浅く沈線を付け，14は２本の斜めの沈線と荒い縄文を施す。３は礫を多量に含み，10・14に繊維を含んでいる。色は１・６・８・９・11がにぶい橙色，２が浅黄橙色，３・12が灰褐色，4・10・13が橙色，５・７がにぶい橙色，14がにぶい褐色である。

第18号住居跡出土遺物（第30図）

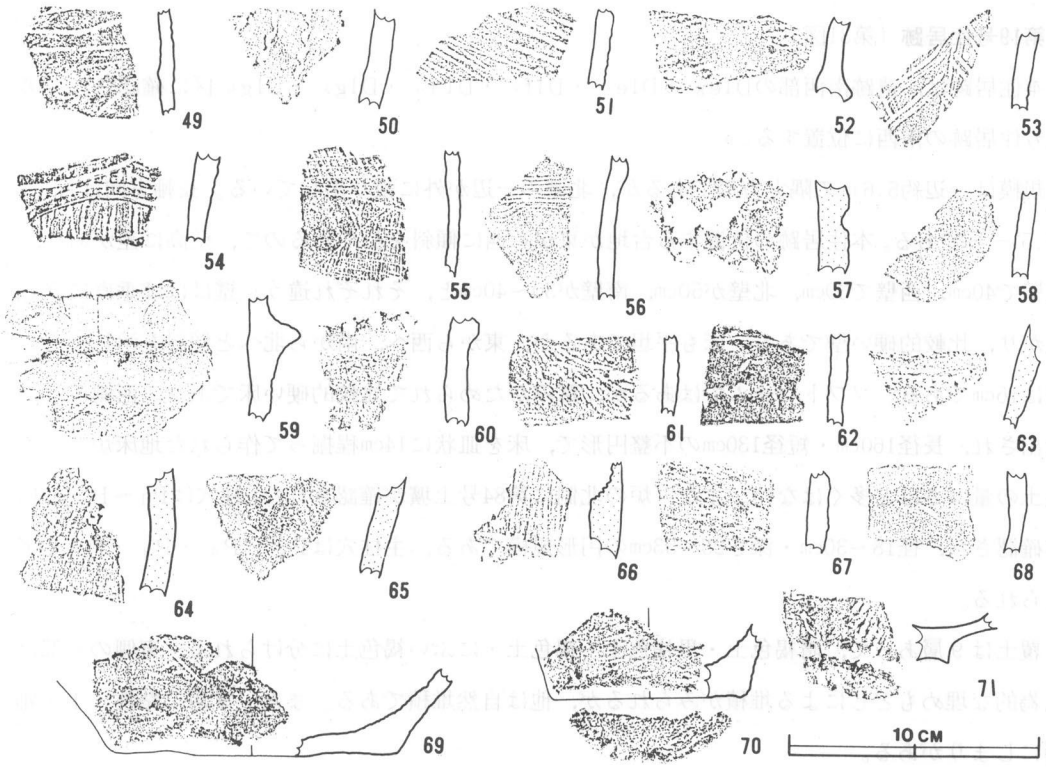
１は竹管による平行沈線文，２は同じ沈線だが口唇部が隆帯になっている。３は口唇部上を連続キザミ文を付けている。４は貝殻腹縁文，９は撚糸文を地文とし竹管による沈線と連続爪形文，竹管刺突文を施す。15・23は単節の縄文を施す。18は波状文の間に縦の細い沈線を施し，有節平行沈線文と縦，横の交差沈線文を付けている。24・25は底部である。24にはわずかに残った胴部に有節縄文を施す。３は胎土に礫を多量に含み，15は繊維を含んでいる。色は１・６・８・17が橙色，２・３・12・18・20が黒褐色，４・５・７・10・19・21・22・24がにぶい黄橙色，9・11・15・25がにぶい褐色，13が褐色，14が明褐色，16がにぶい橙色，23が橙色である。



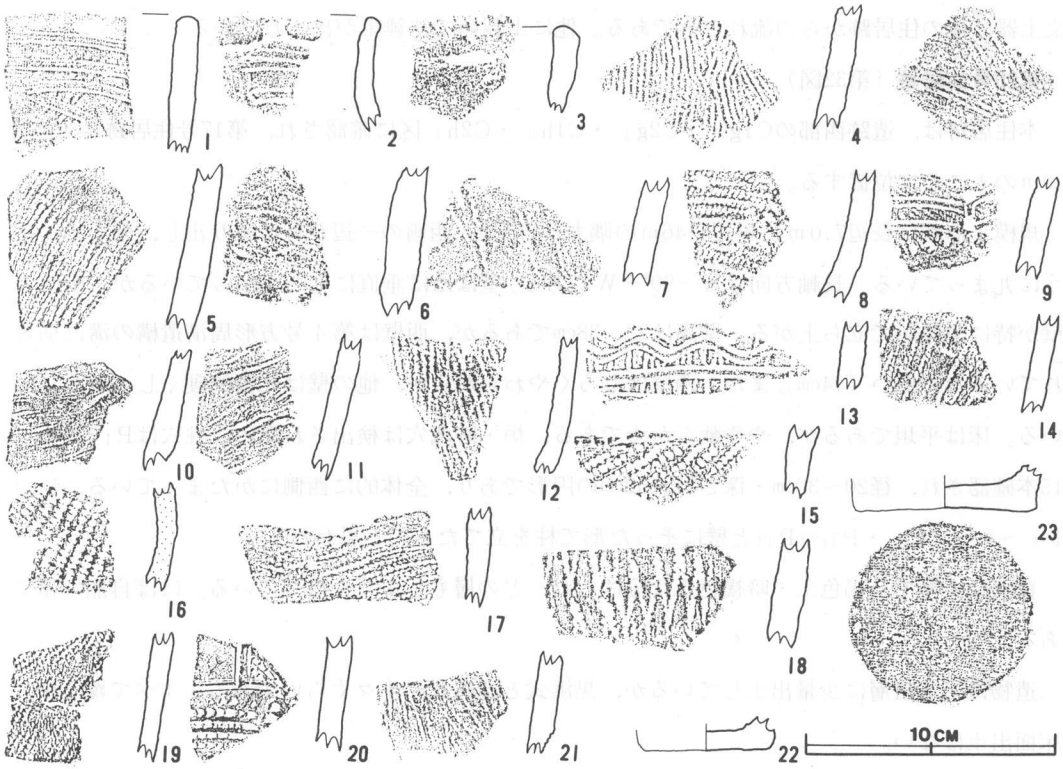
第27図　第18号住居跡実測図



第28図　第17号住居跡出土遺物拓影図(1)



第29図　第17号住居跡出土遺物拓影図(2)



第30図　第18号住居跡出土遺物拓影図

第19号住居跡（第31図）

本住居跡は，遺跡南西部のD1e$_8$・D1e$_9$・D1f$_8$・D1f$_9$・D1g$_8$・D1g$_9$区に確認され，第17号住居跡の南西に位置する。

規模は一辺約5.6ｍの隅丸方形であるが，北側の一辺が外に張り出している。長軸方向はＮ－85.5°－Ｅである。本住居跡の位置する台地が東から西に傾斜をしているので，壁高に差があり，東壁で40cm，西壁で30cm，北壁が50cm，南壁が30～40cmと，それぞれ違う。壁はほぼ垂直に立ち上がり，比較的硬い壁である。床も平坦であるが，東から西へ，南から北へと傾斜を示し，その差は16cmである。ソフトロームではあるが，踏みかためられて比較的硬い床である。西側に炉が検出され，長径160cm・短径130cmの不整円形で，床を皿状に14cm程掘って作られた地床炉である。焼土の量はさほど多くはない。また，炉の北側に第84号土壙が確認された。柱穴はP$_1$～P$_{13}$の13本確認され，径18～30cm・深さ25～53cmの円形規模である。主柱穴はP$_2$・P$_4$・P$_9$・P$_{12}$と考えられる。

覆土は９層あって，暗褐色土・黒褐色土・褐色土・にぶい褐色土に分けられる。東側の一部に人為的な埋めもどしによる堆積がみられるが，他は自然堆積である。また，Ⅴ層に粘性・Ⅰ・Ⅷ層にしまりがある。

遺物は多量出土しているが，浮島式の土器が多い。床面からは弥生土器を出土しているが，縄文土器は他の住居跡からの流れこみである。他に土製品で紡錘車が出土している。

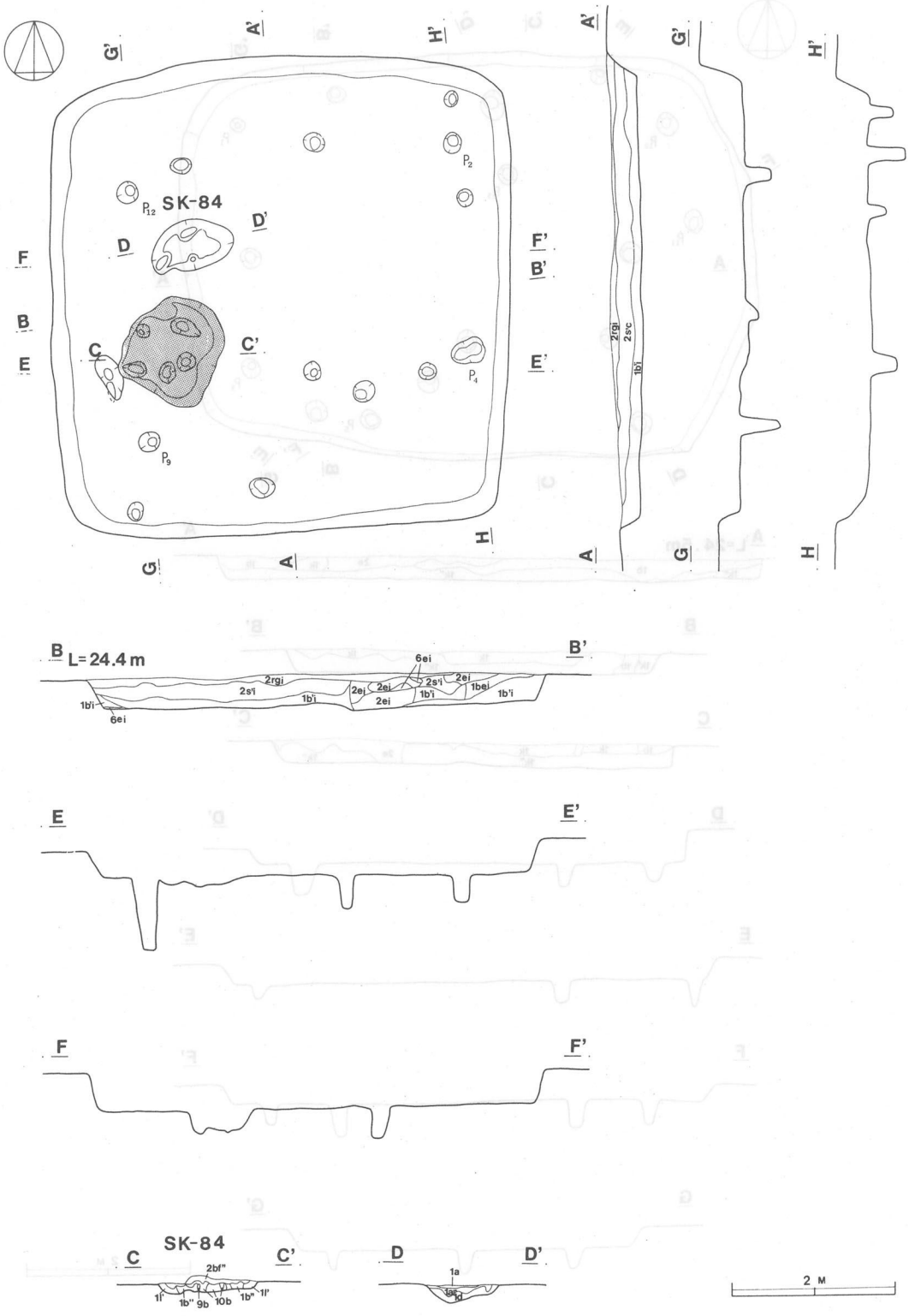
第20号住居跡（第32図）

本住居跡は，遺跡西部のC1g$_0$・C2g$_1$・C1h$_0$・C2h$_1$区に確認され，第17号住居跡の北側約20ｍのところに位置する。

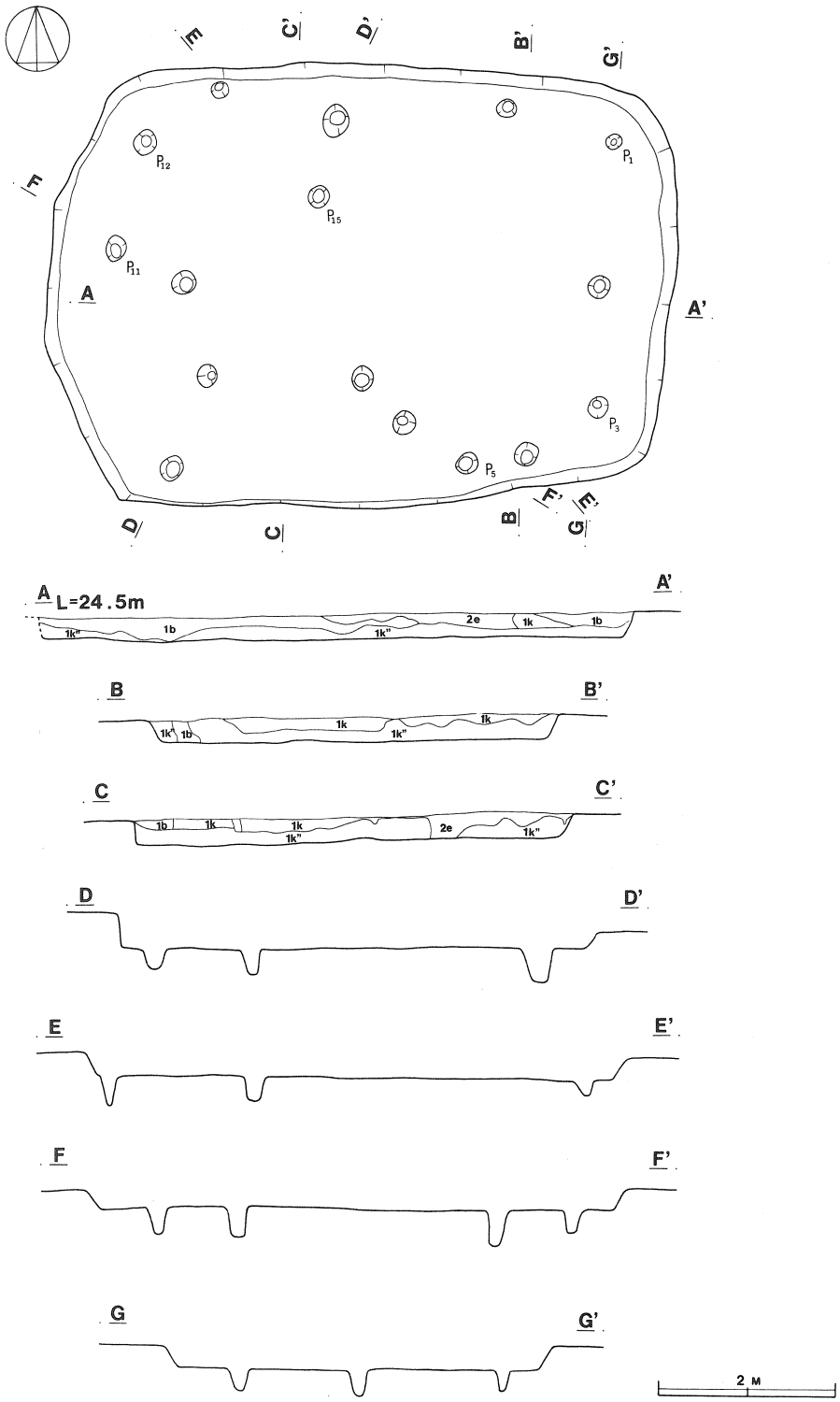
規模・形状は長辺7.0ｍ・短辺4.46ｍの隅丸長方形で，西側の一辺が外に張り出し，弧を描くように丸まっている。長軸方向はＮ－90°－Ｗである。壁はほぼ垂直に立ち上がっているが，南西の壁が特に急傾斜で立ち上がる。壁高は22～38cmであるが，西壁は第４号方形周溝遺構の溝に切られているため低い（14cm）。また，西壁はもろくやわらかいが，他の壁は比較的硬くしっかりしている。床は平坦であるが，やや軟らかめである。炉・貯蔵穴は検出されない。柱穴はP$_1$～P$_{15}$の15本確認され，径20～30cm・深さ21～52cmの円形であり，全体的に西側にかたまっている。P$_1$・P$_3$～P$_5$・P$_8$・P$_{11}$～P$_{13}$と壁にそった形で柱を立てたものと思われる。

覆土は４層で，褐色土・暗褐色土に分けられ，どの層もしまりを持っている。ほぼ自然堆積である。

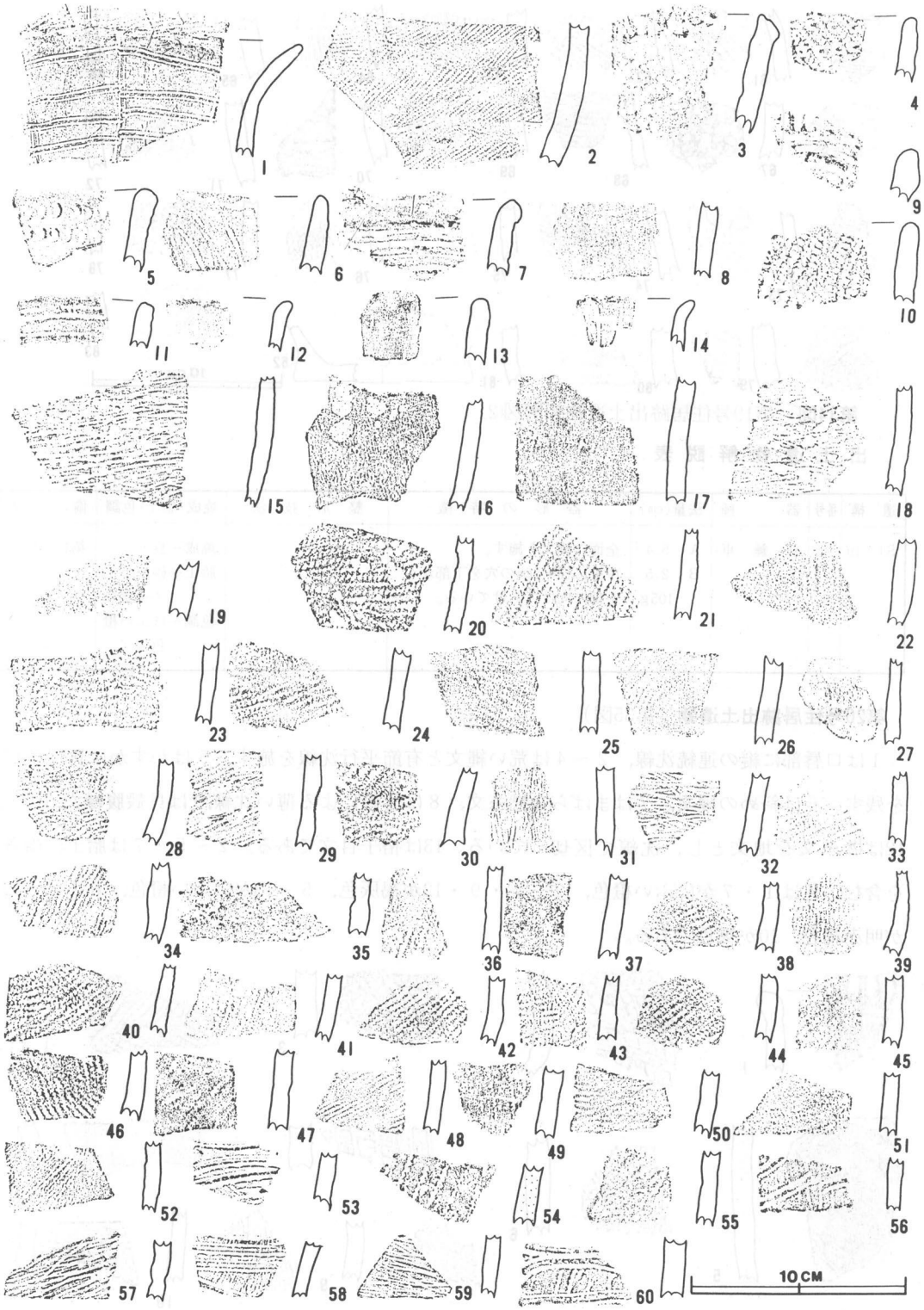
遺物はⅠ・Ⅲ層に少量出土しているが，黒浜式と諸磯式の半々ぐらいである。すべて覆土中で床面出土はない。



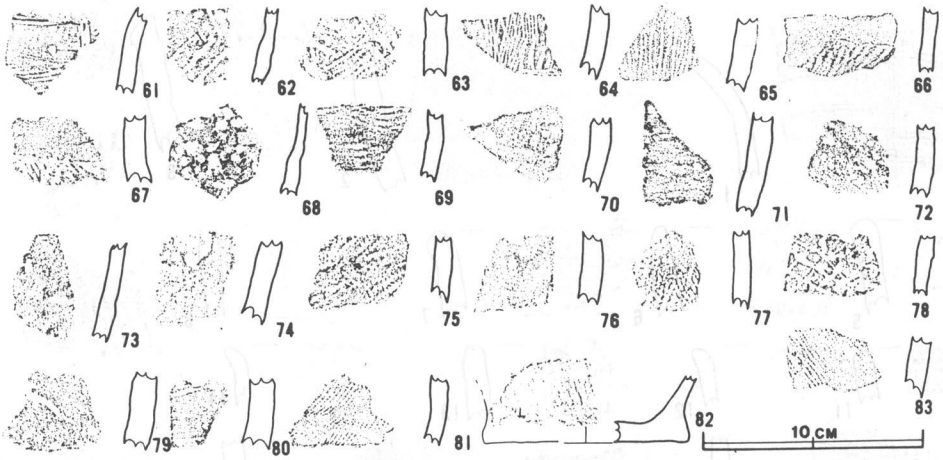
第31図　第19号住居跡実測図



第32図　第20号住居跡実測図



第33図　第19号住居跡出土遺物拓影図(1)



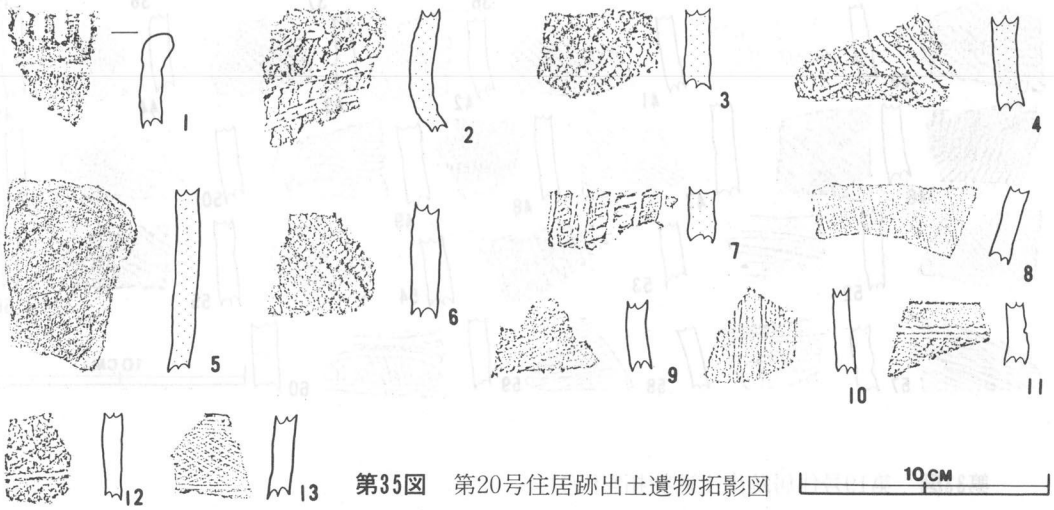
第34図　第19号住居跡出土遺物拓影図(2)

出土遺物解説表

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI−19	1	紡錘車	A 5.4 B 2.5 105g	全面に縄文を施す。 中央に径0.5cmの穴を下部から上部に向けてあけている。		焼成…良 胎土…砂・パミスを含む 色調…にぶい橙色	第128図1

第20号住居跡出土遺物（第35図）

1は口唇部に縦の連続沈線，2～4は荒い縄文と有節平行沈線を施す。5はかすかに貝殻条痕を残す。6は斜めの縄文，7はまばらな撚糸文，8は竹管による薄い沈線，9は貝殻腹縁文，10～12は撚糸文を地文とし，沈線で区切っている。13は格子目文である。2～5・7は胎土に繊維を含む。色は1・7がにぶい橙色，2～4・9・12が褐灰色，5・13がにぶい橙色，6・8・11が明赤褐色，10が褐色である。



第35図　第20号住居跡出土遺物拓影図

第21号住居跡（第36図）

本住居跡は，遺跡西部の$C1i_0$・$C2i_1$・$C1j_0$・$C2j_1$区に確認され，第20号住居跡の南側に位置している。

規模は長辺5.8m・短辺5.0mの隅丸長方形で，北側の一辺が外側に張り出している。長軸方向はN－0°で北を向いている。中央に第85号土壙，南側に第86号土壙が存在している。壁は南壁で部分的にゆるやかに立ち上がり，他はほぼ垂直に立ち上がっている。どの壁も20cm程の壁高で，比較的硬くしっかりした壁である。床は比較的硬いロームで，平坦であるが，四方にくらべ中央がやや盛り上がっており，その差は3cm程である。炉は中央に1つ，南側に1つあって，中央のF_1は長径約100cm・短径80cm・深さ11cmの不整円形，南側のF_2は長径44cm，短径16cm，深さ10cmで，F_1，F_2とも皿状に床を掘りこみ，中程の層に赤く焼けた層が存在する。柱穴はP_1～P_{10}の10本確認され，径約36cm程のものが2本，径約20cm程が8本である。深さは20～29cmとほぼ一定している。ただ，南西に確認された3本は非常に浅く4～6cm程である。

覆土は5層で，褐色土・暗褐色土に分けられる。Ⅲ・Ⅳ層にしまりがあり，人為的な埋めもどしによる堆積である。

遺物は，覆土全層から多量に出土し，大部分は諸磯式の土器である。

第22号住居跡（第37図）

本住居跡は，遺跡中央部の$C2c_4$・$C2c_5$・$C2c_6$・$C2d_4$・$C2d_5$・$C2d_6$区に確認され，第10号住居跡の南約15mのところに位置する。

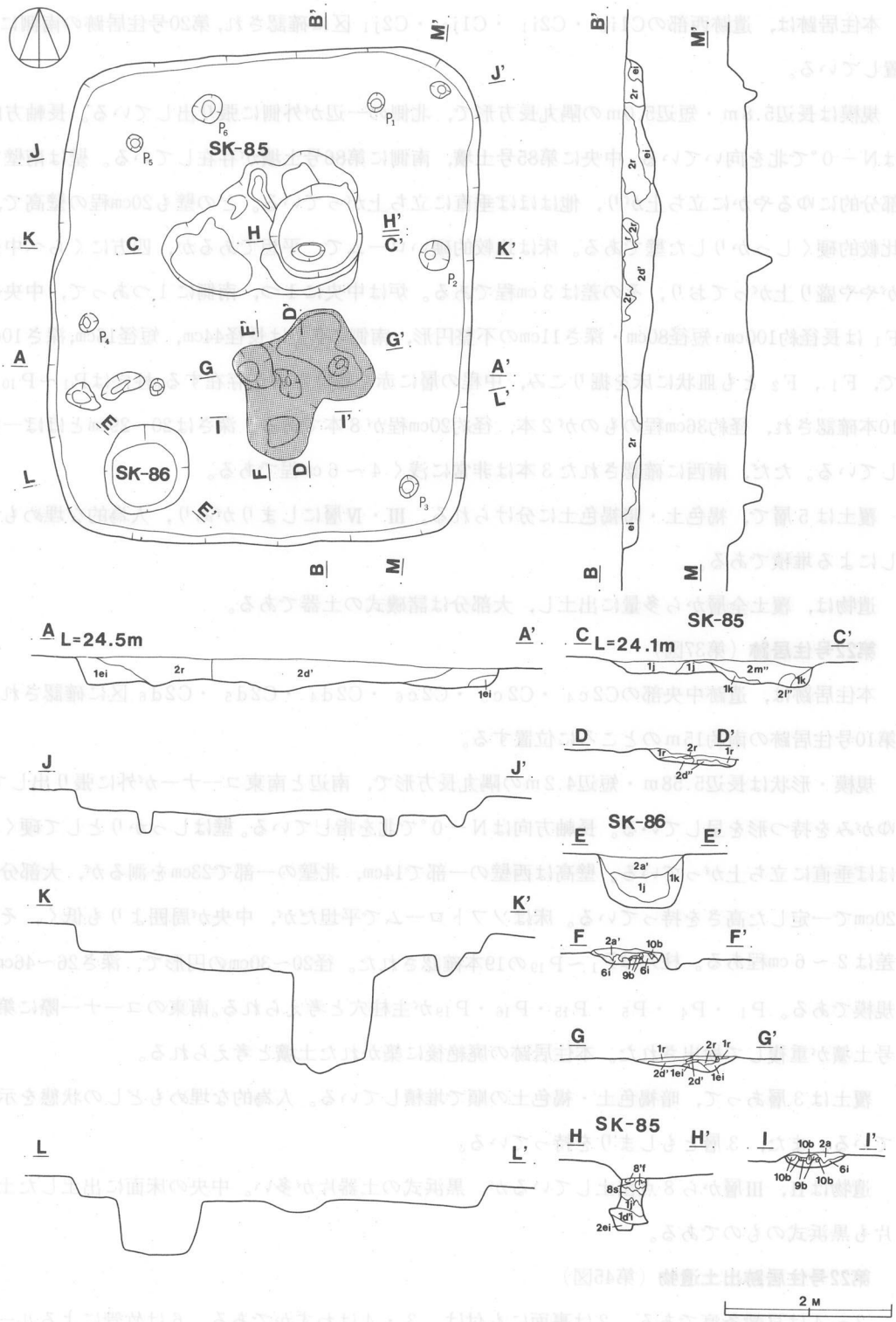
規模・形状は長辺5.58m・短辺4.2mの隅丸長方形で，南辺と南東コーナーが外に張り出して，ゆがみを持つ形を呈している。長軸方向はN－0°で北を指している。壁はしっかりとして硬く，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は西壁の一部で14cm，北壁の一部で23cmを測るが，大部分は20cmで一定した高さを持っている。床はソフトロームで平坦だが，中央が周囲よりも低く，その差は2～6cm程ある。柱穴はP_1～P_{19}の19本確認された。径20～30cmの円形で，深さ26～46cmの規模である。P_1・P_4・P_5・P_{15}・P_{16}・P_{19}が主柱穴と考えられる。南東のコーナー際に第87号土壙が重複して検出された。本住居跡の廃絶後に築かれた土壙と考えられる。

覆土は3層あって，暗褐色土・褐色土の順で堆積している。人為的な埋めもどしの状態を示している。また，3層ともしまりを持っている。

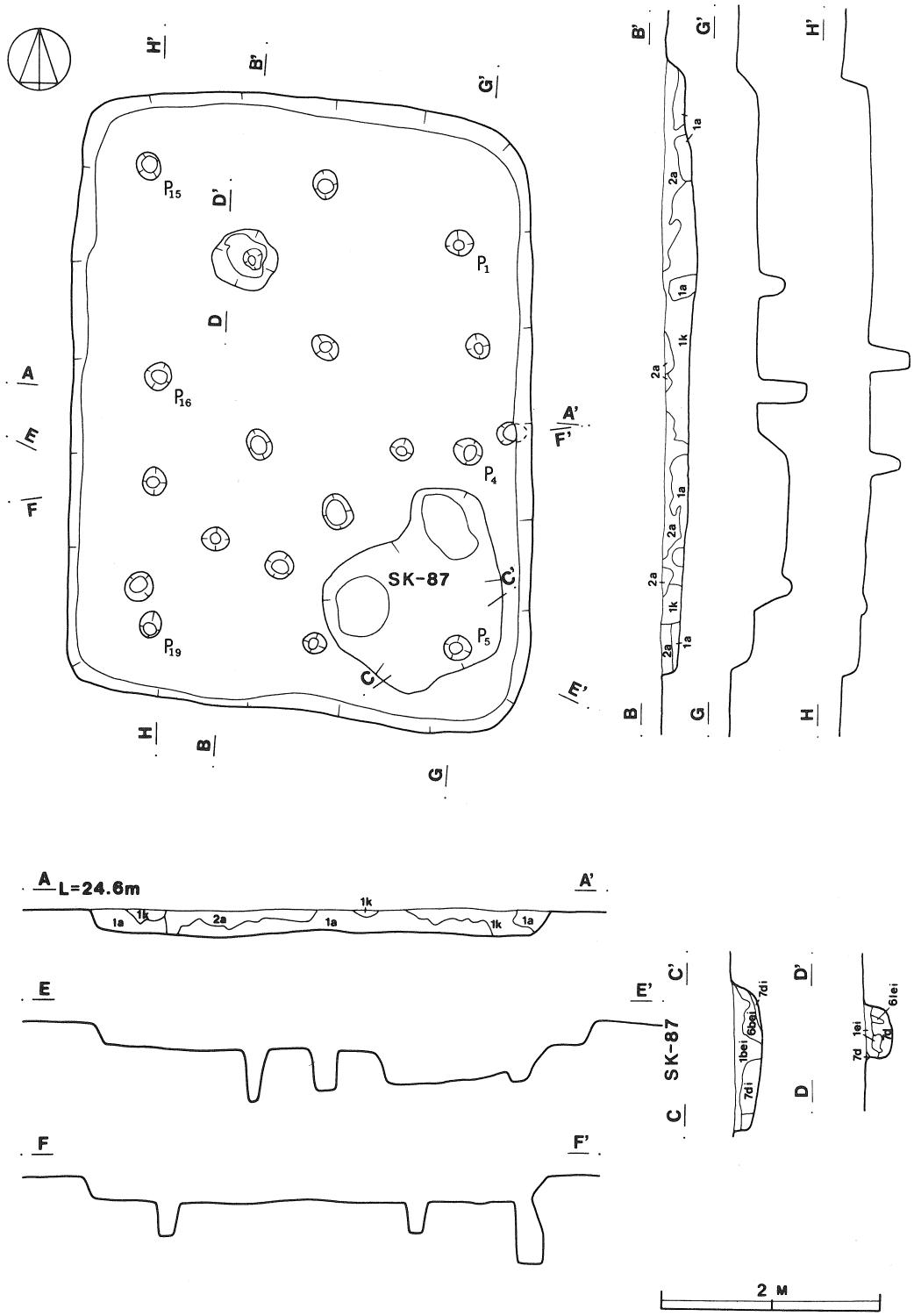
遺物はⅡ，Ⅲ層から8点出土しているが，黒浜式の土器片が多い。中央の床面に出土した土器片も黒浜式のものである。

第22号住居跡出土遺物（第45図）

2～4は貝殻条痕である。2は裏面にも付け，3・4はわずかである。6は竹管によるループ文，7は平行沈線文，8は縦と横の沈線，9・10・14は幅広の半截竹管による沈線，11は荒い縄

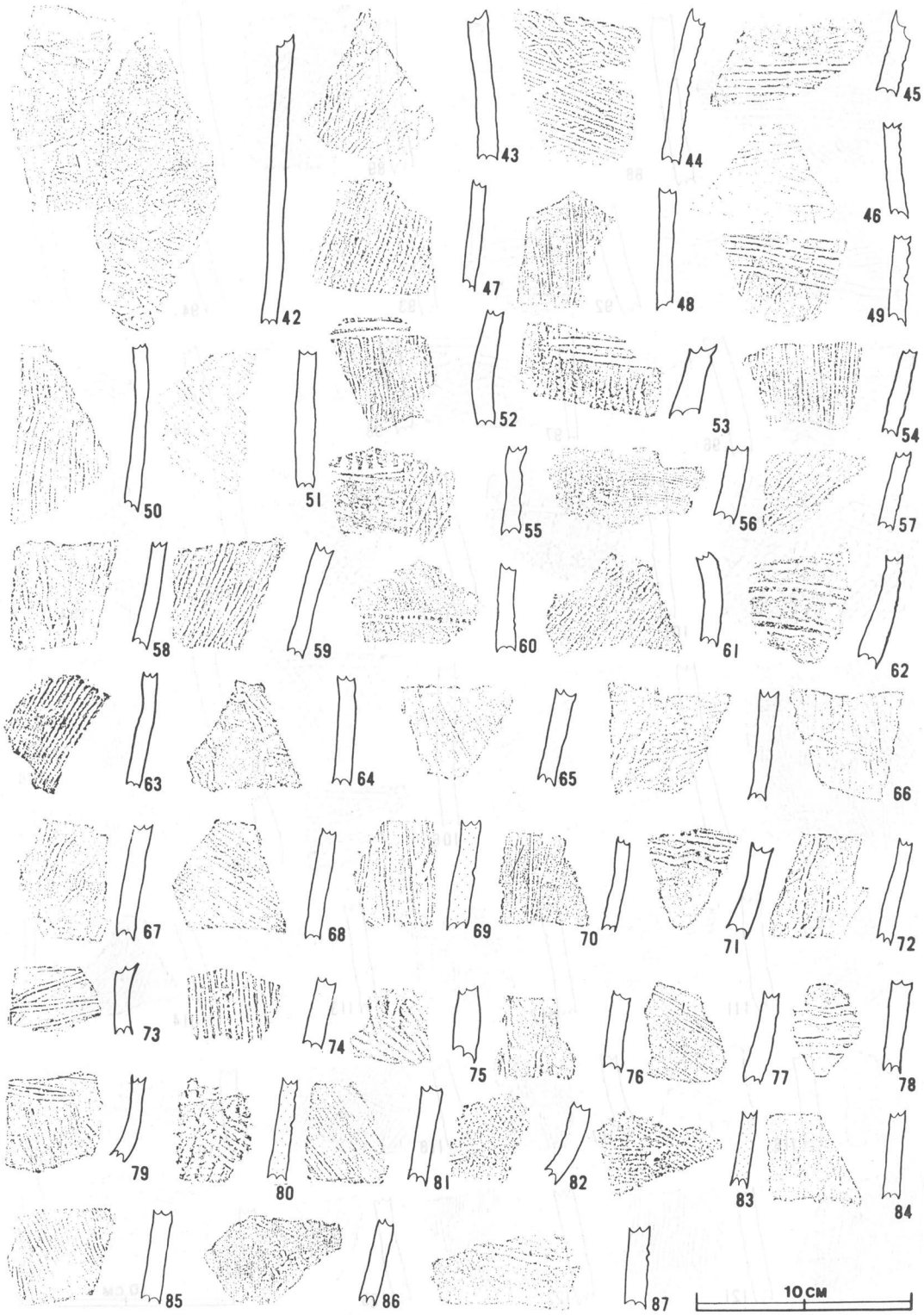


第36図　第21号住居跡実測図

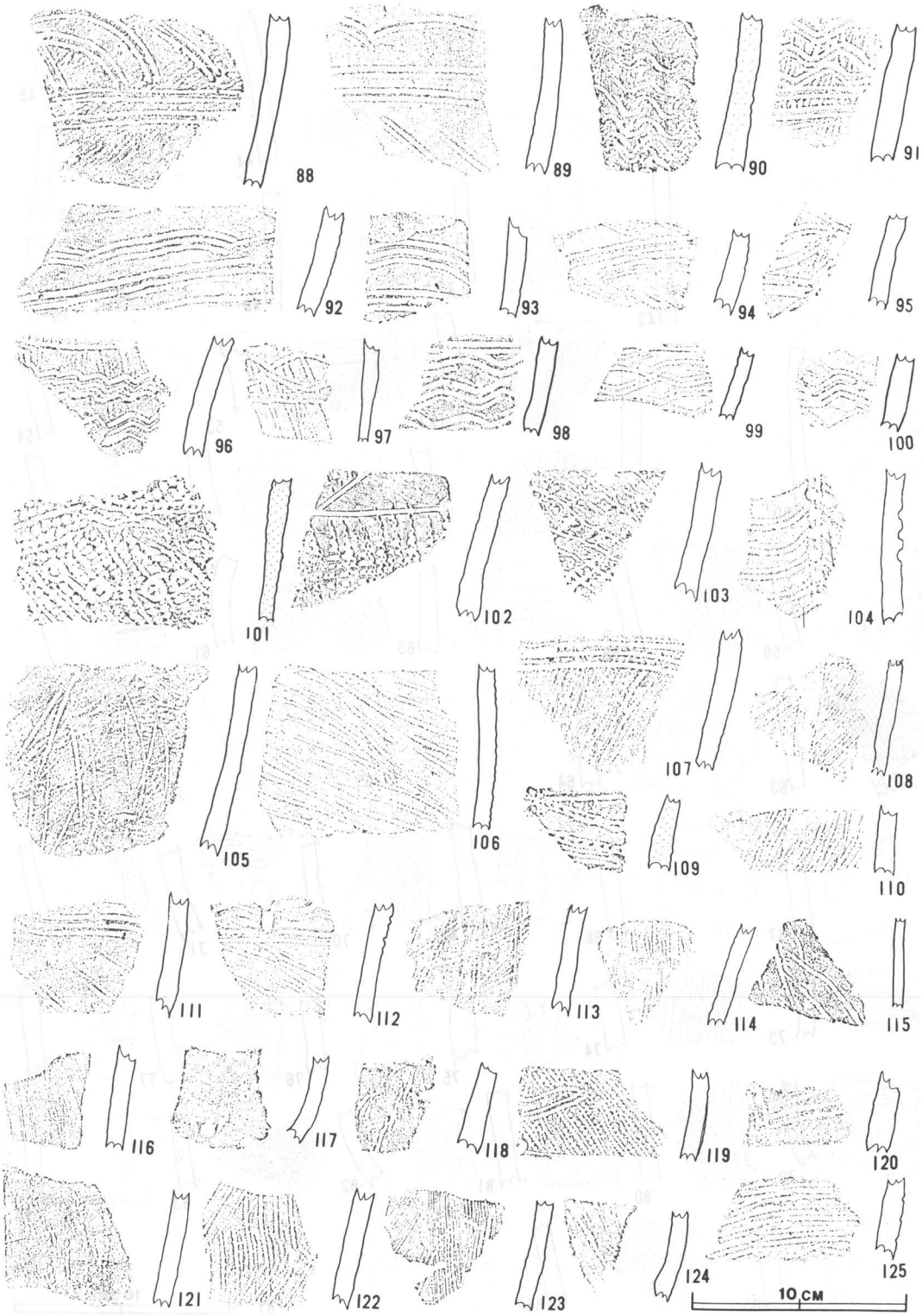


第37図　第22号住居跡実測図

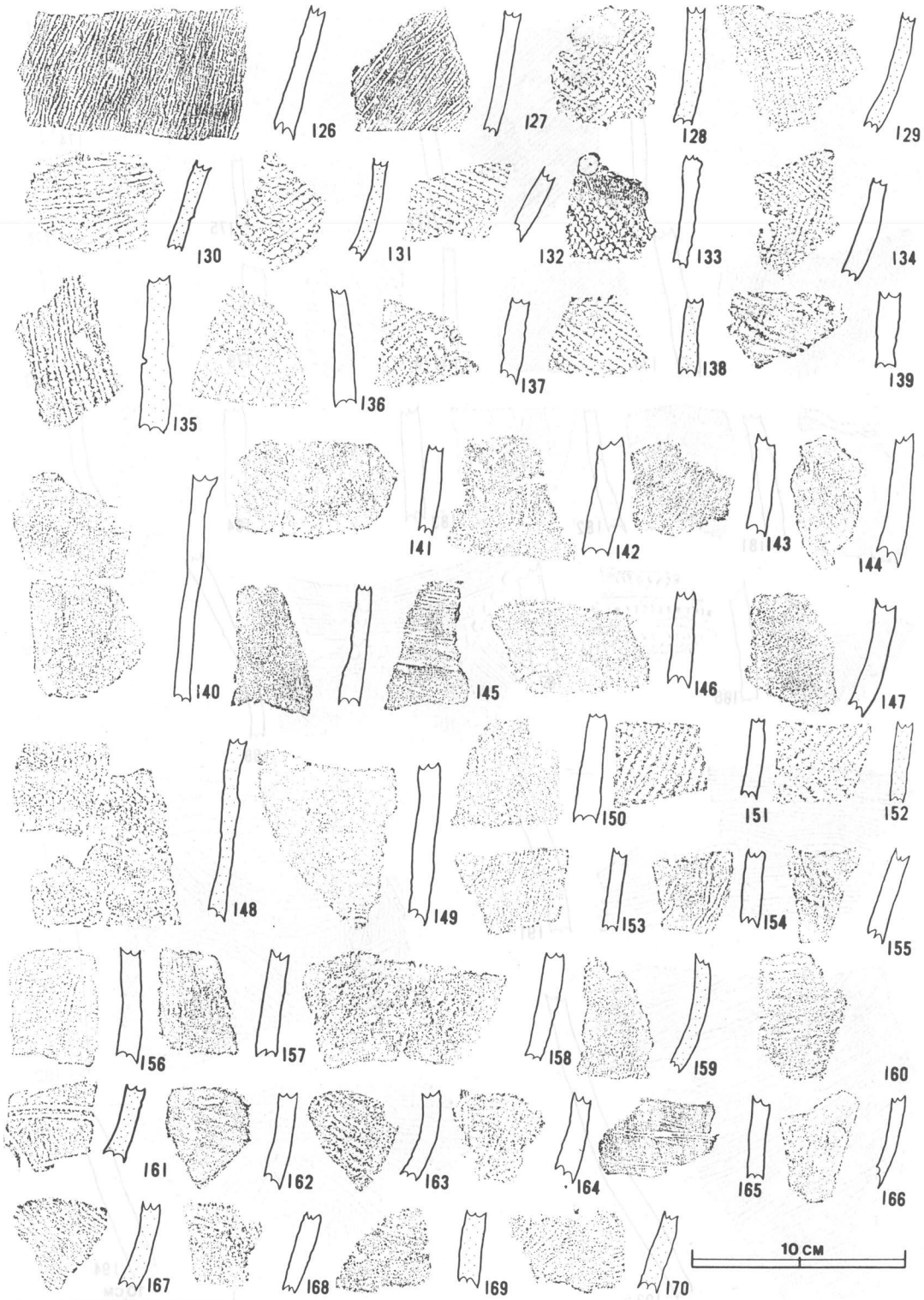
第38図　第21号住居跡出土遺物拓影図(1)



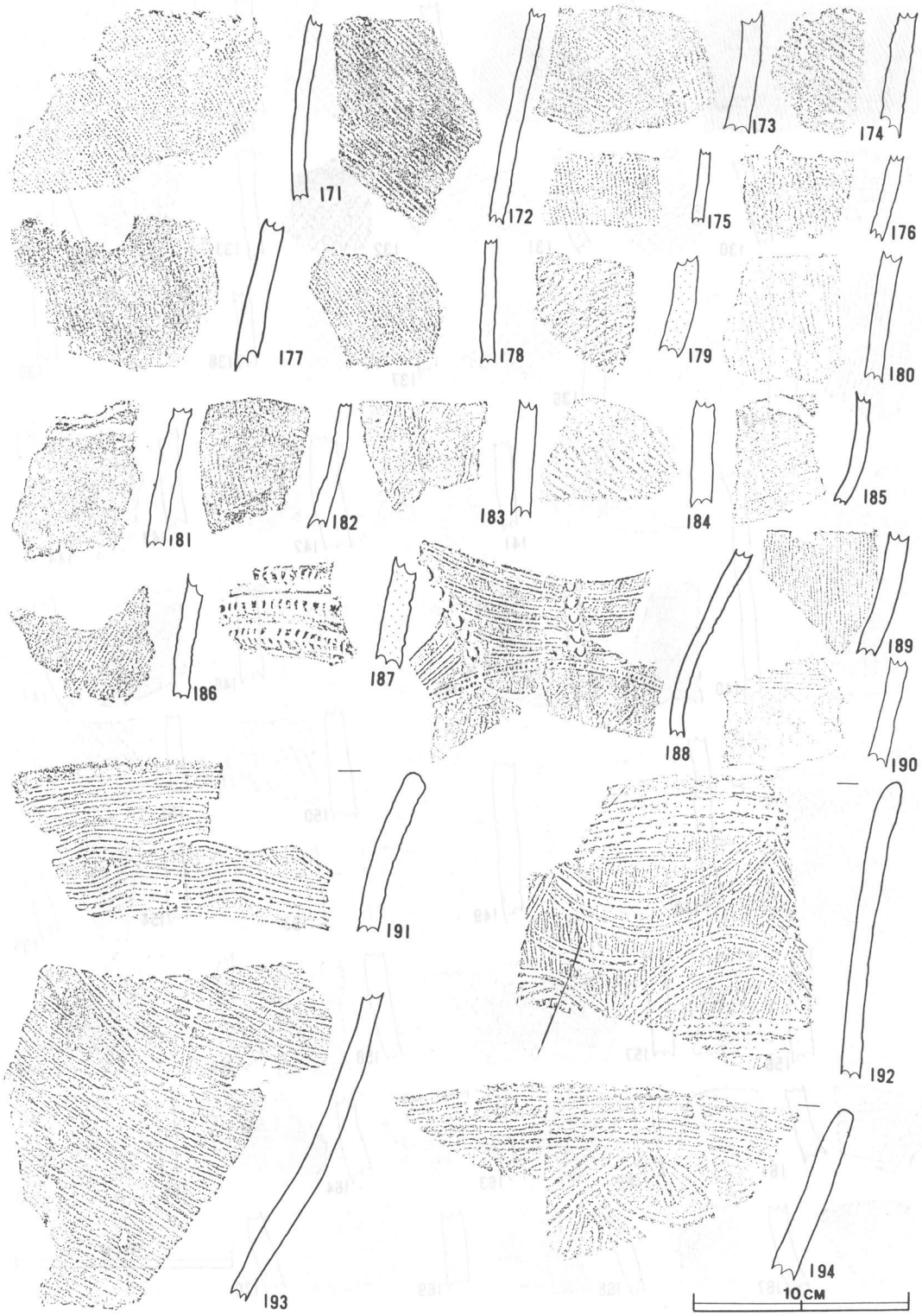
第39図　第21号住居跡出土遺物拓影図(2)



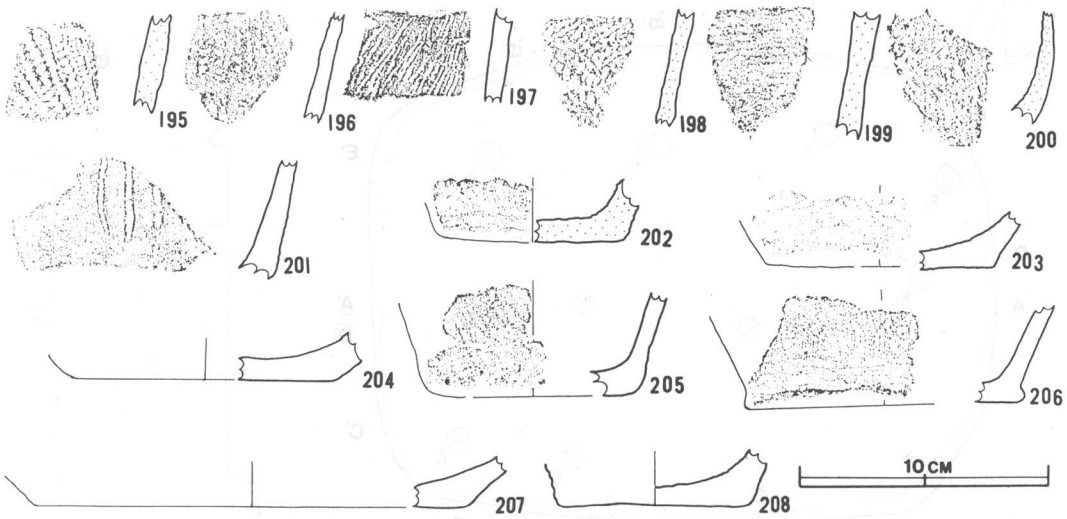
第40図　第21号住居跡出土遺物拓影図(3)



第41図　第21号住居跡出土遺物拓影図(4)



第42図　第21号住居跡出土遺物拓影図(5)



第43図　第21号住居跡出土遺物拓影図(6)

文を施し，12・15・16は撚糸文である。13は貝殻腹縁文，6は胎土に礫を含み,3・4・11は胎土に繊維を含んでいる。色は1・3・6・14が灰褐色，2・9・10がにぶい橙色，4が褐灰色，5・8・11・12がにぶい褐色，7・13が橙色，15・16が明褐色である。

第23号住居跡（第44図）

本住居跡は，遺跡中央部のC2d$_4$・C2d$_5$・C2e$_4$・C2e$_5$区に確認され，第22号住居跡の南側に位置している。

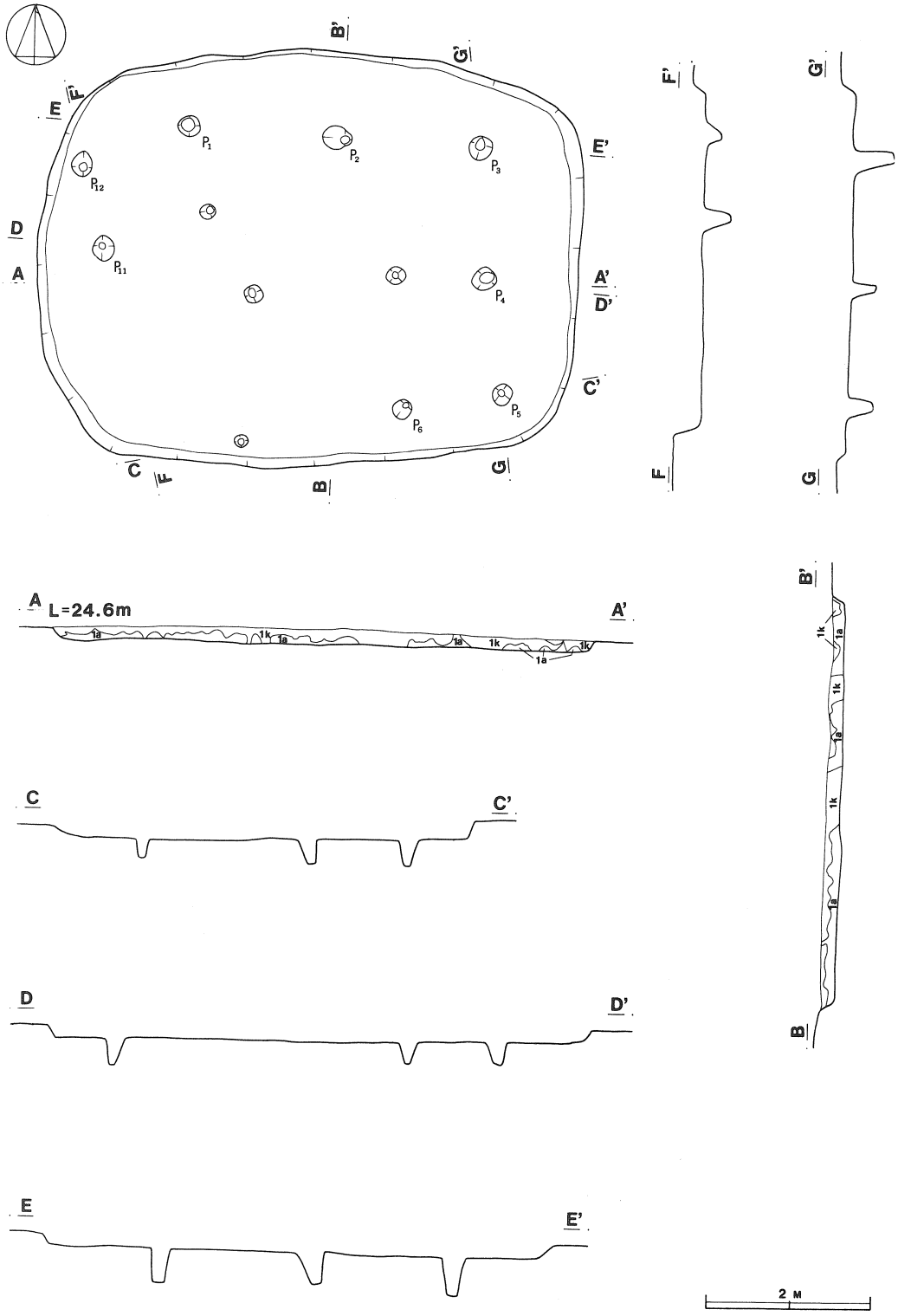
規模・形状は長径6.54m・短径5.06mの楕円形を呈し，長径方向はN－90°－Wである。壁はゆるやかに外傾して立ち上がり，比較的しっかりした硬い壁で，その高さは10～32cmとまちまちである。北西コーナーと南から南東にかけての壁高は低くなっている。床はソフトロームで水平であり，固く踏みかためられている。柱穴は，P$_1$～P$_{12}$の12本確認された。径18～36cmの円形で，深さも22～46cm程である。P$_1$～P$_4$・P$_5$・P$_6$・P$_{11}$・P$_{12}$を使用して，壁にそって柱を築いたものと考えられる。炉，貯蔵穴の類はない。

覆土は2層あり，Ⅰ・Ⅱ層とも褐色土で，ともにしまりを持っていた。人為的な埋めもどしによる堆積状況を示している。

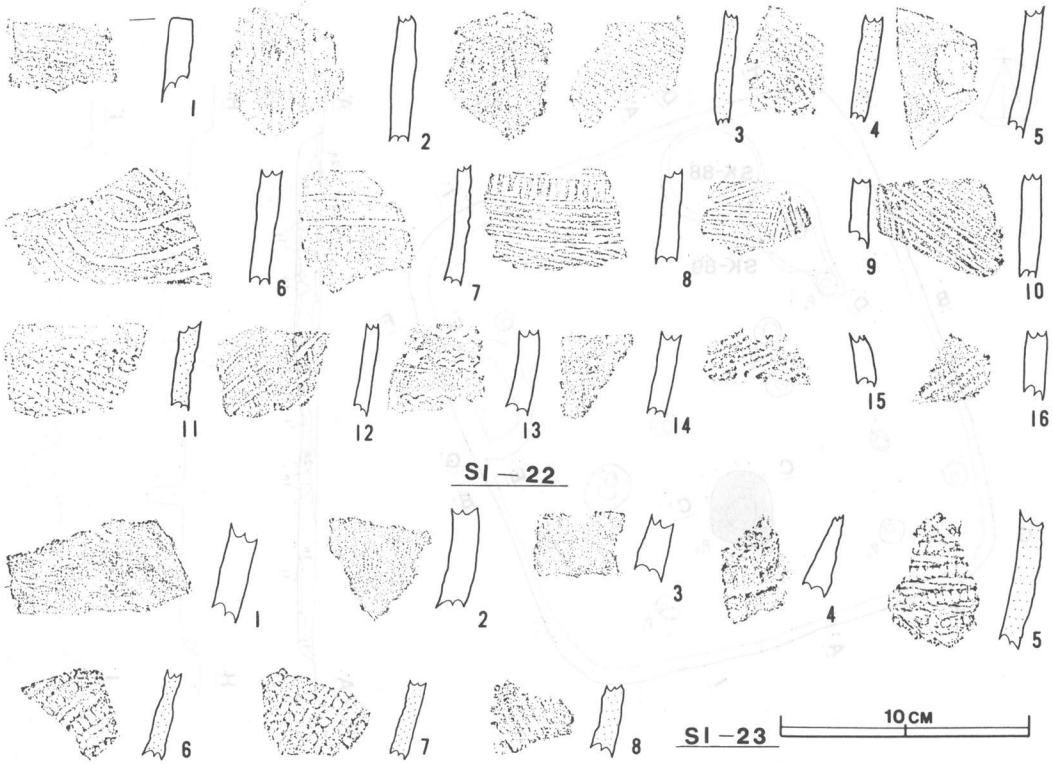
遺物はⅠ層に少量出土したが，黒浜式の土器が主である。

第23号住居跡出土遺物（第45図）

1・3・4は，同類と思われる。胎土にスコリアを多量含み1と3は同一体でにぶい橙色，4は灰褐色である。2はかすかに撚糸文が施され褐灰色をしている。5～8は荒い縄文を施し，胎土に繊維を含む。6・7が同一体で灰褐色，5が褐色，8が黒褐色である。



第44図　第23号住居跡実測図



第45図　第22.23号住居跡出土遺物拓影図

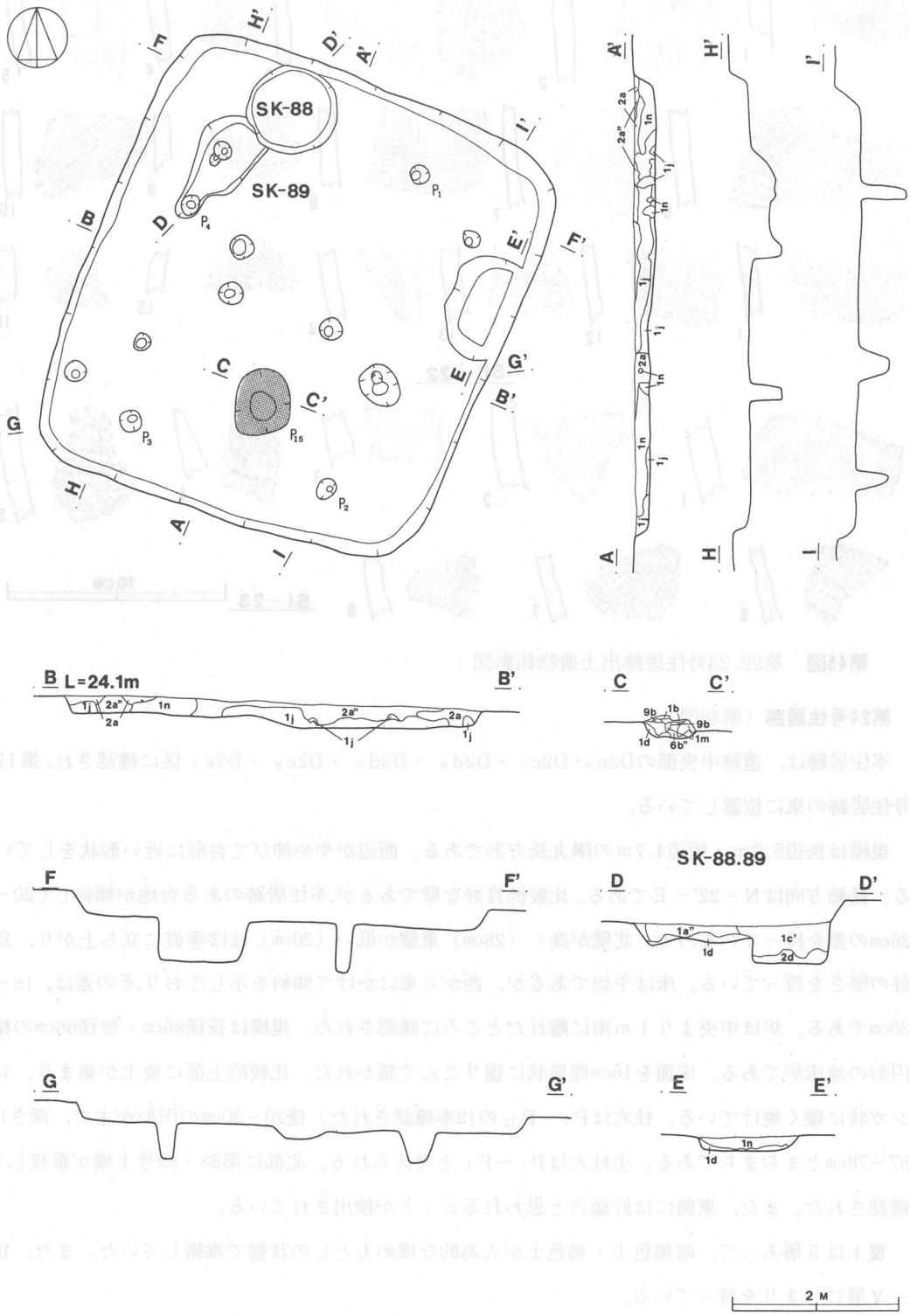
第24号住居跡（第46図）

本住居跡は，遺跡中央部のD2c$_8$・D2c$_9$・D2d$_8$・D2d$_9$・D2e$_8$・D2e$_9$区に確認され，第11号住居跡の東に位置している。

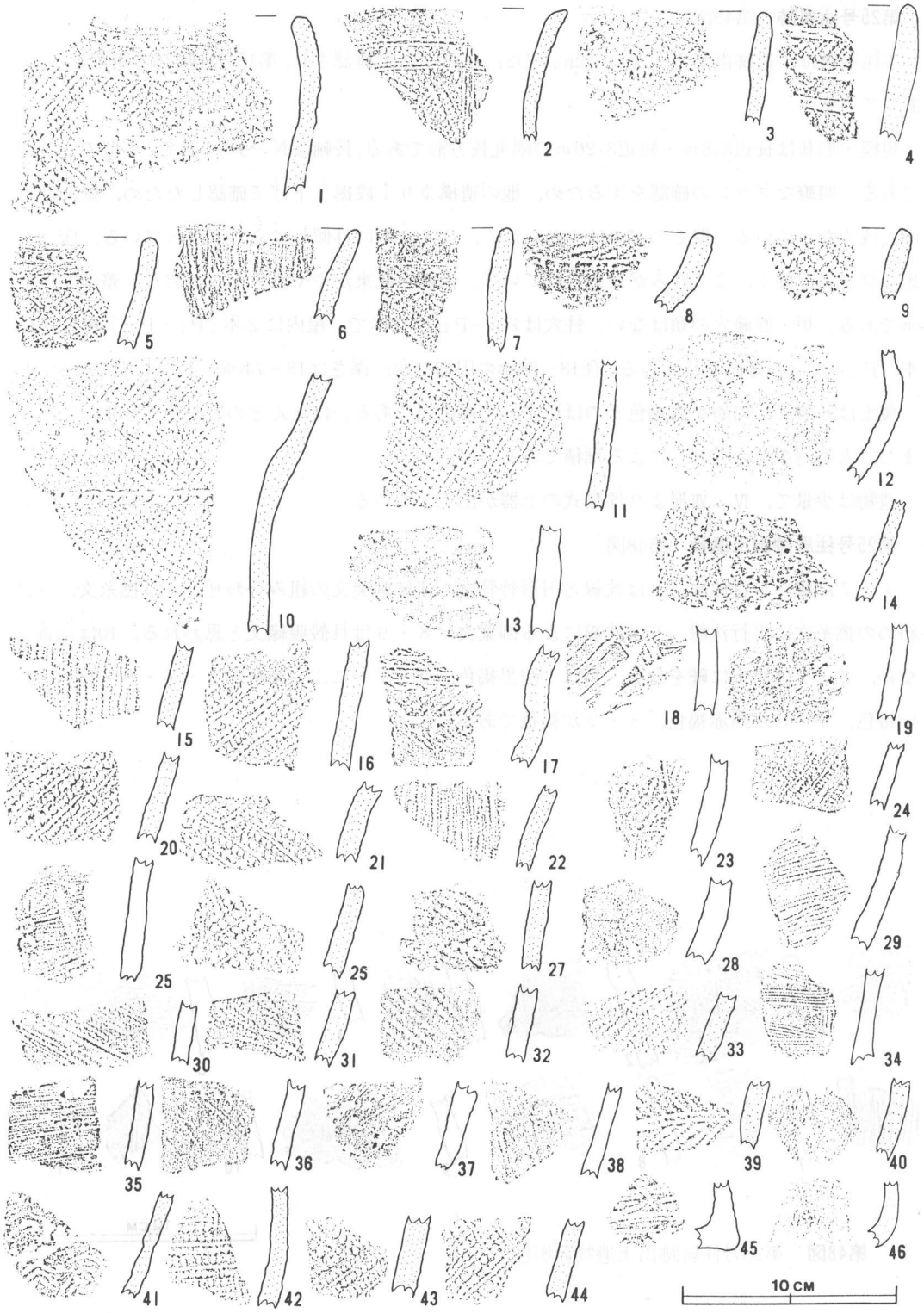
規模は長辺5.2m・短辺4.7mの隅丸長方形である。西辺がやや伸びて台形に近い形状をしている。長軸方向はN－22°－Eである。比較的良好な壁であるが,本住居跡のある台地が傾斜して20～26cmの差を持っているので，北壁が高く（28cm）東壁が低い（20cm)。ほぼ垂直に立ち上がり，良好の堅さを持っている。床は平坦であるが，西から東にかけて傾斜を示しており,その差は，16～20cmである。炉は中央より1m南に離れたところに確認された。規模は長径86cm・短径66cmの楕円形の地床炉である。床面を16cm程皿状に掘りこんで築かれた。比較的上部に焼土が集まり，レンガ状に硬く焼けている。柱穴はP$_1$～P$_{12}$の12本確認された。径20～30cmの円形が主で，深さは37～78cmとまちまちである。主柱穴はP$_1$～P$_4$と考えられる。北部に第88・89号土壙が重複して確認された。また，東側には貯蔵穴と思われるピットが検出されている。

覆土は5層あって，暗褐色土・褐色土が人為的な埋めもどしの状態で堆積していた。また，Ⅲ～Ⅴ層にしまりを持っている。

遺物はⅢ・Ⅳ層にしかも中央から北部に集中して出土した。黒浜式が多数で，浮島・諸磯式も出土した。



第46図　第24号住居跡実測図



第47図　第24号住居跡出土遺物拓影図

第25号住居跡（第49図）

本住居跡は，遺跡南部のD2h$_3$・D2h$_4$・D2i$_3$・D2i$_4$区に確認され，第18号住居跡の南東側に位置している。

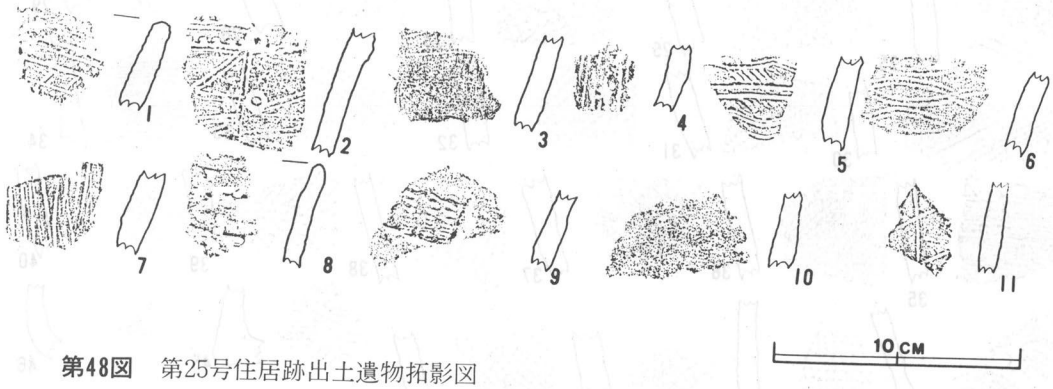
規模・形状は長辺3.8m・短辺3.26mの隅丸長方形である。長軸はN－90°－Eで，小型の住居跡である。明瞭なプランの確認をするため，他の遺構より1段掘り下げて確認したため，壁高は18cmと浅くなっている。壁そのものはやわらかく，ゆるやかに外傾して立ち上がっている。床は平坦なローム で硬く，よく踏みかためられている。南西と北東がやや低くなっており，差は4～6cmである。炉・貯蔵穴の類はない。柱穴はP$_1$～P$_{12}$の12本で，屋内に2本（P$_1$・P$_2$）屋外に10本（P$_3$～P$_{12}$）確認されている。径18～28cmの円形だが，深さは18～74cmとまちまちである。

覆土は8層で，Ⅶ層が明褐色土のほかすべて褐色土である。ほとんどの層がよくしまっている。また，人為的な埋めもどしによる堆積である。

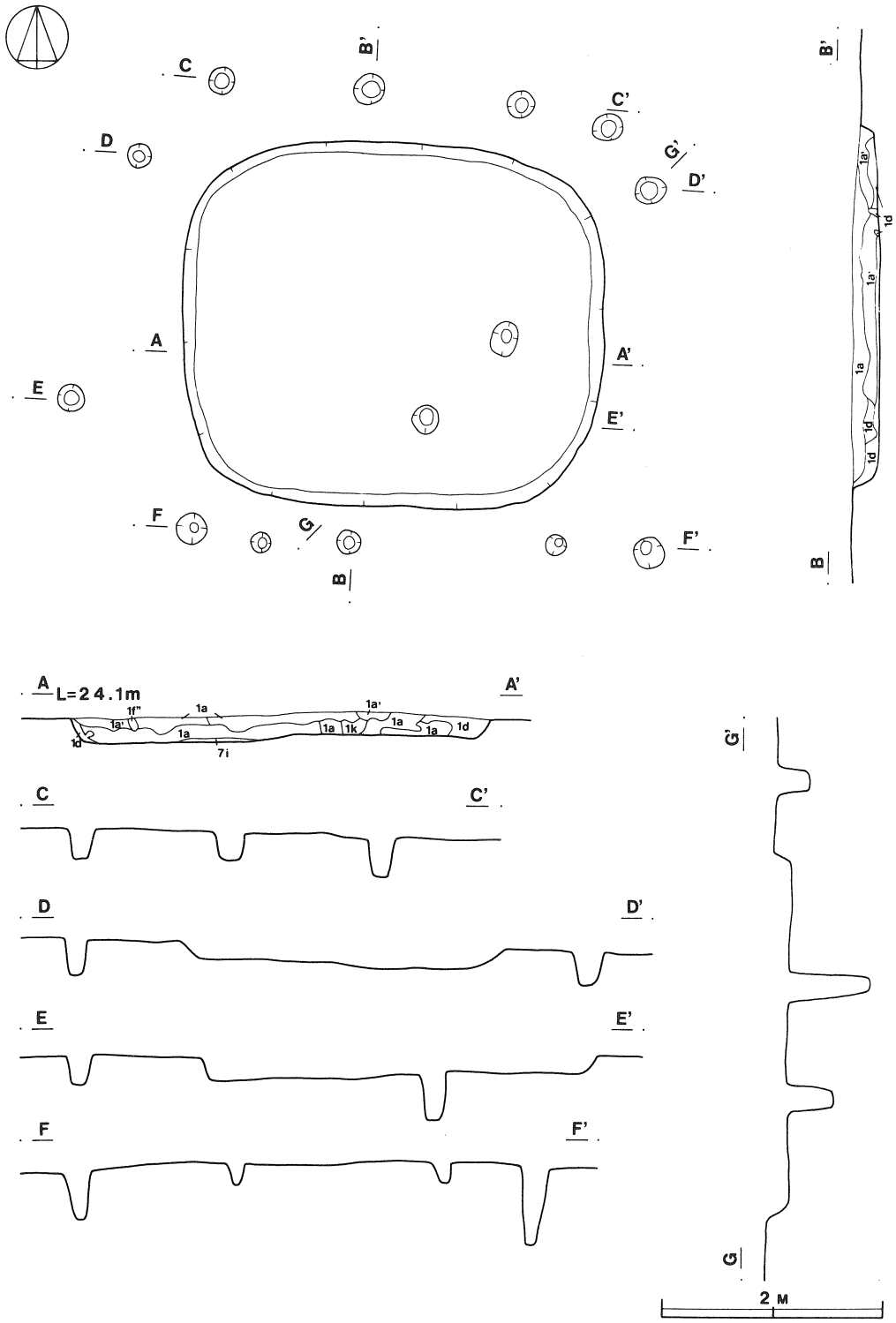
遺物は少量で，Ⅳ・Ⅶ層より浮島式の土器が出土している。

第25号住居跡出土遺物（第48図）

1・7は細い平行沈線，2は沈線と円形竹管文，連続刺突文の組み合わせ，4は撚糸文，5は斜めの撚糸文に平行沈線，6は沈線による柳葉文，8・9は貝殻腹縁文と思われる。10は沈線の交差，8・9は胎土に礫を含む。色は1が黒褐色，2・7がにぶい褐色，3・5・6・11がにぶい橙色，4・10が明赤褐色，8・9が褐色である。



第48図　第25号住居跡出土遺物拓影図



第49図　第25号住居跡実測図

第26号住居跡（第50・51図）

本住居跡は，遺跡南端のE2d$_3$ 区を中心に確認され，第25号住居跡の南に位置する。

規模は一辺約６ｍの隅丸方形で，東辺が外に張り出しゆがみを持っている。主軸方向はＮ－24°－Ｗである。壁はしっかりして硬く，垂直な立ち上がりを持っている。壁高は70～82cmと深く掘りこまれている。床は平坦であるが，北から南に傾斜し，６～10cmの差がある。ハードロームでよく踏みかためられている。北壁の中央に竈が付設され，長径180cm・短径170cmの楕円形をしており，高さ56cmを有す。燃焼部のまわりを粘土・砂で構築している。また，壁溝は竈の部分を除いて全周しており，上幅10cm・深さ8cm程である。南東コーナーからは，貯蔵穴が検出され，径約95cmの円形で，南西に30cm程突起状にとび出した部分を持っている。深さは床面から64cmである。竈に対した南には，長径136cm・短径76cmの楕円形を呈して，床面より一段高く（４cm程）踏みかためた隆帯がある。入り口の施設と考えられる。柱穴は５本あり，内１本（Ｐ$_2$）は東壁近くで検出され，副柱穴と考えられる。他の４本が主柱穴で径28～40cm・深さ63～82cmの規模である。

覆土は４層で，褐色土・暗褐色土・にぶい褐色土で自然堆積である。Ⅲ・Ⅳ層にしまりがあり，また，Ⅳ層に粘性がある。

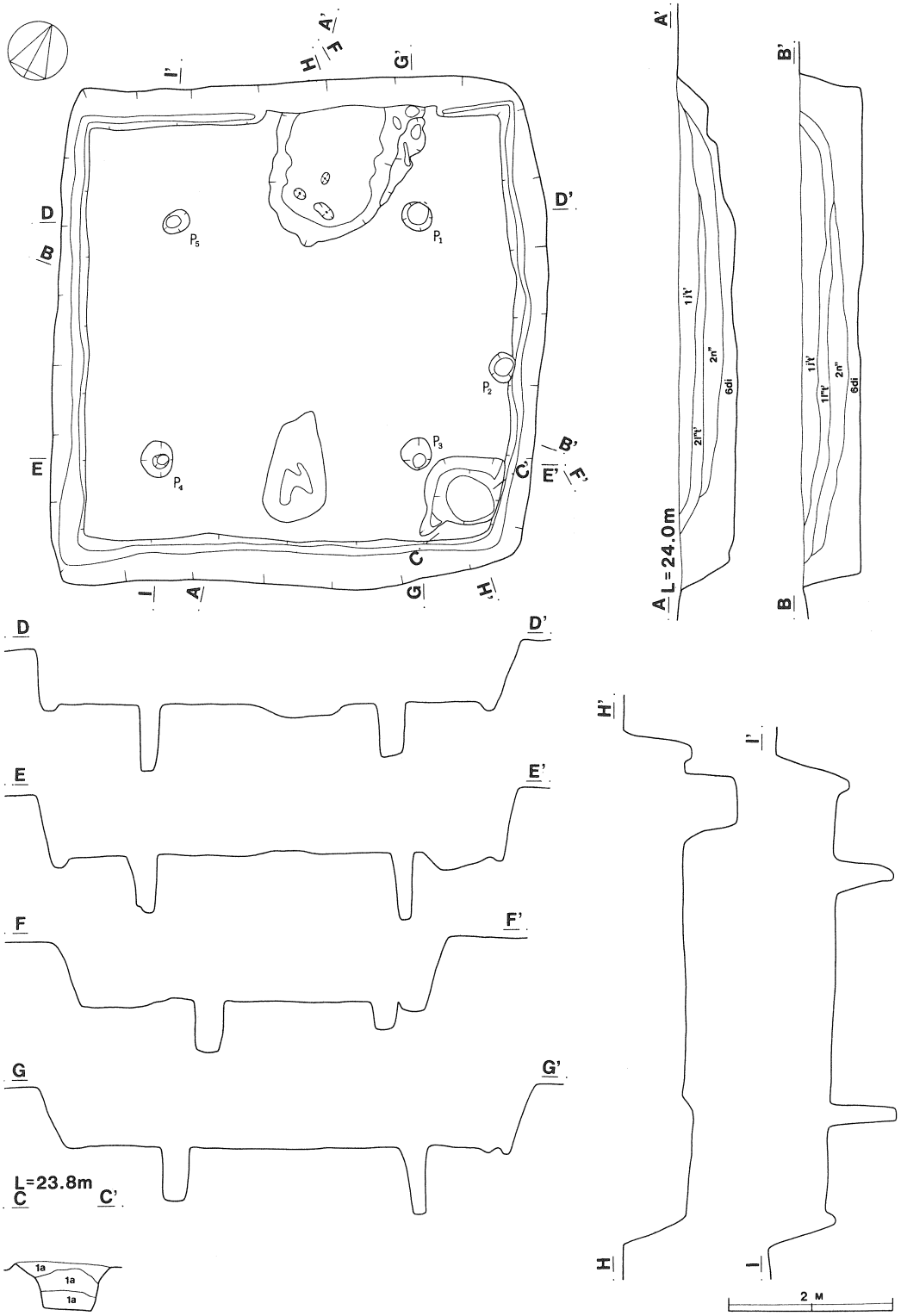
遺物は竈内より鬼高期の杯が出土し，床にも同時期の破片が点在して出土している。

第27号住居跡（第53・54図）

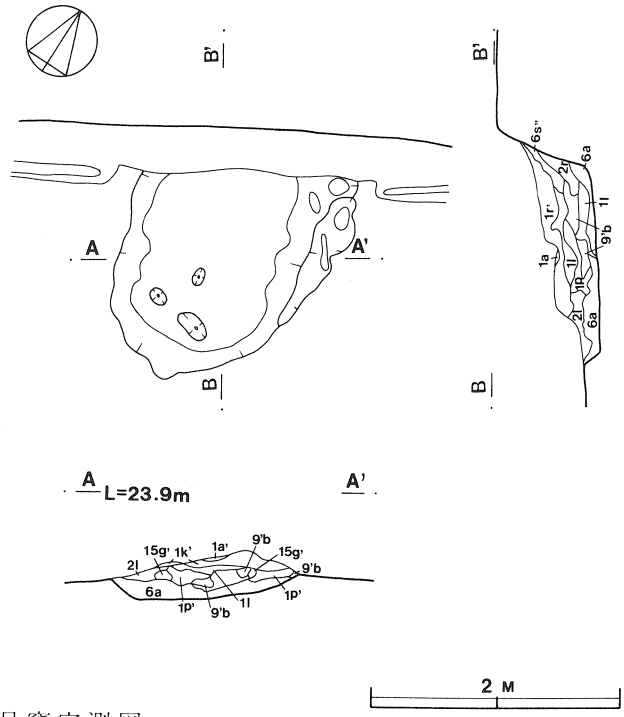
本住居跡は，遺物南端のE2d$_3$ 区を中心に確認され，第25号住居跡の南約18ｍのところに位置する。規模は一辺約６ｍの隅丸方形で，西辺・南辺が外に張り出し，さらに南西コーナーが丸みをおびている。主軸方向はＮ－1.5°－Ｗである。台地が西から東に傾斜しているので，西壁が高く（64～76cm）東壁が低い（32cm）。どの壁もほぼ垂直に立ち上がっている。床は水平。平坦でよく踏みかためられたロームである。竈は，北壁の中央に確認され，床を径125cmの半円形状に，22cm掘りくぼめている。煙道が北壁の一部をけずって作られており，また，燃焼部のわきを粘土で構築している。南西コーナーに，径95cmの不整円形で，深さ64cmの貯蔵穴が検出された。
また，南壁にそって，竈と対して，床を盛り上げた部分があるが，入り口の施設と考えられる。柱穴は４本確認された。Ｐ$_2$ が径50cm，深さ92cmと大きいが他の３本は径20～26cm，深さ42～59cmの規模である。

覆土は６層あり，暗褐色土・黒褐色土・明褐色土・灰褐色土・褐色土に分かれる。どの層もやわらかく，自然堆積である。

遺物は，Ｐ$_1$ 近くにシャベル型の木製鋤・Ｐ$_2$ に柱痕が焼け残って出土した。また，床の各所に茅（屋根材に使用したと考えられる）の炭化物が数多く残っており，本住居跡は火災に遭い，その後廃絶されたと考えられる。その他で石鏃・土玉も出土した。



第50図　第 26 号 住 居 跡 実 測 図

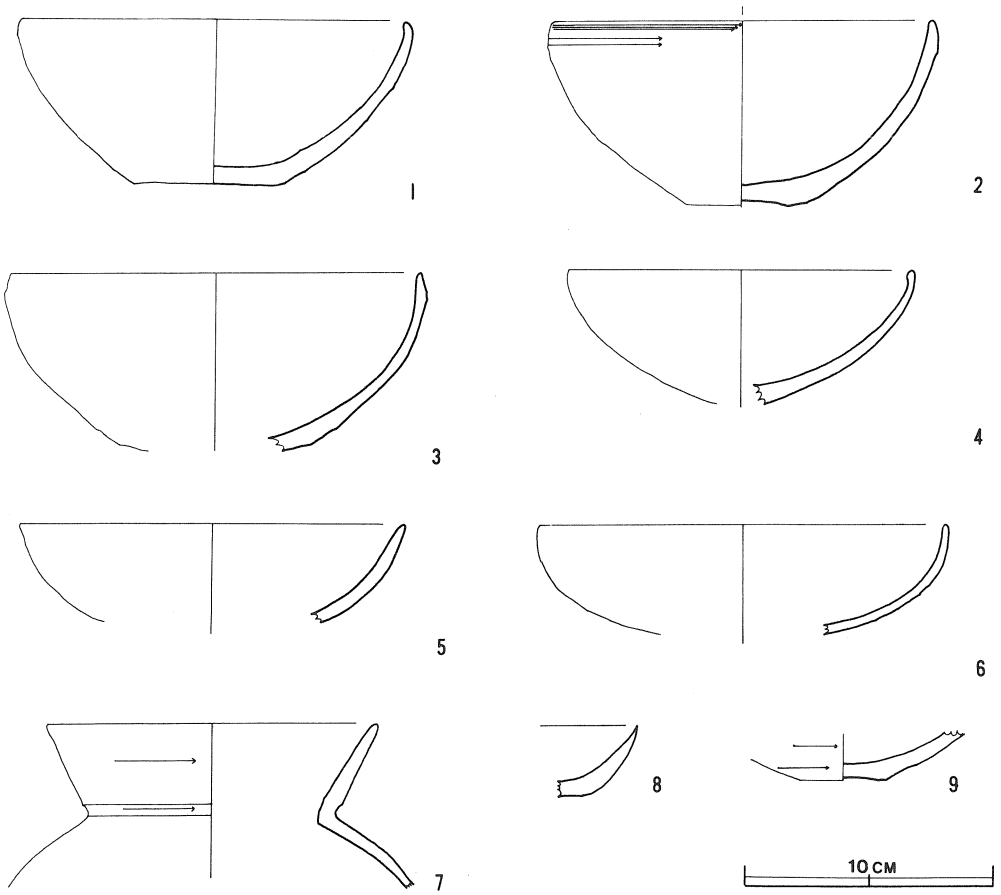


第51図　第26号竈実測図

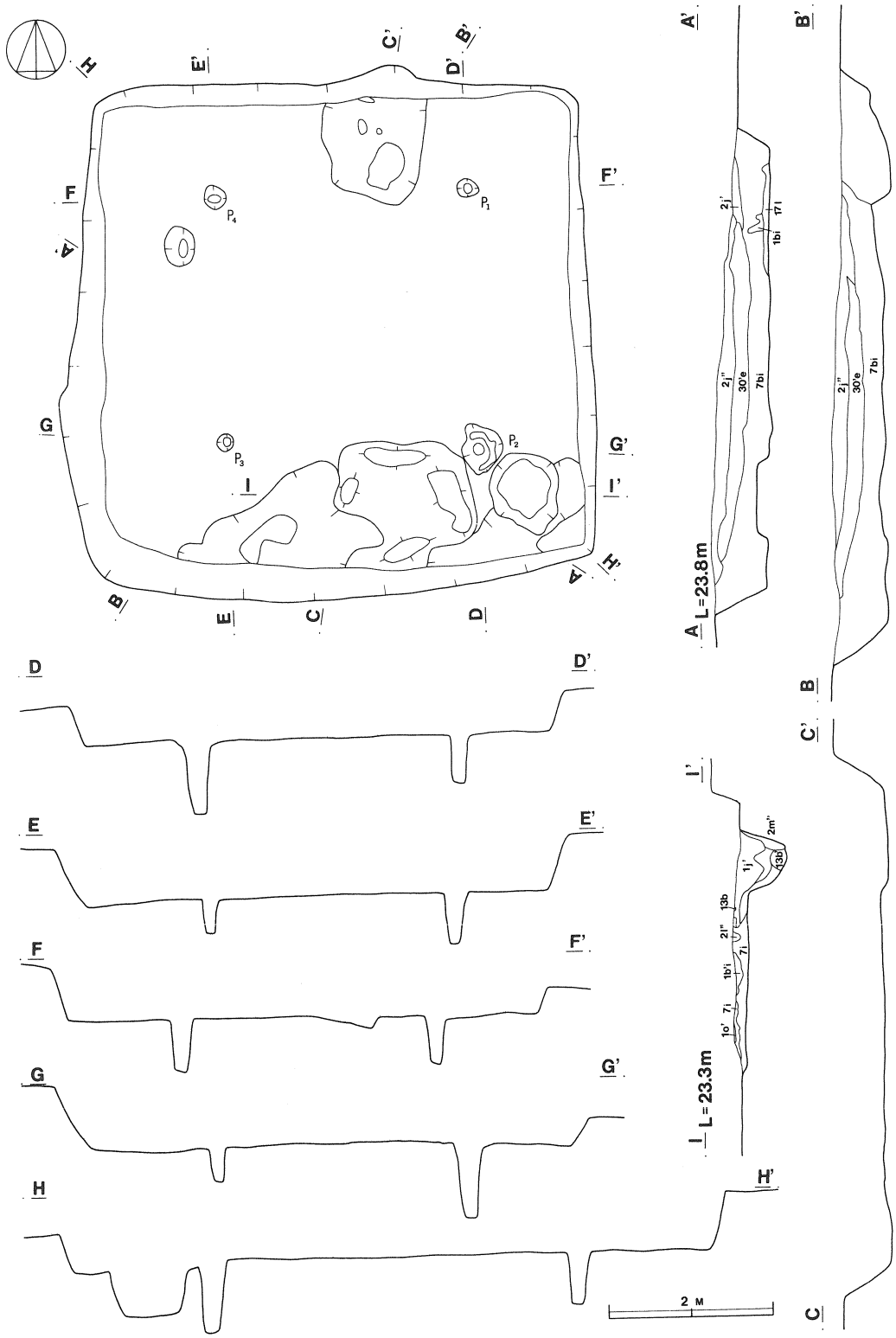
出土遺物解説表

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI−26	1	坏	A 15.8 B 6.5 C 6.1	口唇が内わんする。 最大径を口唇下に持つ。	内面　ヘラなで	焼成…良 胎土…長石，石英砂を含む 色調…にぶい褐色	98% 第52図1
	2	〃	A 15.6 B 7.3 C 4.8	体部は球状に，口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。 底部は小さく厚い。	内面　ヘラなで 口唇の内外面横なで	焼成…良 胎土…砂礫，雲母，スコリアを含む 色調…内　橙色 外　にぶい橙色	40% 第52図2
	3	〃	A 16.8 B (7.1)	体上部から口縁部にかけて急に薄手になる。 底部は小さく厚手であげ底である。	内面　なで 外面　横なで	焼成…良 胎土…砂礫スコリアを含む 色調…内　橙色 外　にぶい橙色	30% 第52図3
	4	〃	A 14 B (5.4)	底部から体上部にかけて除々に薄くなってゆく。 口唇部が内面にくびれる。	内面　ヘラなで 外面　口唇部横なで	焼成…良 胎土…砂礫スコリアを含む 色調…内　橙色 外　褐色	30% 第52図4
	5	〃	A 15.6 B (3.9)	体部の中程から角度を変えて立ち上がる。	内外面　ヘラなで	焼成…良 胎土…砂を含む 色調…内　橙色 外　にぶい黄橙色	10% 第52図5
	6	〃	A 16.4 B (4.3)	薄手の土器で丸味をおびて立ち上がるが，体上部からほぼ垂直に立ち上がる。	内面　横なで 外面　横のヘラなで	焼成…良 胎土…砂を含む 色調…内　にぶい褐色 外　明褐色	20% 第52図6

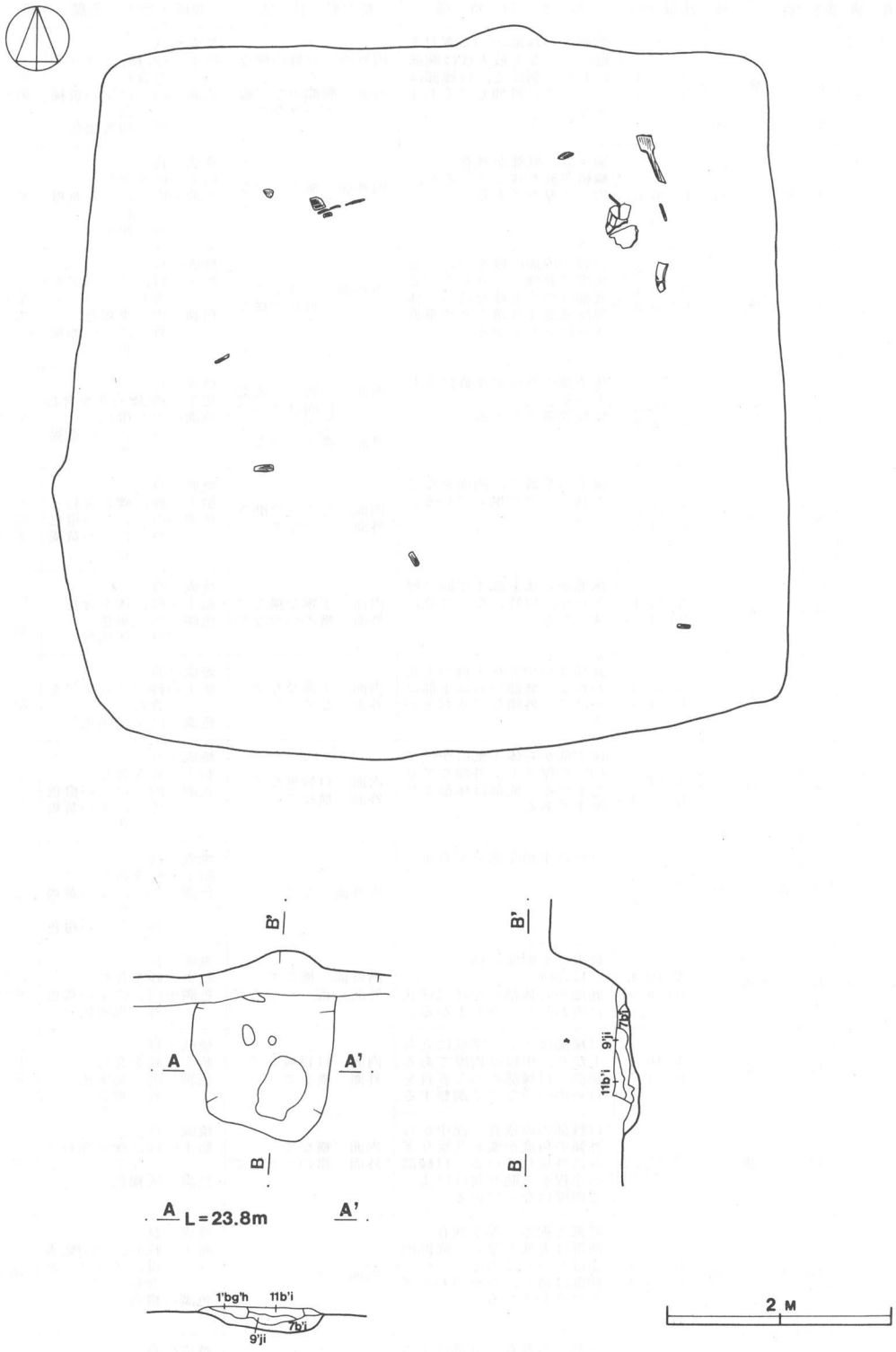
SI−26	7	甕	A 12.2 B (6.5)	胴部は内わんして立ち上がり，口縁部は「く」字状に外傾して立ち上がる薄手の土器である。	口縁部内外面横なで	焼成…良 胎土…砂礫スコリアを含む 色調…橙色	20% 第52図 7
	8	坏	B 2.8	口縁部分が薄く，手づくねである。	内面 なで 外面 横なで	焼成…良 胎土…砂，雲母を含む 色調…内 橙色 外 明赤褐色	朱彩30% 竈内出土 第52図 8
	9	不 明	B (1.9) C 3.4	胴下部と底部が残存。 底部は小さく薄手で，あげ底である。	内面 ヘラなで 外面 横のヘラなで	焼成…良 胎土…砂を含む 色調…内 にぶい橙色 外 黒褐色	第52図 9
	10	土 玉	A 3.6 B 3.6 45 g	径6㎜の穴を上部から下部に向けてあけ，下部の盛り上がった部分を切りとっている。		焼成…良 胎土…砂，パミスを含む 色調…にぶい黄褐色	第128図2
	11	〃	A 3.7 B 3.8 50 g	径8㎜の穴を上部から下部に向けてあけ，下部の盛り上がった部分を切りとっている。		焼成…良 胎土…砂，礫を含む 色調…橙色	第128図3



第52図 第26号住居跡出土遺物実測図



第53図　第27号住居跡実測図

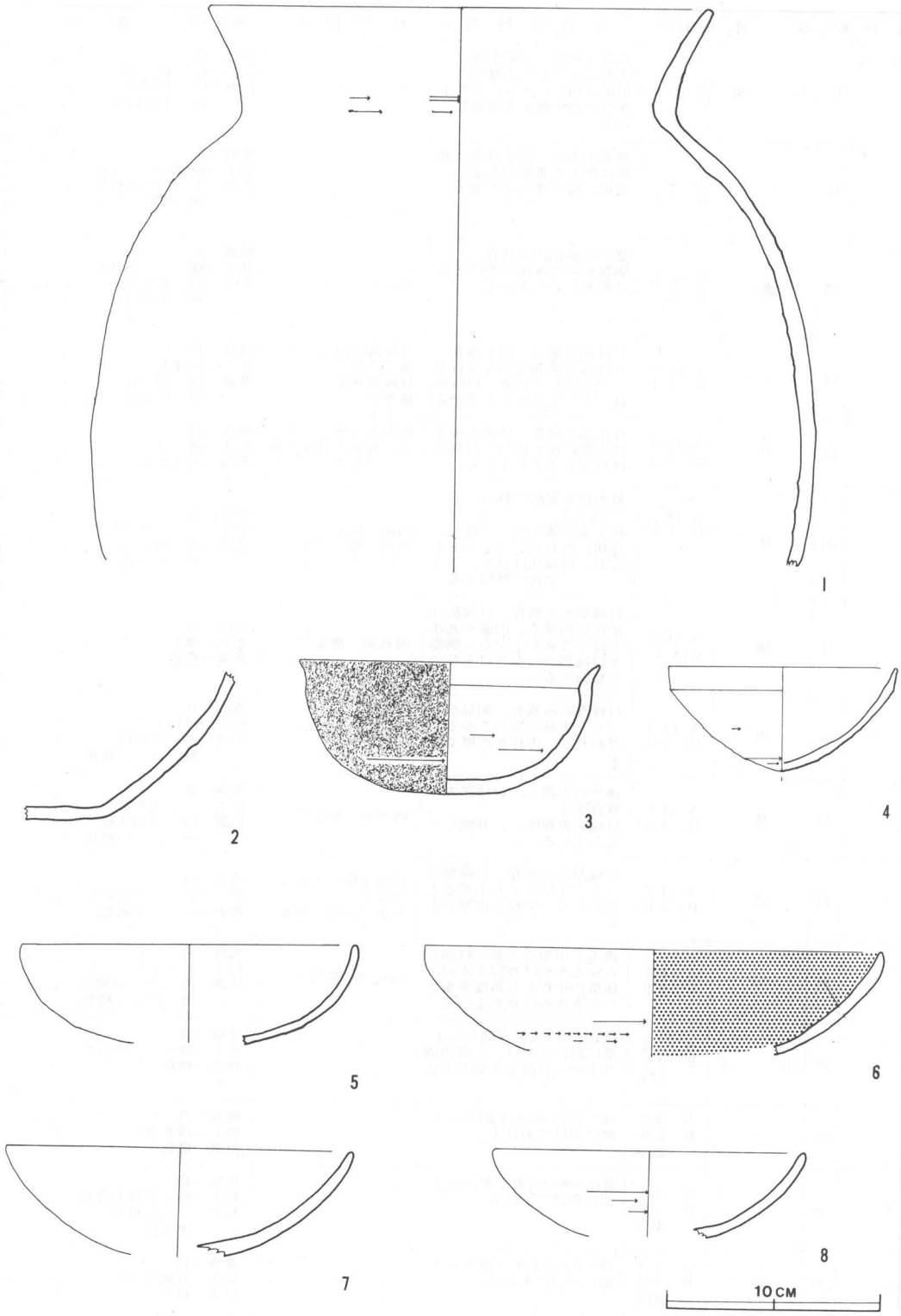


第54図　第27号遺物平面図及び竈実測図

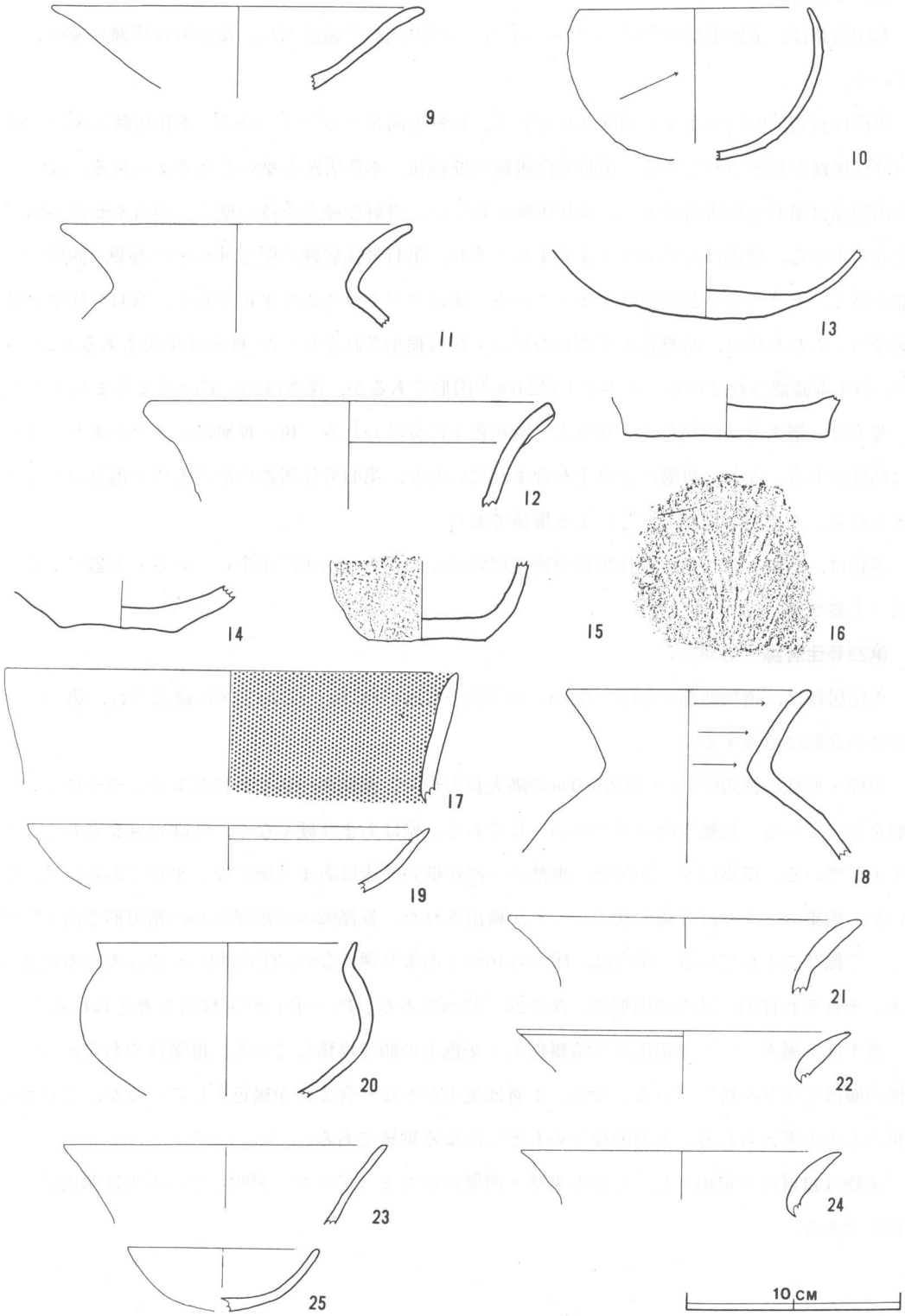
出土遺物解説表

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI−27	1	甕	A 33.4 B(25.5)	胴部と口縁部のつなぎ目を縦のヘラなで最大径は胴部にあり，胴長で，口縁部は「く」字に外傾して立ち上がる。	内外面　口唇の横なで 外面　胴部のなで縦のヘラなで	焼成…良 胎土…砂，礫，スコリアを含む 色調…内　にぶい黄褐色 外　明黄褐色	30% 第55図1
	2	不明	B(6.6)	胴下部，底部が残存。 輪積み痕を残しているが，均一の厚さである。	内外面　横のヘラなで	焼成…良 胎土…砂を含む 色調…内　にぶい黄橙色 外　黒色	第55図2
	3	埦	A 13.8 B 6.1 C 3.8	口唇の内面に段をつけ，急角度で外傾して立ち上がる。底部はやや丸味を持ち，体部は底部より薄くやや垂直ぎみに立ち上がる。	内外面　ヘラなで 口唇の横なで	焼成…良 胎土…砂，スコリアを含む 色調…内　黒褐色 外　にぶい赤褐色	40% 朱彩 第55図3
	4	坏	A 10.6 B 4.8	体上部の外面が垂直に立ち上がる。 比較的薄手の土器。	内面　口唇から底部に向けてヘラなで 外面　横のヘラなで	焼成…良 胎土…砂，礫石英を含む 色調…内　橙色 外　にぶい黄褐色	第55図4
	5	〃	A 15.6 B 4.6	薄手の土器で，内面をなでた後，ヘラで磨いている。	内面　なでヘラ磨き 外面　ヘラなで	焼成…良 胎土…砂，礫を含む 色調…内　にぶい橙色 外　にぶい黄褐色	20% 竈内出土 第55図5
	6	〃	A 21.4 B(4.8)	体部から体上部まで同じ厚さだが，口唇になって急に薄くなる。	内面　丁寧な横なで 外面　横のヘラなで	焼成…良 胎土…砂，礫を含む 色調…内　黒色 外　灰褐色	内黒土器 30% 第55図6
	7	〃	A 16.0 B(4.9)	底部はやや丸味を持つと思われる。底部から体上部にかけて，外傾して立ち上がる。	内面　丁寧ななで 外面　なで	焼成…良 胎土…砂，スコリアを含む 色調…にぶい褐色	60% 第55図7
	8	坏	A 14.6 B(3.9)	体下部から体上部にかけて均一の厚さで，外傾して立ち上がる。底部は体部より厚手である。	内面　口唇横なで 外面　横なで	焼成…良 胎土…砂を含む 色調…内　にぶい橙色 外　にぶい黄褐色	15% 第55図8
	9	高坏	A 17.2 B(3.7)	口唇に平坦な部分を有す。	内外面　なで	焼成…良 胎土…砂を含む 色調…内　にぶい黄褐色 外　にぶい橙色	5% 第56図9
	10	鉢	A 10.4 B(6.9)	最大径を胴部に持つ(11.8cm)。 底部から体部にかけて球状に内わんして立ち上がる。	内外面　横なで 外面一部　ヘラなで	焼成…良 胎土…砂を含む 色調…内　にぶい褐色 外　褐灰色	30% 第56図10
	11	壺	A 16.2 B(4.7)	口縁部は「く」字状に立ち上がり，中程は肉厚である。胴部と口縁部のつなぎ目を斜めのヘラなでで調整する。	内面　口唇横なで 外面　横なで	焼成…良 胎土…砂を含む 色調…内　褐灰色 外　橙色	10% 第56図11
	12	甕	A 22 B(3.7)	口縁部のみ残存。途中から外傾の角度が変わり反りぎみに外反している。口縁部の中程から貼り付けによって肉厚になっている。	内面　横なで 外面　横のヘラなで	焼成…良 胎土…砂，礫を含むスコリア 色調…灰褐色	5% 第56図12
	13	不明	B(3.3) C 6.3	底部と胴の一部が残存 底部は丸底で厚い。底部内面はたいらである。 胴部は薄く，やや内わんぎみに立ち上がる。	内面　なで	焼成…良 胎土…長石，石英，礫，雲母，スコリアを含む 色調…橙色	第56図13
	14	〃	B(2.2) C 5.5	底部のみ残存。底部は小さくあげ底である。	底面　ヘラけずり	焼成…良 胎土…砂，礫を含む 色調…内　赤褐色 外　明赤褐色	第56図14

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI－27	15	不明	B(1.8) C(9.4)	底部と胴部の一部が残存。底部は小さくやや厚い。胴部は内わんぎみに立ち上がり，縦の撚糸文を施している。		焼成…良 胎土…砂，礫を含む 色調…内　赤褐色 外　明赤褐色	第56図15
	16	〃	B(3.6) C　5.3	底部と胴の一部が残存，底部は厚く木葉痕がある。胴部に縦の撚糸文を施す。		焼成…良 胎土…砂礫繊維を含む 色調…内　にぶい橙色 外　橙色	第56図16
	17	甕	A 20.7 B(5.9)	甕の口縁部のみ残存。胴部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。	内面をヘラなで	焼成…良 胎土…砂パミスを含む 色調…内　黒褐色 外　灰褐色	内黒土器 5％ 第56図17
	18	〃	A 18.3 B(5.4)	口縁部と胴の一部が残存。口縁部と胴部のつなぎ目をヘラなでしている。口縁部は「く」字状に立ち上がる。	口縁部内面 横ヘラなで 口縁部外面 横なで	焼成…良 胎土…砂礫を含む 色調…内　褐灰色 外　灰褐色	10％ 第56図18
	19	坏	A 18.3 B(2.9)	体上部が残存。体部と体上部の間に稜を持つ。口唇部は外反して立ち上がる。	内面を丁寧なヘラなで，外面の口縁を横のヘラなで	焼成…良 胎土…礫を含む 色調…明赤褐色	5％ 第56図19
	20	鉢	A 11.9 B(6.8)	最大径を胴部に持つ(13.5cm)。胴下部全体は均一で厚く，球状に内わんして立ち上がるが，口縁部は薄く，小さく「く」字状に外傾する。	内面　横なで 外面　横ヘラなで	焼成…良 胎土…パミスを含む 色調…内　橙色 外　褐灰色	30％ 第56図20
	21	甕	A 16.2 B(3.3)	口縁部のみ残存。口縁部は中程が肉厚で，内面が丸味を持って立ち上がる。胴部と口縁部のつなぎ目をなでて整形する。	内外面　横なで	焼成…良 胎土…礫を含む 色調…橙色	5％ 第56図21
	22	壺	A 14.8 B(3.0)	口縁部のみ残存。胴部から「く」字状に立ち上がると思われる。中程が肉厚である。	内外面　横なで	焼成…良 胎土…砂礫を含む 色調…内　灰褐色 外　にぶい褐色	5％ 第56図22
	23	甕	A 14.7 B(3.6)	薄手の土器で，口縁部のみ残存する。口縁が直線的に，外傾して立ち上がる。	内外面　横なで	焼成…良 胎土…パミスを含む 色調…内　明褐灰色 外　にぶい橙色	5％ 第56図23
	24	壺	A 14.7 B(3.0)	口縁部のみ残存。口縁部は「く」字状に立ち上がると思われる。中程が肉厚である。	内面を横の丁寧なヘラなで 外面の口唇　横なで	焼成…良 胎土…砂パミスを含む 色調…にぶい黄褐色	5％ 第56図24
	25	坏	A　8.7 B　2.9	薄手で小型の土器。底部からゆるやかに外傾するが，体部の中程から角度を変えて垂直ぎみに立ち上がる。	回転台の使用？	焼成…良 胎土…砂を含む 色調…内　にぶい黄橙色 外　にぶい橙色	20％ 第56図25
	26	土玉	A　3.3 B　2.7 27 g	径1.1cmの穴を下部から上部に向けてあけ，上部の盛り上がった部分を切りとる。		焼成…良 胎土…砂パミスを含む 色調…橙色	第128図4
	27	〃	A　2.9 B　2.9 22 g	径0.7cmの穴を下部から上部に向けてあける。		焼成…良 胎土…砂を含む 色調…橙色	第128図5
	28	〃	A　3.5 B　3.5 40 g	径0.8cmの穴を下部から上部に向けてあける。		焼成…良 胎土…砂・雲母を含む 色調…にぶい橙色 黒褐色	第128図6
	29	〃	A　3.3 B　3.2 34 g	径0.6cmの穴を下部から上部に向けてあける。		焼成…良 胎土…砂礫を含む 色調…橙色	第128図7
	30	〃	A(3.4) B(3.0)	径0.6cmの穴を下部から上部に向けてあけ，盛り上がった部分を切りとっている。		焼成…良 胎土…砂礫を含む 色調…橙色	第128図8



第55図　第27号住居跡出土遺物実測図(1)



第56図　第27号住居跡出土遺物実測図(2)

第28号住居跡（第57図）

本住居跡は，遺跡中部の$C2e_7$・$C2e_8$・$C2f_7$・$C2f_8$区に確認され，第23号住居跡の東側に位ている。

規模は長辺5.9m・短辺4mの隅丸長方形で，長軸方向N－2°－Eである。本住居跡の床下に第41号住居跡が検出されている。第41号住居跡の廃絶後，本住居跡を築いたと考えられる。従つて，新旧関係は第41号住居跡が古く，本住居跡が新しい。良好な硬さを持つ壁で，ゆるやかに外傾して立ち上がる。壁高は12～34cmとまちまちであり，第41号住居跡の壁と併わせた南壁，西壁の一部が高く，そうでない部分が低くなっている。床はソフトロームで平坦である。第41号住居跡廃絶後つくられた床は，暗褐色土でやわらかい。炉は検出されなかった。柱穴は重複もあるが，P_1～P_4の4本確認されている。4本とも径24cmの円形であるが，深さは25～47cmとまちまちである。

覆土は6層あり，暗褐色土・褐色土・明褐色土に分けられる。Ⅲ・Ⅳ層にしまりがあり，Ⅴ層に粘性がある。なお，Ⅵ層には焼土が含まれていたが，第41号住居跡の炉のものが混じったと考えられる。人為的な埋めもどしによる堆積である。

遺物は，磨製石斧が第41号住居跡廃絶後埋めこんで作られた床に出土している。土器では黒浜式の土器が多く出土した。

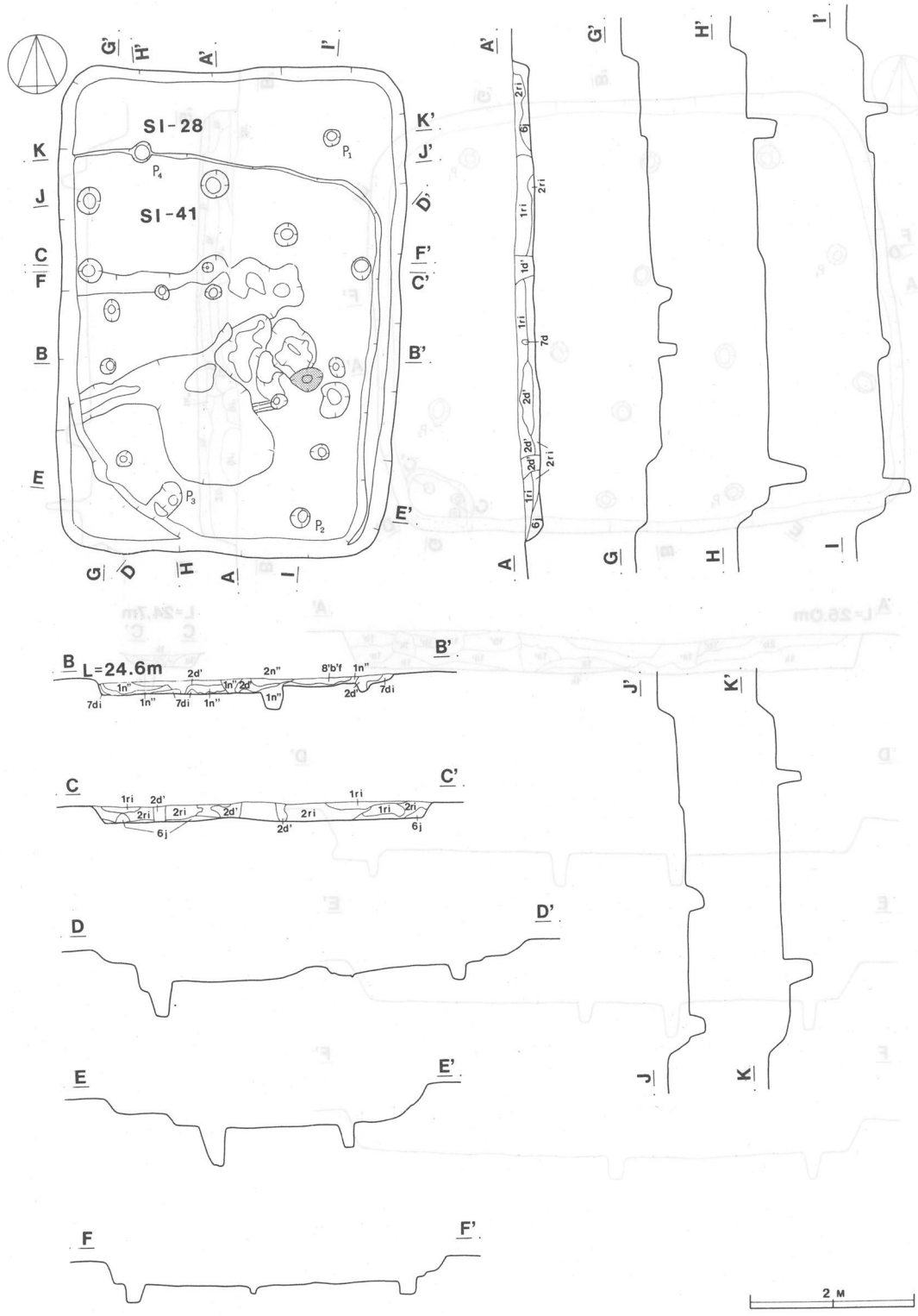
第29号住居跡（第58図）

本住居跡は，遺物西部の$C1d_0$・$C2d_1$・$C2d_2$・$C1e_0$・$C1e_1$・$C2e_2$区に確認され，第20号住居跡の北側に位置する。

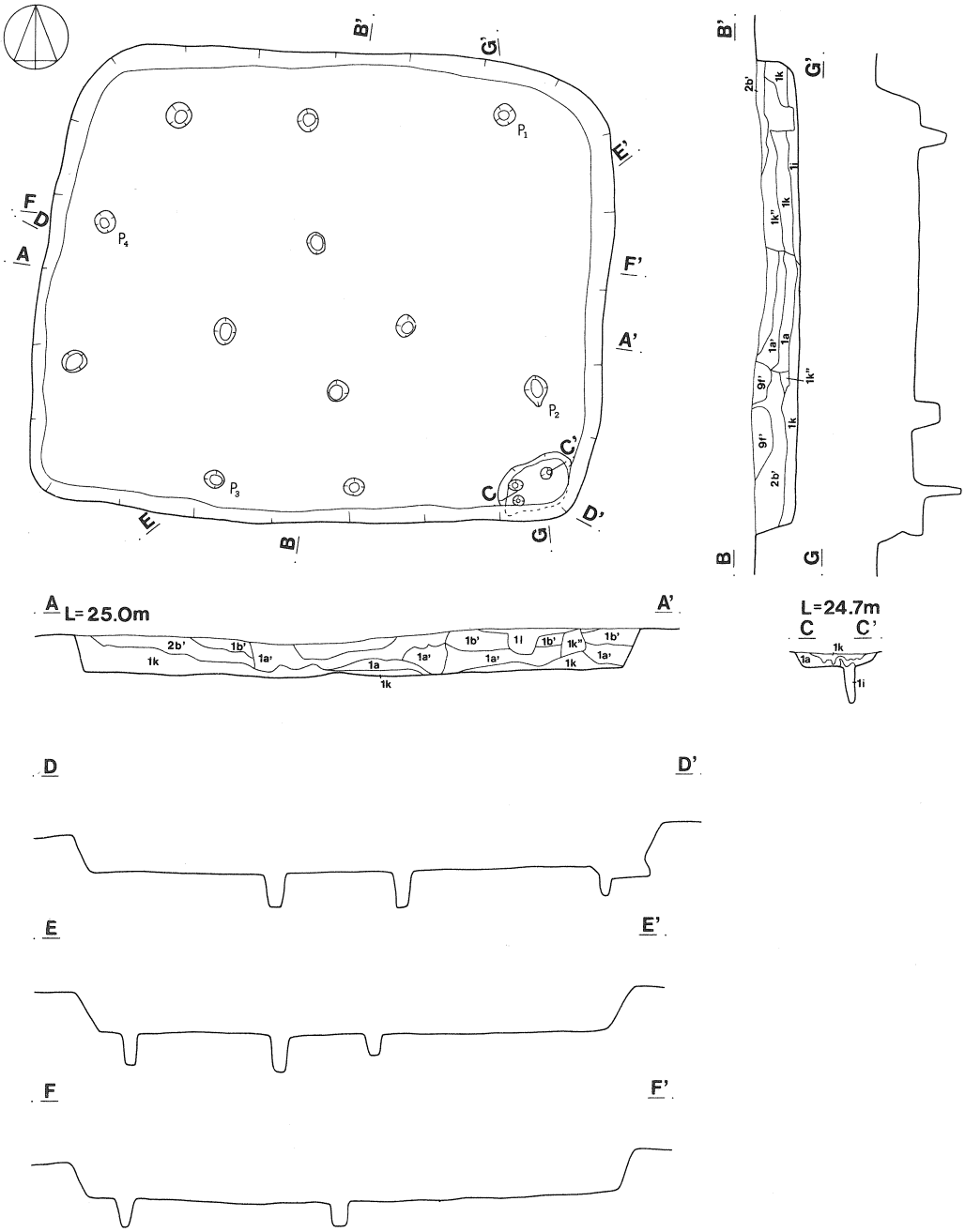
規模・形状は長辺6.0m・短辺5.0mの隅丸長方形で，西側の一辺が外に張り出しややゆがんだ形を呈している。長軸方向はN－85.5°－Eである。壁はあまり硬くなく，ほぼ垂直な立ち上がりを示している。壁高は26～50cmで，東壁の一部が低い。床はあまり硬くなく平坦である。炉はないが，南東コーナーに貯蔵穴状のピットが検出された。長径92cm・短径56cmの楕円形で南壁をえぐって掘りこまれている。深さは，床から16cmとあまり深くない。柱穴はP_1～P_{12}の12本確認され，それぞれ径24～30cmの円形で，深さ26～57cmである。P_1～P_4が主柱穴と考えられる。

覆土は7層あって，赤褐色土・暗褐色土・褐色土の順で堆積している。Ⅲ層はやわらかいが，他の層はしまりを持っている。なお，Ⅰ層は焼土がかなり含まれ赤褐色をしているが，これは後世のものと考えられる。人為的なうめもどしによる堆積である。

遺物はⅢ層に少量出土し，しかも東壁・西壁にかたまっていた。判明しているのは茅山式の土器片である。



第57図　第28.41号住居跡実測図



第58図　第29号住居跡実測図

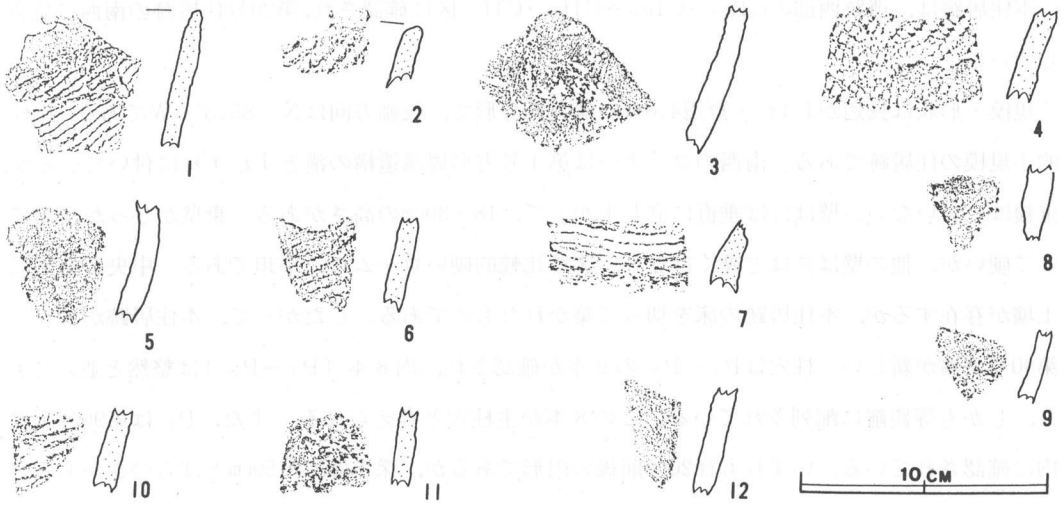
2 M

第28号住居跡出土遺物（第59図）

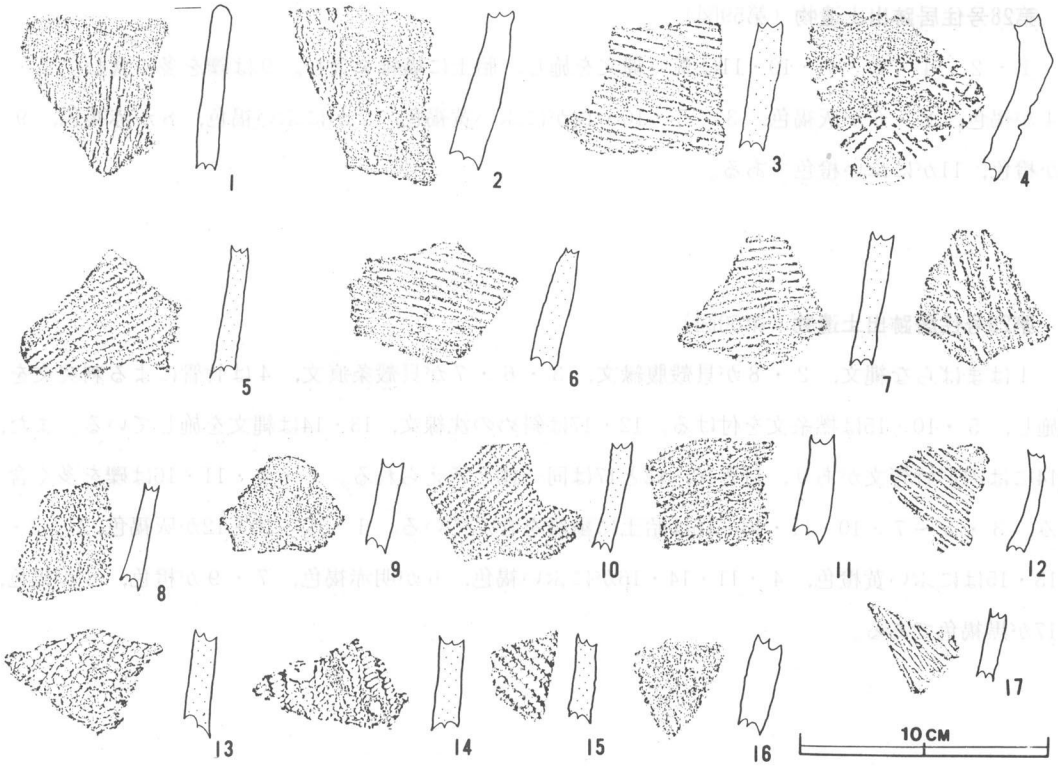
1・2・4・6・7・10・11は荒い縄文を施し，胎土に繊維を含む。9は礫を多く含む。1・4が褐色，2・6が灰褐色，3・5・10・12がにぶい黄褐色，7がにぶい褐色，8が赤褐色，9が橙色，11がにぶい橙色である。

第29号住居跡出土遺物（第60図）

1はまばらな縄文，2・8が貝殻腹縁文，3・6・7が貝殻条痕文，4は竹管による刺突文を施し，5・10・15は撚糸文を付ける。12・17は斜めの沈線文，13・14は縄文を施している。また，14には円形竹管文があり，11と16，12と17は同一体と考えられる。2・4・11・16は礫を多く含み，3・5～7・10・11・13～16は胎土に繊維を含んでいる。1・5・10・12が灰褐色，2・3・13・15はにぶい黄橙色，4・11・14・16がにぶい褐色，6が明赤褐色，7・9が橙色，8が褐色，17が黒褐色である。



第59図　第28号住居跡出土遺物拓影図



第60図　第29号住居跡出土遺物拓影図

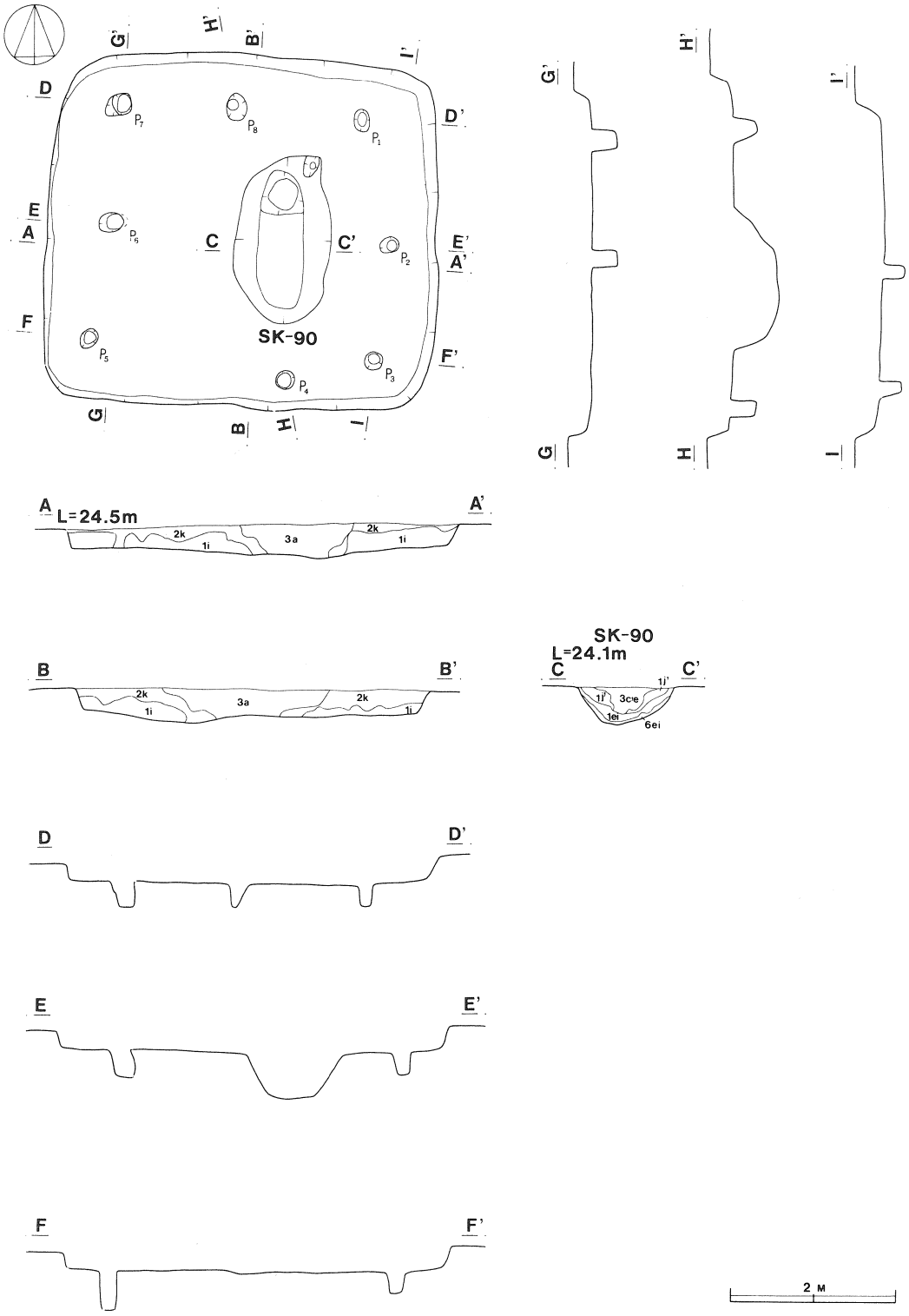
第30号住居跡（第61図）

本住居跡は，遺跡西部のC1e$_9$・C1e$_0$・C1f$_9$・C1f$_0$区に確認され，第29号住居跡の南西に位置している。

規模・形状は長辺が4.4m・短辺4.0mの隅丸長方形で，長軸方向はN－85.5°－Wである。比較的小規模の住居跡である。南西のコーナーは第4号方形周溝遺構の溝とすれすれに付いているが，重複はしていない。壁はほぼ垂直に立ち上がって，18～30cmの高さがある。東壁がしっかりしていて硬いが，他の壁はさほど硬くはない。床は比較的硬いロームで，平坦である。中央に第90号土壙が存在するが，本住居跡の床を切って築かれたものである。したがって，本住居跡が古く，第90号土壙が新しい。柱穴はP$_1$～P$_9$の9本が確認され，内8本（P$_1$～P$_8$）は整然と並んでおり，しかも等距離に配列されている。この8本が主柱穴と考えられる。また，P$_9$は第90号土壙内に確認されている。いずれも径20cm前後の円形であるが，深さは27～59cmとばらつきがある。

覆土は3層あって，黒褐色土・褐色土に分かれる。3層ともしまりを持っている。また，人為的な埋めもどしによる堆積である。

遺物はⅠ・Ⅱ層を中心に少量出土している。また，出土のしかたは北部，北東部に集中している。



第61図　第30号住居跡実測図

第31号住居跡（第64図）

本住居跡は，遺跡西部の$C1c_9$・$C1c_0$・$C2c_1$・$C1d_9$・$C1d_0$・$C2d_1$区に確認され，第30号住居跡の北側に位置する。

規模・形状は長辺6.0m・短辺5.0mの隅丸長方形だが，南東コーナーが内側にへこみ，丸くなっている。長軸はN－83°－Eである。東側で第32号住居跡と重複し，本住居跡の床を切っている。従って，新旧関係は本住居跡が古く，第32号住居跡が新しい。壁はほぼ垂直な立ち上がりを示し，壁高は24～34cmである。また，第32号住居跡と重複しているので，北壁の一部から東壁にかけて欠損している。床は平坦であるが，北東から南西にかけて傾斜をしており，差は16cm程である。また，中央に第91号土壙・東側に第92号土壙・南側に第93号土壙が存在している。本住居跡とつながった土層セクションがないため正確な新旧関係はつかめないが，各土壙の土層から，本住居跡よりも古いものと考えられる。柱穴はP_1～P_9の9本確認された。径16～30cm・深さ26～60cmの円形で，やや細めの柱穴であった。P_2だけは東壁に付いている。主柱穴は形状・深さからP_1～P_4と考えられる。

覆土は5層あって，暗褐色土・褐色土に分かれ，人為的な埋めもどしによる堆積である。全層ともしまりを持っている。

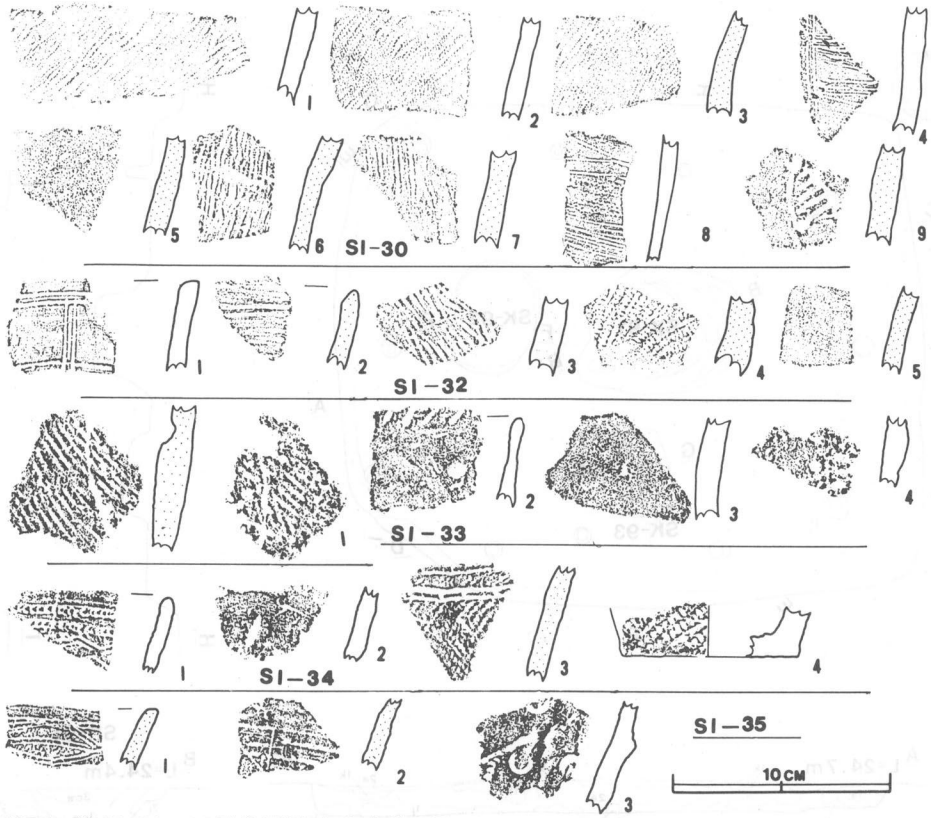
遺物は上部のⅠ・Ⅱ層から出土した。

第30号住居跡出土遺物（第62図）

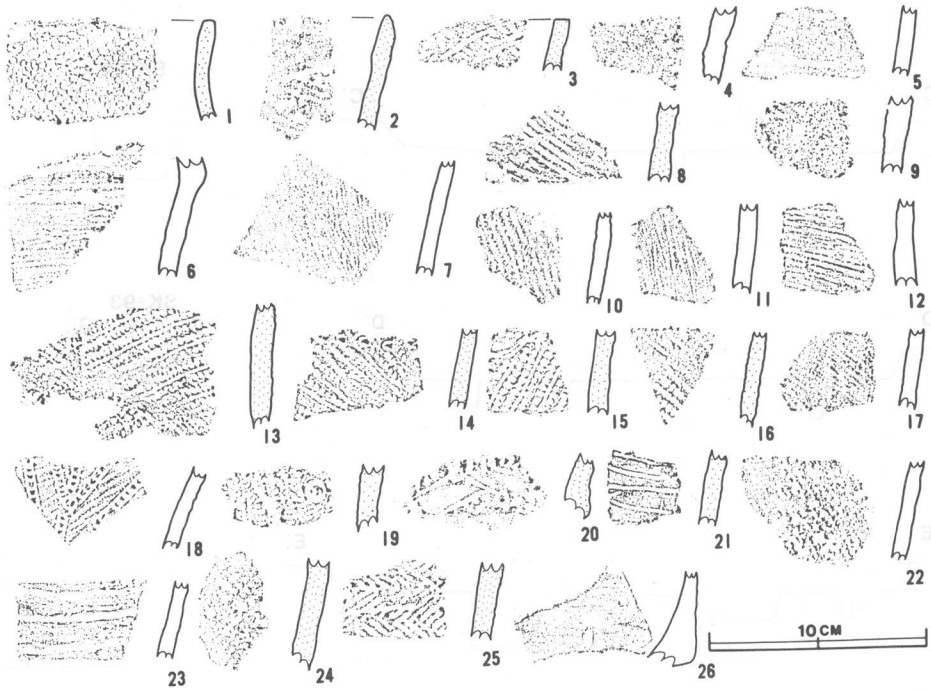
1は薄い斜線文を付ける。2・3・6・7は撚糸文を施している。4は細い沈線を付け，9は押型文である。8は貝殻腹縁文と横の沈線を合わせている。3・5～7・9は胎土に繊維を含んでいる。色は1～3・7がにぶい黄褐色，4・6は褐灰色，5は明褐色，8・9が灰褐色である。

第31号住居跡出土遺物（第63図）

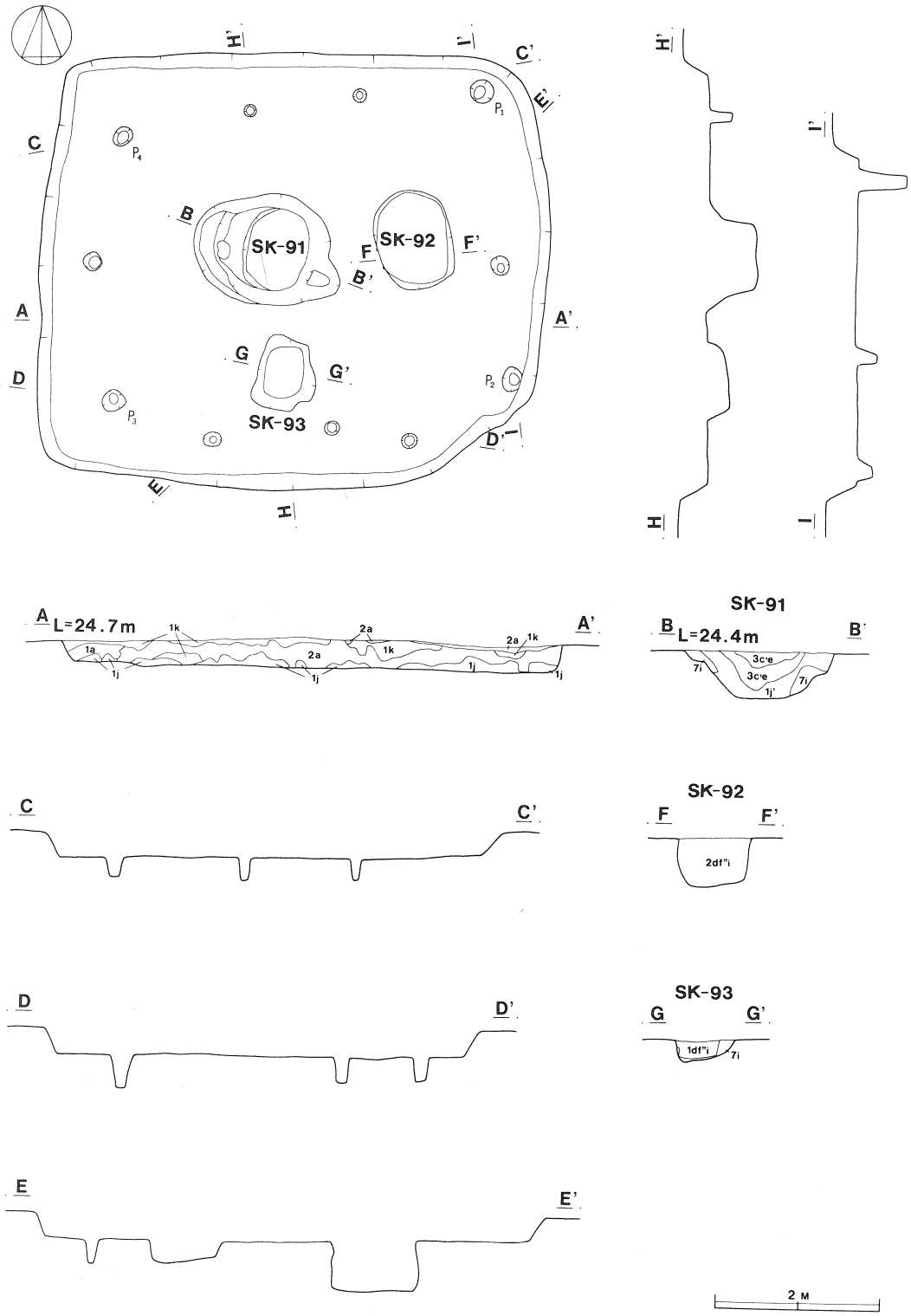
1・3・13～16は縄文を施す。6・8・12は貝殻条痕文，7・10・11・17・24は撚糸文を施す。18は撚糸文を地文とし，有節平行沈線文と円形竹管文を付ける。19・20は縄文を地文とし，やはり円形竹管文を付けている。21は浅い沈線文，23は浅いが太い沈線，25は綾絡の撚糸文である。1～3・8・13～16・19～21・24・25が胎土に繊維を含み，6・23が礫を含んでいる。色は1・7・12・13がにぶい褐色，2・5・11・17・22・25が橙色，3・4・9・16・24がにぶい橙色，6・8・15・18・21・26が灰褐色，10が明赤褐色，14・20が明灰褐色，19が黒褐色，23が灰黄褐色である。



第62図　第30. 32～35号住居跡出土遺物拓影図



第63図　第31号住居跡出土遺物拓影図



第64図　第31号住居跡実測図

第32号住居跡（第65図）

本住居跡は,遺跡西部のC2b$_1$・C2b$_2$・C2c$_1$・C2c$_2$・C2d$_1$・C2d$_2$区に確認され,第31号住居跡の東側に位置する。

規模・形状は長辺5.7m・短辺4.4mの隅丸長方形で，長軸方向はN－0°と北を指している。第31号住居跡と重複し，第31号住居跡の床を切って築かれている。壁は垂直に立ち上がり，硬く良好な壁である。壁高は12～32cmで，西壁の一部から南壁の一部にかけて欠損をしている。床はロームで，比較的硬いほうである。また，南西から北東にかけて傾斜をしており，その差は4～6cmである。柱穴はP$_1$～P$_7$の7本確認され，7本とも円形で径20～26cmと規模がほぼ一定している。また，P$_7$を除く6本は深さが26～34cmと一定している。規模・深さの一定しているP$_1$～P$_6$が主柱穴と考えられる。中央に第94号土壙が検出されている。本住居跡の土層からみて，本住居跡廃絶期かあるいは廃絶直後のものと判断できる。炉は検出されなかった。

覆土は5層あって，褐色土・明褐色土・にぶい褐色土に分かれ，ほぼ自然堆積である。Ⅳ層は粘性，Ⅰ層はしまりを持っている。

遺物は少量出土した。中でも黒浜式の土器片が多い。石器で，石鏃が1点出土している。

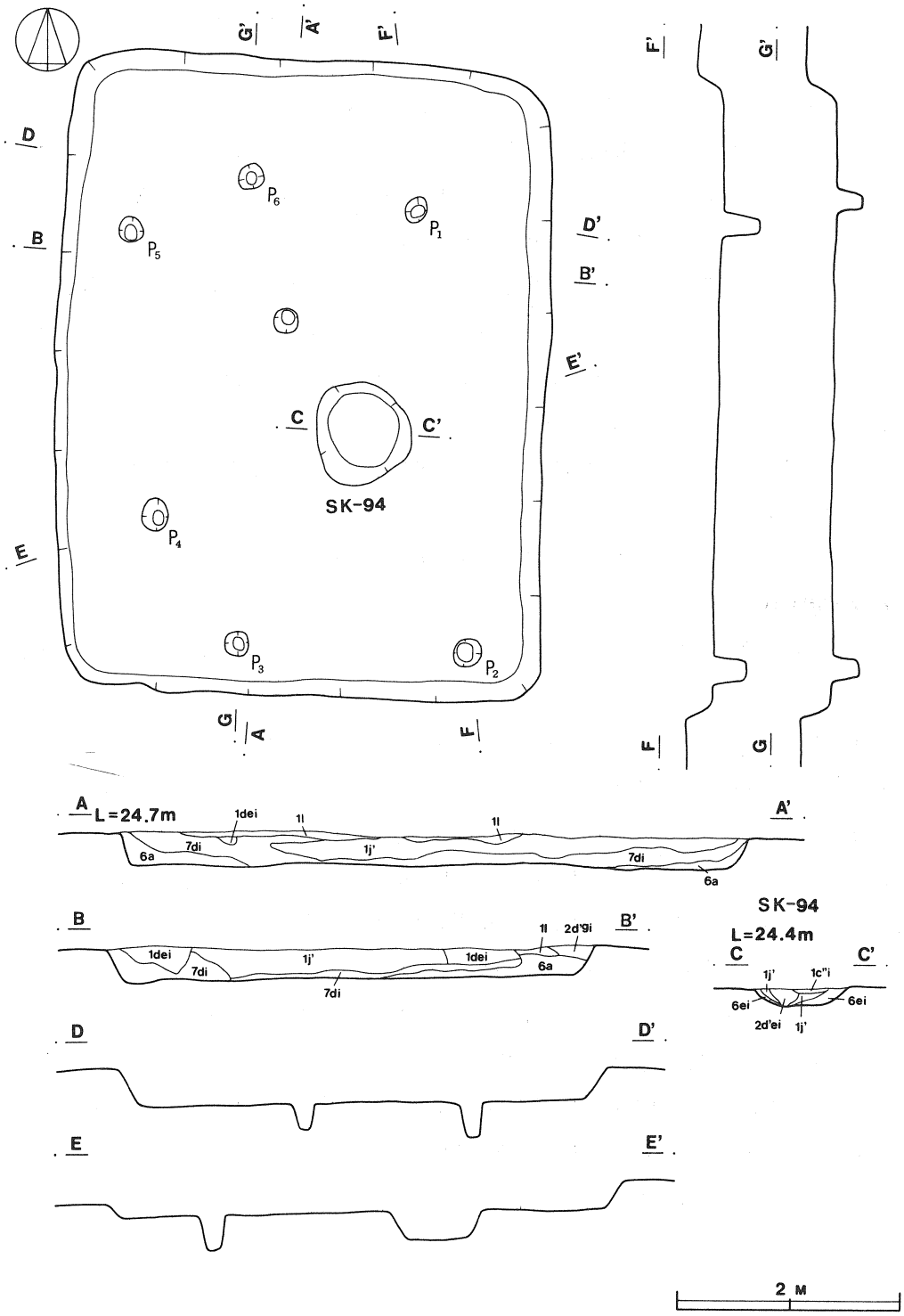
第33号住居跡（第66図）

本住居跡は，遺跡中部のC2c$_2$・C2c$_3$・C2d$_2$・C2d$_3$区に確認され，第32号住居跡の東側に位置している。

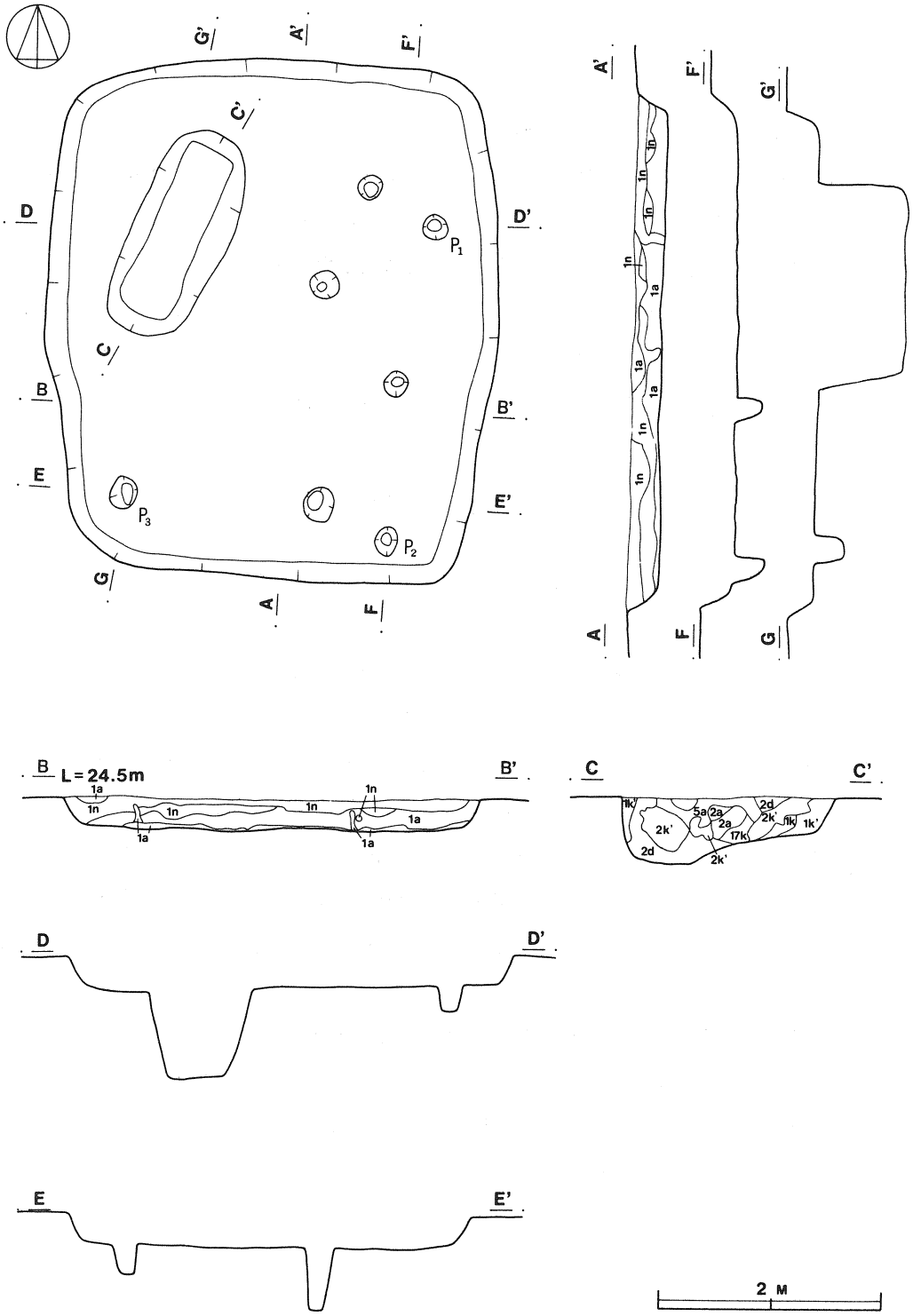
規模・形状は長辺が4.6m・短辺が4mの隅丸長方形であるが2本の長辺がやや外側にふくらみ，丸味をおびた形をし，しかも他の住居跡と比べ小型である。長軸方向はN－0°と北を向いている。壁は良好な硬さを持ち，垂直な立ち上がりを示している。壁高は22～26cmとほぼ一定している。床はロームで比較的硬く平坦であるが，南から北へ傾斜をし，3～6cmの差がある。北西にあるピットは長径195cm・短径90cm・深さ79cmと楕円形を呈しているが，本住居跡とは関連がなく，後世のイモ穴である。柱穴はP$_1$～P$_7$の7本確認され，形状・深さからP$_1$～P$_3$が主柱穴と考えられる。北西にも主柱穴があったと考えられるが，前述のピットにより切られたと考えられる。規模は径20～28cmの円形で，深さは24～58cmとまちまちである。

覆土は7層で，すべて褐色土からなり，Ⅵ・Ⅶ層を除いてすべてしまりがある。北部の一部に人為的な埋めもどしがあったが，他は自然堆積をしている。

遺物はⅢ層に3点出土した。茅山式の土器片である。



第65図　第32号住居跡実測図



第66図　第33号住居跡実測図

第34号住居跡（第67図）

本住居跡は，遺跡中部のC2b$_3$・C2b$_4$・C2c$_3$・C2c$_4$・C2d$_4$区に確認され，第22号住居跡の北西に位置する。

規模・形状は一辺が約５ｍの隅丸方形で，長軸方向はＮ－3.5°－Ｅである。北西・南東のコーナーが外に張り出し，ひし形にゆがんだ形をしている。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は約20cmと一定している。良好な壁で硬い。床はロームで固く踏みかためられているが，周囲に比べて中央がやや低く２～４cmの差を持っている。炉・貯蔵穴は検出されなかった。柱穴はP$_1$～P$_{10}$の10本確認され，径18～26cmの円形で，深さは28～58cmである。どの柱穴も比較的細く，浅いものが多い。主柱穴はP$_1$～P$_4$と考えられる。

覆土は４層あって，褐色土・にぶい褐色土に分けられる。Ⅲ層は粘性・Ⅳ層はしまりを持ち，自然堆積をしている。

遺物はⅢ層を中心に少量出土し，黒浜・浮島式の土器片である。

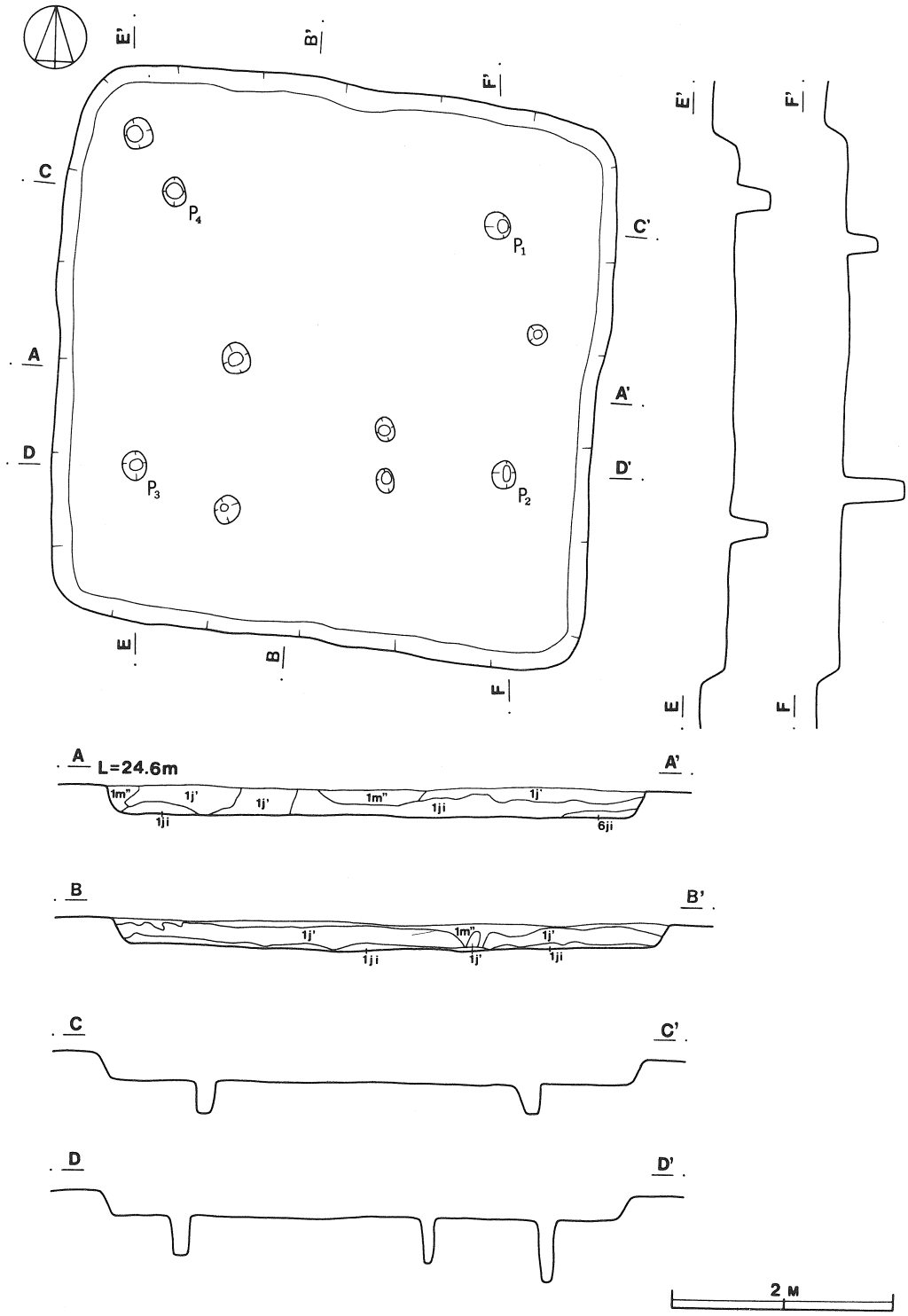
第35号住居跡（第68図）

本住居跡は，遺跡南部のD2j$_3$・D2j$_4$・E2a$_3$・E2a$_4$区に確認され，第25号住居跡の南側に位置している。

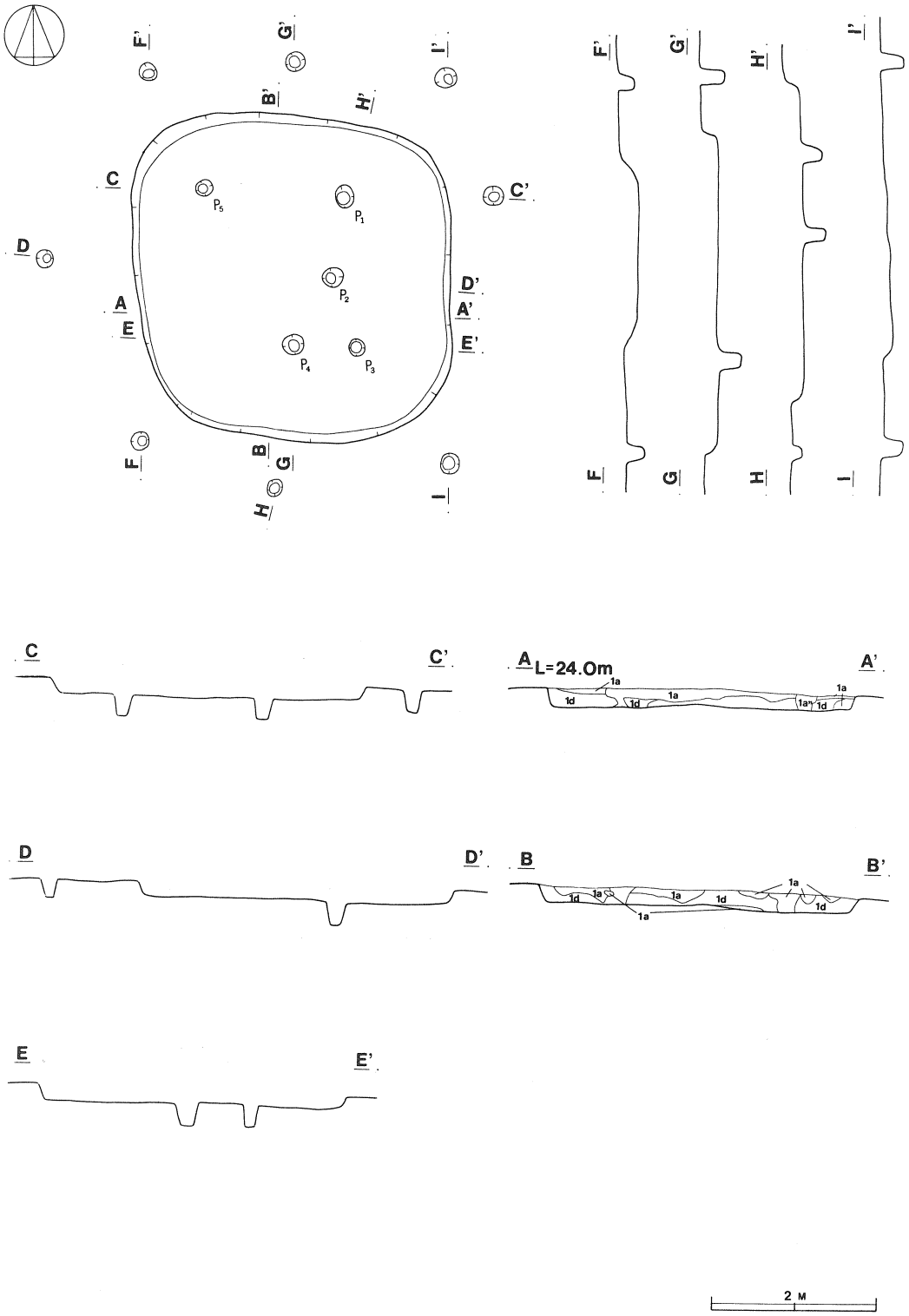
規模・形状は１辺3.8ｍの隅丸方形であるが，各辺が丸味をおび，円形に近い形状を示している。長軸方向はＮ－5.5°－Ｗで，比較的小型の住居跡である。壁はゆるやかに外傾して立ち上がり，壁高は12～20cmと低い。これは第25号住居跡と同じく，確認面を15cm掘り下げて検出されたからである。床は平坦であるが，北西から南東にかけて傾斜しており，その差は２～６cm程である。柱穴は第25号住居跡と同じく屋外にも検出され，屋内に５本，屋外に８本である。屋内（P$_1$～P$_5$）のものは，円形で，径20～26cm・深さ27～29cmでほぼ一定した規模であるが，屋外（P$_6$～P$_{13}$）の柱穴は円形で，径18～26cm・深さ15～31cmと多少規模にばらつきがある。炉・貯蔵穴の類は検出されなかった。

覆土は６層あって，すべて褐色土であり，各層ともしまりを持っている。人為的な埋めもどしによる堆積を示している。

遺物はⅢ・Ⅳ層に５片出土したが，諸磯式２片・浮島式１片・加曽利Ｅ式１片であった。南東コーナー近くの床面出土は浮島式である。



第67図　第34号住居跡実測図



第68図　第35号住居跡実測図

第32号住居跡出土遺物（第62図）

1は縦横の平行沈線，2・3は貝殻条痕，4は斜めの縄文を施している。1を除いてすべて胎土に繊維を含んでいる。1は灰白色，2～4は橙色，5は褐灰色である。

第33号住居跡出土遺物（第62図）

1は貝殻条痕，2は口唇に連続斜線文を施す。1は胎土に繊維を含み，3は礫を含む。1は橙色，2は灰白色，3はにぶい黄橙色，4は浅黄橙色である。

第34号住居跡出土遺物（第62図）

1は連続爪形文と竹管による山形沈線文，3は撚糸文を地文にし，その上は有節平行沈線文を施す。4は，底部だが斜めの縄文がわずかに残った胴部に付いている。

3は胎土に繊維を含んでいる。1は褐灰色，2が橙色，3がにぶい褐色，4がにぶい橙色である。

第35号住居跡出土遺物（第62図）

1は竹管による平行沈線，柳葉文を付ける。2は貝殻条痕，3は隆帯の上下に円形竹管文と1本の沈線を施している。1・2に繊維，3に礫を含む。また，1は明黄褐色，2はにぶい黄橙色，3がにぶい褐色である。

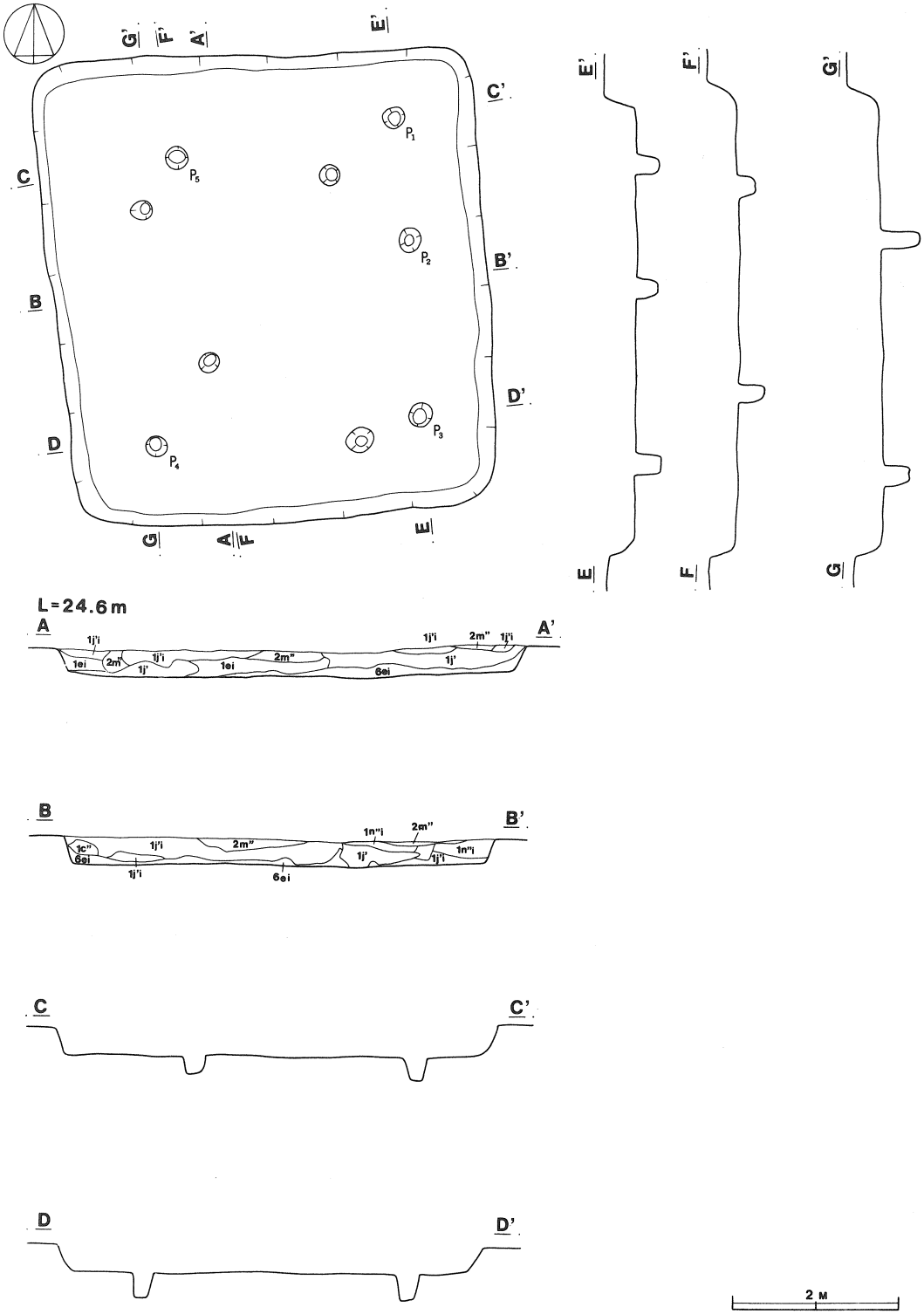
第36号住居跡（第69図）

本住居跡は，遺跡中部の$C2i_5$・$C2i_6$・$C2j_5$・$C2j_6$区に確認され，第21号住居跡の東側約15ｍのところに位置する。

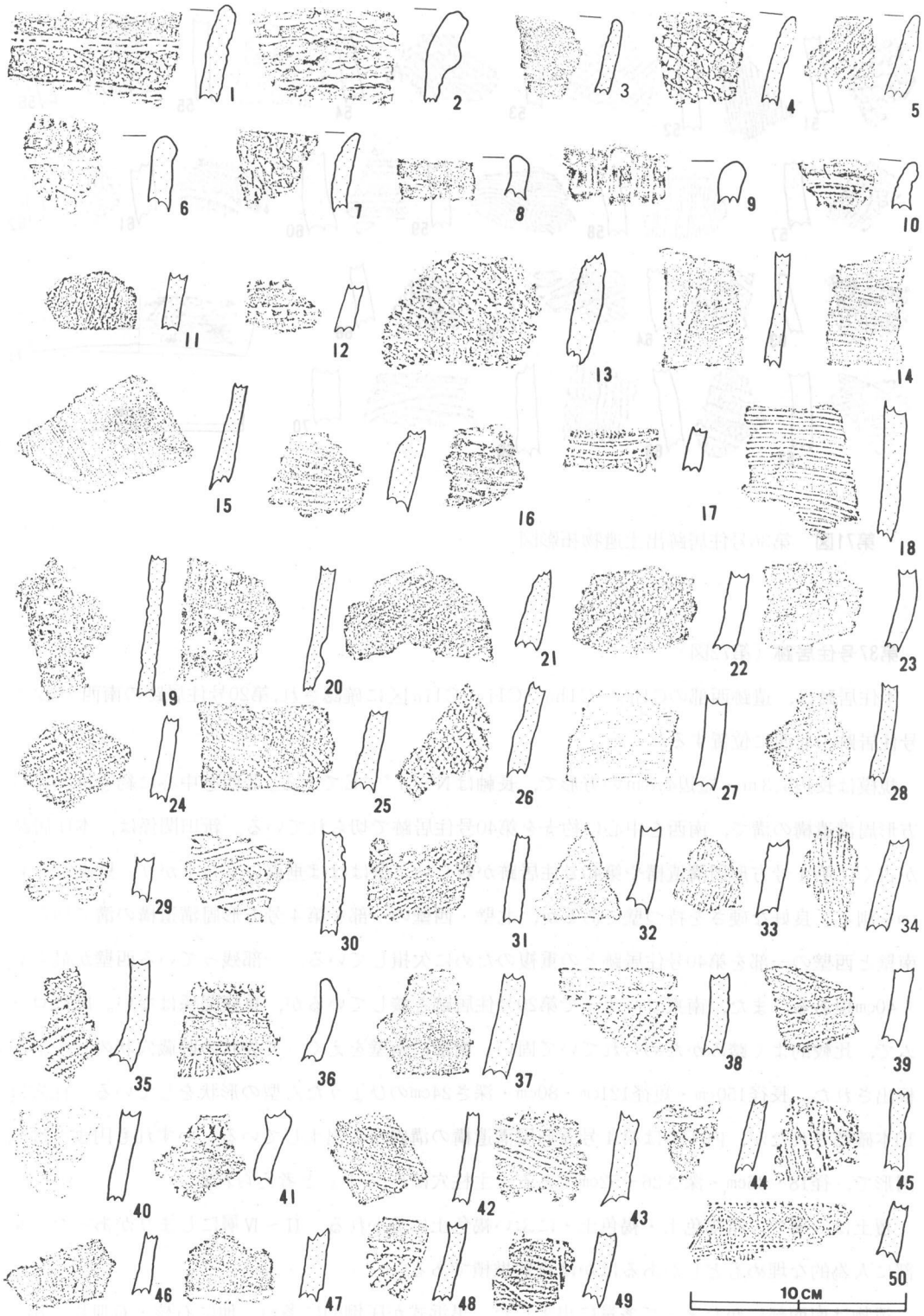
規模・形状は長辺5.4ｍ・短辺5.1ｍの隅丸長方形で，北東コーナーが外に張り出しややゆがんだ形をしている。長軸方向はＮ－12°－Ｅである。壁は良好で，比較的硬く，垂直な立ち上がりをしている。壁高は26～40cmで北壁が他の壁よりも高くなっている。床は平坦なロームで，よく踏みかためられていて固い。炉・貯蔵穴は確認されなかった。柱穴はP_1～P_9の9本確認された。円形で，規模も径26～32cmとほぼ一定している。深さはP_7，P_9を除くと22～32cmと一定しているが，P_7は17cmと浅く，P_9は45cmと深い。主柱穴は深さや位置から，P_1～P_5と考えられる。

覆土は7層で，暗褐色土・にぶい褐色土・褐色土に分けられる。Ⅲ層に粘性があり，Ⅲ・Ⅳ層にしまりがある。人為的な埋めもどしによる堆積である。

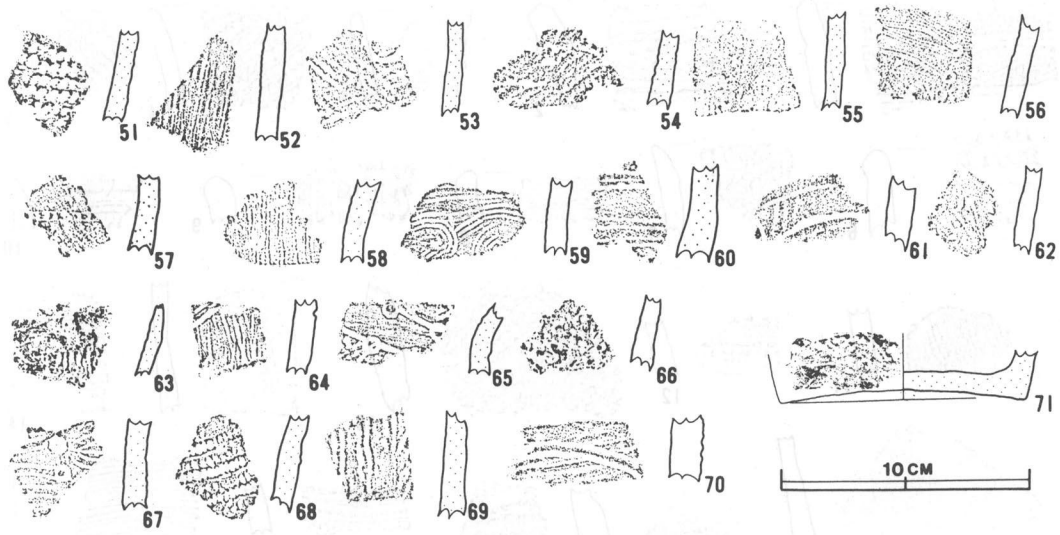
遺物はⅢ・Ⅳ層に，しかもどの平面位置からも均等に多量に出土した。浮島式の土器が多い。南東コーナー近くの床面に出土した土器も浮島式である。石器では石匙・石錘・磨石などが出土している。



第69図　第36号住居跡実測図



第70図　第36号住居跡出土遺物拓影図(1)



第71図　第36号住居跡出土遺物拓影図

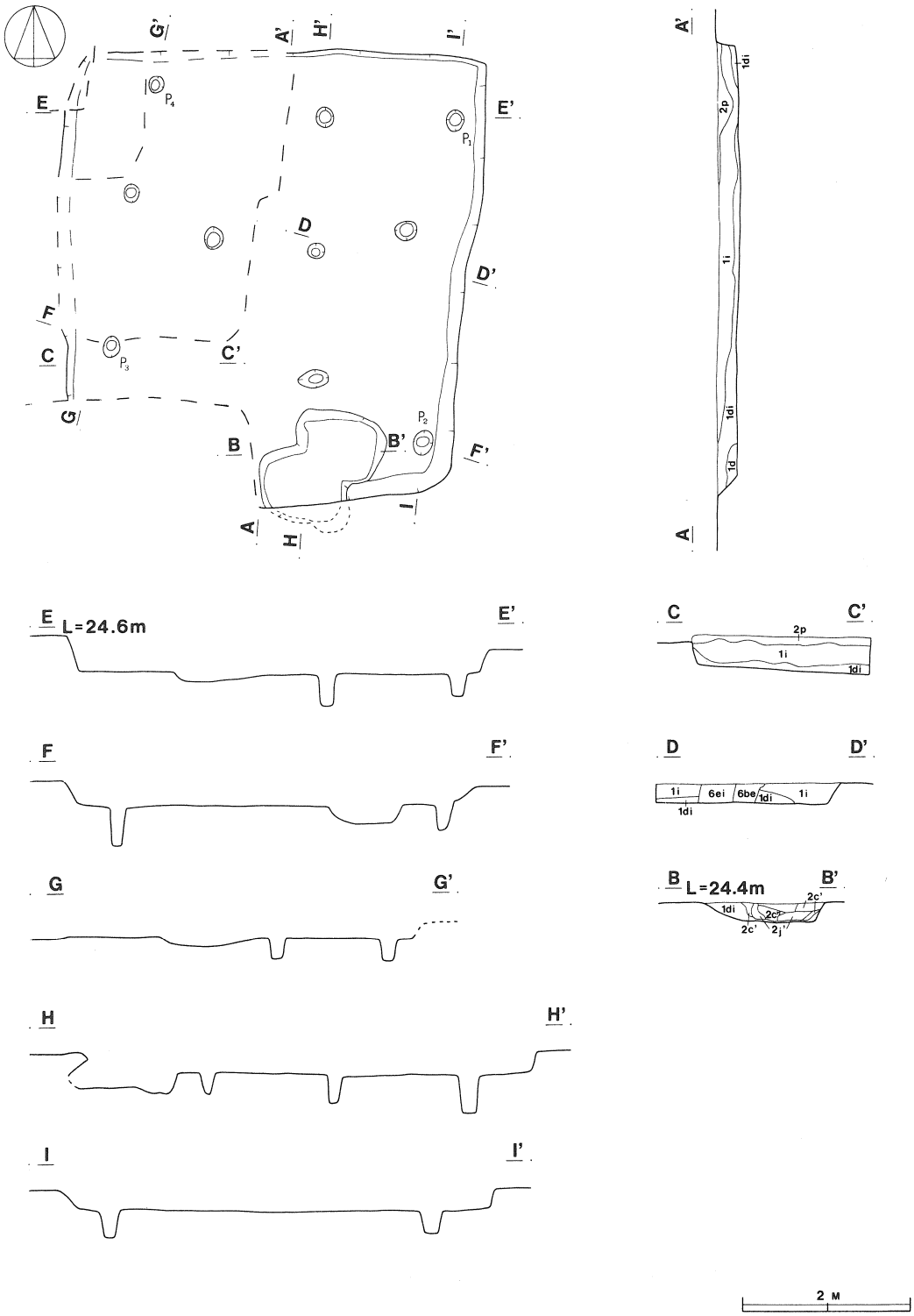
第37号住居跡（第72図）

本住居跡は，遺跡西部のC1h$_9$・C1h$_0$・C1i$_9$・C1i$_0$区に確認され，第20号住居跡の南西・第21号住居跡の北西に位置する。

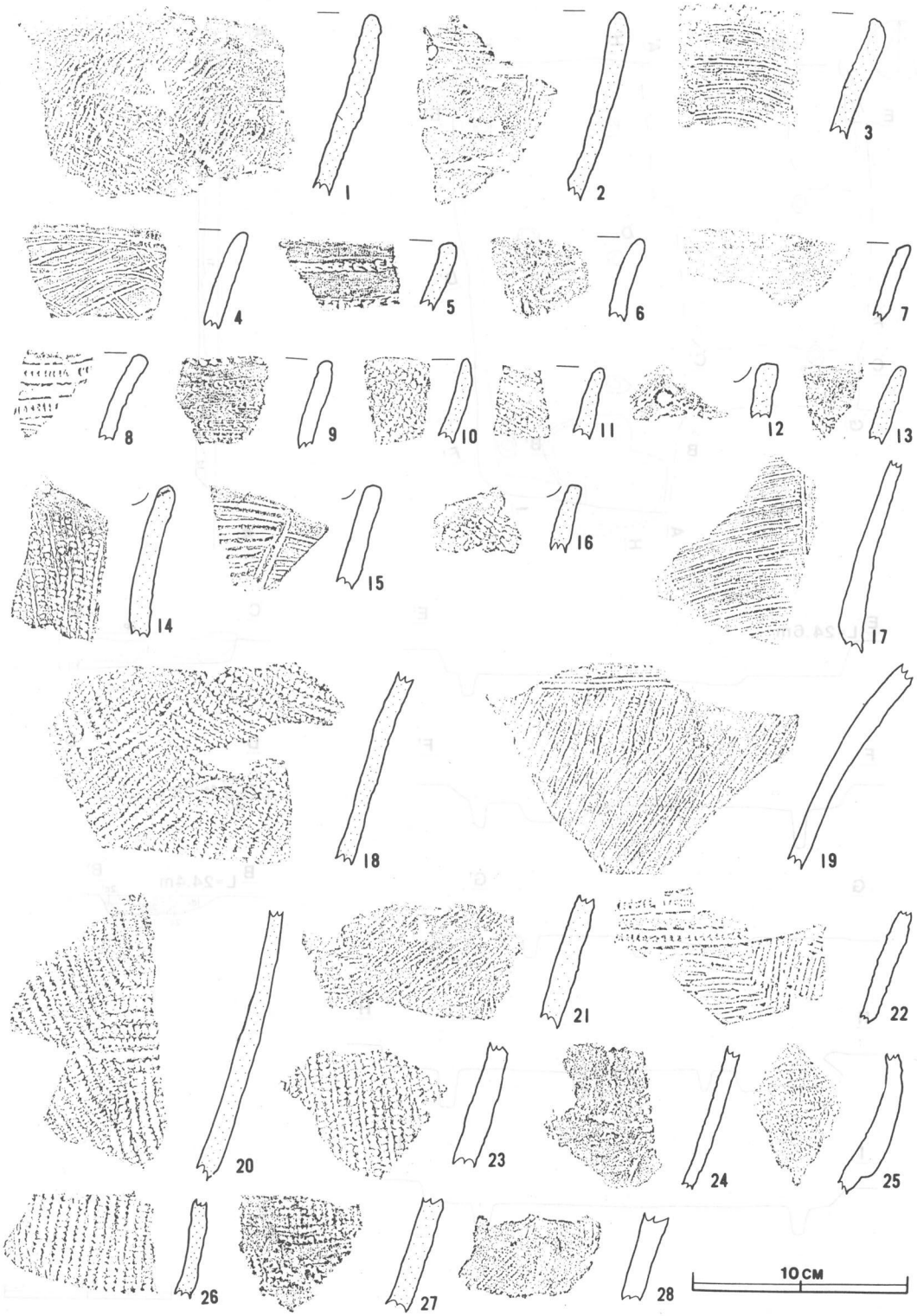
規模は長辺5.3m・短辺4.8mの方形で，長軸はN－7°－Eである。北西を中心に約$\frac{1}{3}$を第4号方形周溝遺構の溝で，南西を中心に約$\frac{1}{8}$を第40号住居跡で切られている。新旧関係は，本住居跡が古く，第4号方形周溝遺構や第40号住居跡が新しい。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高22～40cmを測る。良好な硬さを持つ壁であるが，北壁・西壁の一部を第4号方形周溝遺構の溝で切られ，南壁と西壁の一部を第40号住居跡との重複のために欠損している。一部残っている西壁が最も高く40cm程ある。また，南東コーナーで第20号住居跡と接しているが，重複関係はない。床はロームで，比較的よく踏みかためられていて固い。南部に南壁をえぐって袋状の貯蔵穴状のピットが検出された。長径150cm・短径121cm・80cm・深さ24cmのひょうたん型の形状をしている。柱穴は10本確認されたが，内4本は第4号方形周溝遺構の溝内から出土している。いずれも円または楕円形で，径18～36cm・深さ26～52cmである。主柱穴はP$_1$～P$_4$と考えられる。

覆土は6層で，暗褐色土・褐色土・にぶい褐色土に分かれる。II～Ⅳ層にしまりがあった。東部に人為的な埋めもどしがあるほかは自然堆積である。

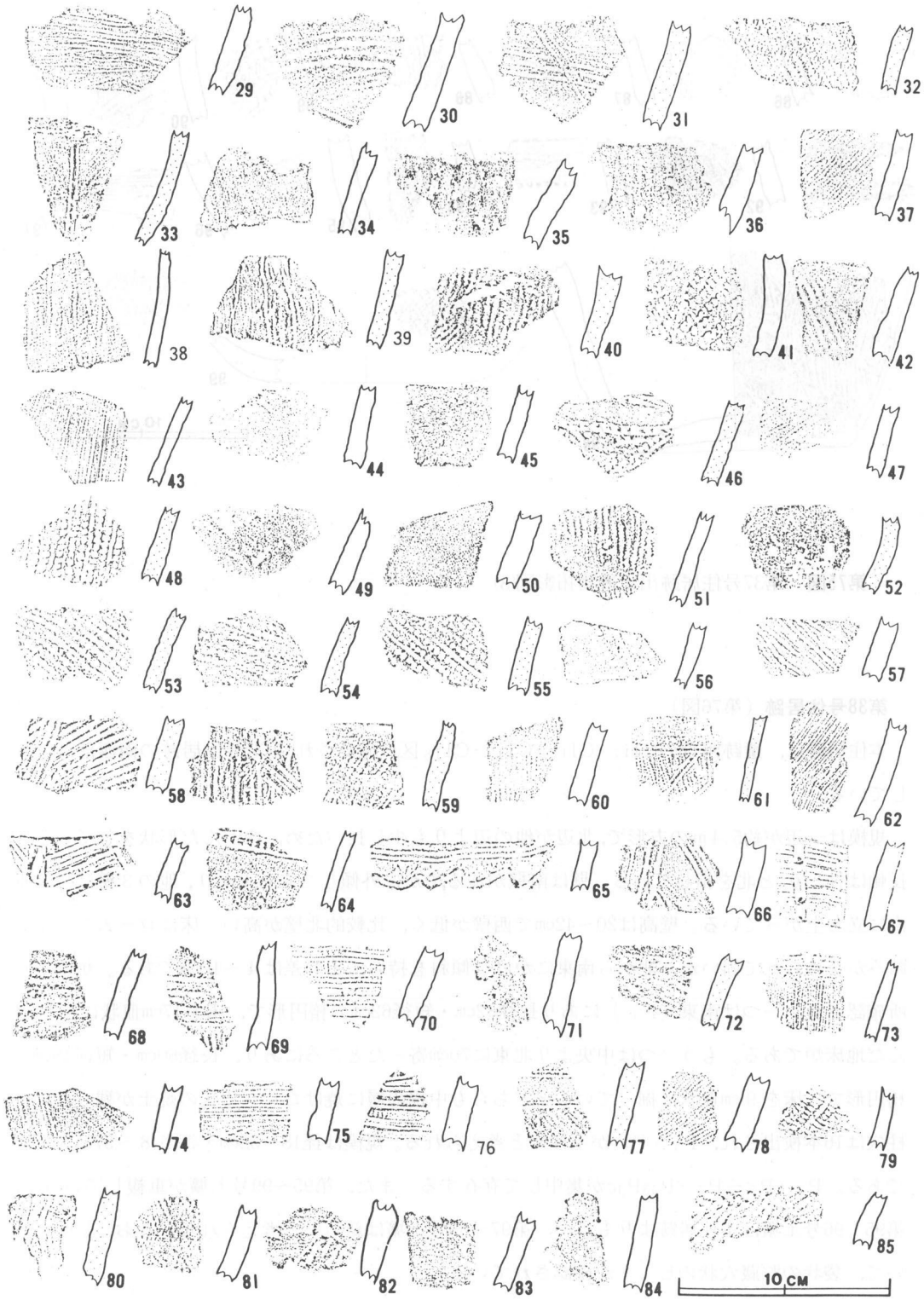
遺物は南西部にかたまって多量に出土した。黒浜式が圧倒的に多い。他に石核・石皿片も出土している。



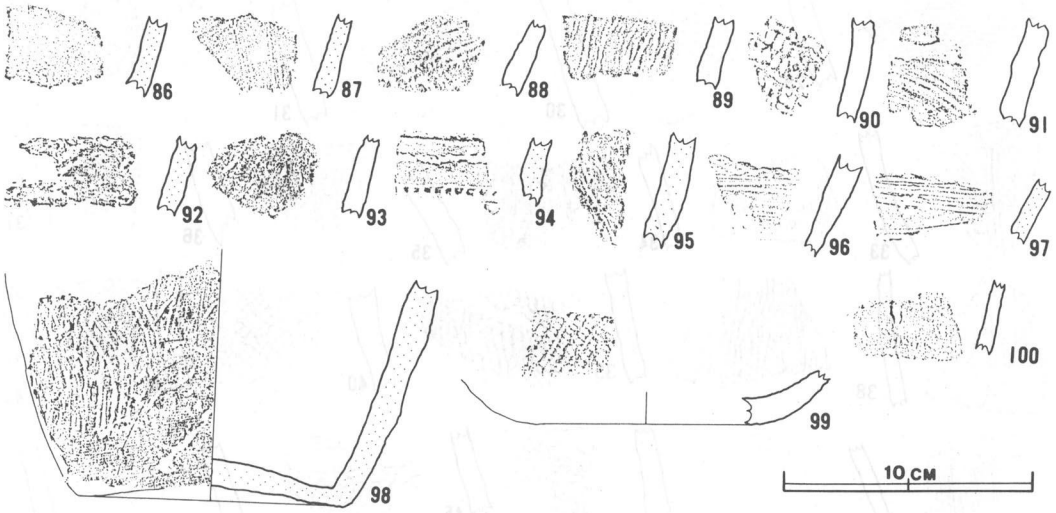
第72図　第 37 号 住 居 跡 実 測 図



第73図　第37号住居跡出土遺物拓影図(1)



第74図　第37号住居跡出土遺物拓影図(2)



第75図　第37号住居跡出土遺物拓影図(3)

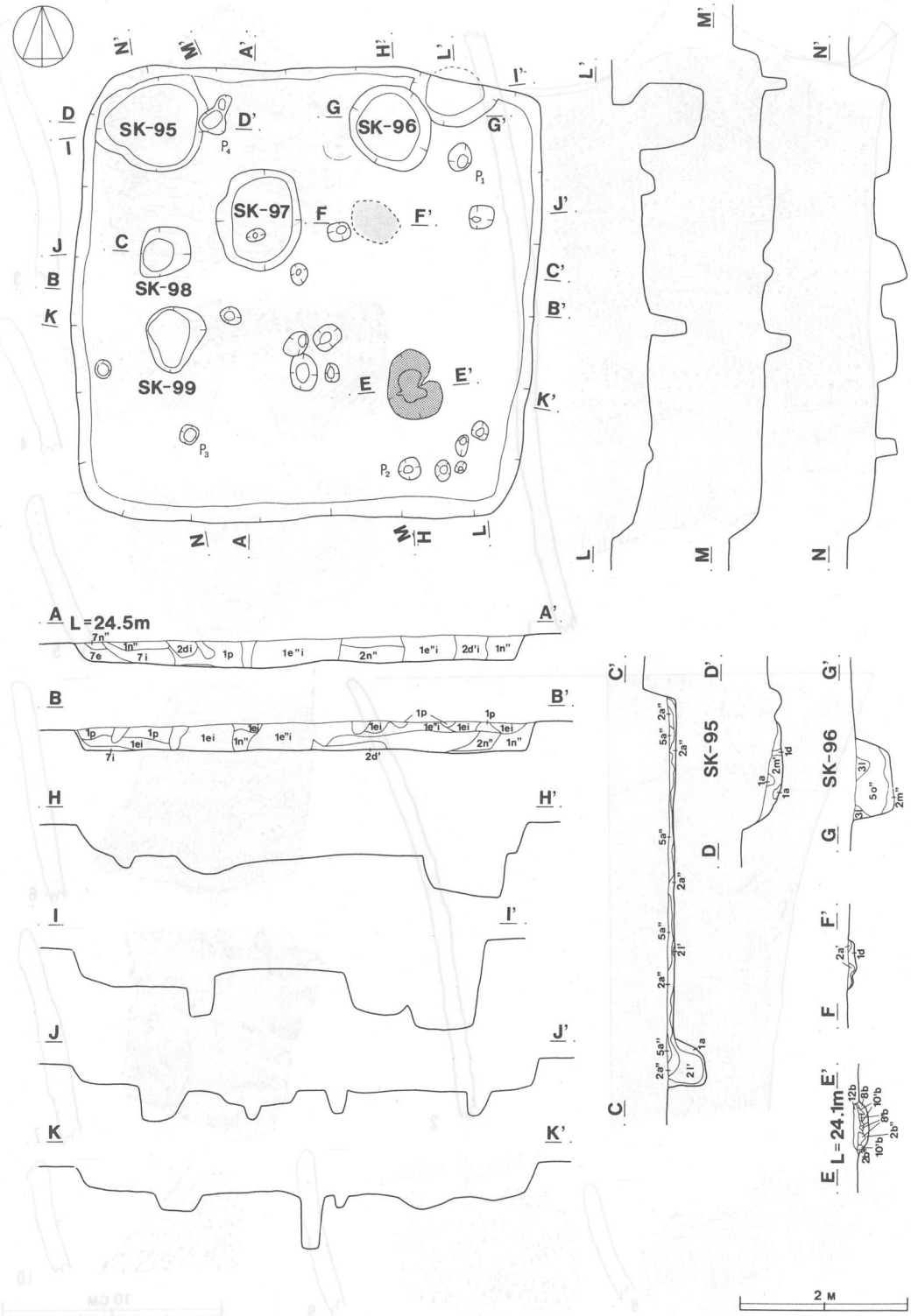
第38号住居跡（第76図）

本住居跡は，遺跡西部のC1i$_7$・C1i$_8$・C1j$_7$・C1j$_8$区に確認され，第37号住居跡の南西部に位置している。

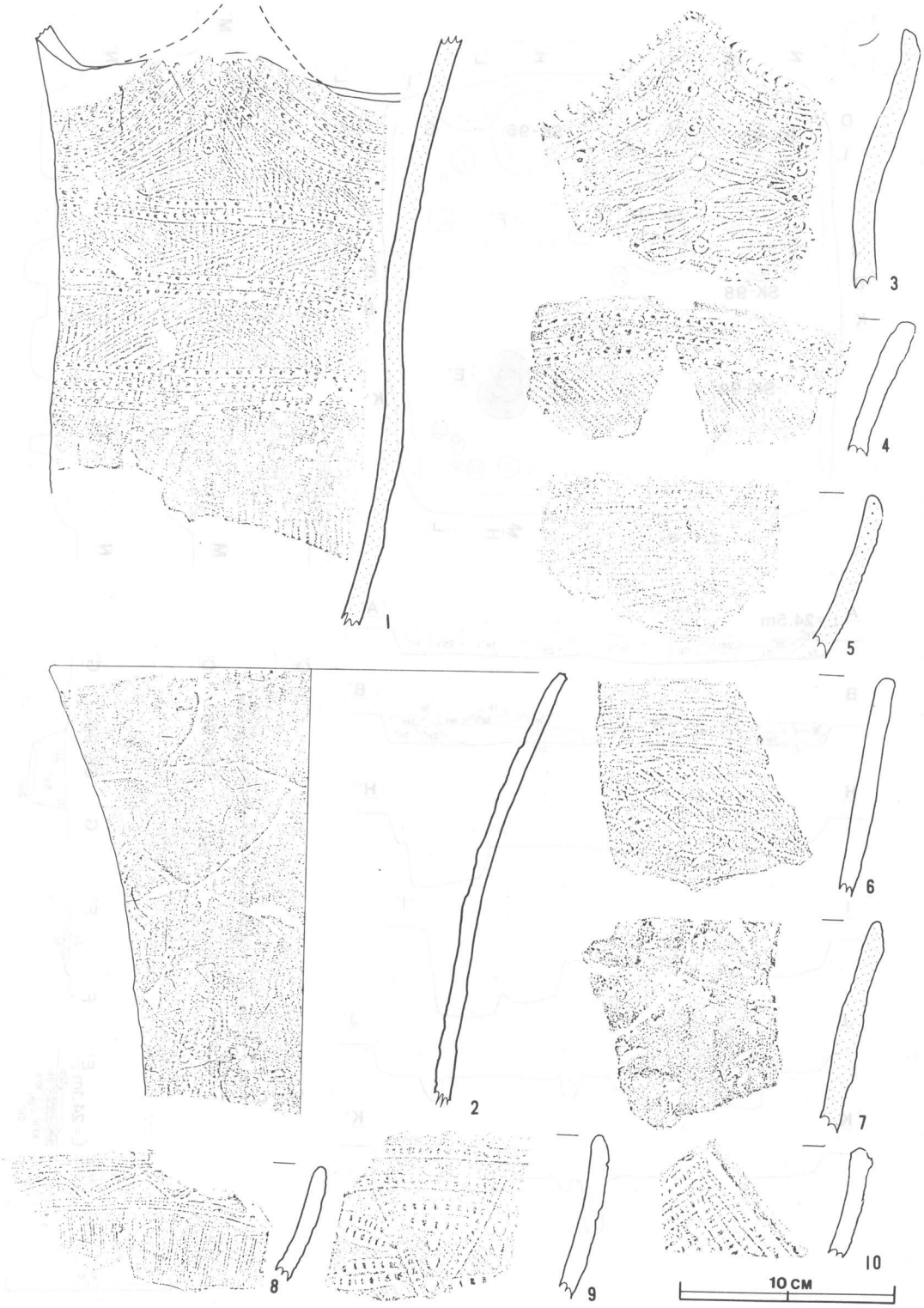
規模は一辺が約5.4ｍの方形で，北辺が他の辺よりも少し長いため，ゆがんだ形状をしている。長軸はＮ－０°と北を指している。壁は南壁がゆるやかに外傾して立ち上がり，他の３壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は20～42cmで西壁が低く，比較的北壁が高い。床はロームで，よく踏みかためられて固いが，北から南東にかけて傾斜を持ち，その差は４～12cmである。炉は２か所確認され，一つは南東（Ｆ$_1$）にあり長径82cm・短径62cmの楕円形で，床を17cm皿状に掘り込んだ地床炉である。もう一つは中央より北東に70cm寄ったところにあり，長径60cm・短径48cmの楕円形で，床を９cm皿状に掘っている。どちらも中程の層に焼けたレンガ状の焼土が残っていた。柱穴は16本検出され，Ｐ$_1$～Ｐ$_4$が主柱穴と考えられる。規模は径18～32cm・深さ８～57cmの円形である。Ｐ$_2$・Ｐ$_5$～Ｐ$_7$・Ｐ$_{13}$Ｐ$_{16}$が集中して存在する。また，第95～99号土壙が重複しているが，第95・96号土壙は本住居跡よりも古く，第97～99号土壙は新しいと考えられる。なお，北壁に付いて，袋状の貯蔵穴状のピットが確認されている。

覆土は10層で，褐色土・暗褐色土・明褐色土が人為的な埋めもどしによる堆積であった。

遺物は多量に出土し，諸磯式と浮島式が多い。石器では石斧・磨石・石皿片が出土した。

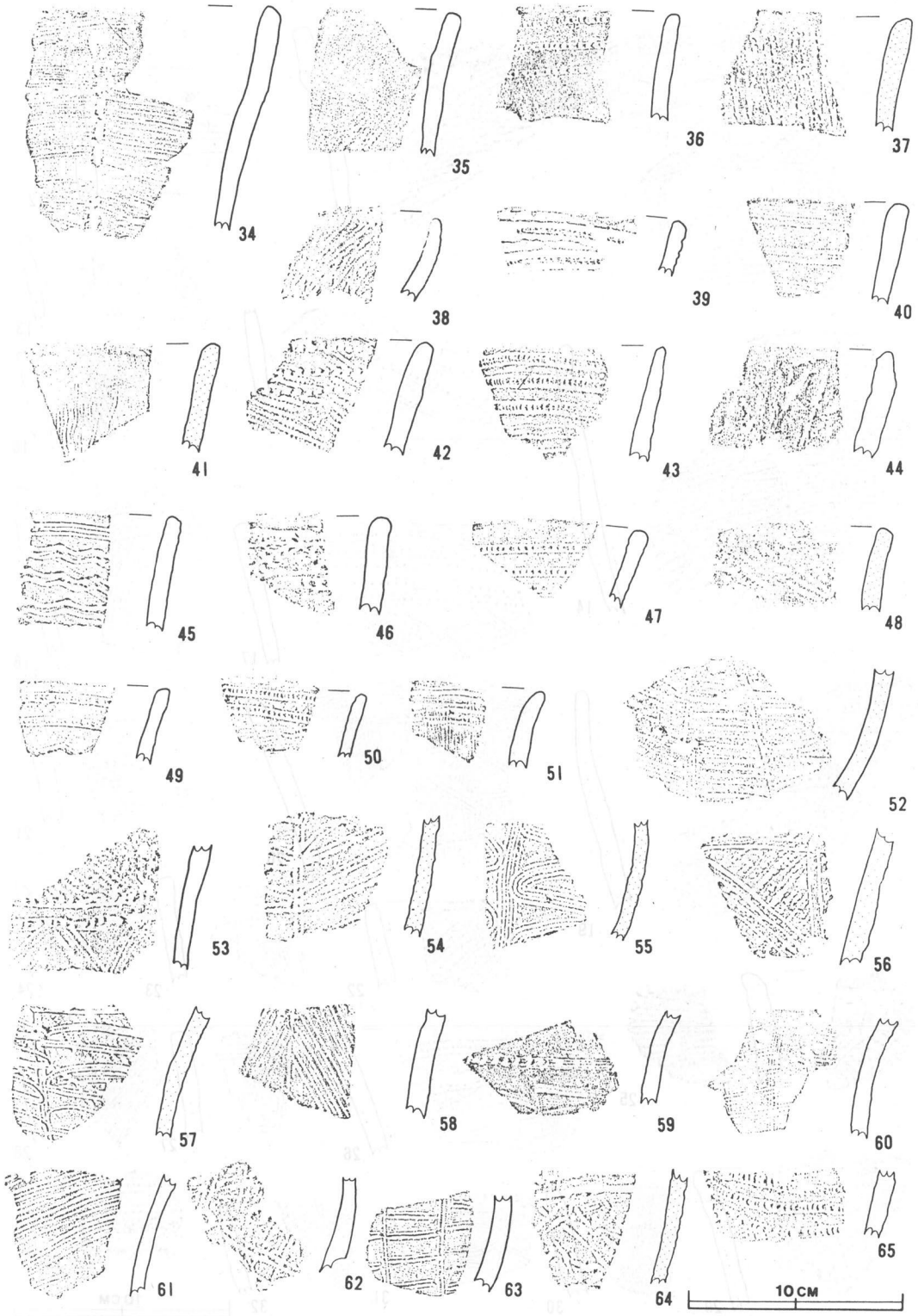


第76図　第38号住居跡実測図

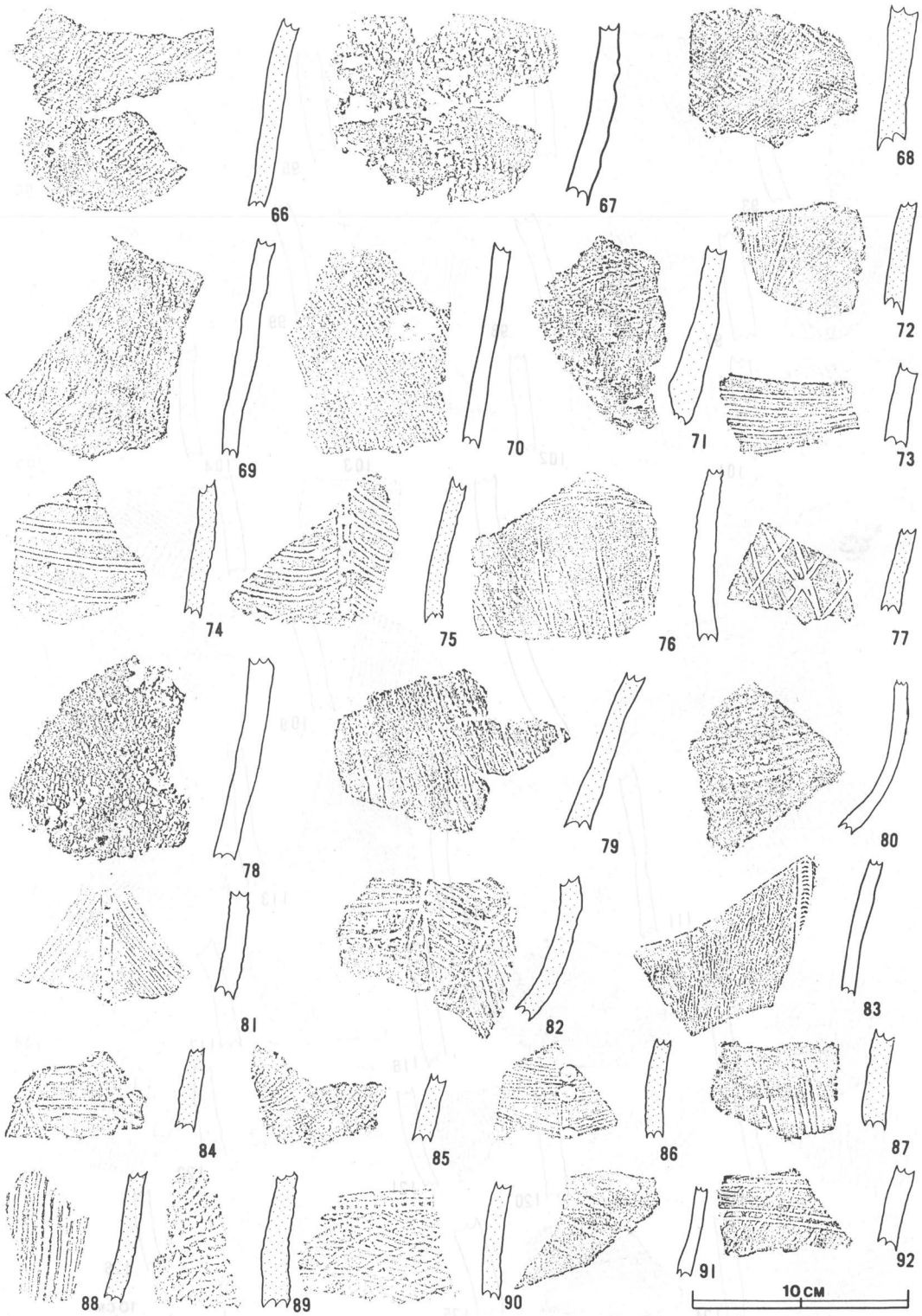


第77図　第38号住居跡出土遺物拓影図(1)

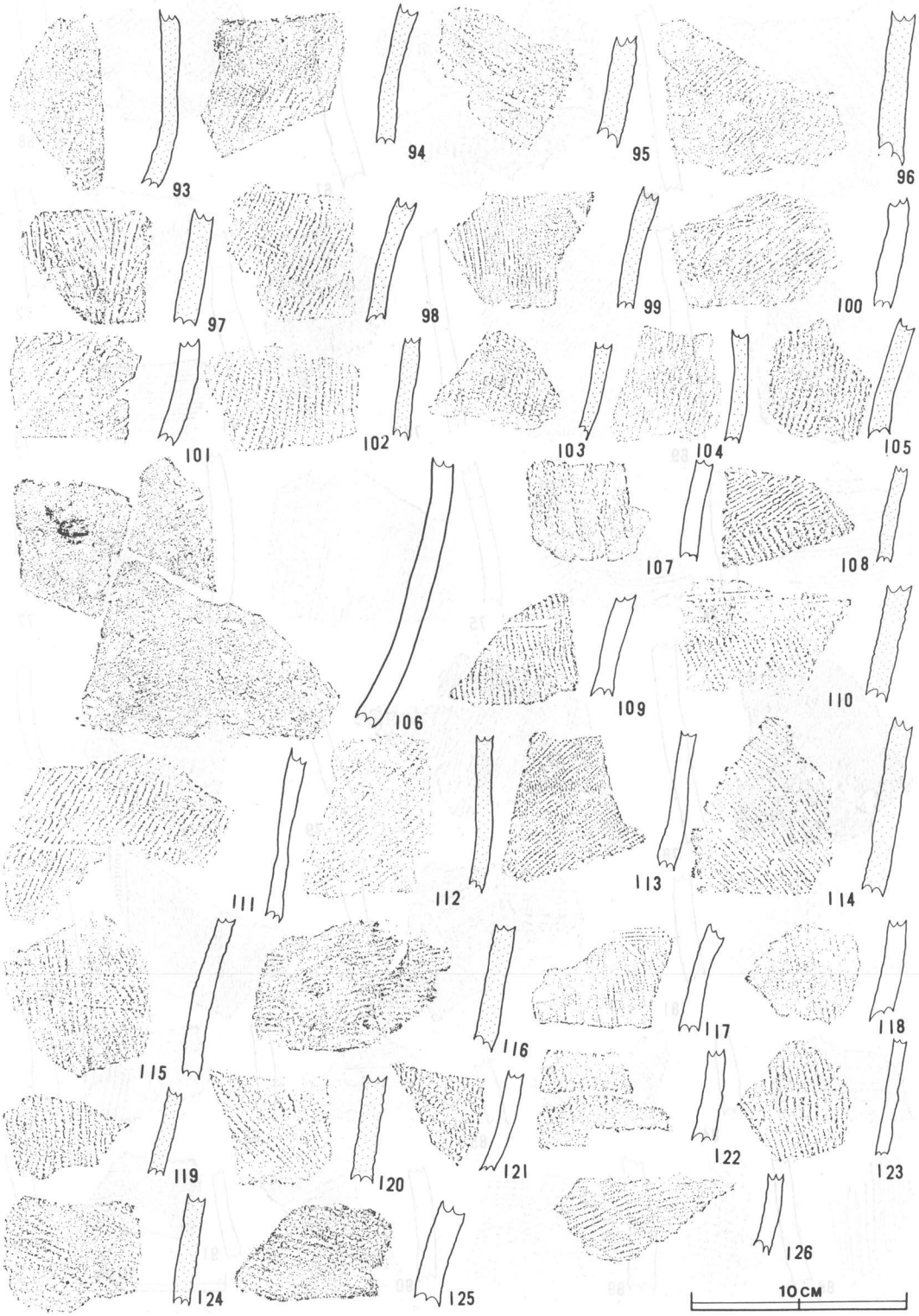
第78図　第38号住居跡出土遺物拓影図(2)



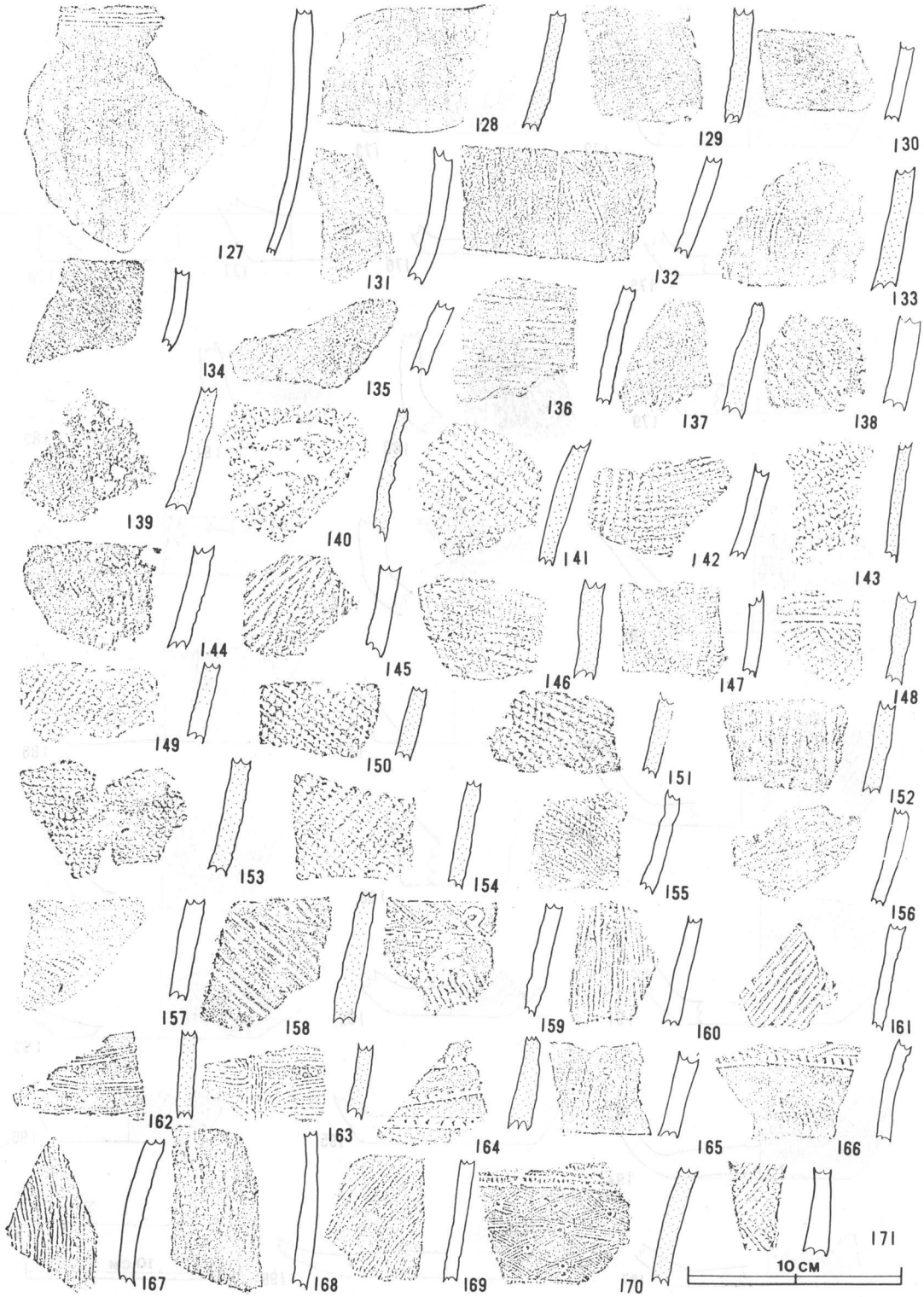
第79図　第38号住居跡出土遺物拓影図(3)



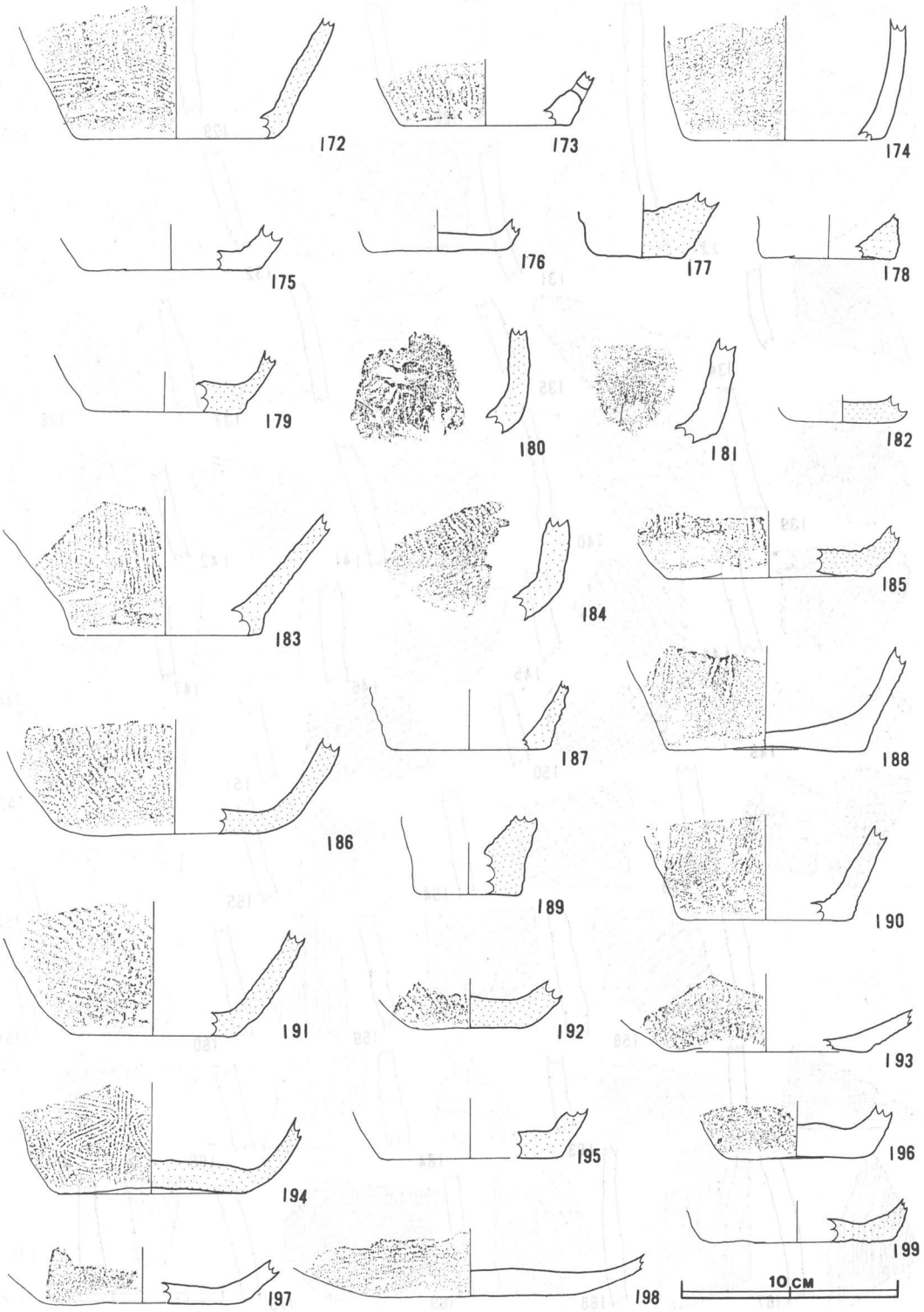
第80図　第38号住居跡出土遺物拓影図(4)



第81図　第38号住居跡出土遺物拓影図(5)



第82図　第38号住居跡出土遺物拓影図(6)



第83図　第38号住居跡出土遺物拓影図(7)

出土遺物解説表

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI−38	1	深鉢	A 19.2 B(27.1)	4つの大波状口縁で，半截竹管による平行沈線と刺突文を施す。胴部以下は縄文を施している。		焼成…良 胎土…砂を含む 色調…内 灰黄褐色 外 にぶい黄褐色	第77図1
	2	〃	A 23 B(19.8)	胴部から口縁にかけて外反して立ち上がる。 胴部下に縦のより糸文を施す。 内面に横なで。		焼成…良 胎土…砂礫スコリアを含む 色調…にぶい黄橙色	第78図2
	3	把手	A 3.7 B(2.7) 16g	把手の部分のみ残存。		焼成…良 胎土…砂礫を含む 色調…褐灰色	第128図9

第39号住居跡（第84図）

本住居跡は，遺跡西端のC1j$_6$・C1j$_7$・D1a$_6$・D1a$_7$・D1b$_6$・D1b$_7$区に確認され，第38号住居跡の南西に位置する。

平面形状はゆがみを持っているため台形を呈し，上底4.4m・下底4.9m・高さ5.2mの規模を有している。長軸方向はN−90°−Eと東を指している。壁は外傾して立ち上がり，さほどしっかりした壁でなくやわらかい。壁高は14〜26cmを測る。北壁と東壁が高く南・西壁が低い。床はローム で，踏みかためられたようにやや固く，平坦であるが東から西にかけて傾斜を示し，その差は8〜12cmである。炉が中央から南東にかけて確認され，長径2.14m，短径1.1mの楕円形で床を22cmⅢ状に掘り込んでいる。上部の層に堅く焼けた焼土の層があったが，焼土の量は比較的少なめの地床炉である。また，北西に第100号土壙，中央に第101号土壙が存在している。ともに本住居跡よりも古い土壙のようである。柱穴はP$_1$〜P$_{10}$の10本確認された。径20〜34cmの円または，楕円形で，深さは25〜49cmとまちまちである。主柱穴はP$_1$〜P$_4$と考えられる。

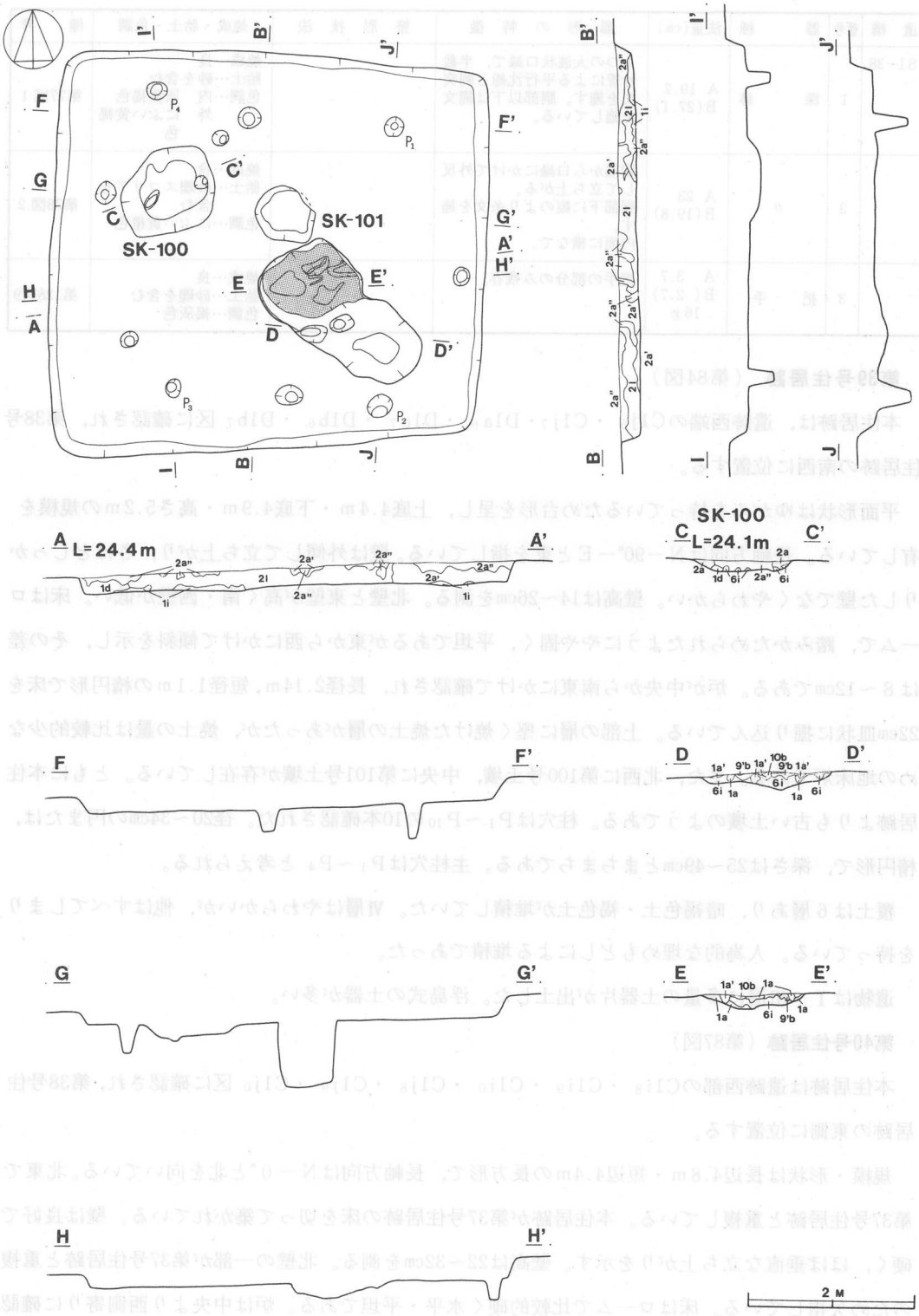
覆土は6層あり，暗褐色土・褐色土が堆積していた。Ⅵ層はやわらかいが，他はすべてしまりを持っている。人為的な埋めもどしによる堆積であった。

遺物はⅠ〜Ⅲ層に多量の土器片が出土した。浮島式の土器が多い。

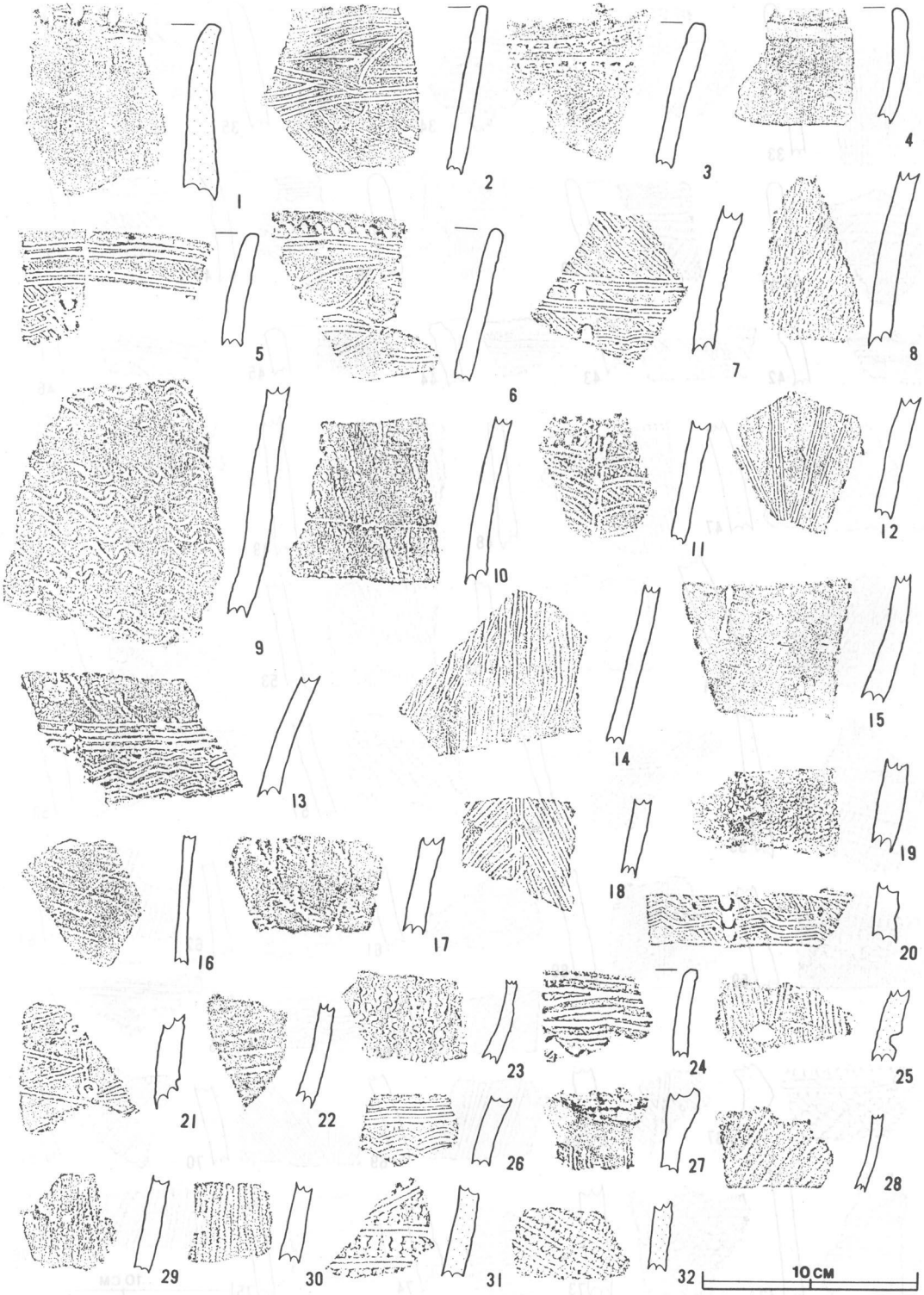
第40号住居跡（第87図）

本住居跡は遺跡西部のC1i$_8$・C1i$_9$・C1i$_0$・C1j$_8$・C1j$_9$・C1j$_0$区に確認され，第38号住居跡の東側に位置する。

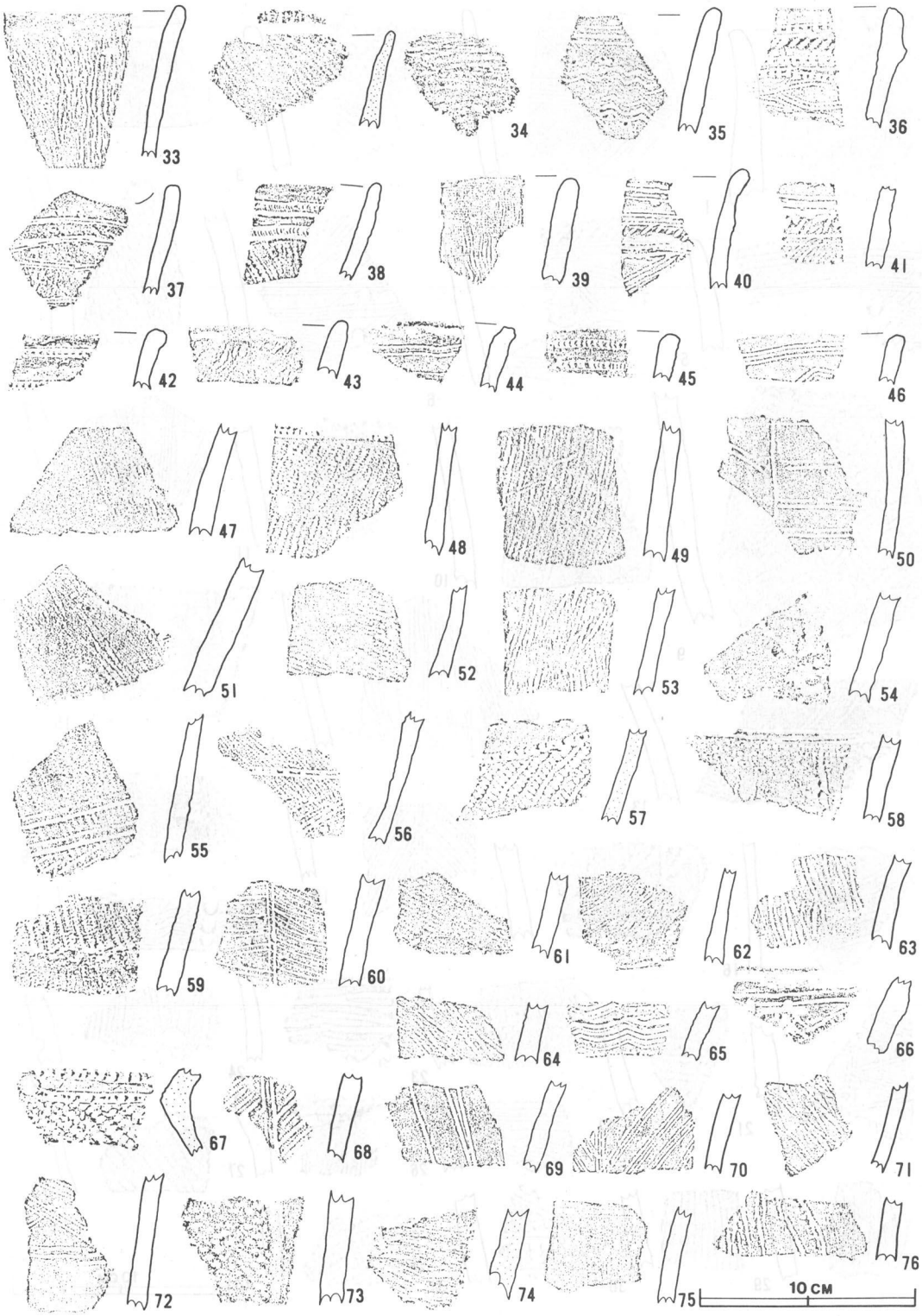
規模・形状は長辺4.8m・短辺4.4mの長方形で，長軸方向はN−0°と北を向いている。北東で第37号住居跡と重複している。本住居跡が第37号住居跡の床を切って築かれている。壁は良好で硬く，ほぼ垂直な立ち上がりを示す。壁高は22〜32cmを測る。北壁の一部が第37号住居跡と重複のため欠損している。床はロームで比較的硬く水平・平坦である。炉は中央より西側寄りに確認され長径144cm・短径70cmの不整楕円形で，床を11cmⅢ状に掘って作られている。また，炉内に小



第84図　第39号住居跡実測図



第85図　第39号住居跡出土遺物拓影図(1)



第86図　第39号住居跡出土遺物拓影図(2)

ピットが５本あり，径16～38cmの円形である。北側に２個(第102･103号土壙)，東側に１個（第104号土壙）が存在し，３個とも本住居跡以前のものと考えられる。柱穴はP_1～P_6の６本検出され，径20～26cm・深さ28～53cmの円形・楕円形を呈している。P_5・P_6はそれぞれ第103・104号土壙の中に作られている。また，東側に第105号土壙が重複している。この土壙は本住居跡の廃絶後に作られたものと判断できる。主柱穴は判別できなかった。

覆土は10層で，暗褐色土・褐色土・明褐色土・赤褐色土が人為的な埋めもどしによる堆積をしている。Ⅰ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅹ層はしまりを持っている。

遺物は全層から多量に出土している。石器では石皿片・磨石が出土した。

出土遺物解説表

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI－40	1	深鉢	A 20.2 B(21.7)	胴部から反りぎみに外反して立ち上がる。 縦のまばらな撚糸文を施す 内面に胴部から底部にかけてヘラけずりをしている。		焼成…良 胎土…砂パミススコリアを含む 色調…内 にぶい橙色 外 褐色	第88図１
	2	〃	A 32.6 B(19.8)	半截竹管による平行沈線，竹管による押形文，縦のまばらな撚糸文を施す。 厚手の土器。口唇部を丁寧なヘラなでを行っている。 内面はヘラなで。		焼成…良 胎土…砂礫を含む 色調…外 灰褐色 内 にぶい褐色	第88図２
	3	〃	B(14.5)	胴部から急角度で外反して立ち上がる。 半截竹管による平行沈線，格子目文。 内面をヘラなでしている。		焼成…良 胎土…砂 色調…内 橙色 外 にぶい橙色	第88図３

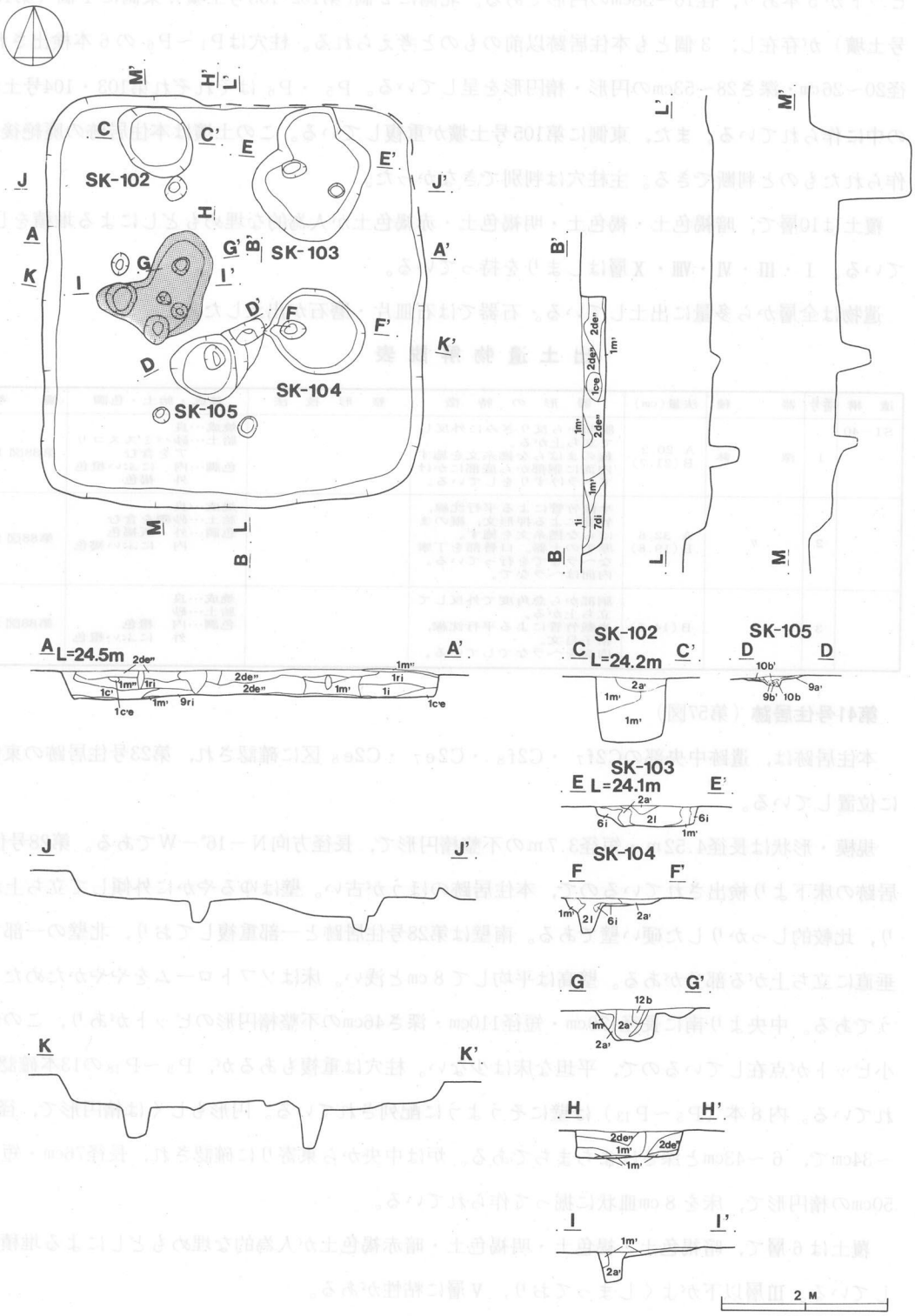
第41号住居跡（第57図）

本住居跡は，遺跡中央部の$C2f_7$・$C2f_8$・$C2e_7$・$C2e_8$区に確認され，第23号住居跡の東側に位置している。

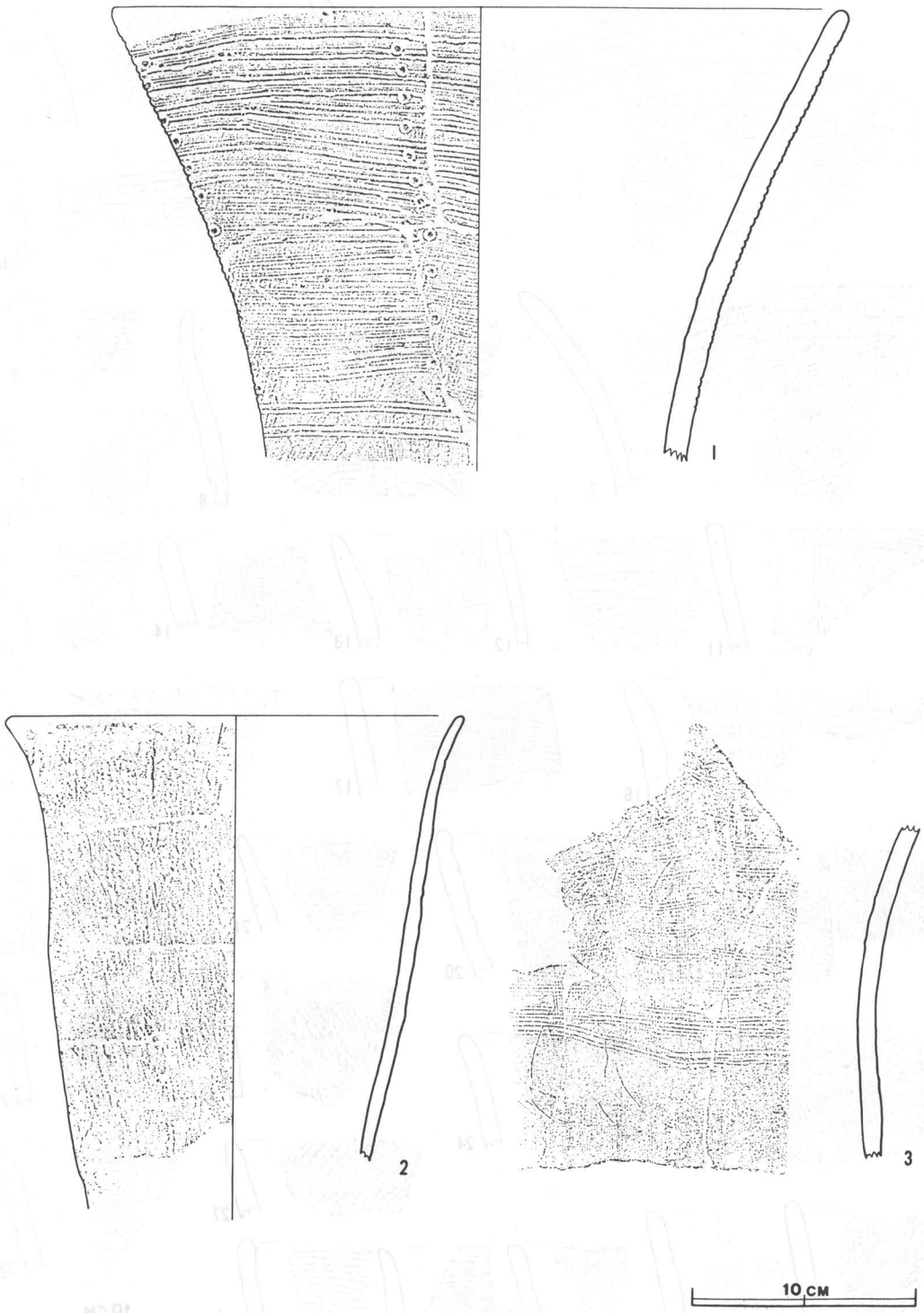
規模・形状は長径4.52ｍ・短径3.7ｍの不整楕円形で，長径方向Ｎ－16°－Ｗである。第28号住居跡の床下より検出されているので，本住居跡のほうが古い。壁はゆるやかに外傾して立ち上がり，比較的しっかりした硬い壁である。南壁は第28号住居跡と一部重複しており，北壁の一部で垂直に立ち上がる部分がある。壁高は平均して８cmと浅い。床はソフトロームをややかためたようである。中央より南に長径170cm・短径110cm・深さ46cmの不整楕円形のピットがあり，この他小ピットが点在しているので，平坦な床は少ない。柱穴は重複もあるが，P_5～P_{18}の13本確認されている。内８本（P_5～P_{13}）は壁にそうように配列されている。円形もしくは楕円形で，径20～34cmで，６～43cmと深さはまちまちである。炉は中央から東寄りに確認され，長径76cm・短径50cmの楕円形で，床を８cm皿状に掘って作られている。

覆土は６層で，暗褐色土・褐色土・明褐色土・暗赤褐色土が人為的な埋めもどしによる堆積をしている。Ⅲ層以下がよくしまっており，Ⅴ層に粘性がある。

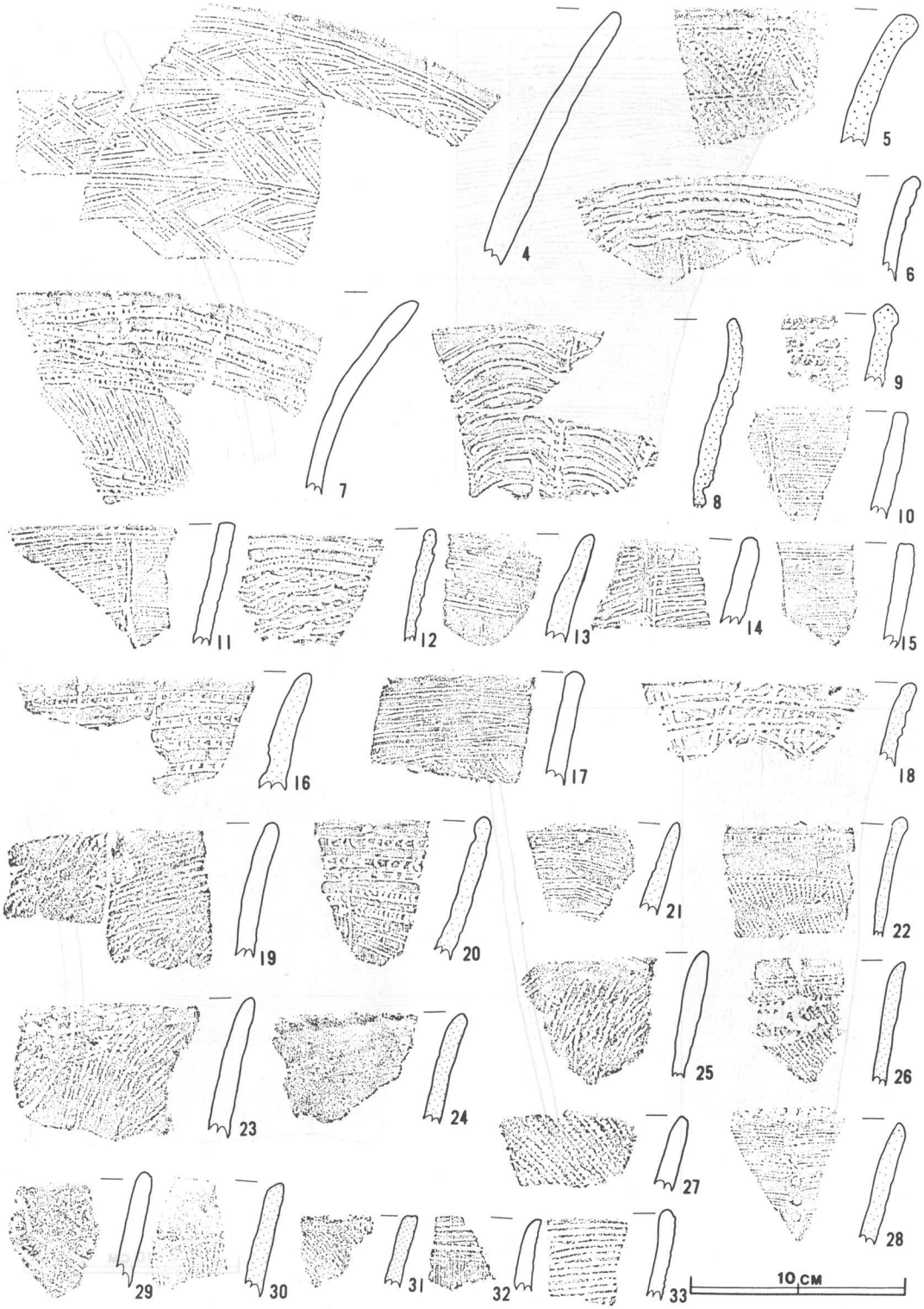
遺物はⅠ・Ⅱ層に出土した。



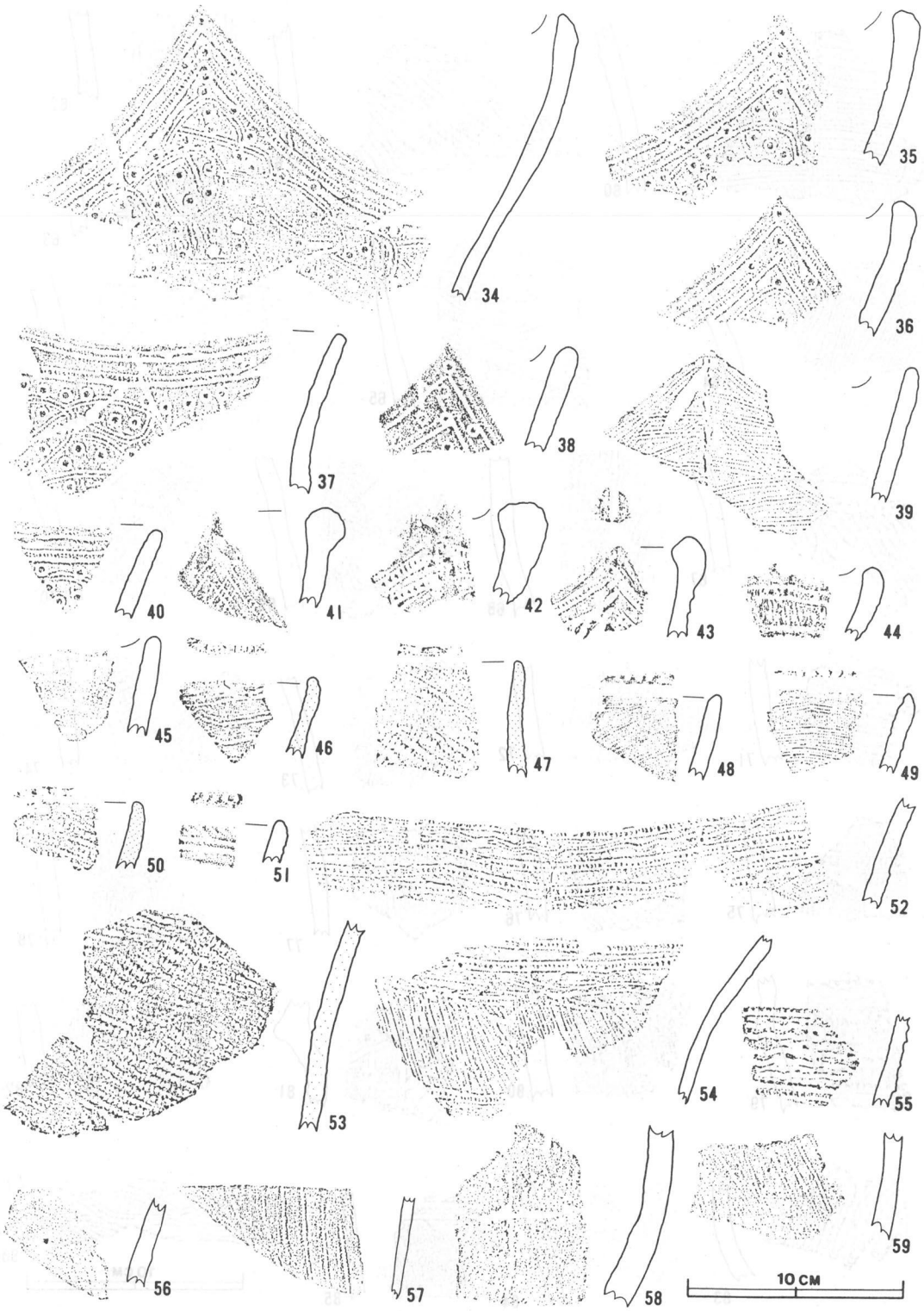
第87図　第40号住居跡実測図



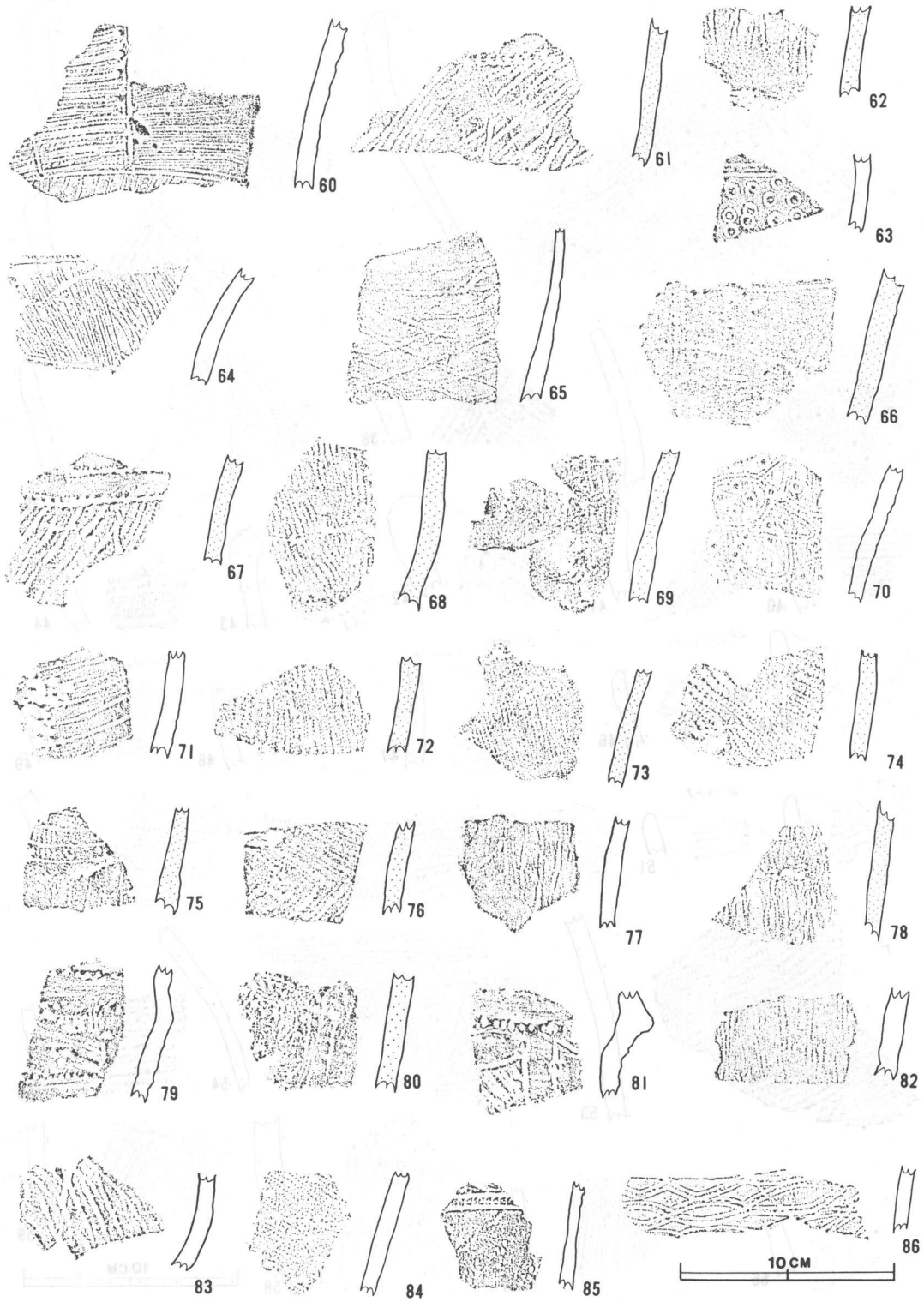
第88図　第40号住居跡出土遺物拓影図(1)



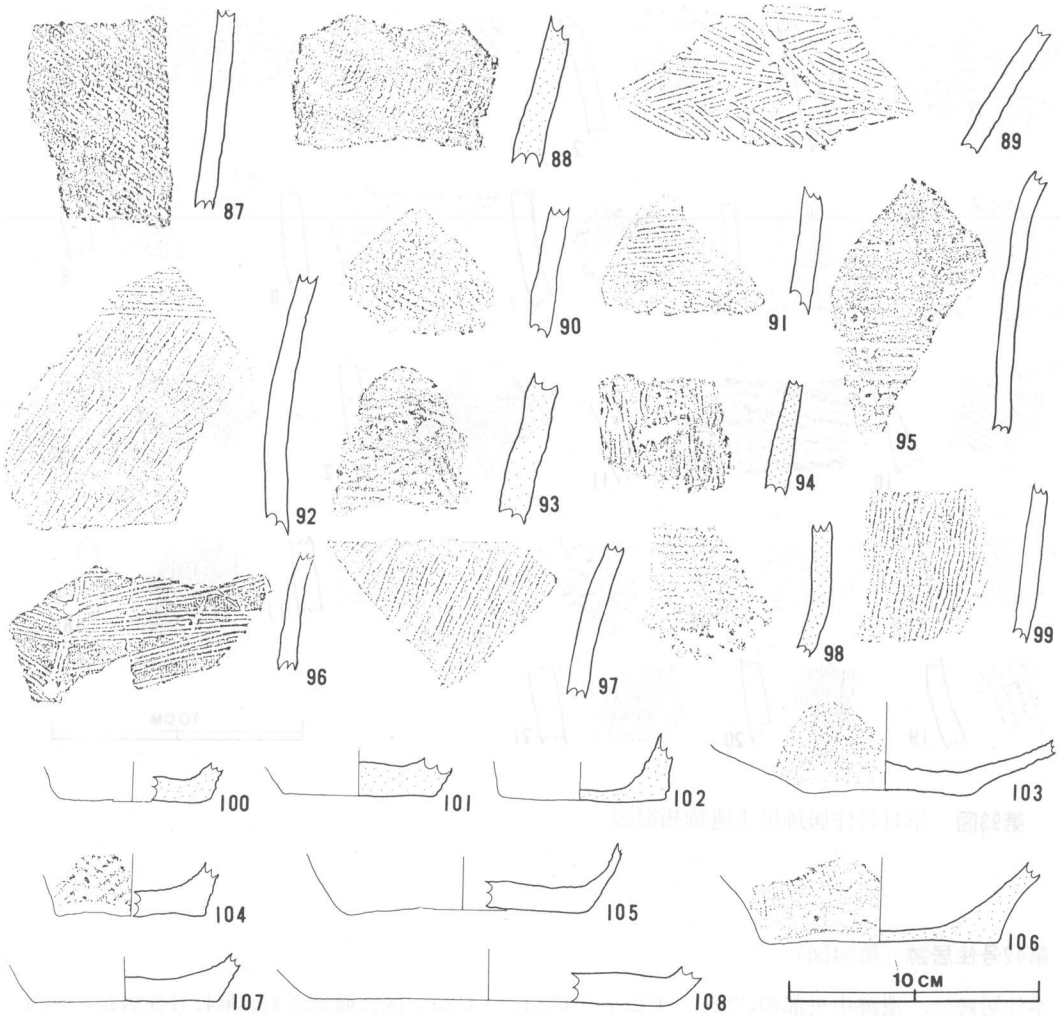
第89図　第40号住居跡出土遺物拓影図(2)



第90図　第40号住居跡出土遺物拓影図(3)



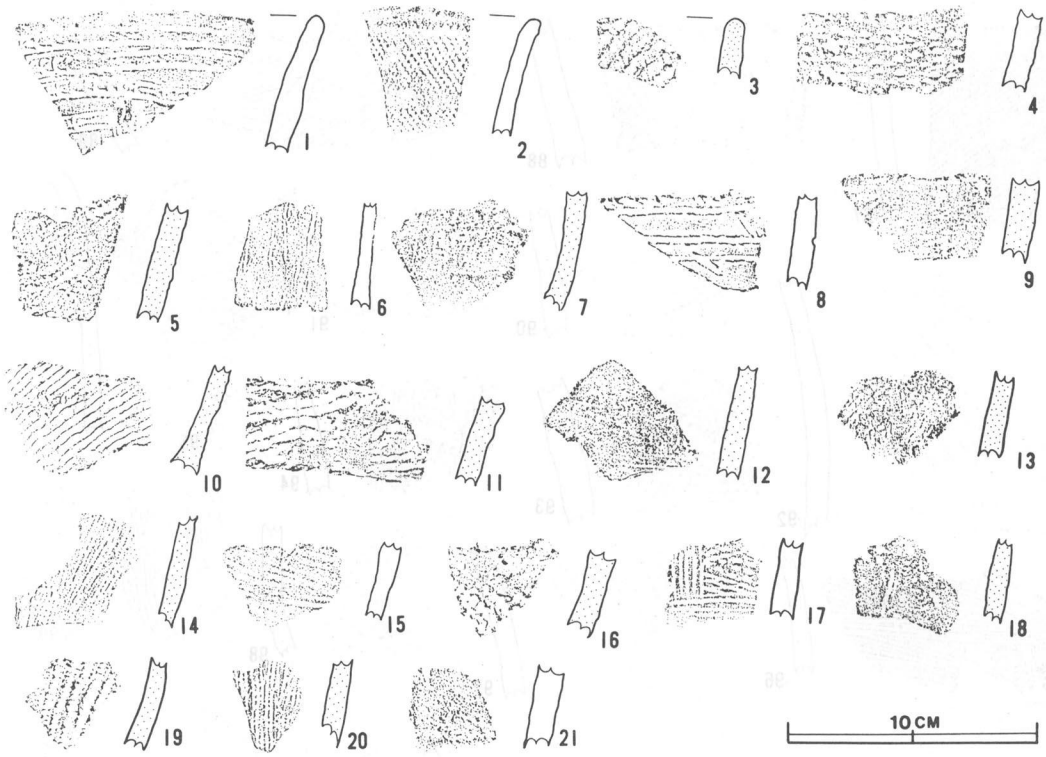
第91図　第40号住居跡出土遺物拓影図(4)



第92図　第40号住居跡出土遺物拓影図(5)

第41号住居跡出土遺物（第93図）

1は竹管による有節平行沈線を付ける。2は斜めの撚糸文，3は荒い縄文で16・19と同類である。4は連続刺突文を多段に付ける。5・11・13は荒い縄文，6はまばらな撚糸文を付ける。7・12・14・15・20は貝殻条痕を付ける。8は横と斜めの箆による沈線を組み合わせている。17は細い縦・横の沈線で区切り，その中に連続刺突文を充塡している。4・9・21は礫を含み,3・5・7・9～14・16・18～20は胎土に繊維を含む。色は1が浅黄橙色，2・19が褐色，3・6・8・10・11・13がにぶい褐色，4・9・12・14・20がにぶい橙色，15・17・21が橙色，16が灰褐色である。



第93図　第41号住居跡出土遺物拓影図

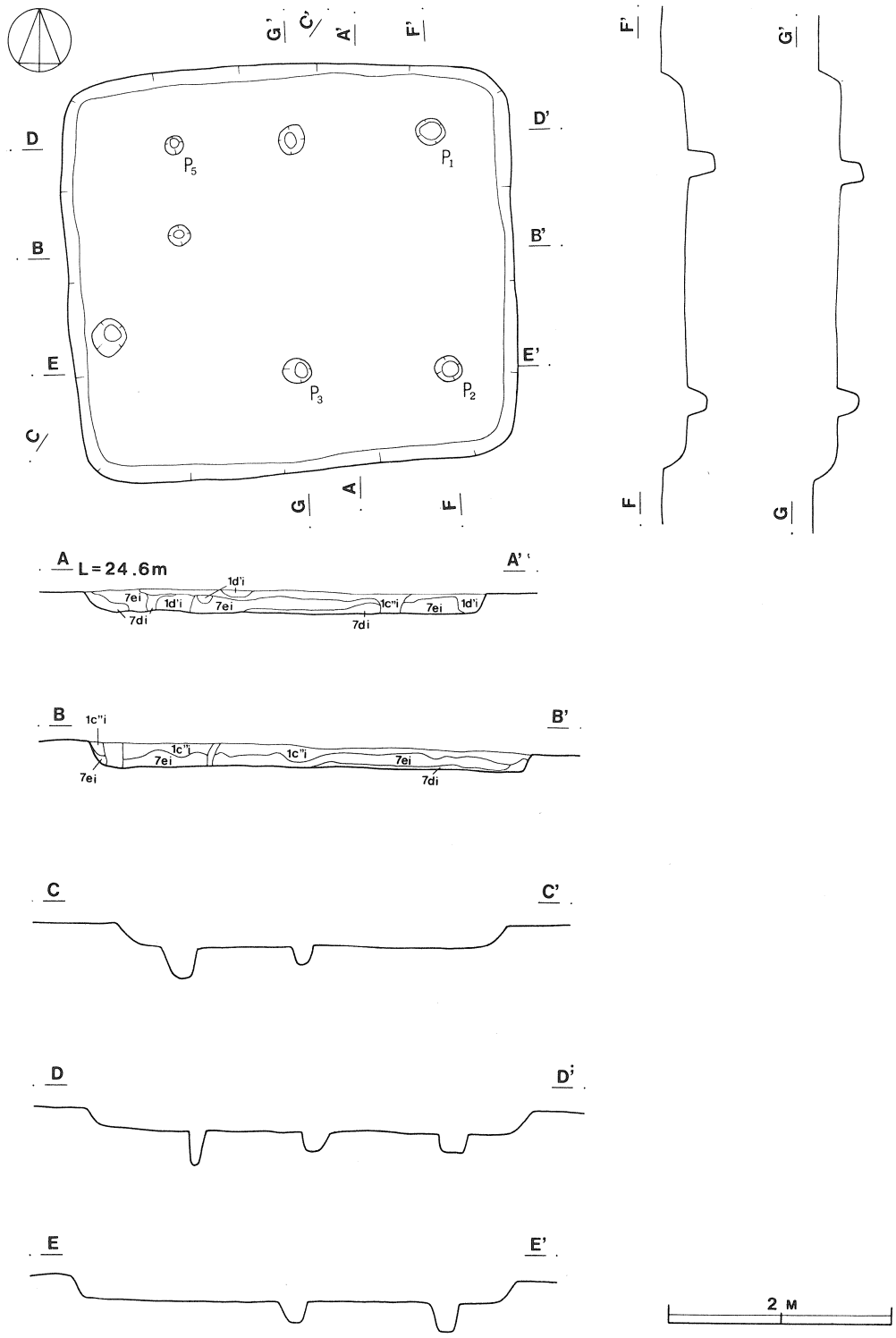
第42号住居跡（第94図）

本住居跡は，遺跡中央部のC2c$_7$・C2c$_8$・C2d$_7$・C2d$_8$区に確認され，第41号住居跡の北側に位置している。

規模・形状は長辺3.9m・短辺3.4mの隅丸長方形で，各辺の中央がやや外に張り出しぎみである。長軸はN－86.5°－Eである。壁は垂直に立ち上がり壁高は20cmと一定しており，しかも比較的浅い住居跡である。壁はさほどしっかりしたものでなく，やわらかい。床もソフトロームで比軽的やわらかく，水平・平坦である。炉・貯蔵穴はない。柱穴はP$_1$～P$_7$の7本確認されたが，内5本（P$_1$～P$_5$）は壁から等距離にあり，しかも整然と並んでいる。この5本が主柱穴と考えられる。柱穴の規模は径16～32cm，深さ18～32cmの円形である。

覆土は4層で，明褐色土・褐色土に分かれる。II層は粘性，III層はしまりがある。人為的な埋めもどしによる堆積を示している。

遺物はII層を中心に少量出土したが，浮島式・諸磯式が多い。中央の床面出土は茅山式の土器である。



第94図　第42号住居跡実測図

第42号住居跡出土遺物（第95図）

２・３・５・７に貝殻条痕文が付いている。６は荒い縄文を施している。２・３・５～８は胎土に繊維を含む。１・２・８が灰褐色，３・４がにぶい橙色，５・６が赤褐色，７がにぶい褐色である。

□□**第95図**　第42号住居跡遺物拓影図

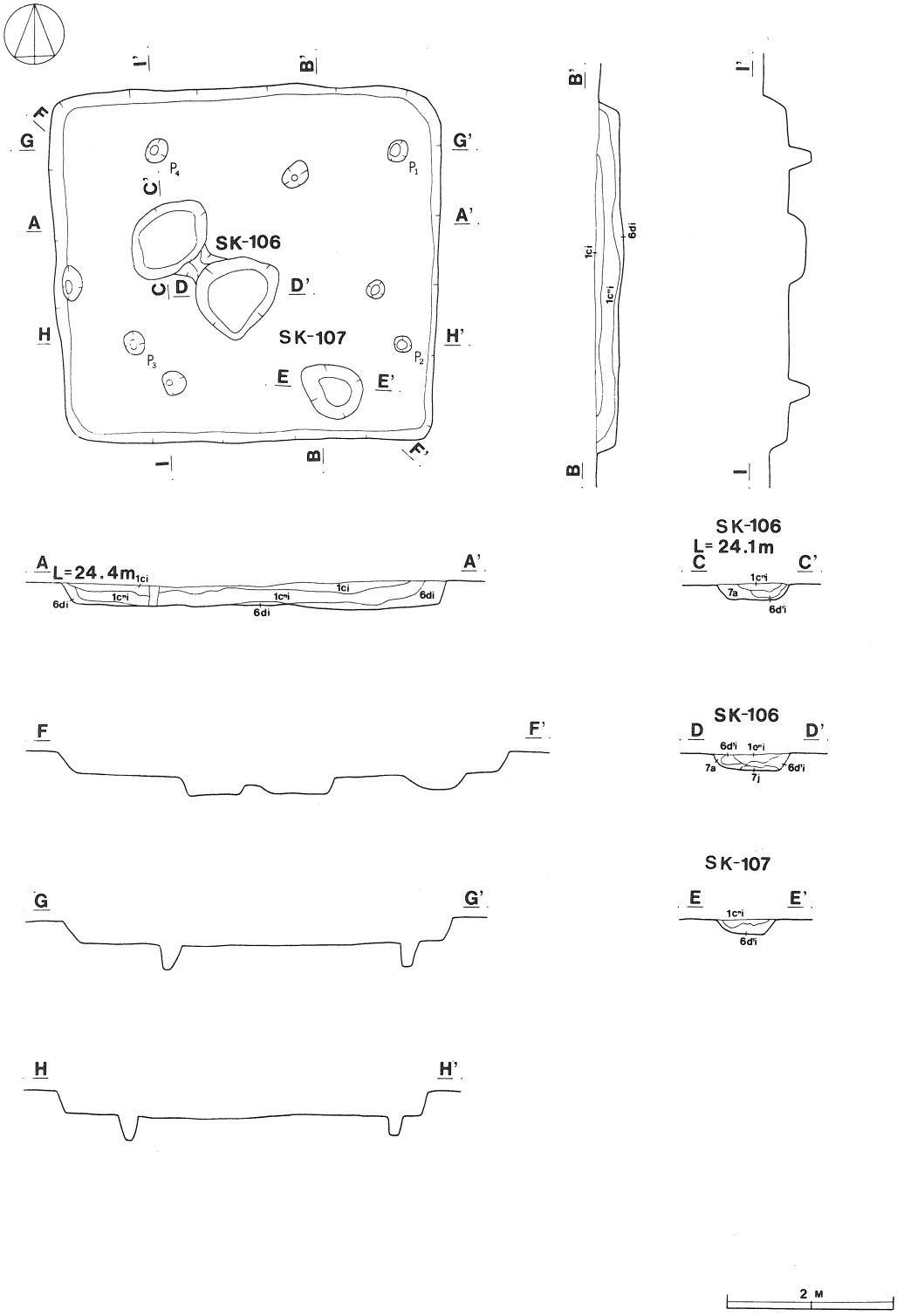
第43号住居跡（第96図）

本住居跡は，遺跡西部のD1a$_8$・D1a$_9$・D1b$_8$・D1b$_9$区に確認され，第39号住居跡の東側に位置している。

規模・形状は一辺が4.4ｍの隅丸方形で，北の一辺が少し長くなって台形に近い形状を呈している。長軸はＮ－０°と北を向いている。壁は比較的良好で硬い。ほぼ垂直な立ち上がりを示し，20～30cmの壁高を持つ。床は平坦なロームだが，比較的硬い。中央が四方より低くなってややくぼみ，その差は５cm程ある。柱穴はP$_1$～P$_8$ の８本確認され，内１本は西壁に付いて検出された。径22～42cm・深さ25～31cmの円形または楕円形である。主柱穴は位置，深さからP$_1$～P$_4$ の４本と考えられる。中央に第106号土壙，南東側に第107号土壙が重複して検出された。両方の土壙とも本住居跡と同時期か，あるいは本住居跡の廃絶直後に築かれたことが，本住居跡の土層などから判断される。本住居跡との関連，あるいは土壙相互の関連は不明である。

覆土は３層あって，すべて褐色土である。Ⅰ・Ⅲ層にしまりを持ち，自然堆積である。

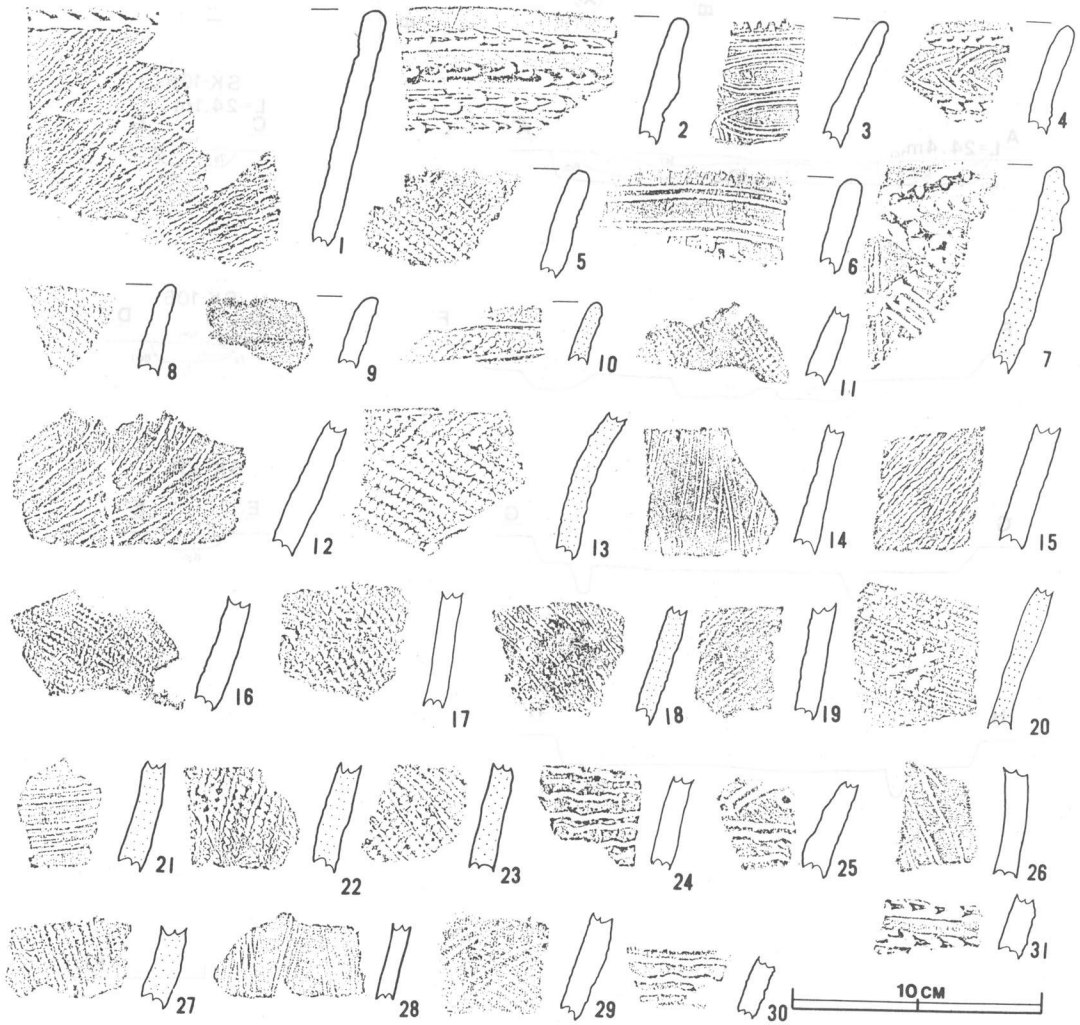
遺物はⅢ層に集中して出土した。浮島式・諸磯式が主である。床面出土は浮島式の土器である。石器では剥片と石皿片が出土した。



第96図　第43号住居跡実測図

第43号住居跡出土遺物（第97図）

1は，撚糸文を地文とし口縁に連続爪形文を付けている。12・15・19も同類である。2・31は連続爪形文のみである。3・4は柳葉文であるが3は口唇に連続押形文，4は口縁に有節沈線文を付けている。5・8・11・17・22・23・27は荒い縄文を付ける。6は竹管による沈線，7は諸磯式にみられる浮線文，10は縄文を地文とし二本の竹管による沈線を付けている。13は結束縄文，14・28は細い沈線を縦に施す。16・18・20・26は撚糸文を付けるが，26はまばらである。21は横の細い沈線，24・30は同類で波線文を付ける。25は撚糸文を地文とし，有節平行沈線，円形竹管文を合わせている。13・18～23・27が胎土に繊維を含む。色は1・6・12・26・29がにぶい黄橙色，2・9・10・18・20・28が灰褐色，3が褐色，4・8・11・12・14・15・24・25・29・31がにぶい褐色，7が赤褐色，16・22・23が褐灰色，17・19・21・27が橙色である。



第97図　第43号住居跡出土遺物拓影図

第44号住居跡（第98図）

本住居跡は，遺跡西部のD1a$_9$・D1a$_0$・D2a$_1$・D1b$_9$・D1b$_0$・D2b$_1$区に確認され，第43号住居跡の東に位置する。

規模・形状は長辺が5.6m・短辺が4.5mの長方形で，南西のコーナーと，北東のコーナーの一部が外に張り出し，ゆがみを持っている。長軸はN－87°－Eである。壁は良好で硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，20～30cmの壁高を持っている。床は平坦でロームだがやや硬い。北から南にかけて傾斜を持ち，傾差は6cm程である。炉・貯蔵穴は検出されなかった。北側に第108号土壙が重複して確認され，本住居跡の廃絶後に築れた土壙であることが，本住居跡の土層のⅠ層から判断できる。また，中央にも第109号土壙が重複している。第109号土壙との新旧関係は不明である。

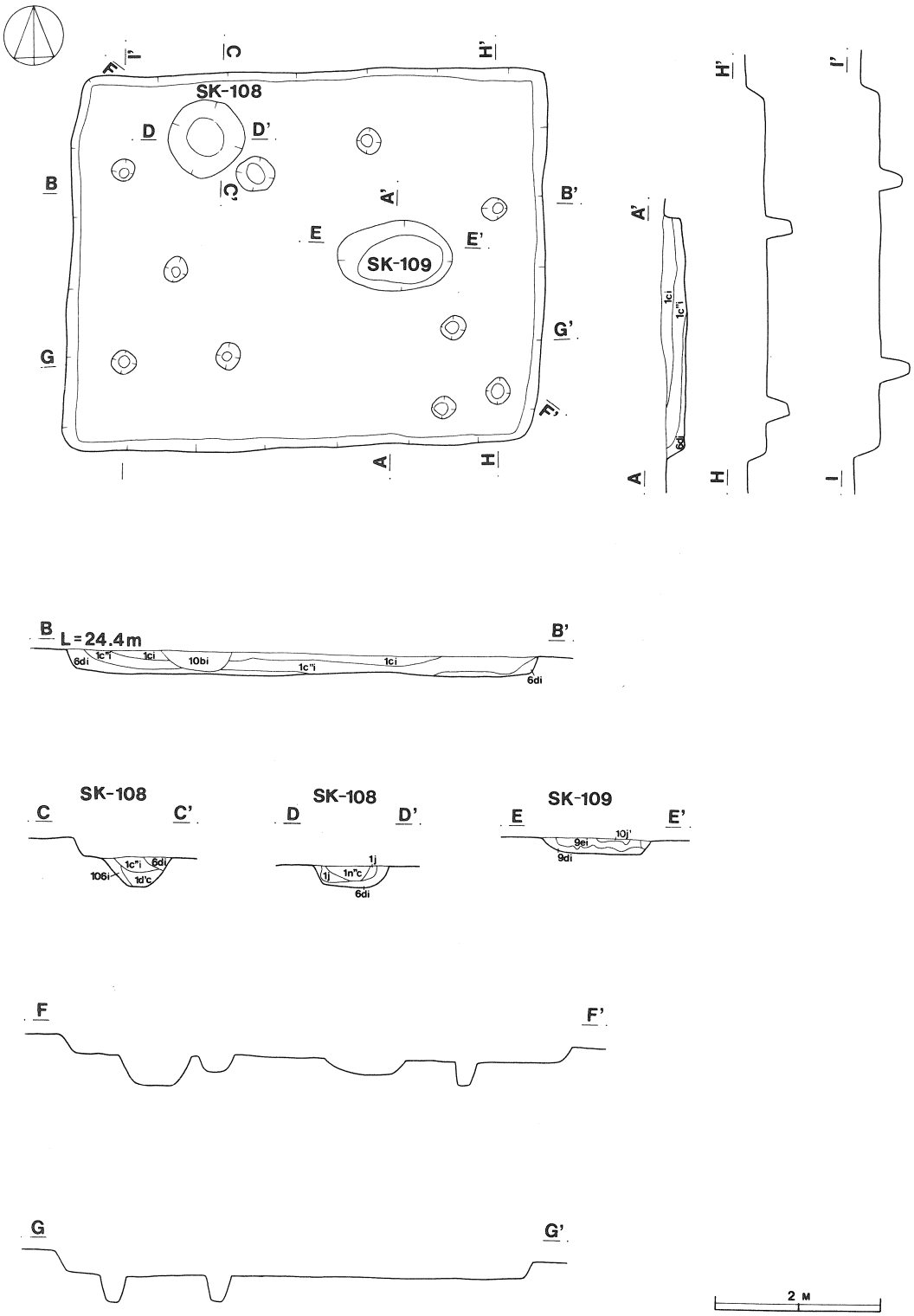
柱穴はP$_1$～P$_{10}$の10本あり，径28～46cmの円形で，深さは18～34cm程である。主柱穴は不明である。

覆土は5層で，にぶい赤褐色土・にぶい褐色土・褐色土に分かれる。第108号土壙の部分も含めて自然堆積である。Ⅰ層に焼土を含み，Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ層にしまりがある。

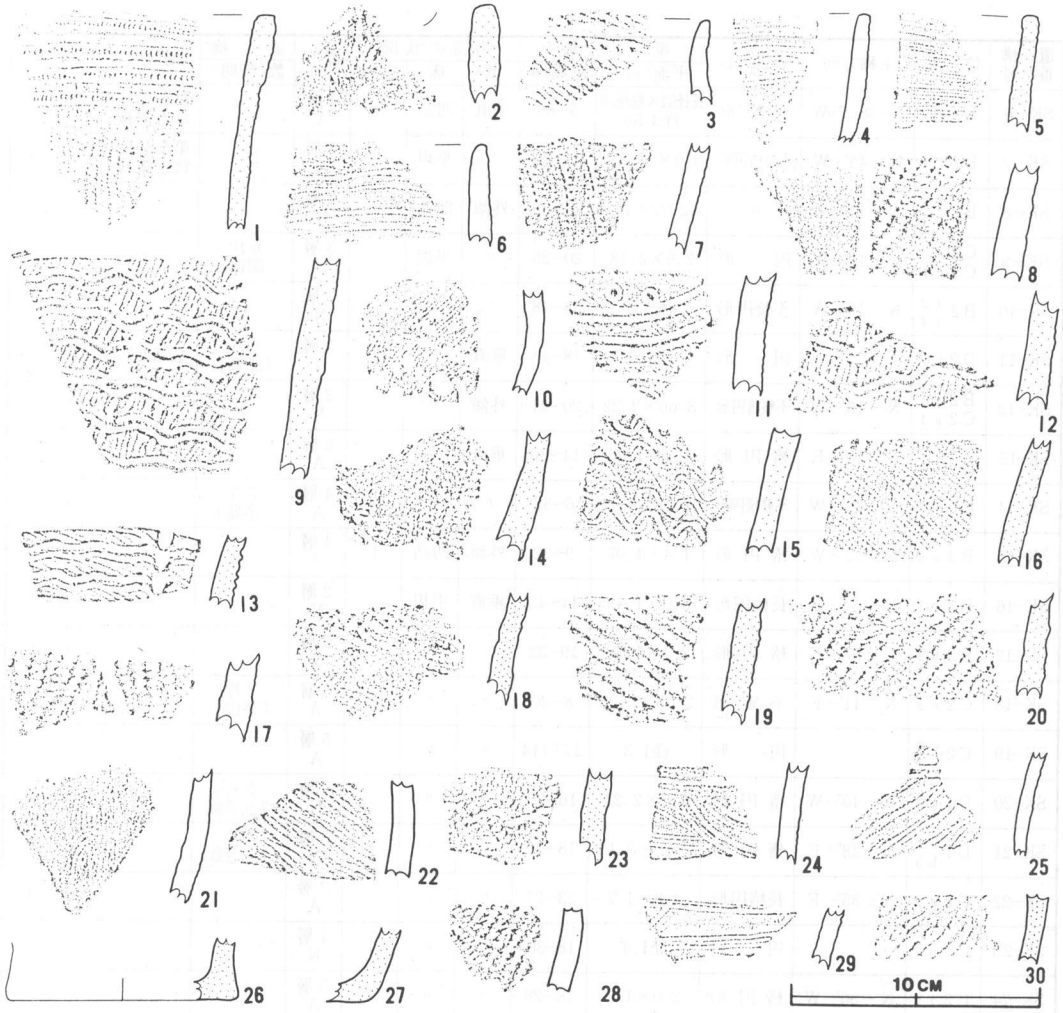
遺物はⅢ層を中心に，しかも北部に集中して出土した。浮島式と諸磯式の半々ぐらいである。床面出土も浮島式の土器である。

第44号住居跡出土遺物（第99図）

1・25は撚糸文を地文として有節沈線を付ける。2は荒い格子目文，3は輪積み痕を指で消し，撚糸文を施す。4・6・24は撚糸文を地文とし沈線を施す。5は横の櫛掻き文，7は波状貝殻腹縁文，8・17は加曽利E式の太い区画文と縄文である。9・12・13・15は同類で撚糸文の地文に波状沈線を施す。9・12は同一個体である。10・16・22・28は撚糸文，11は撚糸文を地文とし，し，円形竹管文，平行沈線文を合わせている。14・18～20・30は荒い縄文を施す。23は綾絡縄文，29は竹管による平行沈線に細いキザミを入れている。2・8・15・17・21に礫を多く含み，1・2・5・9・14～16・18～20・23・26～28・30は繊維を含んでいる。色は1・6・13・15・19・23・26～28がにぶい橙色，2・4・11・17・29がにぶい黄橙色，3・7・16が灰褐色，5・21・24が褐灰色，8・12・14・18・22・25がにぶい褐色，9・10が橙色，20・30が黒褐色である。



第98図　第44号住居跡実測図



第99図　第44号住居跡出土遺物拓影図

3　土壙

当遺跡から検出された土壙は119基であり，遺跡の中央部・西部に集中して確認された。

土　壙　一　覧　表

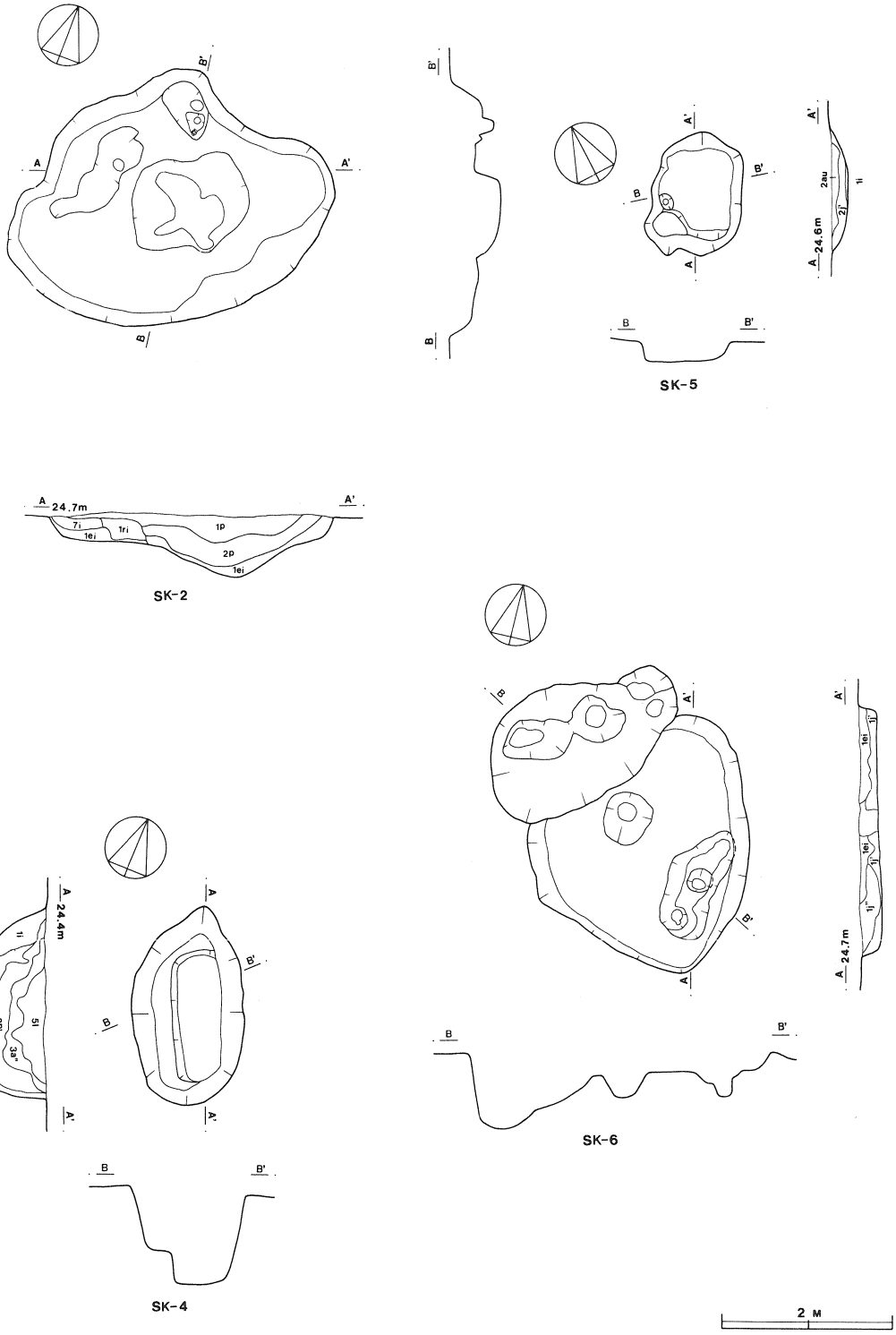
遺構番号	位置	主軸方向	平面形	規模 平面(m)	規模 壁高(cm)	各部の状況 壁	各部の状況 床	各部の状況 ピット数	覆土	遺物 数(時期)	備考	関連図版
SK−1	A2h9 i9	N−14°−W	不整楕円形	長径(辺)×短径(辺) 8.3×(6.0)	21	外傾	平坦			29片 (茅山黒浜)	第2号住居跡と重複	第7図
SK−2	C2b8 c8	N−46.5°−E	〃	3.9×2.9	24〜38	〃	凹凸	3	6層 N			第100図
SK−3	C1a0	N−41°−E	楕円形	3.12×1.48	18〜37	〃	平坦	1	3層 N	5片 (関山)		第101図
SK−4	B3g3	N−40°−W	楕円形	2.32×1.3	70〜100	垂直	〃		5層 N	4片 (田戸下層)		第100図
SK−5	B2d9 d0	N−44°−E	不整形	1.42×1.0	15〜20	〃	〃		3層 N	3片 (黒浜)		〃

遺構番号	位置	主軸方向	平面形	規模 平面(m)	規模 壁高(cm)	各部の状況 壁	各部の状況 床	各部の状況 ピット数	覆土	遺物 数(時期)	備考	関連図版
SK−6	B2e5	N−38.5°−W	不整形	長径(辺)×短径(辺) 径3.56	5~88	垂直	凹凸	3	4層 A	2片	第9号住居跡と重複	第100図
SK−7	B2f4	N−49°−W	不整楕円形	3.0×2.38	15~110	〃	平坦		5層 N	1片	第9号住居跡と重複	第102図
SK−8	B2f6 f7	N−11°−W	〃	2.92×1.92	20~39	外傾	凹凸	1	3層 N			〃
SK−9	C2e0 C3e1	N−12°−W	円形	2.6×2.18	20~25	〃	平坦		3層 N	6片 (関山)		〃
SK−10	B2i2 j2	N−16°−W	不整円形	径2.2	38~48	〃	〃	1	3層 N			〃
SK−11	D2b7		円形	径1.9	18~43	垂直	〃	2	3層 N	6片 (浮島)	袋状ピット	第103図
SK−12	B2j1 C2a1	N−18°−W	不整楕円形	3.66×2.22	20~21	外傾	〃		2層 N			〃
SK−13	A3i5	N−18°−E	楕円形	1.9×1.25	14~30	垂直	〃		2層 A			〃
SK−14	C2j2	N−73°−W	不整楕円形	2.98×1.2	6~33	〃	〃	5	4層 A	7片 (浮島)		第101図
SK−15	B3a6	N−32°−W	楕円形	1.4×1.07	9~22	外傾	凹凸	1	4層 A			第103図
SK−16	B3a5	N−7°−E	長楕円形	3.0×1.49	14~43	垂直	平坦		2層 N			第103図
SK−17	B3b6	N−57°−E	楕円形	2.4×1.38	19~32	〃	〃		2層 N			第104図
SK−18	C2e9	N−41°−E	不定形	2.35×2.28	8~20	〃	〃	3	5層 A	3片 (茅山)		第105図
SK−19	C2c6 c7		円形	径1.3	17~114	〃	〃		5層 A			
SK−20	D1c3	N−40°−W	楕円形	2.7×2.21	16~20	〃	〃		4層 N	5片 (茅山,浮島)		第104図
SK−21	D1b2 b3	N−28°−E	楕円形	2.25×2.13	18~39	〃	〃	1	3層 N	22片 (茅山,浮島)		第103図
SK−22	C2e2	N−35°−E	長楕円形	4.8×1.7	23~27	〃	〃		3層 A			第104図
SK−23	C3h2		円形	径1.4	18~30	〃	〃	1	4層 N			〃
SK−24	C2i0	N−86°−W	楕円形	2.0×1.2	18~28	〃	〃	3	5層 A			〃
SK−25	D2b2	N−81°−E	〃	2.96×1.5	16~28	〃	凹凸	1	6層 A	4片		第106図
SK−26	C2c6 c7	N−87°−W	不定形	2.38×2.1	9~110	〃	平坦		4層 N	6片 (茅山,浮島)		
SK−27	E2b5 c5		円形	径1.2	20~26		〃	1	3層 N			第106図
SK−28	E2g7 h7	N−59°−W	長楕円形	2.56×1.4	11~122	〃	皿状		3層 A			〃
SK−29	C2f2 f3		不整円形	径1.16	17~24	〃	平坦		2層 N			〃
SK−30	C1f0	N−3°−W	楕円形	1.32×0.96	18~22	〃	凹凸	4	2層 N			〃
SK−31	C2f1		不定形	径2.3	20~34	〃	平坦	1	3層 N	1片 (浮島)		第106図
SK−32	C2g2	N−60°−E	楕円形	1.58×1.28	3~24	〃	〃	4	2層 N			〃
SK−33	C2f2	N−33°−W	不整楕円形	2.3×1.64	19~24	〃	〃		2層 N	1片		〃
SK−34	C2g3	N−16°−E	楕円形	2.5×1.56	16~20	〃	〃	2	3層 A	2片 (浮島)		第107図
SK−35	C2h3	N−39°−W	〃	1.4×1.21	50~56	〃	〃		4層 A	1片 (浮島)		〃

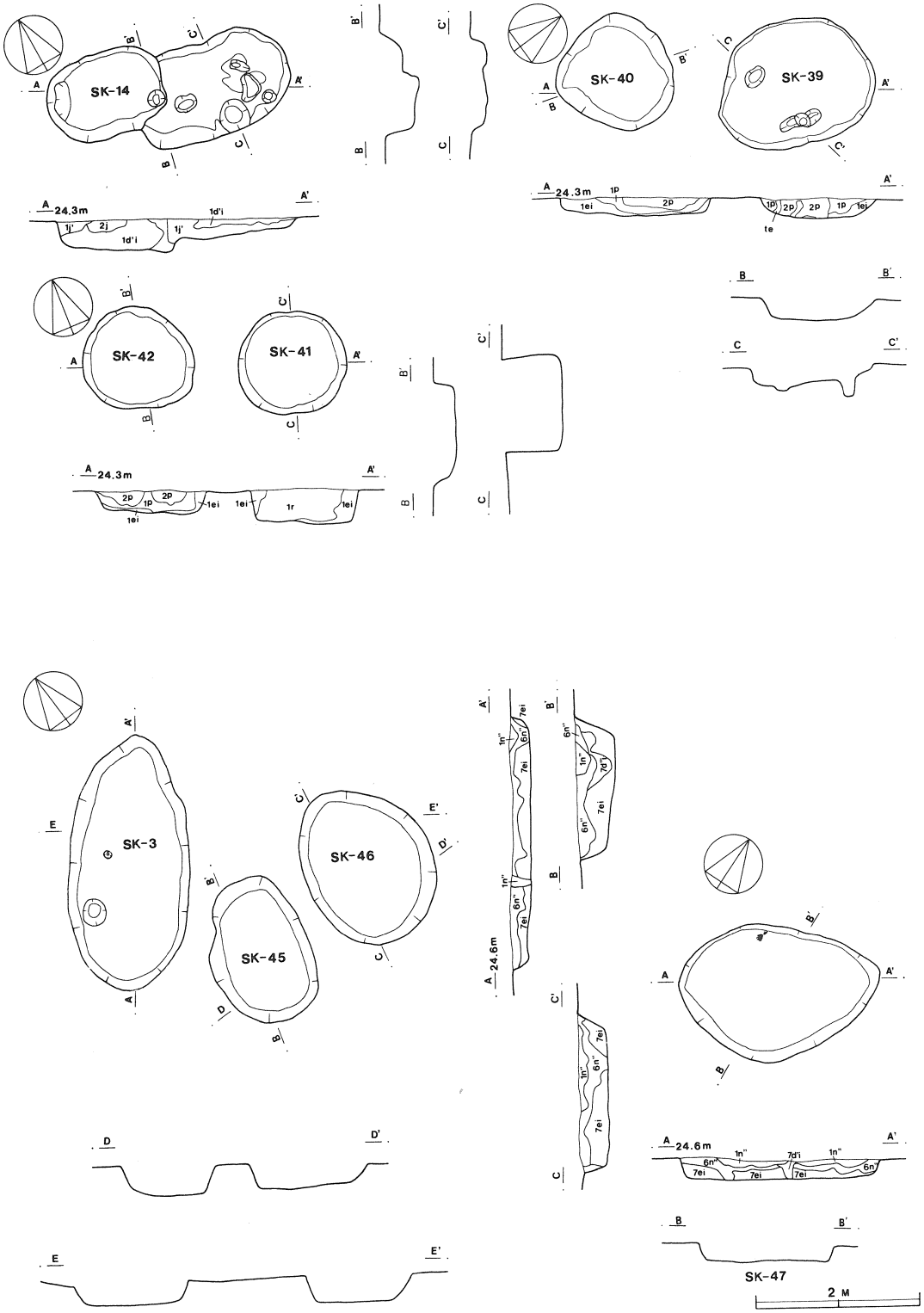
遺構番号	位置	主軸方向	平面形	規模 平面(m)	規模 壁高(cm)	各部の状況 壁	各部の状況 床	各部の状況 ピット数	覆土	遺物 数(時期)	備考	関連図版
SK−36	C2h3		円形	長径(m)×短径(m) 径1.1	32〜45	垂直	凹凸	2	4層 A	1片		第107図
SK−37	C2i4	N−86°−E	不整楕円形	3.1×1.1	17〜92	〃	平坦		5層 A	3片 (浮島)		〃
SK−38	C2i5	N−35°−E	〃	2.32×2.02	8〜40	〃	〃	1	4層 N	4片 (浮島, 茅山)		〃
SK−39	C2j4	N−20°−E	楕円形	2.0×1.51	9〜15	〃	凹凸	2	3層 N			第101図
SK−40	C2j4		不整円形	1.44×1.41	14〜22	外傾	平坦		4層 A	2片 (浮島)		〃
SK−41	C2j3		円形	径1.3	37〜41	垂直	〃		2層 A	5片 (浮島)		〃
SK−42	C2j3		〃	径1.4	20〜24	〃	〃		3層 A	7片 (浮島, 黒浜)		〃
SK−43	D1a1	N−30.5°−E	長楕円形	3.26×1.44	9〜68	〃	〃	3	5層 N	2片 (浮島)		第107図
SK−44	C1j1	N−72°−W	楕円形	2.52×2.1	20〜32	外傾	〃	1	4層 N	6片 (浮島)		〃
SK−45	C1b0 C2b1	N−20.5°−E	〃	1.78×1.32	29〜47	垂直	〃		4層 N			第101図
SK−46	C1b0	N−5°−E	〃	2.0×1.58	22〜34	〃	〃		3層 N			〃
SK−47	C2b2	N−52°−E	〃	2.48×1.68	18〜20	〃	凹凸		4層 A			〃
SK−48	C2d1	N−84°−E	〃	3.58×1.7	3〜38	〃	〃	3	6層 A	3片	西側に炉を持つ 第29号住居跡と重複	第108図
SK−49	C2d3 d4	N−58°−W	〃	2.7×1.6	21〜25	〃	平坦		4層 A			〃
SK−50	C2a3	N−59°−E	〃	3.46×1.82	16〜28	外傾	凹凸	4	2層 N	1片 (田戸下層)		〃
SK−51	C2a4	N−7°−E	〃	2.72×1.08	9〜18	〃	平坦	2	2層	1片 (茅山)		〃
SK−52	C2a4 a5	N−72°−W	〃	2.76×1.78	17〜23	〃	〃	2	3層 A			〃
SK−53	E2a5	N−4°−E	〃	1.42×1.1	17〜21	〃	〃	1	3層 N	1片		第109図
SK−54	D2j6	N−90°−E	〃	1.26×0.82	15〜22	垂直	皿状	1	3層 N			〃
SK−55	E2a6	N−8°−E	不整方形	1.82×1.34	14〜28	〃	平坦		4層 A	4片		〃
SK−56	C2c9	N−17°−W	不定形	3.3×2.55	11〜20	〃	〃	5	3層 A	1片		第105図
SK−57	C2d9 d0	N−47°−W	長楕円形	4.1×1.1	14〜42	〃	凹凸	6	3層 A	1片		〃
SK−58	D2h5 i5		円形	径1.34	19〜62	〃	平坦	1	5層 A	3片 (黒浜)		第108図
SK−59	C2e9 e0	N−42°−E	長楕円形	2.77×1.18	18〜26	〃	〃		3層 A			第105図
SK−60	D2b4		円形	径2.6	10〜14	〃	〃		4層 A			第109図
SK−61	D2b5		不整円形	3.52×3.2	8〜16	〃	〃	1	3層 A	33片 (茅山, 浮島)	底面より浮島式土器片出土	〃
SK−62	D2b7	N−17°−E	楕円形	1.82×1.22	17〜23	外傾	皿状	3	6層 A	2片		〃
SK−63	C2h2	N−66°−W	〃	1.04×0.74	34〜36	垂直	〃		6層 A	1片 (浮島)		〃
SK−64	E2e7 e8	N−58°−W	〃	2.1×1.5	34〜122	〃	平坦		4層 N	4片 (浮島)		〃
SK−65	D2d4	N−33°−W	〃	2.76×2.24	12〜128	〃	〃	1	5層 N	16片 (浮島, 関山)	第5号方形周溝遺構内底面より浮島式土器出土	第105図

遺構番号	位置	主軸方向	平面図	規模 平面(m)	規模 壁高(cm)	各部の状況 壁	各部の状況 床	各部の状況 ピット数	覆土	遺物 数(時期)	備考	関連図版
SK−66	C2f5	N−3°−E	楕円形	長径(m)×短径(m) 2.3×1.42	18〜20	垂直	平坦		3層 N	2片		第110図
SK−67	C2f5	N−6°−E	〃	1.1×0.96	16〜30	〃	〃	1	3層 A			〃
SK−68	C2 e6 f6	N−88°−W	〃	2.54×1.9	18〜20	〃	〃	1	3層 N	5片 (浮島,茅山)	底面より浮島式土器出土	〃
SK−69	E1a0		円形	径1.0	40〜41	〃	凹凸	1	5層 A			〃
SK−70	E1a0	N−84°−E	〃	1.0×0.8	21〜26	〃	平坦	1	3層 N			〃
SK−71	D2a1	N−3°−W	不整楕円形	2.38×1.48	22〜58	〃	皿状	1	5層 A	8片 (浮島)		〃
SK−72	D2a1	N−34.5°−E	不定形	3.64×2.42	8〜67	外傾	〃	1		9片 (浮島,黒浜)		〃
SK−73	E2 e4 f4	N−18°−W	楕円形	1.78×1.44	36〜98	垂直	平坦		10層 N			〃
SK−74	D2a7		円形	径1.4	18〜19	外傾	〃	2	4層 A			第108図
SK−75	B2 f7 f8		不整楕円形	1.66×1.06	20〜30	ゆるやかに立ち上がる	皿状		4層 A		第7号住居跡内	第14図
SK−76	B2 f5 g2	N−3°−W	三ヶ月形	1.38×0.68	30〜50	垂直	平坦				第8号住居跡内	第15図
SK−77	B2 e5 f5	N−17°−E	楕円形	1.24×0.84	14	外傾	〃		2層 N		第9号住居跡内	〃
SK−78	B2 f4 f5		不整円形	径0.8	10〜14	〃	〃				〃	〃
SK−79	D2d3	N−83°−W	楕円形	1.1×1.0	16〜24	垂直	凹凸	2	3層 A		第11号住居跡内	第18図
SK−80	D2 d2 d3		円形	径0.8	42〜46	〃	平坦		3層 N		〃	〃
SK−81	B2 c9 d9	N−22°−W	楕円形	0.82×0.66	12	〃	〃	1			第12号住居跡内	第21図
SK−82	D1 c0 d0		不整円形	径3.2	18〜26	外傾	〃	1	4層 N		第17号住居跡内	第26図
SK−83	D1c0	N−66°−W	楕円形	1.0×0.82	6〜10	ゆるやかに立ち上がる	皿状				〃	〃
SK−84	D1f8	N−66.5°−E	〃	1.04×0.64	24	垂直	平坦	3	4層 N		第19号住居跡内	第31図
SK−85	C2i1	N−77.5°−E	不整楕円形	2.42×1.7	11〜22	外傾	凹凸	4	11層 A		第21号住居跡内	第36図
SK−86	C1j0 C2j1		円形	径1.04	60〜64	垂直	平坦		3層 N		〃	〃
SK−87	C2d5	N−10°−E	不整円形	径1.64	18〜34	外傾	〃	1	3層 A		第22号住居跡内	第37図
SK−88	D2 c9 d9		円形	径1.1	47〜52	垂直	〃				第24号住居跡内	第46図
SK−89	D2 d8 d9	N−33.5°−E	不整楕円形	1.42×0.74	20〜36	ゆるやかに立ち上がる	凹凸	3			〃	〃
SK−90	C1 e9・e0 f9・f0	N−15.5°−E	楕円形	1.98×1.14	48	外傾	皿状		4層 N		第30号住居跡内	第61図
SK−91	C1 c0 d0	N−65.5°−W	不整楕円形	1.88×1.38	51〜54	〃	平坦		4層 N		第31号住居跡内	第64図
SK−92	C1c0	N−16°−W	楕円形	1.2×0.9	58〜60	〃	〃				〃	〃
SK−93	C1d0	N−9°−W	不整楕円形	0.94×0.8	20〜26	垂直	皿状		2層 A		〃	〃
SK−94	C2c1		不整円形	径0.84	12〜26	外傾	平坦		4層 N		第32号住居跡内	第65図
SK−95	C1i7	N−67°−E	不整楕円形	1.36×1.16	15〜42	垂直	〃		4層 A		第38号住居跡内	第76図

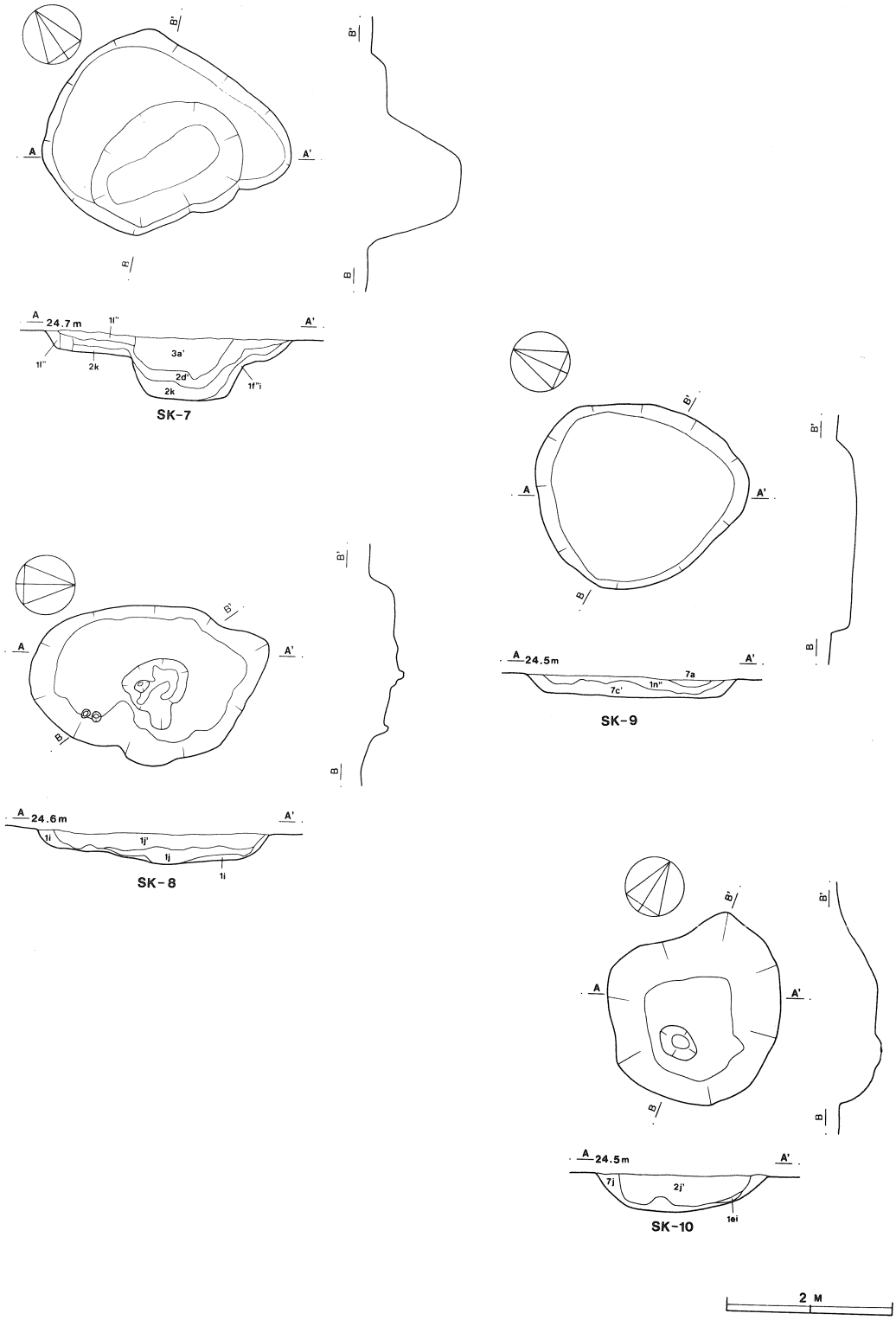
遺構番号	位置	主軸方向	平面図	規模 平面(m)	規模 壁高(cm)	各部の状況 壁	各部の状況 床	各部の状況 ピット数	覆土	遺物 数(時期)	備考	関連図版
SK−96	C1 i 8	N−28.5°−W	楕円形	1.08×0.98	39〜43	垂直	皿状		3層 N		第38号住居跡内	第76図
SK−97	C1 i 7 j 7	N−0°	〃	1.2×1.0	12〜16	外傾	〃	1			〃	〃
SK−98	C1 i 7 j 7	N−45°−E	〃	0.72×0.6	27〜39	垂直	〃				〃	〃
SK−99	C1 j 7	N−5.5°−W	不整楕円形	0.82×0.72	13〜19	〃	〃				〃	〃
SK−100	D1 a 6 a 7	N−32°−E	不整円形	1.28×1.04	10〜14	ゆるやかに立ち上がる	平坦	2			第39号住居跡内	第84図
SK−101	D1 a 7	N−34°−W	〃	0.78×0.6	76	垂直	〃				〃	〃
SK−102	C1 i 9	N−41°−W	楕円形	1.0×0.8	88〜92	〃	〃		3層 N		第40号住居跡内	第87図
SK−103	C1 i 9 j 9	N−0°	不整楕円形	1.6×1.3	20〜30	外傾	〃	2	5層 A		〃	〃
SK−104	C1 j 9	N−85°−W	楕円形	1.24×1.0	6〜8	ゆるやかに立ち上がる	凹凸	1	4層 A		第40号住居跡内	〃
SK−105	C1 j 9	N−44.5°−E	不整楕円形	1.24×0.82	6〜42	垂直	平坦	2			〃	〃
SK−106	D1 a 8	N−55°−W	双円形	1.9×1.12	19〜22	〃	〃		4層 A		第43号住居跡内	第96図
SK−107	D1 a 9 b 9	N−57°−W	楕円形	0.8×0.64	22	外傾	〃		2層 N		〃	〃
SK−108	D1 a 9 a 0		円形	径0.9	32	〃	〃		3層 N		第44号住居跡内	第98図
SK−109	D1 a 0	N−98°−W	楕円形	1.4×0.86	15〜24	垂直	〃		3層 N		〃	〃
SK−110	C1 g7・g8 h8・h9	N−42°−W	不整ひし形	6.0×3.26	32〜51	〃	〃	9	4層 A		第4号方形周溝遺構内	第121図
SK−111	C1 f 7	N−31.5°−E	楕円形	0.6×0.5	14〜24	〃	〃	6			〃 溝内	〃
SK−112	C1 g9・g0 h9・h0	N−25°−W	双円形	1.62×0.9	180	〃	〃		7層 N		〃 溝内	〃
SK−113	C1 h 8 i 8	N−86.5°−W	不整楕円形	1.3×1.14	82〜88	外傾	〃		7層 A		〃 溝内	〃
SK−114	D2 d7・e7・e8・f7・f8	N−37°−W	〃	6.24×2.6	16〜91	垂直	凹凸	6	5層 A		第5方形周溝遺構内	第122図
SK−115	D2 d 5 d 6	N−33°−W	〃	1.38×1.2	40	〃	平坦				〃 溝内	〃
SK−116	D2 e 7	N−10°−E	楕円形	1.08×0.84	40〜48	〃	〃				〃 溝内	〃
SK−117	D2 e 7	N−16°−W	〃	1.2×0.72	34〜70	袋状	〃				〃 溝内 袋状土壙	〃
SK−118	D2 f 7	N−71°−E	〃	1.32×1.0	16〜44	垂直	〃				〃 溝内	〃
SK−119	D2 g 5 g 6		円形	径1.02	30〜34	ゆるやかな立ち上がり	〃				〃 溝内	〃



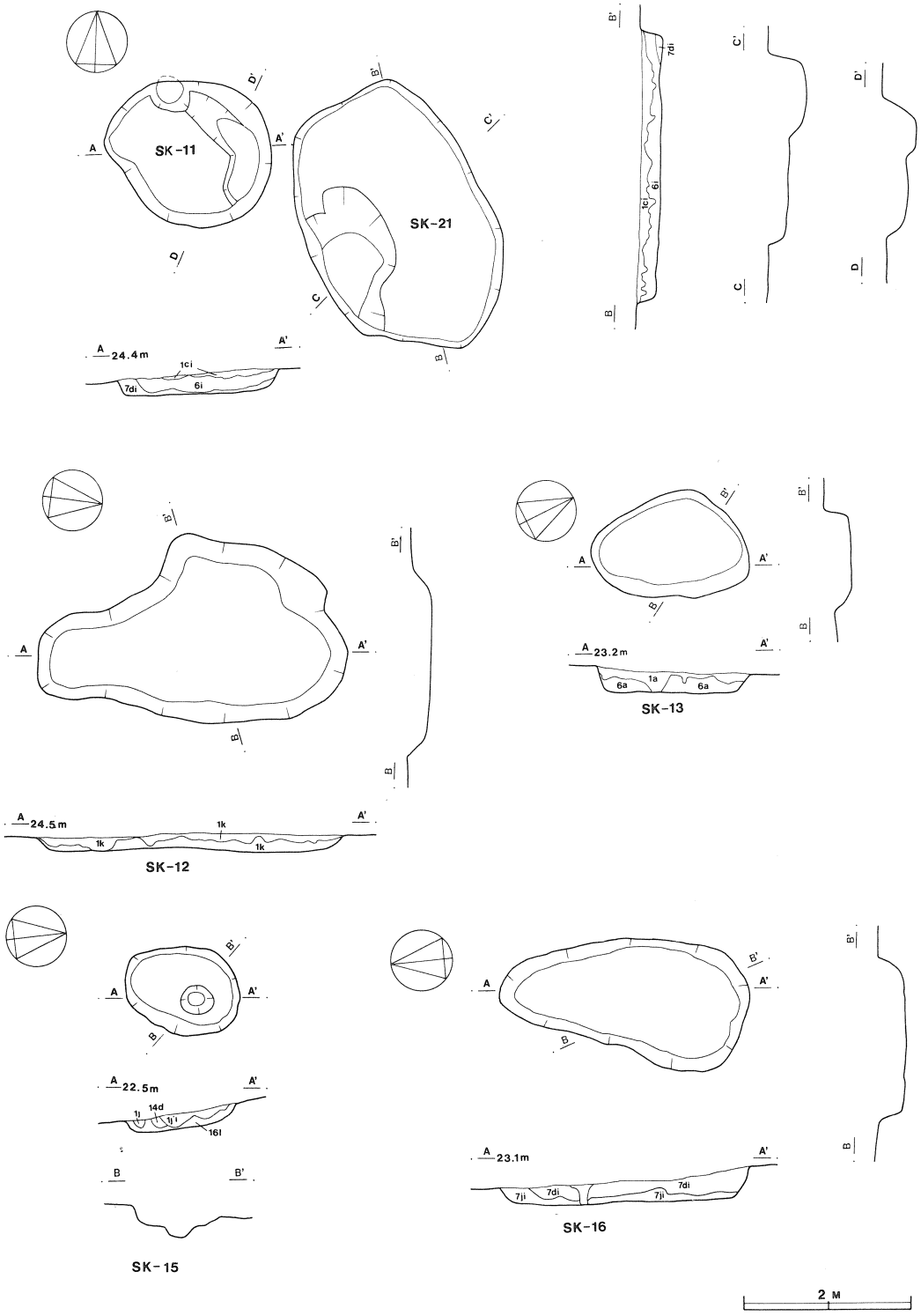
第100図　第２．４～６土壙実測図



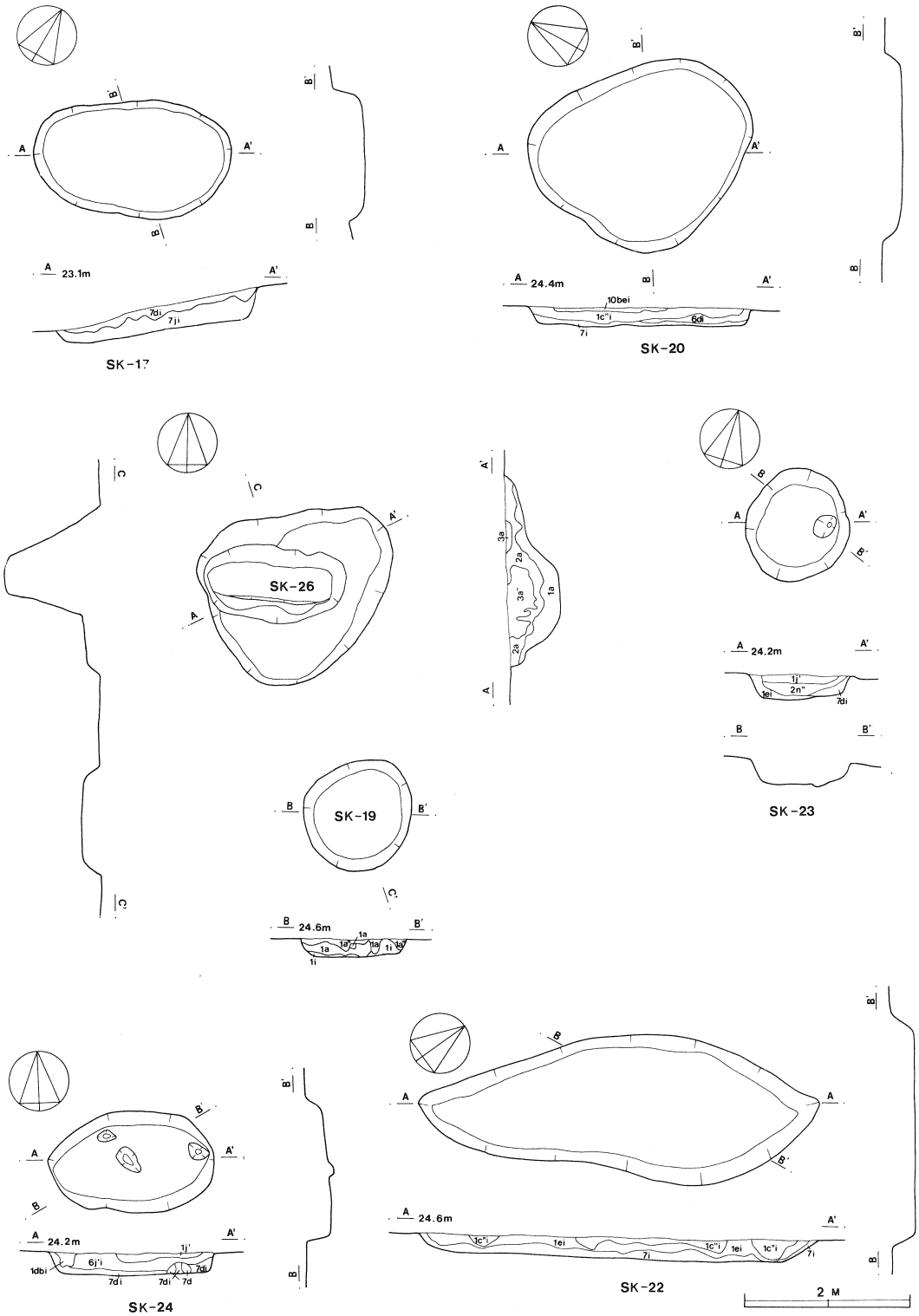
第101図　第3.14.39～42.45～47号土壙実測図



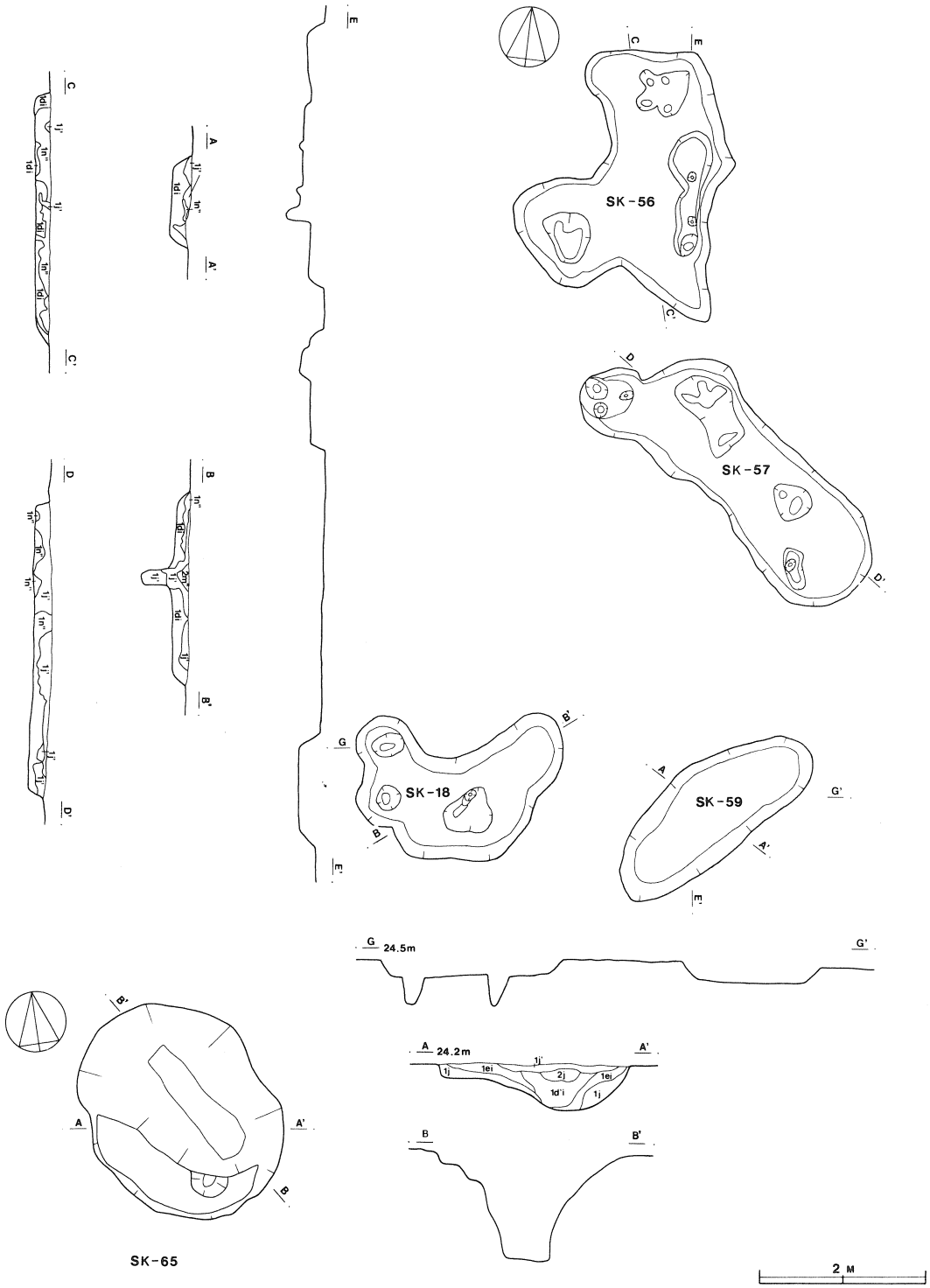
第102図　第７～10号土壙実測図



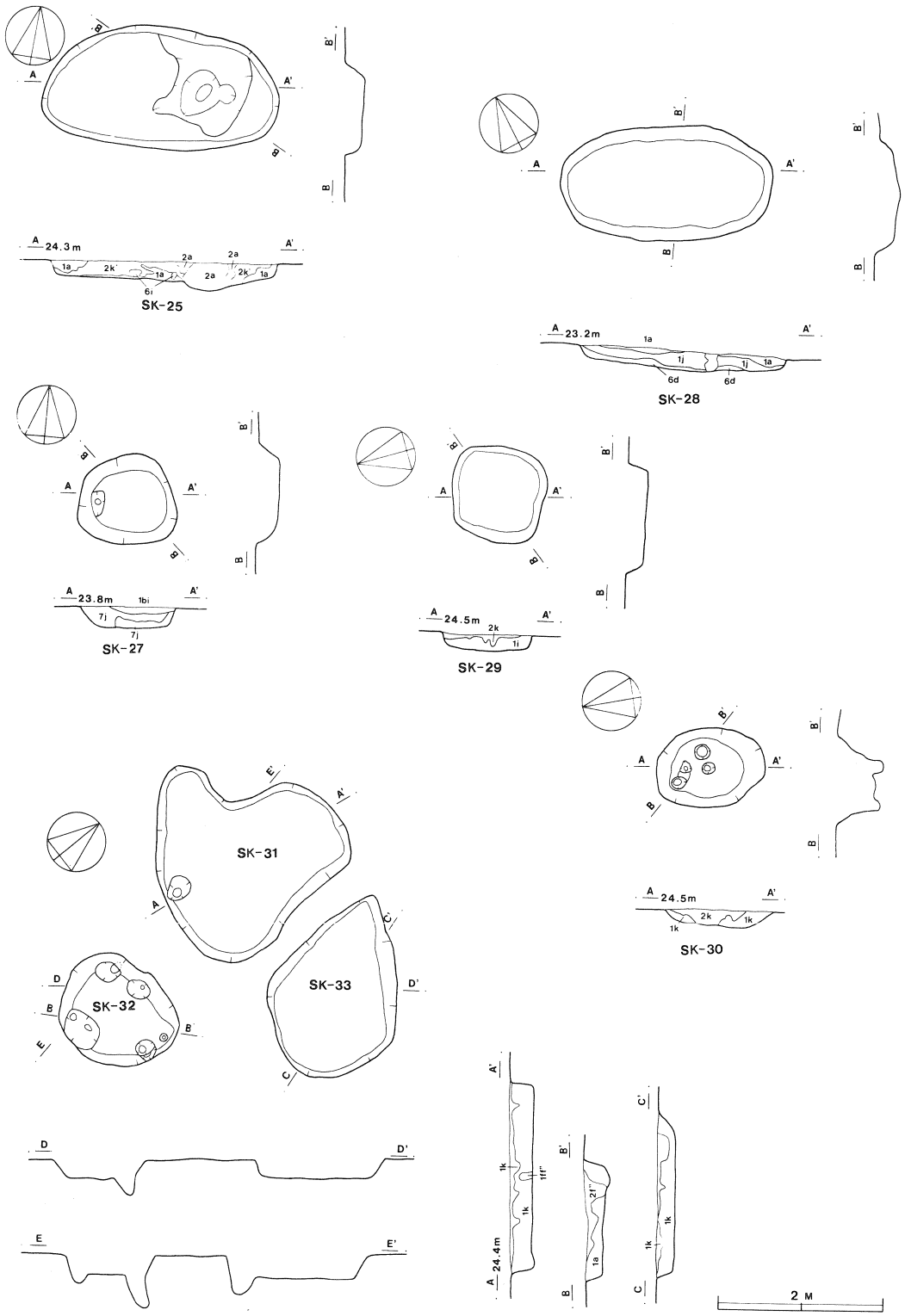
第103図　第11～13. 15. 16. 21号土壙実測図



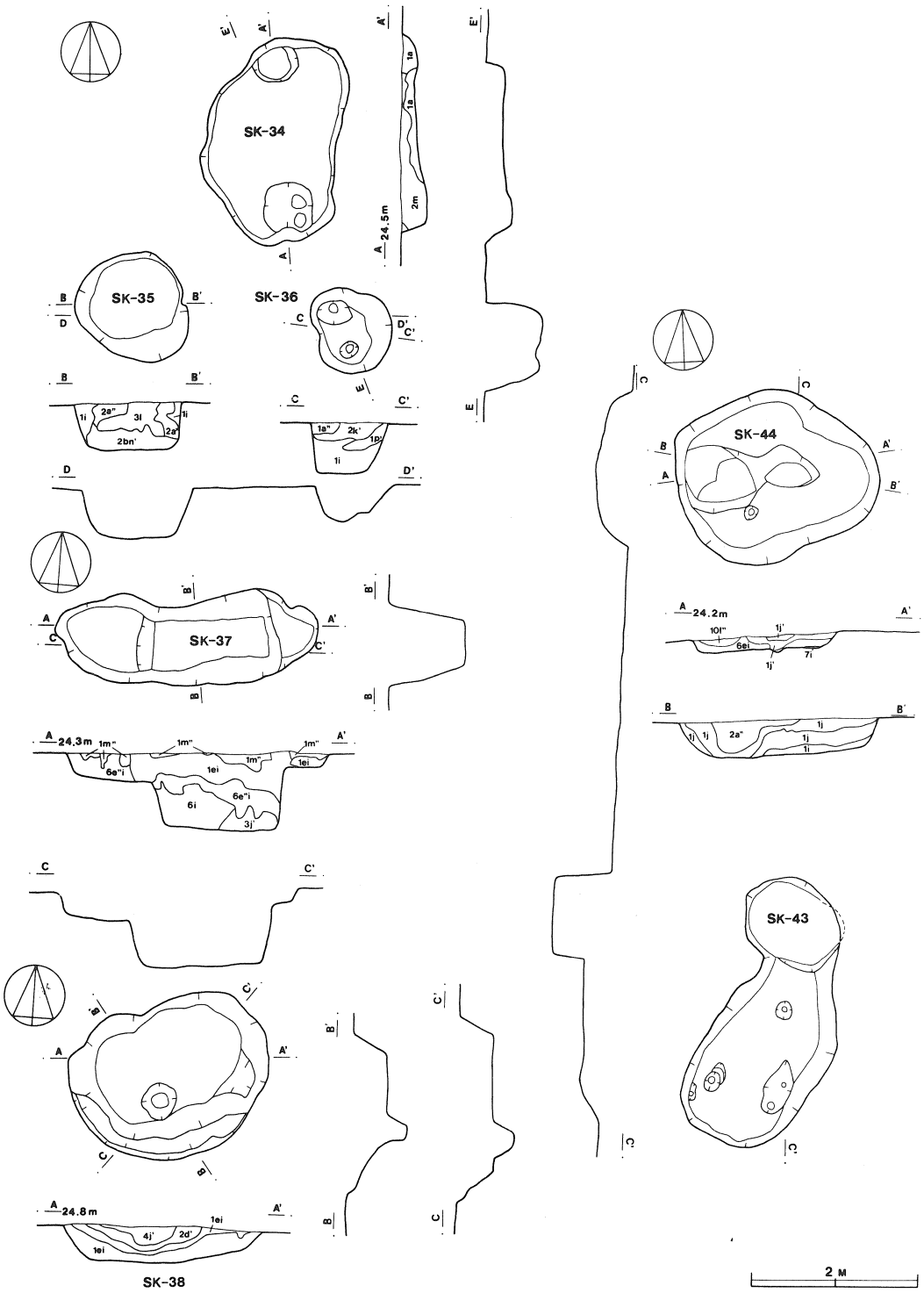
第104図　第17.19.20.22～24号土壙実測図



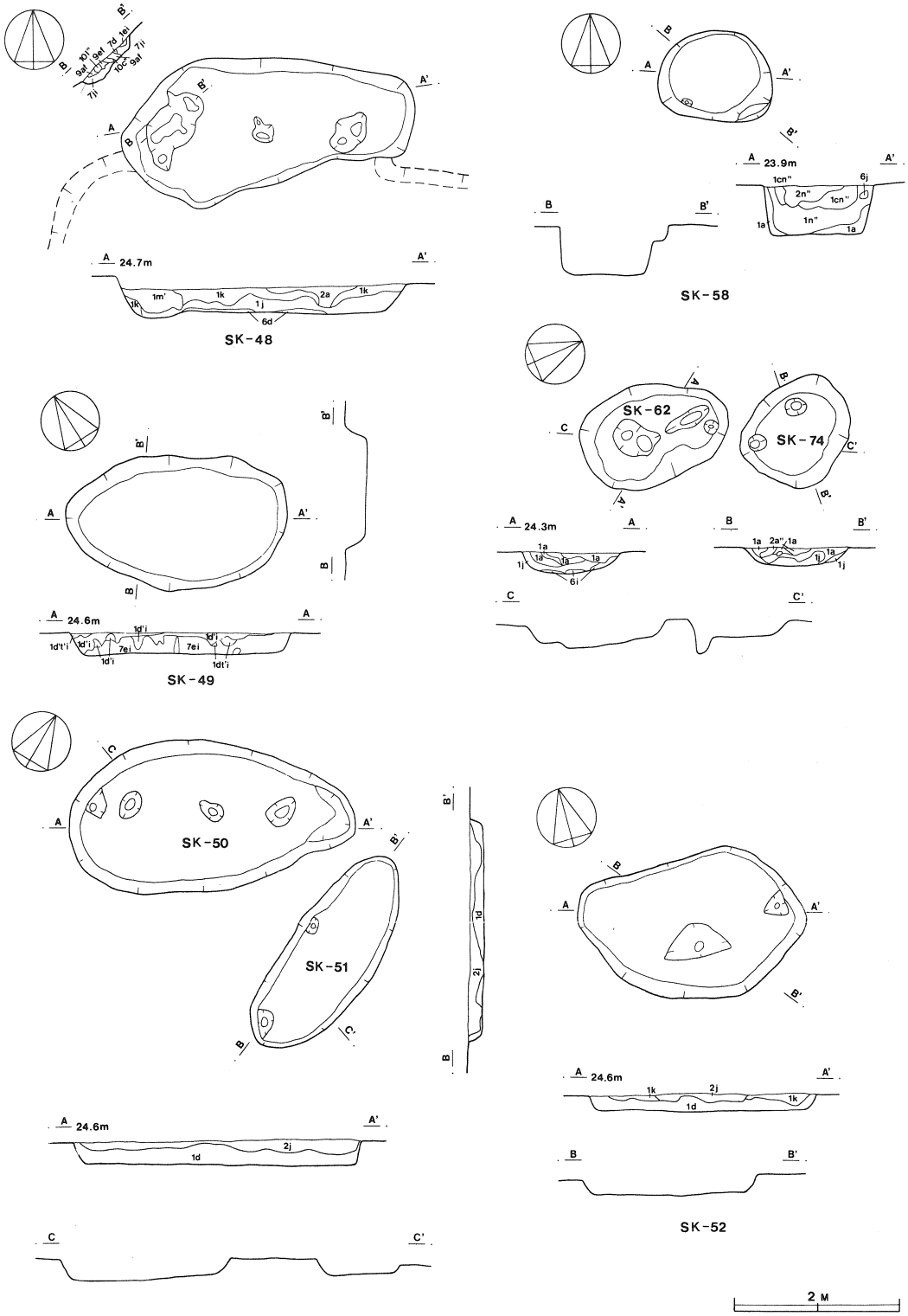
第105図　第18.56.57.59.65号土壙実測図



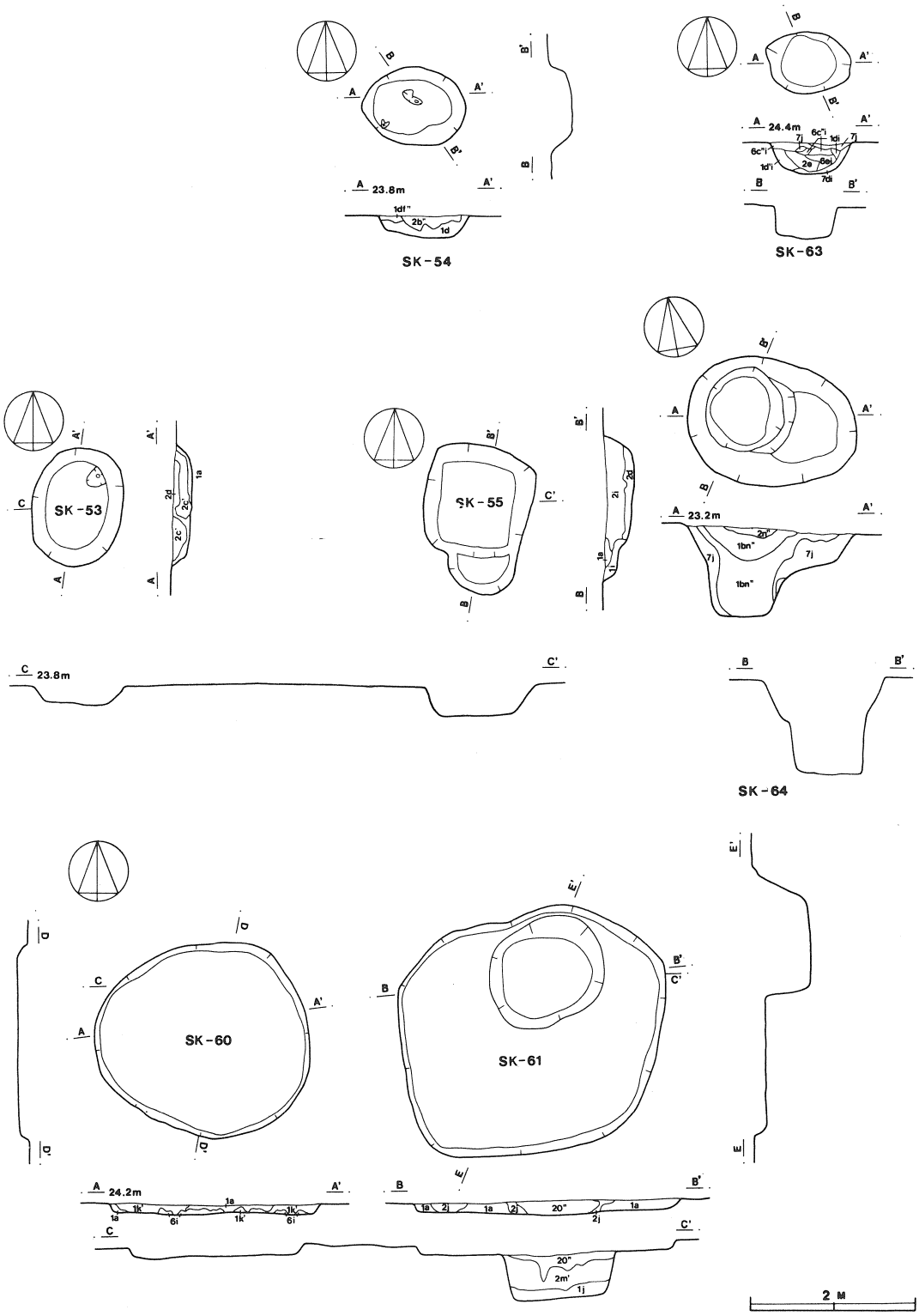
第106図　第25.27～33号土壙実測図



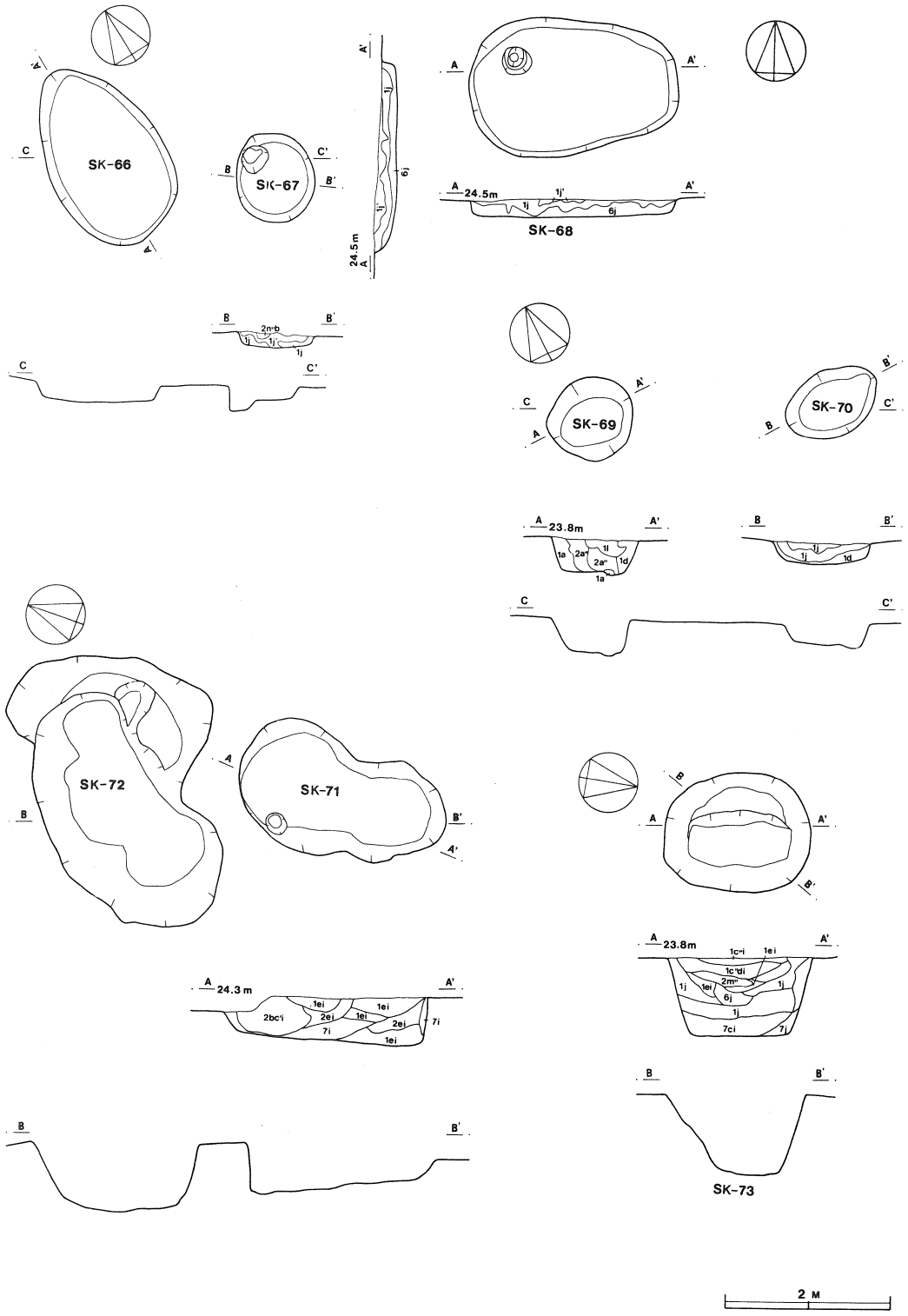
第107図　第34～38.43.44号土壙実測図



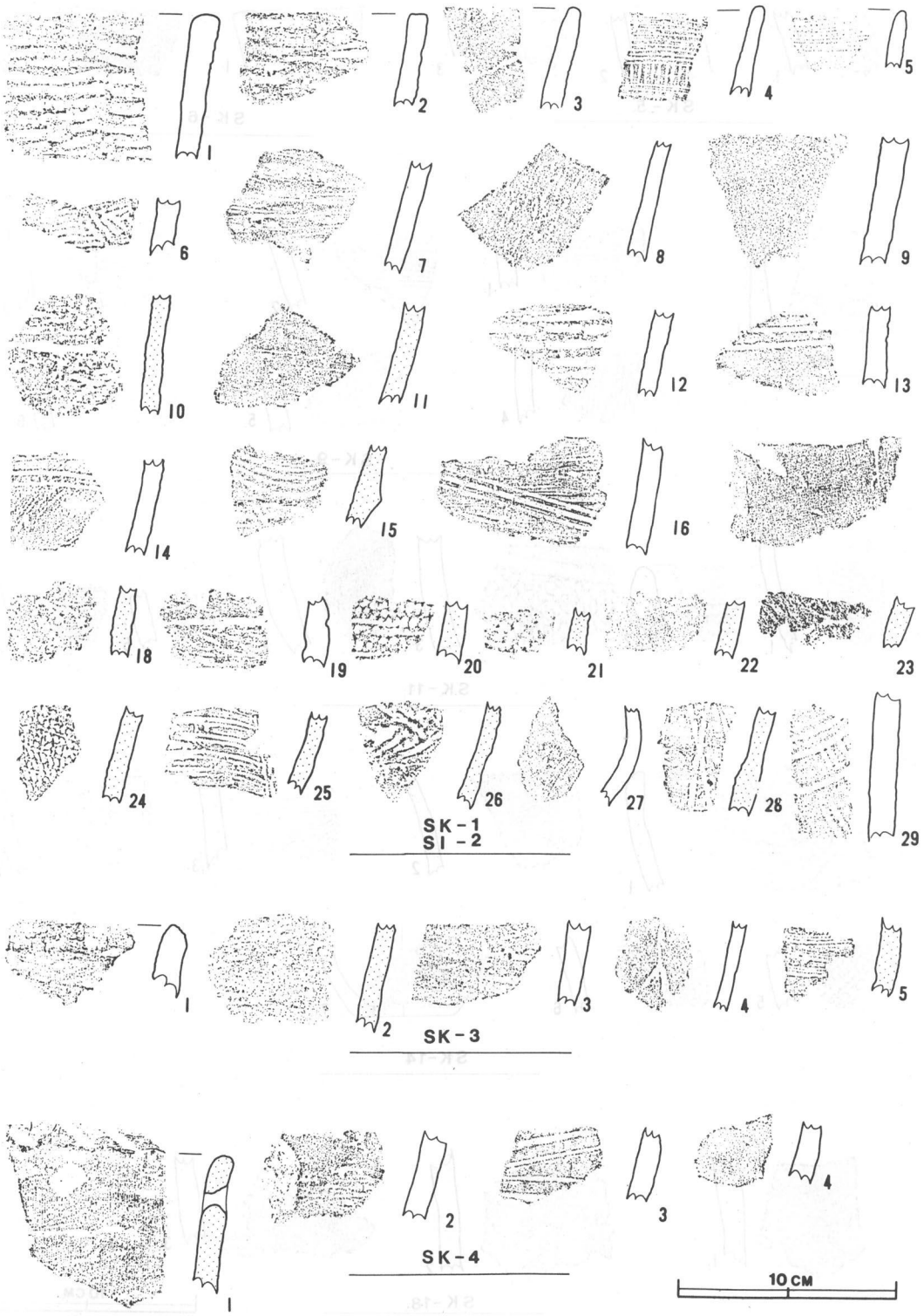
第108図　第48～52. 58. 62. 74号土壙実測図



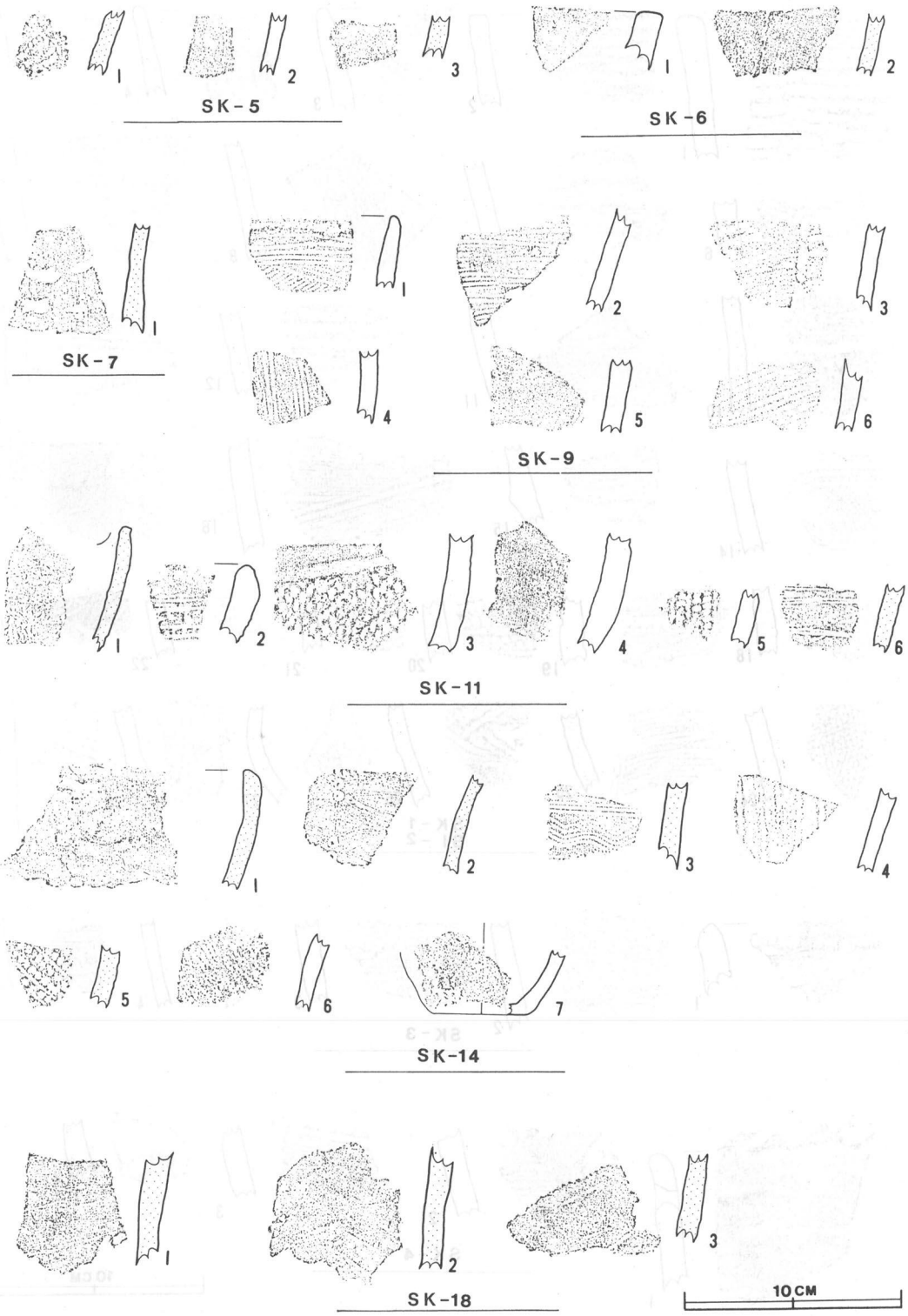
第109図　第53～55.60.61.63.64号土壙実測図



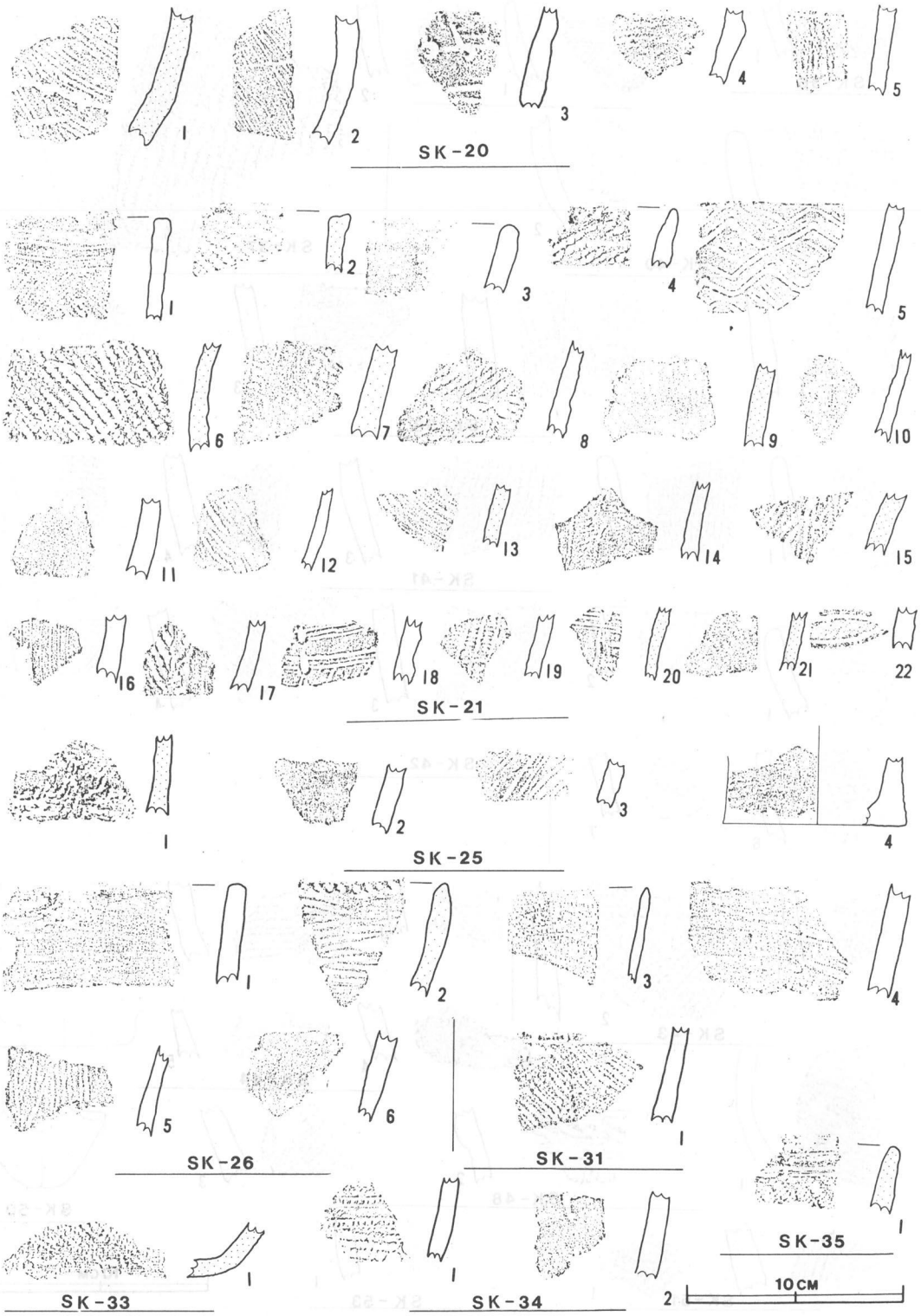
第110図　第66～73号土壙実測図



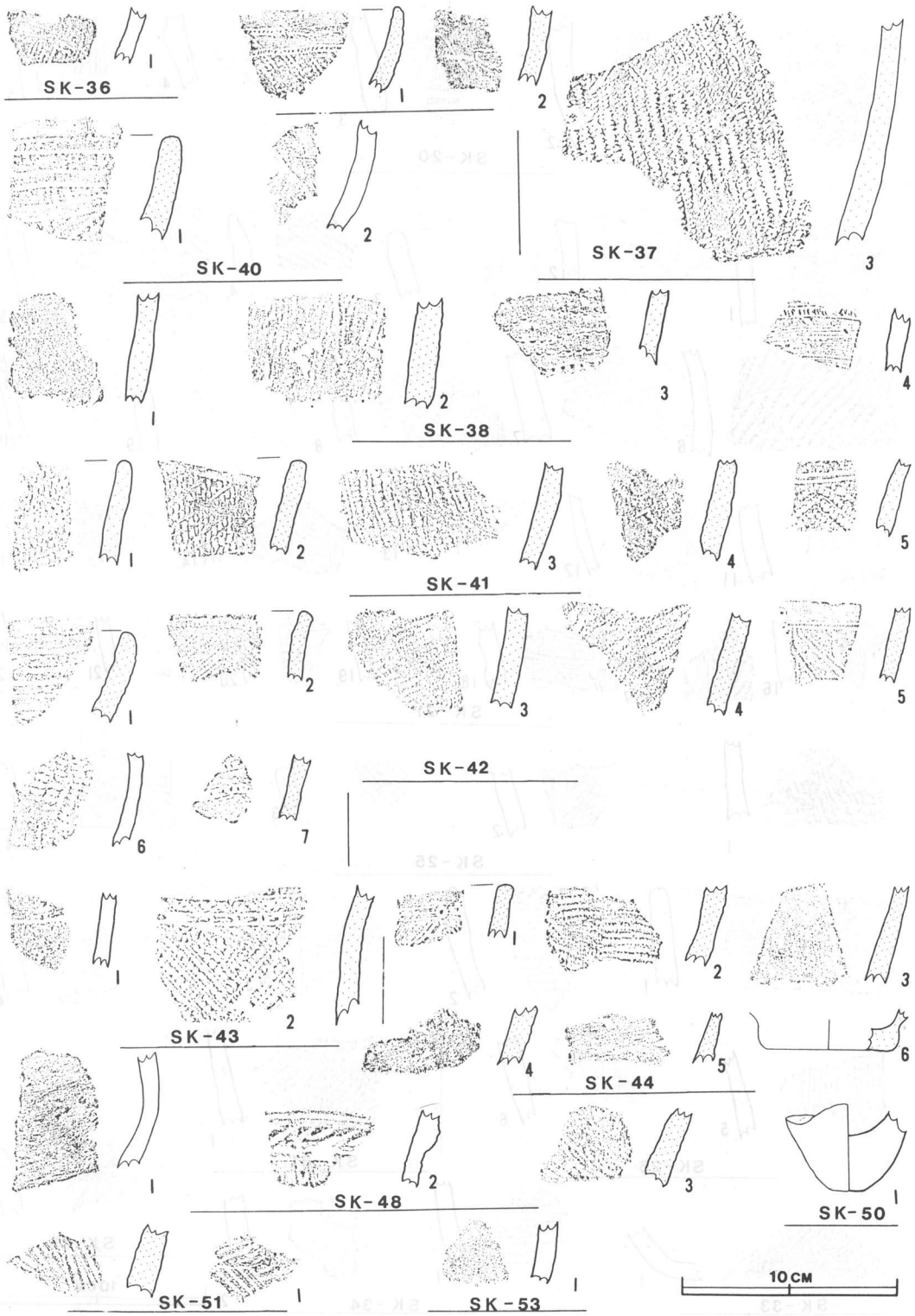
第111図　第２号住居跡　第１．３．４号土壙出土遺物拓影図



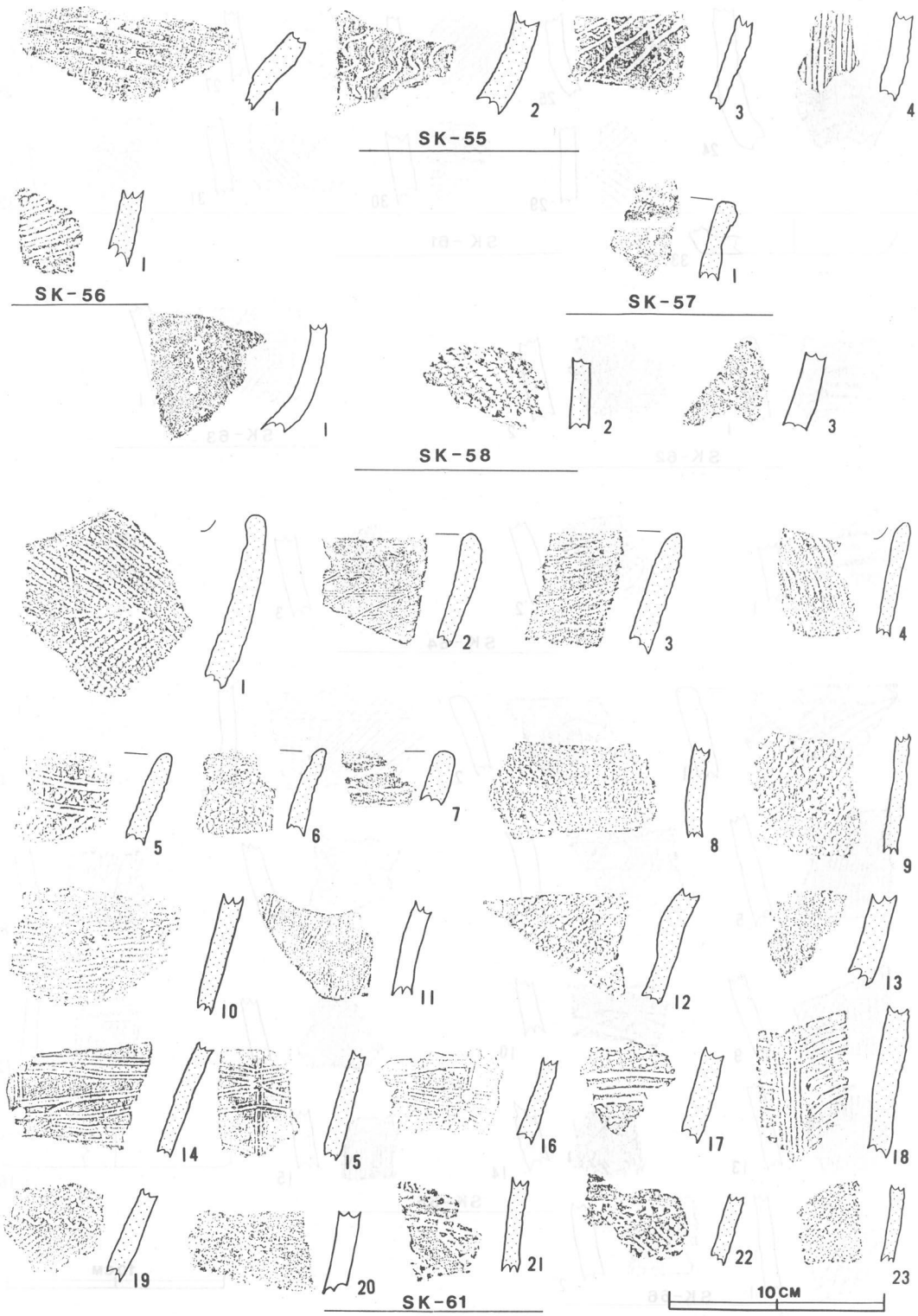
第112図　第５～７．９．11．14．18号土壙出土遺物拓影図



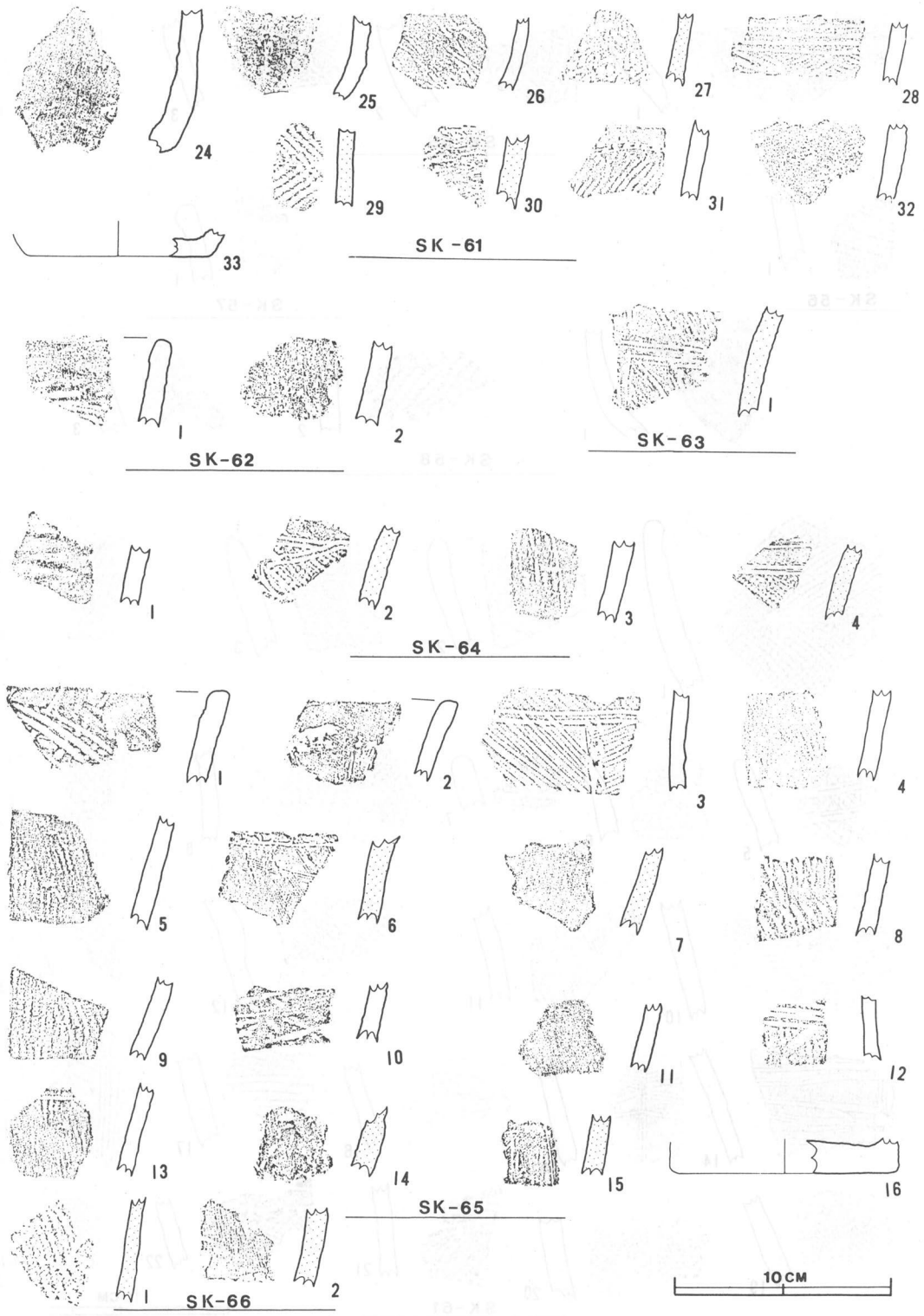
第113図　第20. 21. 25. 26. 31. 33～35号土壙出土遺物拓影図



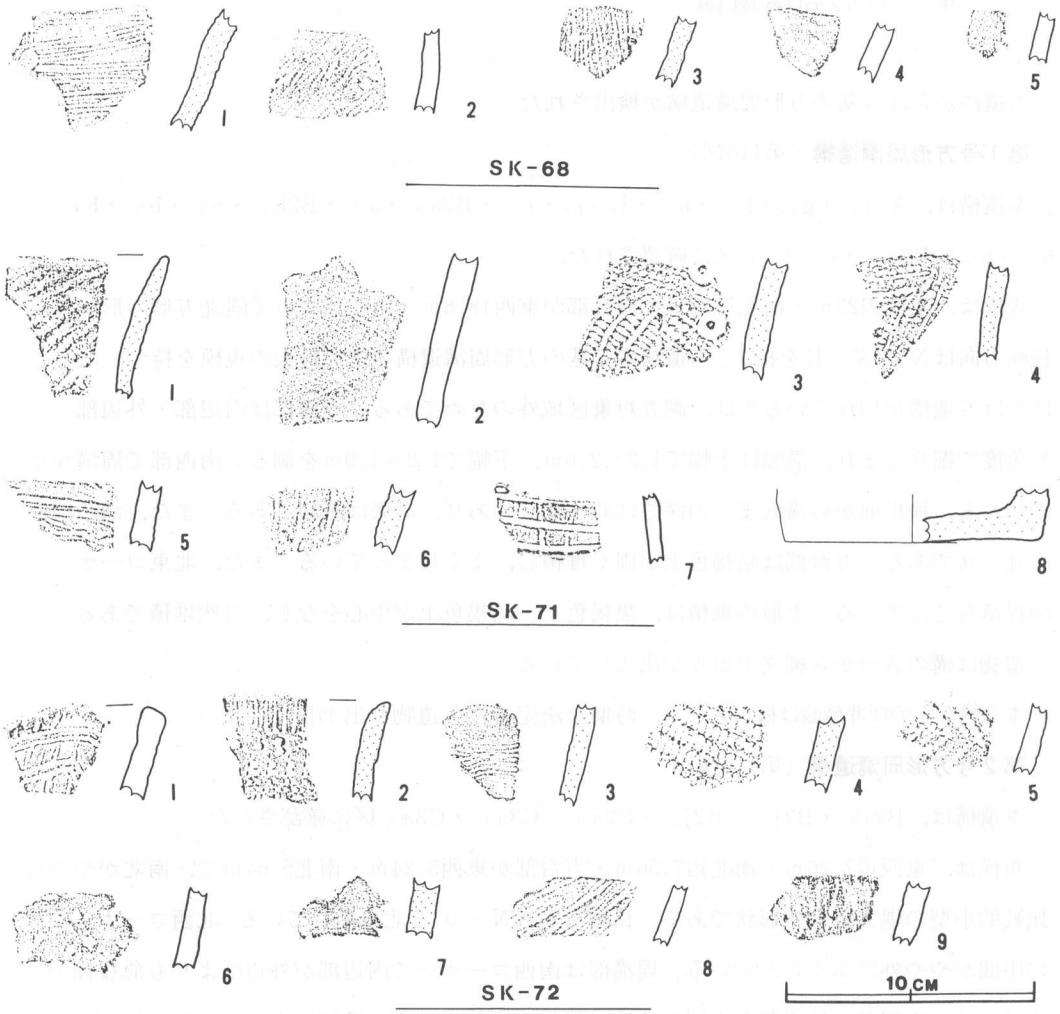
第114図　第36～38.40～44.48.51.53号土壙出土遺物拓影図



第115図　第55～58.61号土壙出土遺物拓影図



第116図　第61～65号土壙出土遺物拓影図



第117図　第68.71.72号土壙出土遺物拓影図

4　方形周溝遺構

当遺跡からは５基の方形周溝遺構が検出された。

第１号方形周溝遺構（第118図）

本遺構は，A2g_6・g_7・h_7・h_8・i_8・j_8・j_9・B2a_8・a_9・B2b_3・b_4・b_5・b_6・b_7・b_8・b_9・B2c_4・c_5・c_6区に確認された。

規模は，東西辺23m・南北辺23m・方台部が東西18.8m・南北19.2mで隅丸方形の形状である。長軸方向はN－18°－Eを指す。当遺跡の５基の方形周溝遺構の中で最大の規模を持つ。北から西にかけて遺構が切れているのは，調査対象区域外のためである。周溝部は内辺部・外辺部とも同じ角度で掘りこまれ，溝幅は上幅で1.3～2.6m，下幅で1.2～1.9mを測る。南西部で周溝が細くくびれる。検出面から溝底までの深さは32～46cmであり，溝底は平坦である。また，溝の断面は「U」状である。方台部は暗褐色土が固く堆積し，よくしまっている。また，北東コーナーで５cm程落ちこんでいる。土層の堆積は，黒褐色土・暗褐色土が中心をなし，自然堆積である。

遺物は溝の各所から縄文土器片が出土している。

本遺構からの埋葬施設は検出されず，時期を決定できる遺物も出土していない。

第２号方形周溝遺構（第119図）

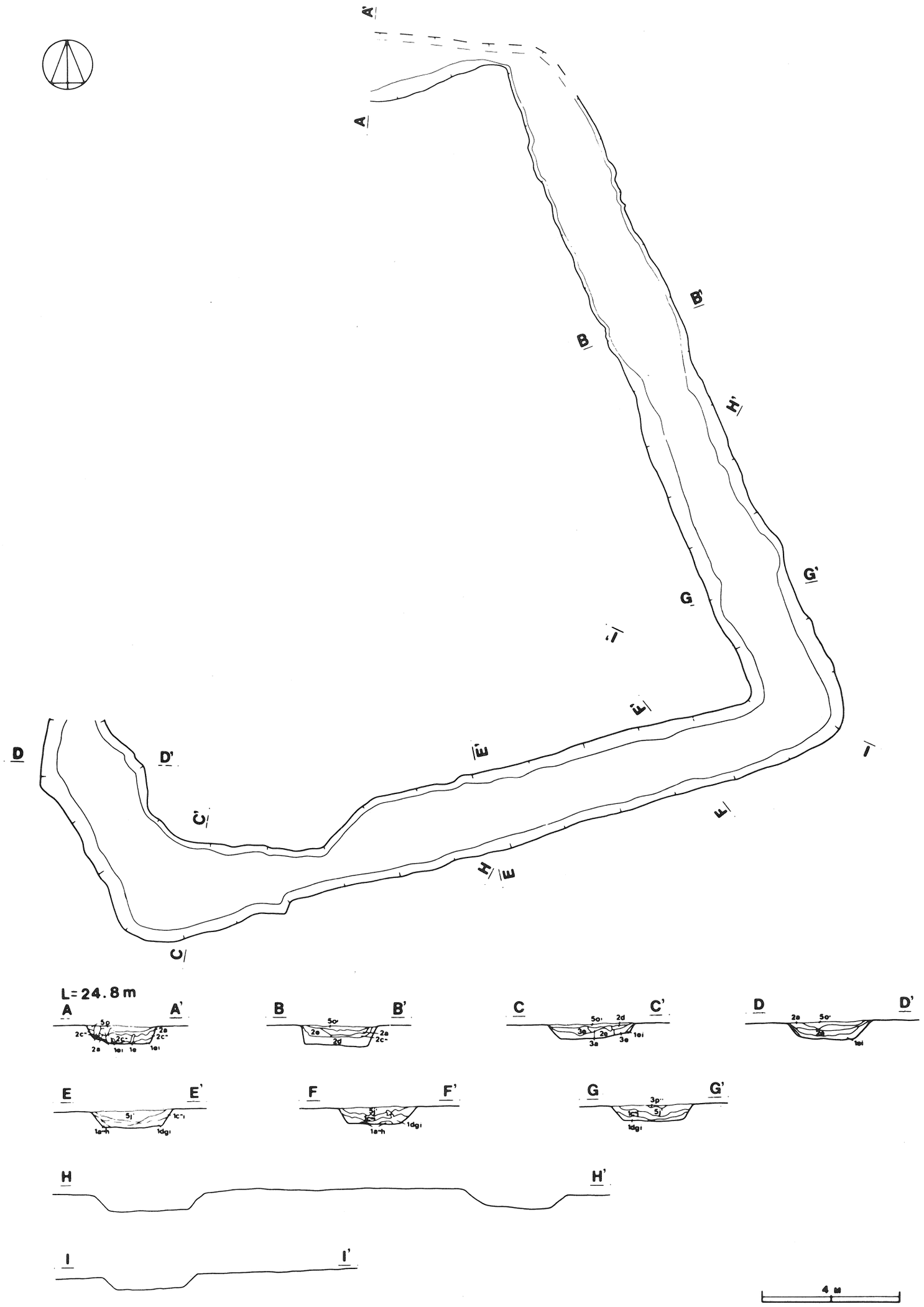
本遺構は，B2j_0・B2j_1・B2j_2・C2a_0・C3a_1・C3a_2区に確認された。

規模は，東西辺7.26m・南北辺7.56m・方台部が東西5.24m・南北5.64mで，南北がやや長い比較的小型の隅丸方形の形状である。長軸方向はN－0°と北を指している。北西コーナーと東辺の中間がやや外にふくらんでいる。周溝部は南西コーナーで内辺部が外辺部よりも急な傾斜を示すほかは，内辺部・外辺部とも同じ角度で掘りこまれている。溝幅は上幅で0.74～1.44m・下幅で0.44～0.8mである。検出面から溝底までの深さは32～48cmであり，溝底は平坦である。従って溝の断面は「U」の形状を呈している。また，方台部は北西コーナーで，やや内側にへこみ，丸味をおびている。

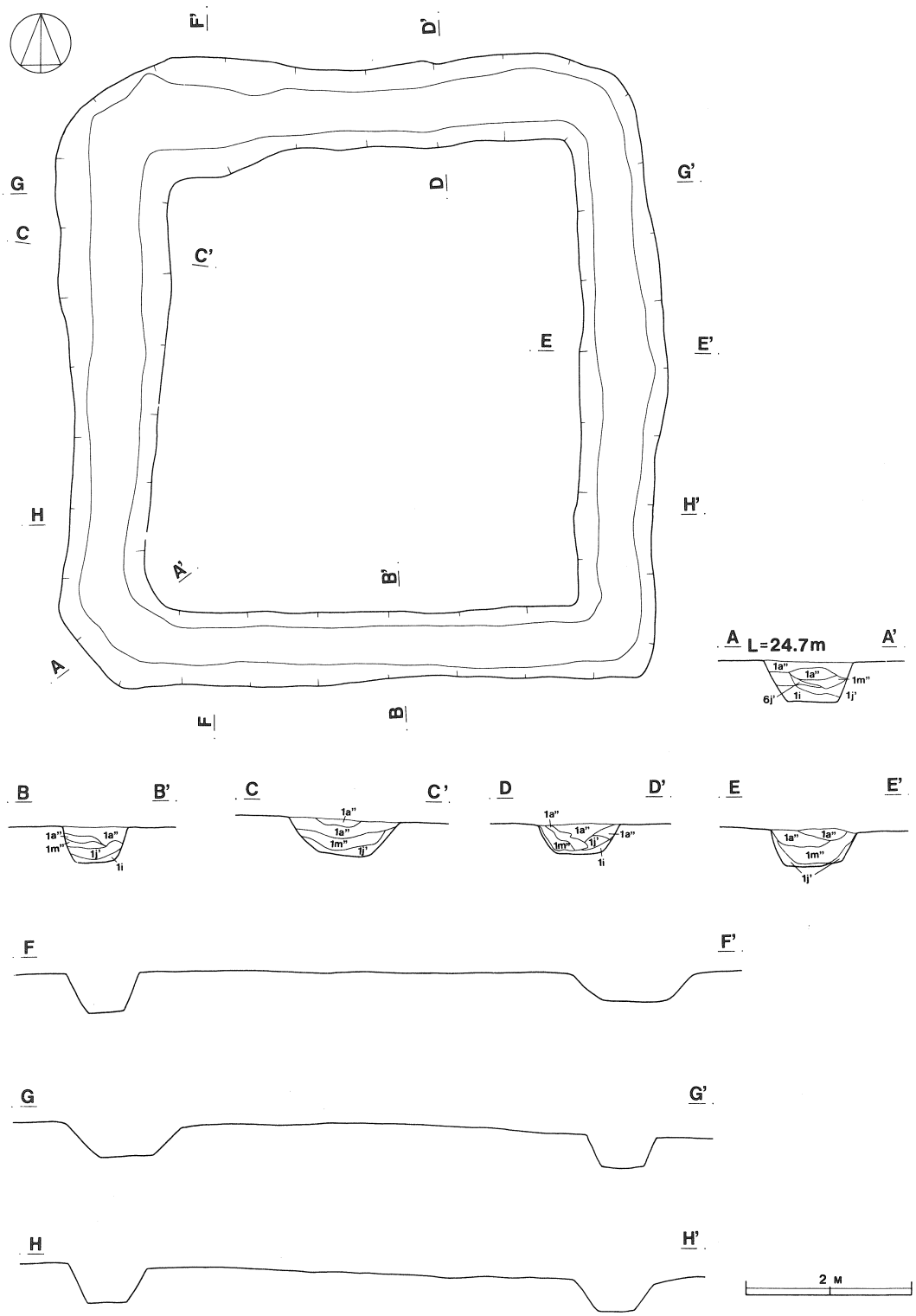
土層は褐色土の自然堆積である。また，各層ともよくしまっている。方台部は10cm程のよくしまった暗褐色土が堆積し，その下は堅固なハードロームであった。

遺物は周溝内より，しかも北部コーナー・北東コーナーから集中して，縄文土器が出土している。また，方台部にも少量点在していた。

本遺構からは埋葬施設が検出されず，時期を決定する遺物も出土していない。



第118図　第１号方形周溝遺構実測図



第119図　第２号方形周構遺構実測図

第3号方形周溝遺構（第120図）

本遺構は，C2f$_8$・C2f$_9$・C2g$_8$・C2g$_9$区に確認された。

規模は東西辺5.04m・南北辺5.8m，方台部が東西2.6m・南北3.9mと南北辺が少し長く，小型の隅丸方形の形状である。北辺が少々右下がりで，かつ南北辺が丸味をおびて，円形化している。長軸方向はN－0°と北を指している。周溝部は内辺部が外辺部よりも急な角度で掘りこまれ，特に南部に至ってその角度が急である。溝幅は上幅で1.02～1.4m，下幅で0.56～0.94mを測る。確認面から溝底までの深さは38～47cmであり，溝底はほぼ平坦である。ただ，東部で一部皿状になっているため断面が「U」字状を呈している。方台部の北部に，長径60cm・短径44cm・深さ22cmの楕円形のピットが存在するが，統一の土層セクションがないため，本遺構に関連するものかどうかは不明である。

土層の堆積は，暗褐色土が中心で北東・南西部に不自然な堆積を示すが，他はすべて自然堆積である。

遺物は北西・南部の周溝内を中心に縄文土器片が出土している。また方台部の東南にも少量出土した。

本遺構からは埋葬施設は検出されず，時期を決定する遺物も出土していない。

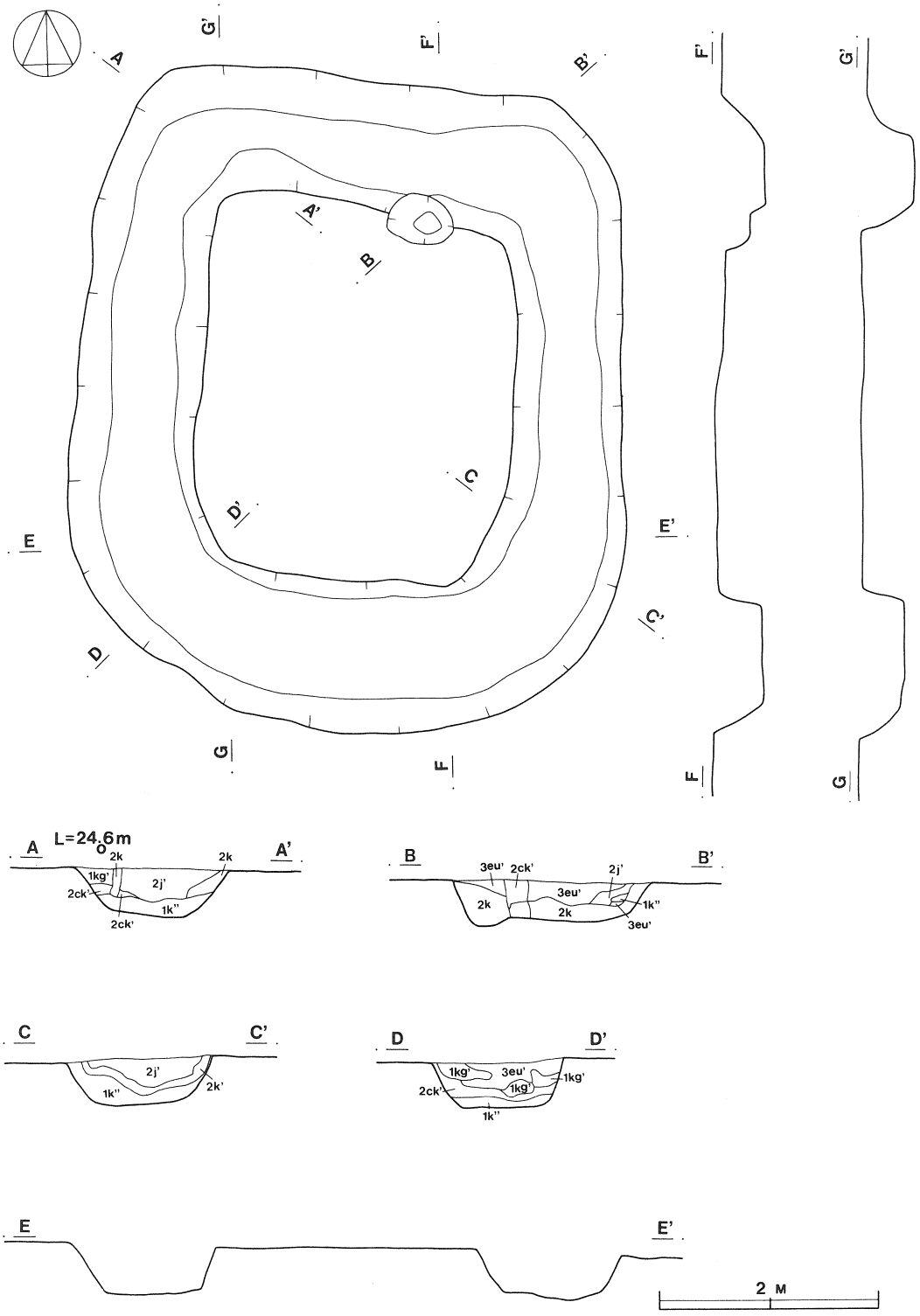
第4号方形周溝遺構（第121図）

本遺構は，C1f$_7$・f$_8$・f$_9$・f$_0$・C1g$_7$・g$_8$・g$_9$・g$_0$・C1h$_7$・h$_8$・h$_9$・h$_0$・C1i$_7$・i$_8$・i$_9$・i$_0$区に確認された。

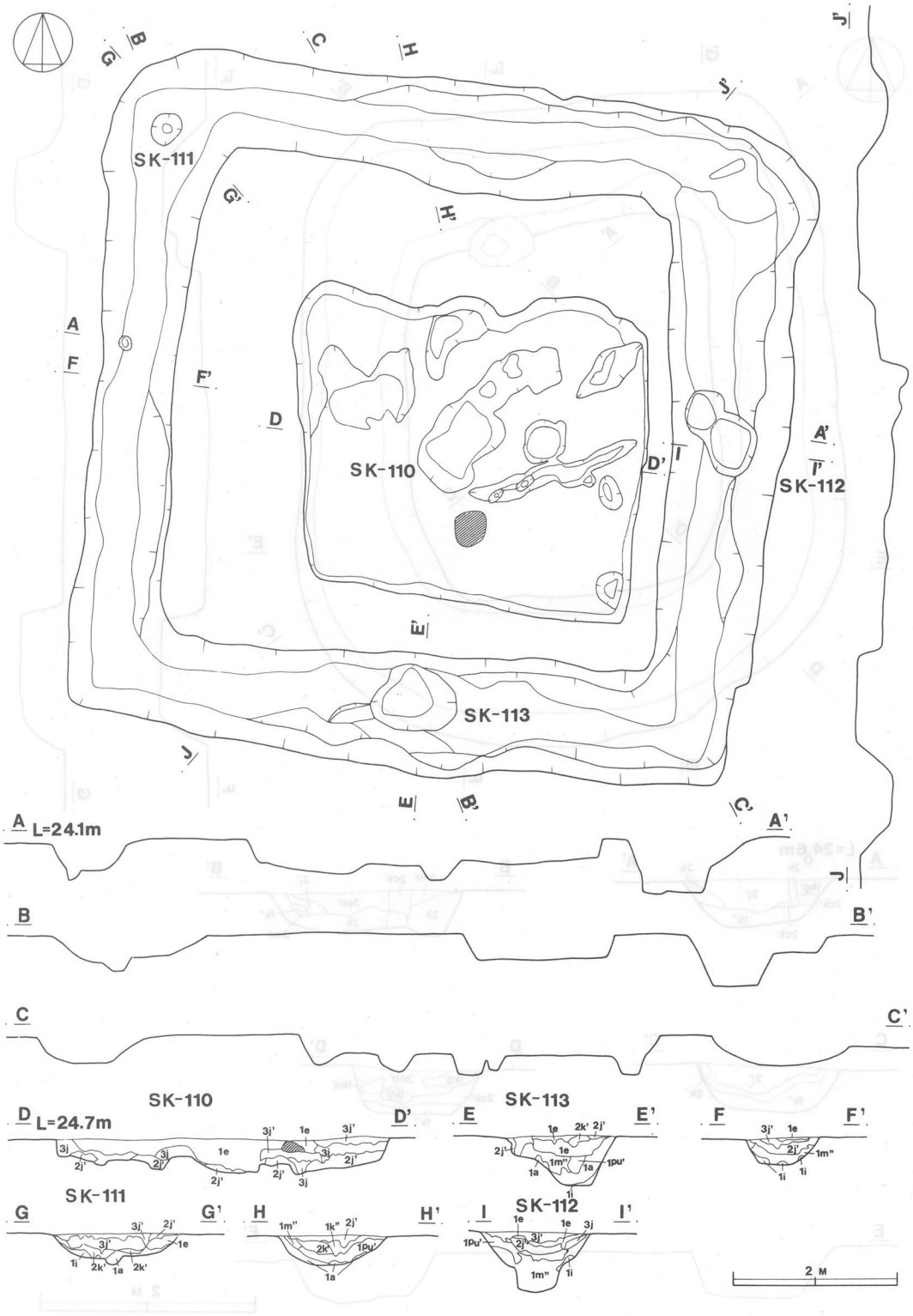
規模は東西辺11.98m・南北辺12.46m，方台部が東西8.58m・南北8.66mと南北辺がやや張り出している。周溝部の断面は，内辺部が外辺部よりも急な角度で掘りこまれているのは，南部と東部で，西部では逆に外辺部の方が急な角度をしている。溝幅は，上幅で1.36～2.56m，下幅で0.36～1.7mを測る。検出面から溝底までの深さは48～92cmである。溝底は皿状になっているので，断面は「U」字状が多い。ただ，内辺部が急な傾斜を持つ南部と東部では底面が平坦なので「凵」状の断面を呈している。周溝内にピットが5本検出されたが，いずれも本遺構との関連は薄く，周溝内土壙とした。

遺物は周溝内から縄文土器片が出土した。北部の周溝は比較的量が少ない。また，方台部の南部にも縄文土器片が少量点在している。さらに，方台部の南部には，径約30cm程の石が組まれた形で4個出土している。(実測図中の斜線部分)

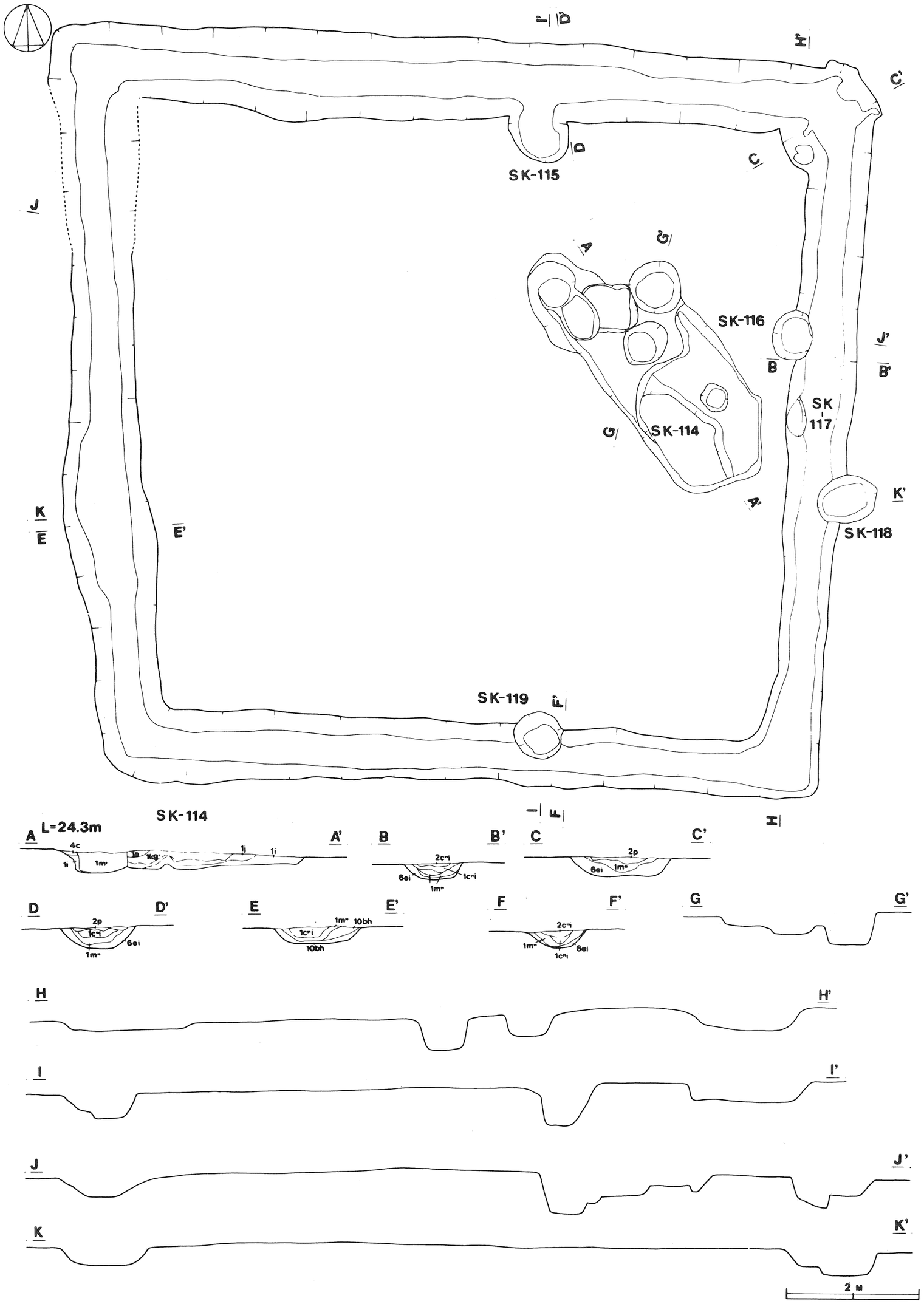
埋葬施設とは判定できないが，方台部の中程に土壙（第90号）が検出されている。時期決定の遺物は出土しない。



第120図　第３号住居跡実測図



第121図　第４号方形周溝墓実測図



第122図　第５号方形周溝墓実測図

第5号方形周溝遺構（第122図）

本遺構は，D2c$_3$・c$_4$・c$_5$・c$_6$・c$_7$・D2d$_3$・d$_4$・d$_5$・d$_6$・d$_7$・D2e$_3$・e$_4$・e$_5$・e$_6$・e$_7$・D2f$_3$・f$_4$・f$_5$・f$_6$・f$_7$・D2g$_3$・g$_4$・g$_5$・g$_6$・g$_7$区に確認された。

規模は東西辺17.78m・南北辺16.3m，方台部は東西15.4m・南北13.2mと東西辺が長く，また南北辺においても北辺が少し長いので，いくらか台形ぎみの隅丸方形である。長軸方向はN－84°－Wである。周溝の断面は内辺部・外辺部とも同じ角度で掘り込まれ，溝幅は上幅で0.94～2.32m，下幅で0.46～1.4mを測る。検出面から溝底の深さは14～68cmである。断面形状は「 凵 」状である。周溝内の東側中間に長径1.32m・短径1.0m・深さ48cmの楕円形のピットがある。また，方台部の北部・東部・南部にピットを有している。径約1.2mの円形または楕円形であるが，東部のピットの一つは方台部をえぐって，袋状に掘りこまれている。本遺構の土層から考えて，各ピットと本遺構の関連は薄く，すべて周溝内土壙とした。

土層は自然堆積であり，覆土は暗褐色土・褐色土が中心であった。

遺物は周溝の全域から縄文土器片が出土している。特に北西コーナーでは他の箇所よりも多く出土している。

埋葬施設とは判定できないが，方台部の東部に土壙（第92号）が検出されている。時期決定の遺物は出土しない。

出土遺物解説表

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SK－3	1	紡錘車	A(4.2) B(3.1) 56g	糸まき車状の形。 竹管による押圧文（全面）。		焼成…良 胎土…砂パミスを含む 色調…にぶい黄褐色	第128図10
SK-61	2	深鉢	B(18.5)	胴部より口縁にかけてかすかに外反して立ち上がる。 半截竹管による平行沈線。 内面をヘラなでしている。		焼成…良 胎土…砂礫を含む 色調…内　明赤褐色 外　灰褐色	
SX－5	3	土玉	A 3.1 B 2.3 21g	径8mmの穴を下部から上部に向けてあけ，盛り上がった部分を切りとる。		焼成…良 胎土…砂パミスを含む 色調…にぶい赤褐色	第128図11
グリッド D1a7	4	不明	B(4.6) C 7.3	鉢か壺の胴の一部と底部が残存。 外面に縦の撚糸文を施す。 内面をヘラなで，底面を丁寧なヘラなでしている。		焼成…良 胎土…砂礫パミスを含む 色調…赤褐色	
グリッド E1b8	5	小型坏	A 3.3 B 2.3 C 2.3	ロクロを使用。 回転糸切り痕を残す。		焼成…良 胎土…砂を含む 色調…橙色	

第4章　ま　と　め

新池台遺跡発掘調査の結果，遺構は縄文時代早期・前期，弥生時代後期，古墳時代後期の住居跡と土壙，方形周溝遺構が検出された。遺物は縄文時代早期・前期・中期，弥生時代後期，古墳時代後期，歴史時代の土器と土製品，石器，石製模造品，鉄製品が出土した。

1　住居跡について

遺跡から検出された住居跡は44軒になり，時期別に次のように分けた。

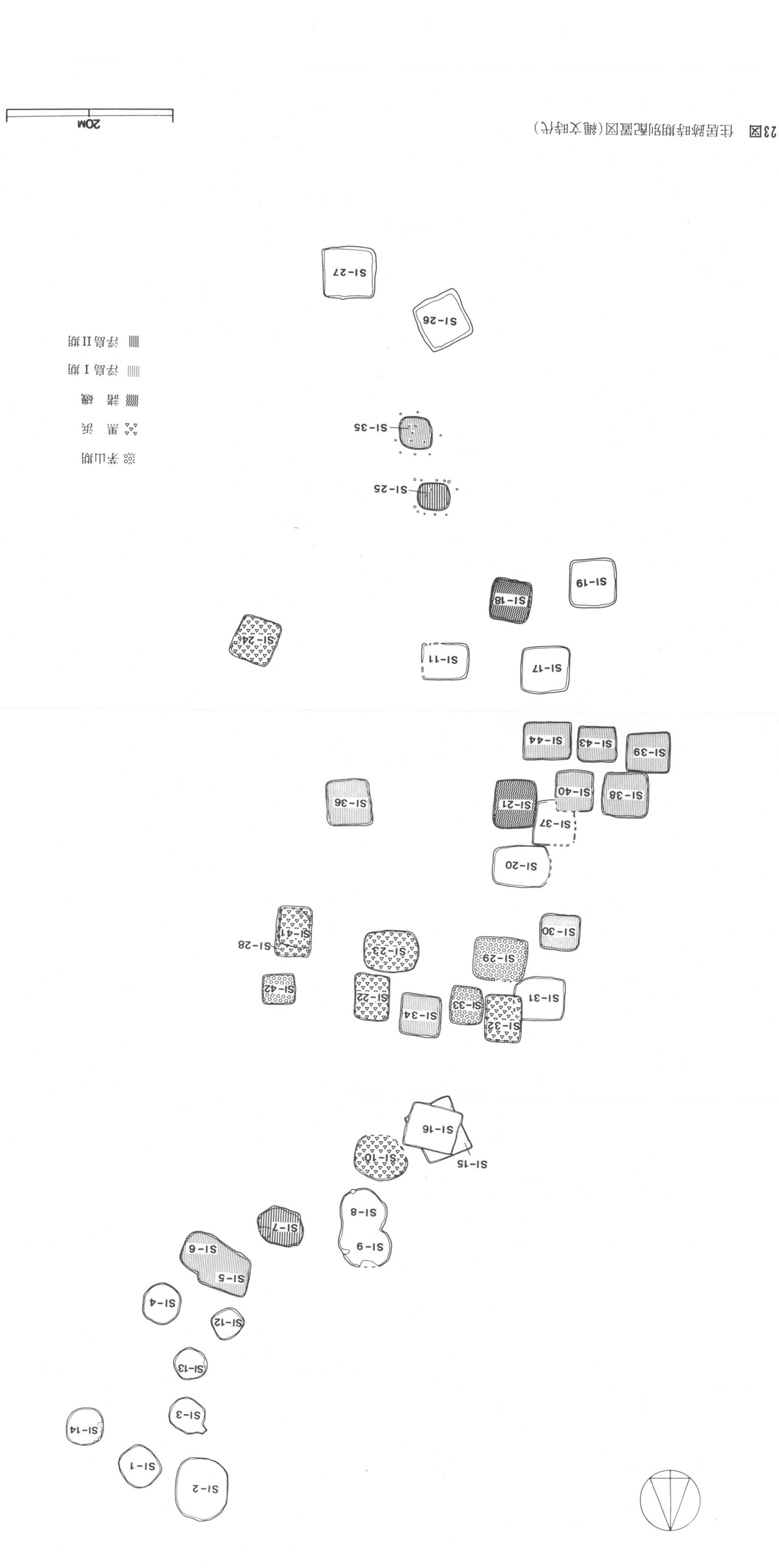
縄文時代早期（茅山期）	3軒
縄文時代前期前半（黒浜期）	7軒
縄文時代前期後半（諸磯・浮島期）	15軒
その他の縄文時代のもの	11軒
弥生時代後期（長岡・十王台期）	3軒
古墳時代（鬼高期）	2軒
時期不明のもの	3軒

○縄文時代早期（茅山期）

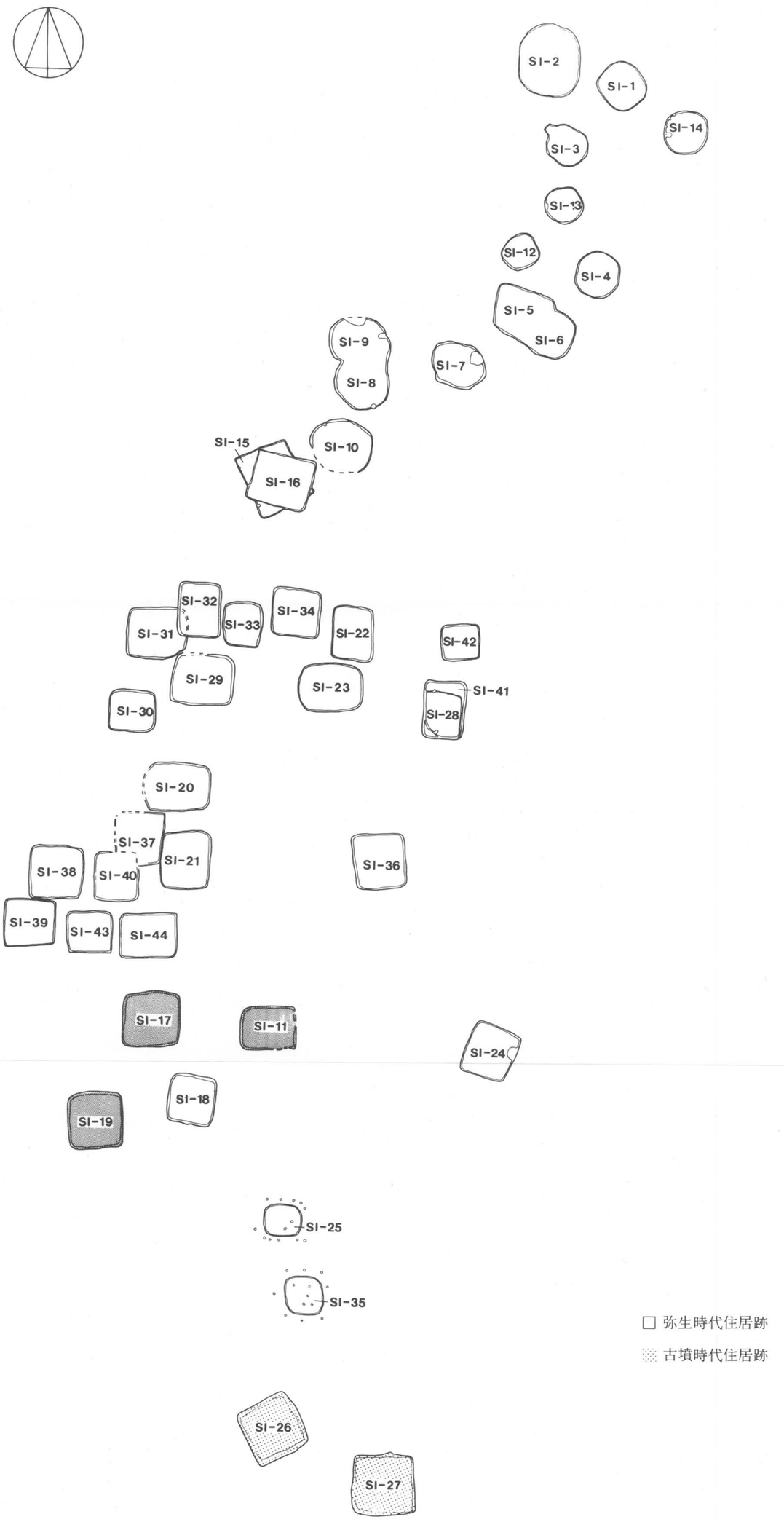
茅山式土器を出土している住居跡は，第29・33・42号住居跡の3軒が属する。位置は遺跡台地の中央にあり，3軒とも隅丸長方形の形状である。炉は検出されない。住居跡内に炉を持たず，方形のプランが多いのがこの時期の全国的な特徴である。長軸方向は，第33号住居跡がN－0°，他の2軒は，N－85.5°－E，N－86.5°－Eである。柱穴は第29号住居跡が12本と多いが，第33・42号住居跡とも7本である。第42号住居跡の柱穴は7本の内5本が整然とならんでいる。また，深さも第29号住居跡が26～50cmとばらつきがあるが，他の2軒は20～26cmと一定している。第29号住居跡と第33号住居跡が1.5mと接近していて，同時に存在したとは考えられない。両住居跡と第42号住居跡間は約20mである。位置及び規模（29号住居跡が6.0×5.0m，33号が4.6×4.0m，42号が3.9×3.4m）から，33号と42号住居跡に類似性が見られ，第29号住居跡は異時期のものと考えられる。

○縄文時代前期前半（黒浜期）

第10・22～24・28・32・37号住居跡の7軒が属する。遺跡の中央部に5軒，西部に1軒，南東



第123図　住居跡時期別配置図（縄文時代）



第124図　住居跡時期別配置図(弥生、古墳時代)

住居跡一覧表

住居番号	位置	長軸方向	平面形	規模 平面(m)	壁高 (cm)	各部の状況 壁	床	柱穴	炉 位置	種類	その他	覆土	出土遺物	時期	備考
SI−1	A3 i1・i2 j1・j2	N−35.5°−W	不整円形	長径(m)×短径(m) 4.94×4.52	28〜36	堅い	南東が低い	14				3層	なし	不明	
SI−2	A2 h9・h0 i9 A3h1・i1	N−2°−E	楕円形	7.4×6.18	20	〃	平坦	17	中央より北へ2m	地床炉		3層	Ⅲ層に少量炉覆土に5点	縄文時代	第1号土壙と重複
SI−3	A2 j0 B2 a0 A3 a1 B3 a1	N−48.5°−W	不整円形	4.36×3.88	20〜30	〃	〃	16				4層	Ⅱ層に数点	〃	
SI−4	B3 d1・d2 e1・e2		円形	4.5×4.5	20〜32	〃	〃	11				4層	Ⅱ，Ⅲ層に少量	〃	
SI−5	B2 d9・d0 e9・e0 f0	N−65°−W	台形	4.8×5.4 ×6.0	35〜45	さほど堅くない	〃	8	中央より南へ1m	地床炉		5層	Ⅳ層に多量石鏃石匙	縄文時代前期	第6号住居跡と重複 浮島式
SI−6	B2e0・f0 B3e1・f1	N−22°−E	隅丸方形	5.0×5.0	35〜45	さほど堅くない	〃	15				5層	Ⅳ層 石鏃，石匙，磨石	〃	第5号住居跡と重複 浮島式
SI−7	B2 f7・f8 g7・g8	N−64°−W	不整楕円形	5.9×4.6	20〜30	堅い	〃	10			北東貯蔵穴	3層	Ⅱ層に少量	〃	第75号土壙と重複 浮島式
SI−8	B2 g4・g5 h5・h6		円形	5.6×5.6	12〜22	やわらかい	〃	19				2層	Ⅱ・Ⅲ層に少量	縄文時代	第9号住居跡，第76号土壙と重複
SI−9	e4・e5 B2e6・f4 f5・f6	N−22.5°−W	楕円形	6.3×5.0	12〜22	堅い	〃	12			東壁貯蔵穴	6層	Ⅱ・Ⅲ層に少量	〃	第8号住居跡，第6，7，77，78号土壙と重複
SI−10	B2 h4・h5 i4・i5	N−62.5°−W	〃	6.52×5.48	28〜40	〃	〃	15				5層	Ⅴ層に少量	縄文時代前期	黒浜式
SI−11	c2・c3 D2c4・d2 d3・d4	N−90°−E	隅丸長方形	5.7×4.8	24〜25	〃	〃	12				3層	Ⅲ層に多量	弥生時代後期	第79，80号土壙と重複 十王台式
SI−12	B2 c9・c0 d9・d0		不整円形	3.96×3.96	18〜32	〃	〃	9				4層	Ⅱ・Ⅲ層北東部に中量	縄文時代	第81号土壙と重複
SI−13	B2b0・c0 B3b1・c1		円形	3.9×3.9	10〜22	〃	西部が低い	12			西部貯蔵穴	3層	なし	不明	
SI−14	A3j3・j4 B3a3・a4		〃	4.5×4.5	14〜34	〃	西から東へ傾斜	13			西部貯蔵穴	2層	なし	〃	
SI−15	j2・j3 B2j4 i3・i4	N−74°−W	長方形	5.9×5.2	6〜10	さほど堅くない	平坦	22				2層	少量 石斧	縄文時代	第16号住居跡と重複
SI−16	h3・i2 B2i3・j2 j3・j4	N−25°−W	台形	5.3×5.8 ×6.6	3〜7	さほど堅くない	〃	26				2層	少量	〃	第15号住居跡と重複
SI−17	D1 c9・c0 d9・d0 D2c1	N−0°	隅丸方形	5.5×5.5	26〜30	堅い	〃	8				6層	Ⅰ・Ⅱ層に少量鉄製品	弥生時代後期	第82，83号土壙と重複 長岡式
SI−18	D1e0・f0 D2 e1・e2 f2	N−14°−E	〃	5.0×5.0	26〜32	〃	〃	7				10層	Ⅲ層に多量	縄文時代前期	諸磯式
SI−19	e8・e9 D1f8・f9 g8・g9	N−85.5°−E	〃	5.6×5.6	30〜50	〃	南から北へ傾斜	14	西部	地床炉		9層	多量 紡錘車	弥生時代後期	第84号土壙と重複 十王台式
SI−20	C1g0・h0 C2g1・h1	N−90°−W	隅丸長方形	7.0×4.46	22〜38	西側−やわらかい 他−堅い	平坦	16				4層	Ⅱ・Ⅲ層に少量	縄文時代	
SI−21	C1i0・j0 C2i1・j1	N−0°	〃	5.8×5.0	20	堅い	〃	10	中央南部	地床炉		5層	多量 石Ⅲ片	縄文時代前期	第85，86号土壙と重複 諸磯式
SI−22	c4・c5 C2c6・d4 d5・d6	N−0°	〃	5.58×4.2	14〜23	〃	〃	19				3層	Ⅱ・Ⅲ層に少量	〃	第87号土壙と重複 黒浜式

住居番号	位置	長軸方向	平面形	規模 平面(m)	壁高 (cm)	各部の状況 壁	床	柱穴数	炉竈 位置	種類	その他	覆土	出土遺物	時期	備考
SI−23	C2 d4・d5 e4・e5	N−90°−W	楕円形	6.54×5.06	10〜32	堅い	平坦	12				2層	I層に少量	縄文時代前期	黒浜式
SI−24	D2 c8・c9 d8・d9 e8・e9	N−22°−E	隅丸長方形	5.2×4.7	20〜26	堅い	西から東へ傾斜	12	中央南部	地床炉	東部貯蔵穴	5層	III・IV層に少量	〃	第88, 89号土壙と重複 黒浜式
SI−25	D2 h3・h4 i3・i4	N−90°−E	〃	3.8×3.26	18	やわらかい	平坦	屋内2 屋外12				8層	IV・VII層に少量	〃	浮島式
SI−26	E2d3	N−24°−W	隅丸方形	6.0×6.0	70〜82	堅い	〃	5	北壁中央	竈	南東コーナー貯蔵穴 壁溝	4層	土玉, 白玉 石製模造品 坏等	古墳時代後期	鬼高式
SI−27	E2d3	N−15°−W	〃	6.0×6.0	西壁64〜76 東壁32	〃	〃	4	北壁中央	〃	南西コーナー貯蔵穴	6層	坏・壺・高坏・鉢 甕・坩・土玉・木柱痕・シャベル型木製鋤	〃	鬼高式
SI−28	C2 e7・e8 f7・f8	N−2°−E	隅丸長方形	5.9×4.0	12〜34	〃	〃	4				6層	磨製石斧	縄文時代前期	第41号住居跡と重複 黒浜式
SI−29	C1 d0・d1 d2・e0 e1・e2	N−85.5°−E	〃	6.0×5.0	26〜50	さほど堅くない	〃	12			南東コーナー貯蔵穴	7層	III層に少量 東壁・西壁にかたよる	縄文時代早期	第48号土壙と重複 茅山式
SI−30	C1 e9・e0 f9・f0	N−85.5°−W	〃	4.4×4.0	18〜30	さほど堅くない	〃	8				3層	I・II層に少量 北部, 北東部に集中	縄文時代前期	第90号土壙と重複 浮島式
SI−31	C1 c9・c0 d9・d0 C2 c1・d1	N−83°−E	〃	6.0×5.0	24〜34	さほど堅くない	北東から南西に傾斜	11				5層	I・II層に少量	縄文時代	第91〜93号土壙と重複
SI−32	C2 b1・b2 c1・c2 d1・d2	N−0°	〃	5.7×4.4	12〜32	堅い	平坦	7				5層	少量 石鏃	縄文時代前期	第94号土壙と重複 黒浜式
SI−33	C2 c2・c3 d2・d3	N−0°	〃	4.6×4.0	22〜26	〃	〃	7				7層	III層に少量	縄文時代早期	茅山式
SI−34	C2 b3・b4 c3・c4 d4	N−3.5°−E	隅丸方形	5.0×5.0	20	〃	〃	10				4層	III層に4点	縄文時代前期	浮島式
SI−35	D2 j3・j4 E2 a3・a4	N−5.5°−W	〃	3.8×3.8	12〜20	やわらかい	〃	屋内5 屋外8				6層	III・IV層に5点	〃	浮島式
SI−36	C2 i5・i6 j5・j6	N−12°−E	隅丸長方形	5.4×5.1	26〜40	堅い	〃	9				7層	III・IV層に多量 石鏃, 石匙, 磨石	〃	浮島式
SI−37	C1 h9・h0 i9・i0	N−7°−E	方形	5.3×4.8	22〜40	〃	堅い	10			南壁貯蔵穴	6層	南西部に多量 石核, 石皿片	〃	黒浜式
SI−38	C1 i7・i8 j7・j8	N−0°	〃	5.4×5.4	20〜42	さほど堅くない	北から南東へ傾斜	17	南東(F1) 中央より北に70cmより	地床炉	北壁貯蔵穴	10層	多量 深鉢, 石斧, 磨石 石皿	〃	第95〜99号土壙と重複 浮島式
SI−39	C1 j6・j7 D1 a6・a7 b6・b7	N−90°−W	台形	4.4×4.9	14〜26	やわらかい	東から西へ傾斜	10	中央から南東	〃		6層	I〜III層に多量	〃	第100・101号土壙と重複 浮島式
SI−40	C1 i8・i9 i0・j8 j9・j0	N−0°	長方形	4.8×4.4	22〜32	堅い	平坦	13	中央より西側より	〃		10層	多量 深鉢, 磨石, 石皿片	〃	第102〜105号土壙と重複 浮島式
SI−41	C2 f7・f8 e7・e8	N−16°−W	不整楕円形	4.52×3.7	8	〃	凹凸	16	中央から東より	〃		6層	少量	縄文時代	
SI−42	C2 c7・c8 d7・d8	N−86.5°−E	隅丸長方形	3.9×3.4	20	やわらかい	やわらかく平坦	7				4層	II層に少量	縄文時代早期	茅山式
SI−43	D1 a8・a9 b8・b9	N−0°	台形	4.4×4.4	20〜30	堅い	平坦	8				3層	III層に少量 剥片, 石皿片	縄文時代前期	第106〜107号土壙と重複 浮島式
SI−44	D1 a9・a0 b9・b0 D2 a0・b1	N−87°−E	長方形	5.6×4.5	20〜30	〃	〃	10				5層	III層北部に少量	〃	第108, 109号土壙と重複 浮島式

部に１軒位置している。規模はすべて長径・長辺が５ｍを超え，中でも第10号住居跡は6.25×5.48ｍと最大である。形状は楕円形が２軒，隅丸長方形が４軒，方形が１軒で早期に比べ円形プランが混じるのが特徴である。長軸・長径方向は，Ｎ－０°が２軒，Ｎ－62.5°－Ｗ，Ｎ－90°－Ｗの２軒，その他が４軒である。柱穴は第22号住居跡が19本と多く，他は７本から12本の間である。

第28号住居跡の４本は，第41号住居跡との重複もあるので正確な本数ではない。深さは12～40cmの間で，やや一定している。炉は７軒ともない。７軒の住居跡間で類似性があるのは，第10・23号住居跡（ともに楕円形），第24・37号住居跡（ともに貯蔵穴と思われる袋状ピットを有する）そして他の３軒である。また，第22・23号住居跡は距離が50cmと非常に接近しており，同時期に存在したものとは考えられない。従って，楕円形で西方向の住居跡（第10・23号住居跡），隅丸長方形でほぼ北を向く（Ｎ－２°－Ｅを含めて）住居跡（第22・28・32号住居跡），貯蔵穴と思われるピットを有する住居跡（第24・37号住居跡）の３時期に２～３軒ずつ存在していたと考えられる。

○縄文時代前期後半（諸磯・浮島期）

第５～７・25・30・34～36・38～40・43・44号住居跡の13軒が属する。遺跡台地の北部に３軒中央部に２軒，西部に６軒，南部に２軒とかたまって存在する。形状は台形状のものが３軒，隅丸方形が３軒，楕円形が１軒，長方形が３軒，隅丸長方形が２軒，方形が１軒である。長軸・長径方向はＮ－０°が２軒，他の10軒は，東西に傾く。また，規模はすべて６ｍ以下で，長径・長辺が５ｍを超えるものが６軒，５ｍ以下が７軒である。柱穴は10本以下の住居跡が多いが，特に第６号住居跡が13本，第38号住居跡が16本と多い部類にはいる。確認面から床面までの深さは，第５・６・38号住居跡が45cmと深く，他は14～32cmの深さに築かれている。また，第５・21・38～40号住居跡の５軒が炉を持っていて，早期に比べ住居跡内に炉を持っている例が多い。第７・38号住居跡は，貯蔵穴と思われる袋状ピットを有している。13軒の住居跡は，３期に分けられ，第１期が第18・21号で，諸磯式の土器を出土する。第２期が第５・６・30・34・38～40・43・44号住居跡で，浮島Ⅰ式土器を出土している。第３期が第７・25・36号住居跡の３軒で，浮島Ⅱ式を出土する。

○弥生時代後期（長岡・十王台期）

第11・17・19号住居跡の３軒が属する。３軒とも遺跡台地の南西部にあり，第11号住居跡が隅丸長方形，第17・19号住居跡が隅丸方形である。方向は第17号住居跡だけがＮ－０°で，他はＮ－90°－Ｅ，Ｎ－85.5°－Ｅである。規模は5.7×4.8ｍ，5.5×5.5ｍ，5.6×5.6ｍとほぼ３軒とも同規模で，深さも第19号住居跡の西壁を除くと24～30cmとほぼ同じである。炉は第19号住居跡のみ検出されたが，第11号住居跡は第５号方形周溝遺構に，第17号住居跡は第82号土壙に切られて消失

し，本来は炉が存在していたものと考えられる。柱穴は第11号住居跡が12本，第17号住居跡が７本，第19号住居跡が13本である。住居跡相互の距離は６～７ｍである。出土遺物からみると，第17号住居跡が長岡式の土器を出土していることから，他より早く構築され，第11・19号住居跡は少し遅れて弥生時代の終末（十王台式）に存在したと思われる。

○古墳時代後期（鬼高期）

第26・27号住居跡の２軒が属する。２軒とも遺跡台地の南端に位置し，北壁中央に竈を有する。主軸方向はＮ－24°－Ｗ，Ｎ－15°－Ｗと北西を指している。規模は両住居跡とも6.0×6.0ｍで，隅丸方形の形状をしている。深さは，第26号住居跡で72～82㎝，第27号住居跡で64～76㎝と類似している。弥生時代やそれ以前の住居跡と比べ大型で竈を有し，深く掘りこまれているのが特徴である。ただ，第26号住居跡だけに壁溝が確認され，また貯蔵穴を有するが，位置は第26号住居跡が南東コーナーに，第27号住居跡は南西コーナーにあって相違点がある。柱穴は第26号住居跡が５本で，１本副柱穴を有している。２軒とも主柱穴は４本で等間隔に位置し，第26号住居跡が比較的太く，深めである。また，南壁近くの床に，床から４㎝程土を盛って踏みかためて作った出入口状の施設を検出している。また，第27号住居跡は柱痕を残し，さらに床に多量の炭化物を検出したことから，焼失家屋であると思われる。住居跡間の距離は6.5ｍと離れており，出土遺物などからも，同じ時期に構築されたと考えられる。

○第５・６号住居跡

両住居跡の覆土から多量の石が出土した。平面位置では，第５号住居跡で北部に，第６号住居跡ではほぼ全域に出土している。断面位置ではⅢ層が最も多く，次いでⅡ層，Ⅳ層，Ⅰ層，床面の順である。石質では頁岩が70点，黒曜石18点，赤色頁岩８点，蛇文岩が７点，黒色頁岩が６点，滑石２点，花崗岩が１点，その他の順で，総数約280点を超える。これは第５・６号住居跡の覆土のみで，附近の他の住居跡には見られないことである。その中で石核，剥片だけを考えると，石核25点，剥片81点で，石器製作上での剥片が断然多い。また，両住居跡の石器はチャートの石鏃３点，蛇文岩，黒曜石の石匙が１点ずつで完成品は少なく，どの石核，剥片，完成品とも接合するものはない。他の各地区で石器製作が行われ，素材として使用に耐えない石核，製作の際排出された剥片を棄てたと考えられる。さらに，床面よりの出土が少ないことから両住居跡内では製作されず，また第６号住居跡の覆土堆積状況と合わせて考えれば，この２軒の住居跡は，埋土と一緒に投棄の場に使用されたと考えられる。

第125図　第５．６号住居跡石器分布図

2　土壙について

新池台遺跡から検出された土壙は119基にのぼり，遺跡台地の中央のＣ２区に多く集中している。平面形は楕円形（不整楕円形を含む）が79基と最も多く，次いで円形（不整円形を含む）27基，三日月型２基，双円形２基，ひし形１基，方形１基，不定形７基の順である。規模は直径・長径が１ｍ以下の小規模のものが10基，２ｍを超えるものが51基であり，第110号と第114号は６ｍを超える大規模の土壙である。長径（長軸を含む）方向はＮ－０°のものが２基，90基が東西どちらかに傾く。残りの27基は円形・不定形である。確認面から底面までの深さが50cm以下の土壙が99基で浅いものが多い。第48号土壙は，119基の土壙の中でただ１基炉を有している。遺物を出土したものは43基で第１，21，61号土壙を除くとほとんどが10片以下である。また遺物は縄文土器片で，田戸下層・茅山・黒浜・関山・浮島・加曽利Ｅ式と，早期から中期まで広がっている。第61・65・68号土壙は底面から浮島式の土器が出土し，縄文時代前期と時期が判明している。ほかに比較的時期が明らかな土壙は，縄文時代前期よりも古いものが第１，48，85，86，91～93，95，96，

100～104号である。縄文時代前期のものは，第94・106・107号である。また，前期よりも新しものが第６・75～85・87・89・90・97～99・105・108号である。弥生時代後期よりも新しいものが，第79・80・82～84号である。その他の土壙は時期不明である。第４・７・26・37・65・73号土壙は開口部が楕円形または円形に対して，底面が方形になって他の土壙と性格を異にするが，目的は不明である。

3　方形周溝遺構について

遺跡から検出された方形周溝遺構は５基である。現況では墳丘を持たず，しかも主体部が確認されず，遺物も縄文土器の溝への流れこみだけで，遺構に伴う遺物は出土しなかった。規模は，第１号が23×23m，第２号が7.26×7.56m，第３号が5.04×5.8m，第４号が11.98×12.46m，第５号が17.78×16.3mであり，第１号がずばぬけて大きく，最大である。方位は第１号がN－18°－W・第２・３号がN－0°，第４号がN－8°－E・第５号がN－84°－Wで北方向か西方向であるのに対し，第１号のみが角度の違う方向を持っている。こうしてみると，第１号のみが，規模も大きく，方位も違うことから，他の４基と異なる性格を持つ遺構と思われる。第１号から第３号まで埋葬施設は発見されず，また，第４・５号はそれぞれ第110号土壙，第114号土壙が検出されたが，方形周溝との関連は見られず，現在のところ埋葬施設とは判定できない。時期は第５号が第11号住居跡を切って作られているので，弥生時代以降と考えられるが，正確な下限はつかめない。ただ周溝が曲線的になる第３号は古く，第１・４号は古墳時代のものと考えられる。方台部がほぼ平坦で，溝面も凹凸が少なく，溝自体も断面は「U」字状に掘り込まれ，平面形状も隅丸方形，隅丸長方形で整然とした形である。これらは，最近関東地方で多く検出されてきている方形周溝遺構と判断されるが同様の遺構は，石岡南台地区の兵崎，大谷津A，外山遺跡(昭和55・56年度調査）で検出され，また守谷町の北今城遺跡（昭和53年度調査）でも検出されている。

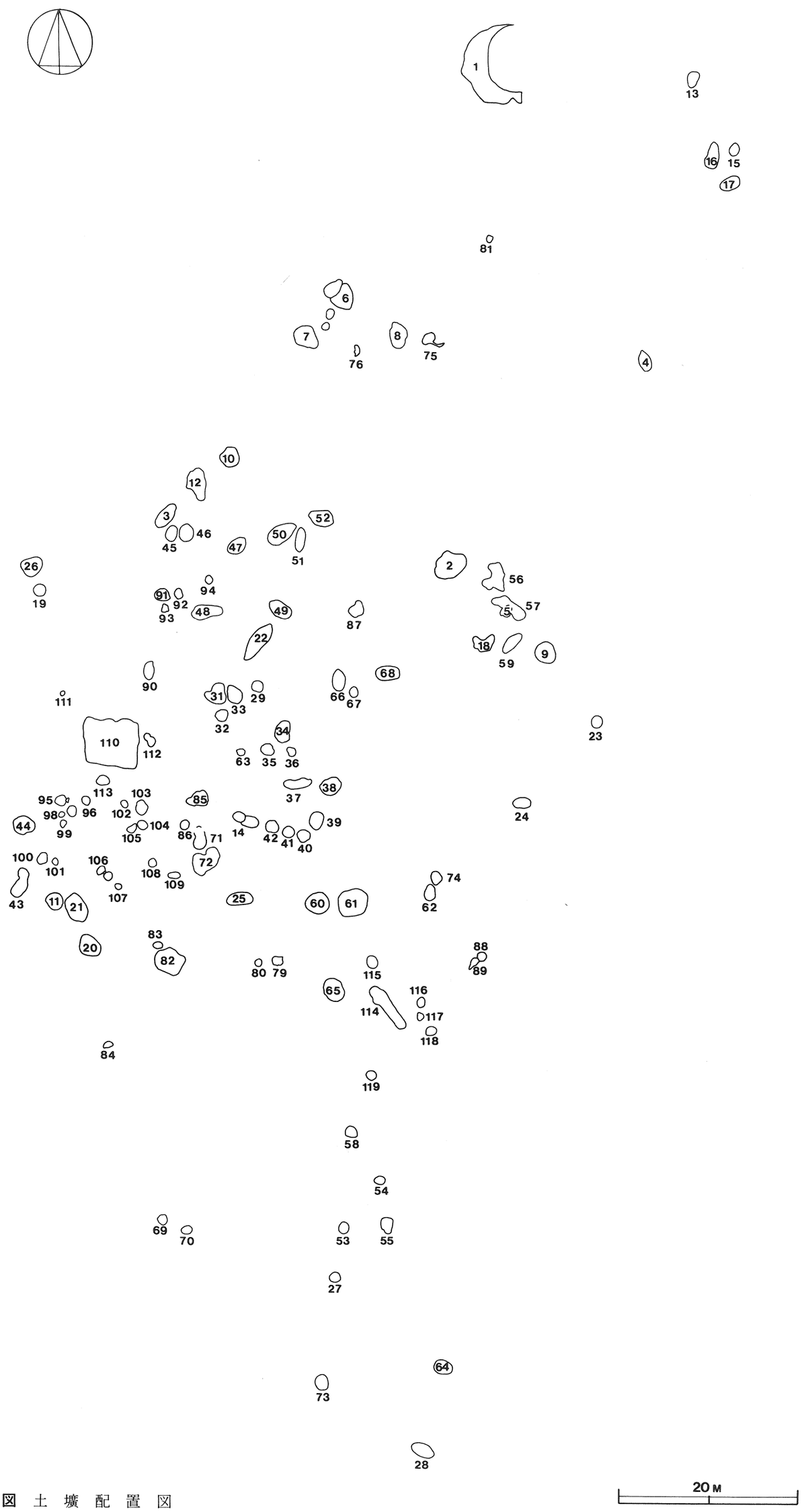
4　遺物について

(1)縄文土器

第１群　早期の土器

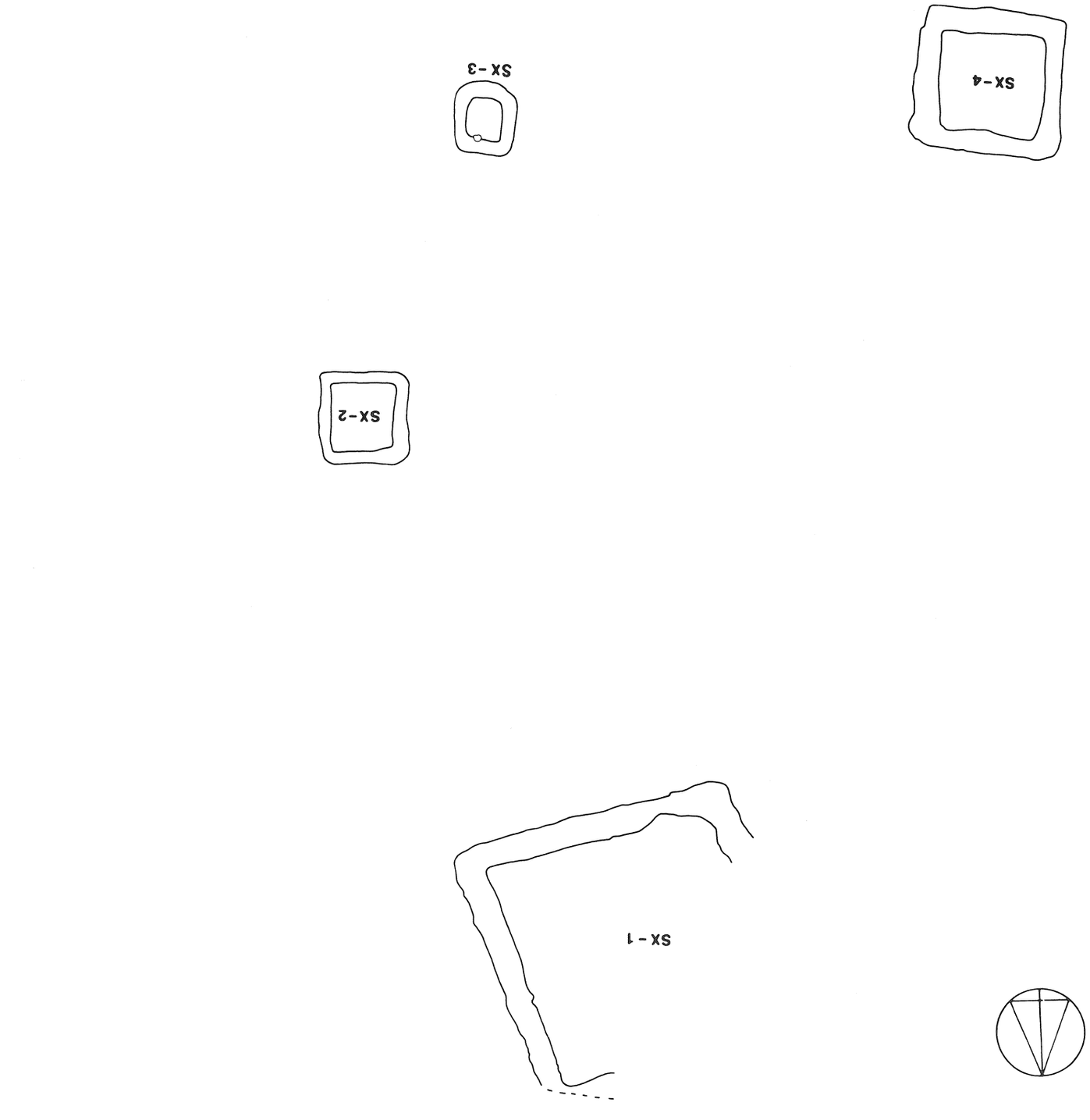
○田戸下層式土器

第10・20号住居跡の覆土から出土した。細い沈線の縦横の組み合わせ，比較的太めの横位の沈線を施したものであり，沈線文系土器と呼ばれるものである。焼きは良好で堅い。色調は，褐灰色，暗褐色系である。また，薄手の土器で，胎土に繊維を含んだものも数点出土した。第50号土壙の覆土より尖底部も出土している。口唇部に太いキザミを有するものもある。



第126図　土　壙　配　置　図

20 M



第127図　方形周溝遺構配置図

○茅山式土器

第29・33・41号住居跡や第36・37号住居跡の覆土から出土したもので，平底で，胴部に貝殻条痕を施している。これらは条痕文系土器といわれるもので，野島式，鵜ヶ島台式，茅山下層式，茅山上層式を含めて広義の茅山式土器とした。この土器の特徴は，土器の上・下部のつなぎをよくするため，胎土に植物の繊維を入れているが，焼成時に消失し，繊維痕が鬆のように穴があいて残っている。大部分は厚手であるが，薄手のものも少量出土している。また，表裏両方に条痕を付けているものや，条痕の方向を変えて格子目状に施しているものもある。焼成は比較的良く，よく練られた胎土で，色は褐色が主である。第26号土壙の覆土からは，口唇直下にキザミ目を付けた土器が出土している。

第２群　前期前半の土器

第22～24・28・32・37号住居跡から出土した。斜縄文が施文され，２段のＬ $\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$ の縄文が多い。他に３段Ｌ $\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$ $\left\{\begin{matrix}R\\R\\R\\R\end{matrix}\right.$ や，羽状縄文，付加縄文などもある。縄文を地文とし，その上に半截竹管による沈線文を付けたものもある。総じて繊維を多量に含み，胎土中に砂を含んでいる。また，礫，雲母を含むものも若干出土している。焼成はさほど良くない。色調は黒褐色系が多い。第36号住居跡の覆土からは半置半転の縄文，第20号住居跡からは結束らしき縄文を施した土器が出土している。縄文時代前期前半にあたる黒浜式の土器である。

第３群　前期後半の土器

○諸磯ａ式土器

第18・21号住居跡，第20・25・29・31・36・38・39・40・44号住居跡，第61号土壙の覆土から出土した。地文にＲ $\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$ の縄文を持ち，半截竹管による爪形文，平行線文などを付けている。また，竹管をそのまま使用した円形竹管文，半截竹管による助骨文，木の葉文（柳の葉のように幅細の）などを施文している土器もある。胎土に繊維の混入のないのが普通であるが，混入されているものも少量出土している。量的には円形竹管文を施したものが一番多く出土している。

○諸磯ｂ式土器

ａ式の土器より厚手で，細い粘土紐を貼り付け，斜状にキザミを施した浮線文を付ける特徴を持つ。また半截竹管による平行線文，縄文を施文しただけのもの，縄文の結束などもこのグループに入れた。第21・38・43号住居跡の覆土から出土している。諸磯式は前期前半の土器と比べると竹管による施文と浮線文に代表される。

○浮島Ⅰ式土器

施文の特徴から①まばらな縦・斜行の撚糸文，②地文は無いが平行沈線（横・斜行・孤），有節平行沈線を持つ。③撚糸文を地文に平行沈線，有節平行沈線を持つもの，④波状貝殻文を地文に平行沈線（コンパス文）を持つもの，⑤変形爪形文，⑥まばらな撚糸文を地文に変形爪形文を持つもの，⑦稚拙で浅い波状貝殻文，等をこのグループに入れた。大部分の住居跡，土壙から出土している。最も多いのは③の平行沈線を持つものである。地文に斜行撚糸を格子目状に付けた土器も出土した。

○浮島Ⅱ式土器

⑧変形爪形文（胴部以下は波状貝殻文を有す），⑨波状貝殻痕，⑩地文は無文で輪積痕等の施文をこのグループに入れた。浮島Ⅰ式よりは少ないが，９～10軒の住居跡の覆土から出土した。⑨の波状貝殻痕は，浮島Ⅰ式の⑦より波をせん明で豪快に付けていて，Ⅱ式の土器の中では量的に最も多く出土している。

○浮島Ⅲ式土器

施文の特徴で，⑪連続三角文，⑫波状貝殻文（腹縁の線がはっきりしているもの）をこのグループに入れた。第５・６号住居跡の床，第21・36号住居跡の覆土から出土している。量は浮島Ⅰ・Ⅱ式に比べずっと少ない。

第４群　中期後半の土器

第16・17・39・44号住居跡，第11号土壙の覆土から出土した。太い縦の沈線で区画文を作り，前後に，斜行の縄文を施文したり，沈線間を磨消文様で充塡している。胎土に雲母，礫などを含んで，灰褐色を呈している。加曽利Ｅ式の新しい部類に属する。土器片を覆土から出土しただけで，遺構は検出されていない。

(2)弥生土器

○磐船山式土器

第11号住居跡の覆土から出土した。胴部破片は２本以上の竹管による格子目文を付けている。また２～３段の綾絡文を施文したものもある。次の長岡・十王台式の土器に比べると少量である。

○長岡式土器

第17号住居跡の床面より出土する胴部破片が多く，斜行縄文を施しているのが多いが，ほかに

羽状縄文を施文したものもある。格子目文の中で櫛描きによるものは，この類に入れた。第39号住居跡の覆土からも出土した。

○十王台式土器

第11・19号住居跡の床面，第17～19号住居跡の覆土から出土した。口唇部にスリット（キザミ）を持つもの，縄文原体の押捺などがある。外山遺跡などに出土した複合口縁は少ない。頸部以下は櫛目による２～３条の懸垂文を付け，土器円周を３～６区画割りし，区画された間は無文かあるいは，櫛目の波状文をうめている。胴部には付加縄文で羽状を呈しているものや，斜行縄文を付けている。また胴部には，櫛による斜行線文を付けるものも出土した。底部は布目痕を残すものが１点出土した。

○土師器

第26・27号住居跡より出土した。坏・鉢・壺・甕等である。完形品は少数で坏２点であり，大部分は破片である。一個体のみ回転台使用とおぼしきものが出土したが，他はすべてロクロは使用されてない。坏は平底が多く，鉢は丸底である。壺は口縁部が「く」の字状に外反し，肩部がわずかに張る。甕は胴長で，口縁部が外反する。大部分は，縦・横・斜めのヘラなどで整形してある。またヘラ削りも少ない。朱彩を施したもの１点，内黒土器が４点含まれている。すべて鬼高式土器である。

参考文献

茨城県教育財団「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」昭和57年

『日本の考古学　II　縄文時代』　河出書房新社　昭和53年

山岸良二　『方形周溝墓』　ニューサイエンス社　昭和56年

札幌市教育委員会「札幌市文化財調査報告書ＸＶIII」昭和54年

茨城県教育財団「南守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」昭和56年

甲野勇　『縄文土器の話』　学生社　昭和51年

野田市郷土博物館「野田市北前貝塚」昭和54年

茨城県　「茨城県史料考古資料編先土器・縄文時代」昭和49年

茨城県　「茨城県史料考古資料編　古墳時代」　昭和49年

寺門義範「関東地方東部浮島式土器群の再検討」昭和52年

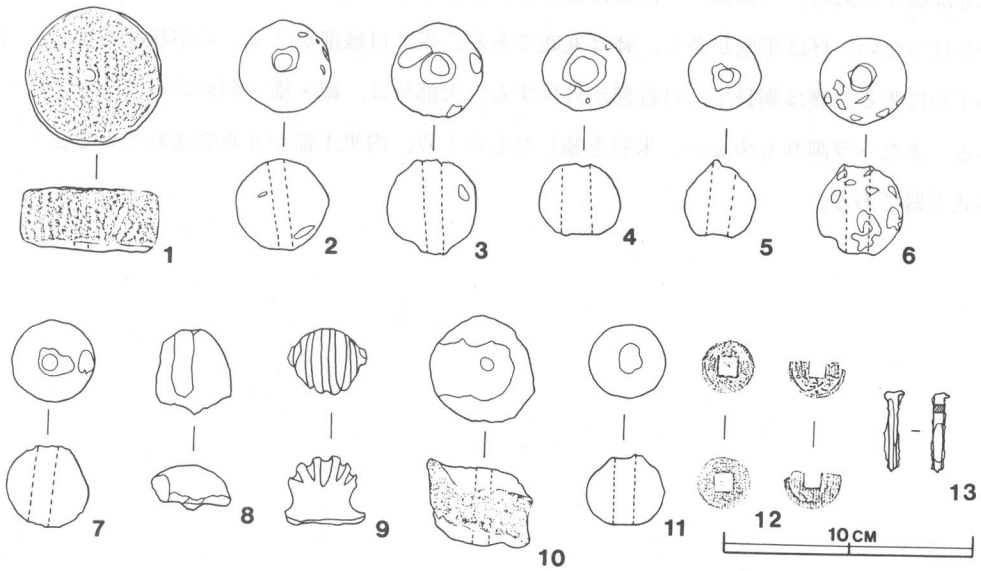
小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成図録・本編』東京堂出版　昭和48年

茨城県教育財団「龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書６」昭和57年

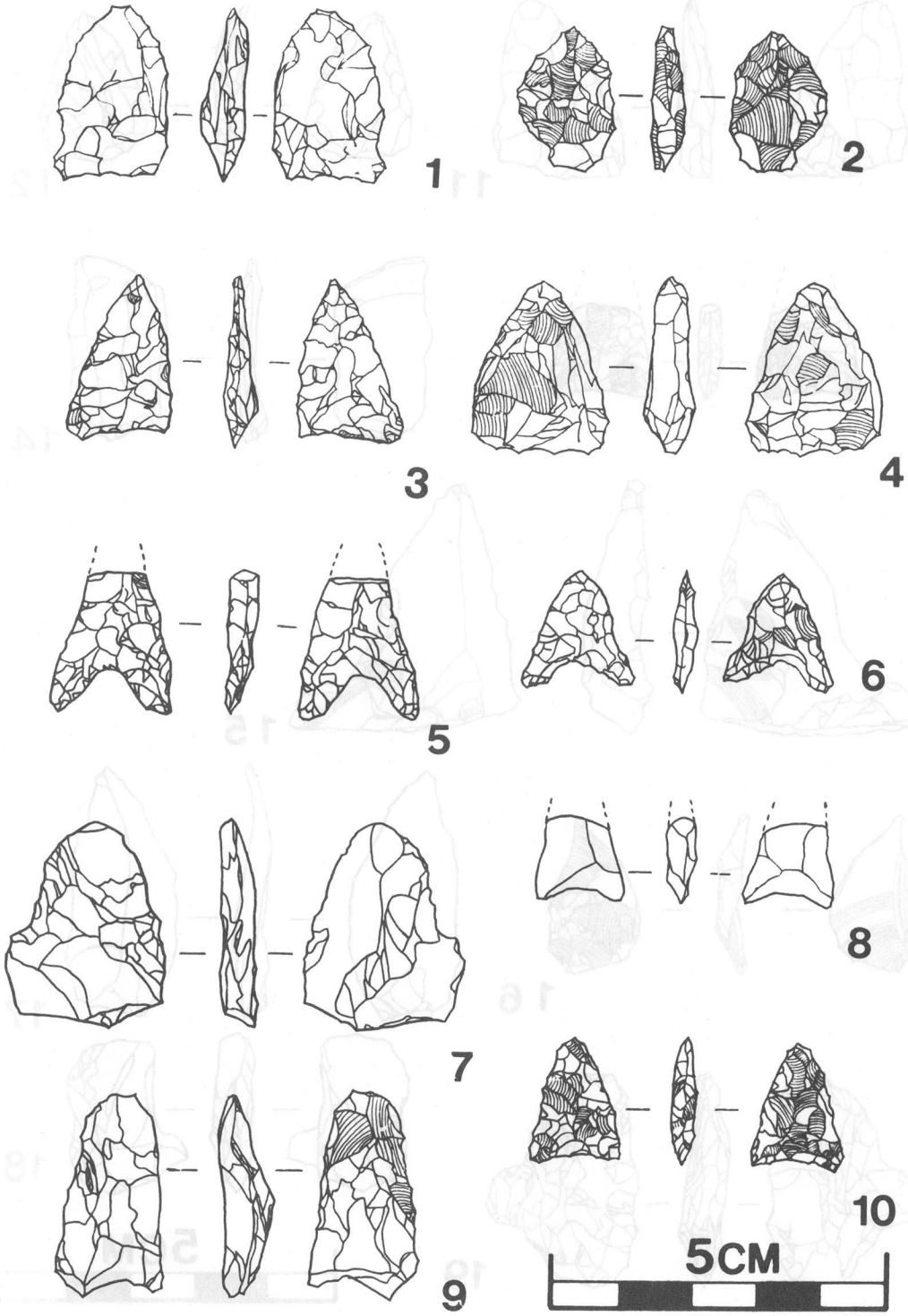
佐藤次男　「弥生式土器一関東　東関東１・２」『考古学ジャーナル』147号　昭和53年

杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成図録・本編３』東京堂出版　昭和48年

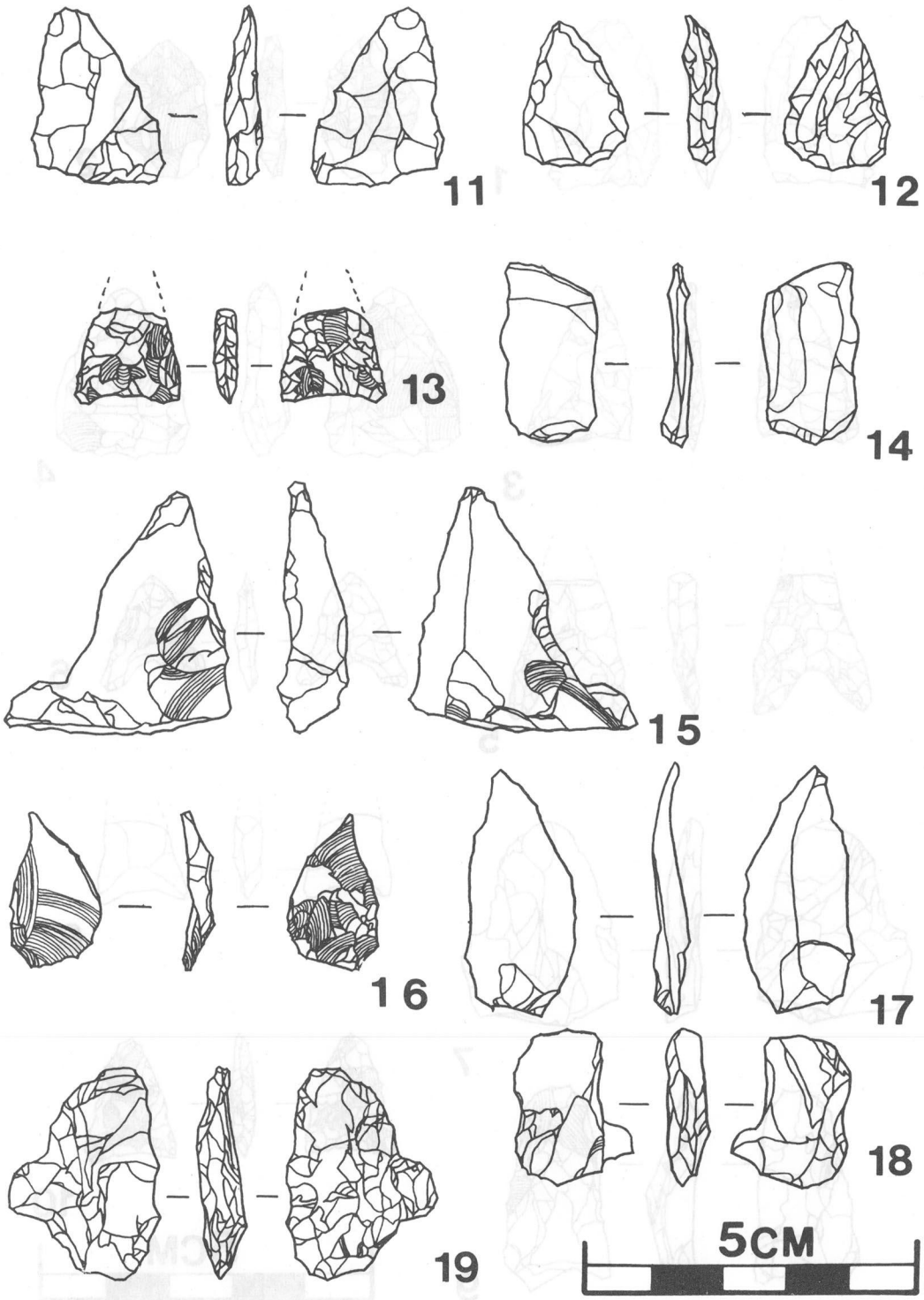
『日本の考古学　Ⅴ　古墳時代下』　河出書房新社　昭和５３年



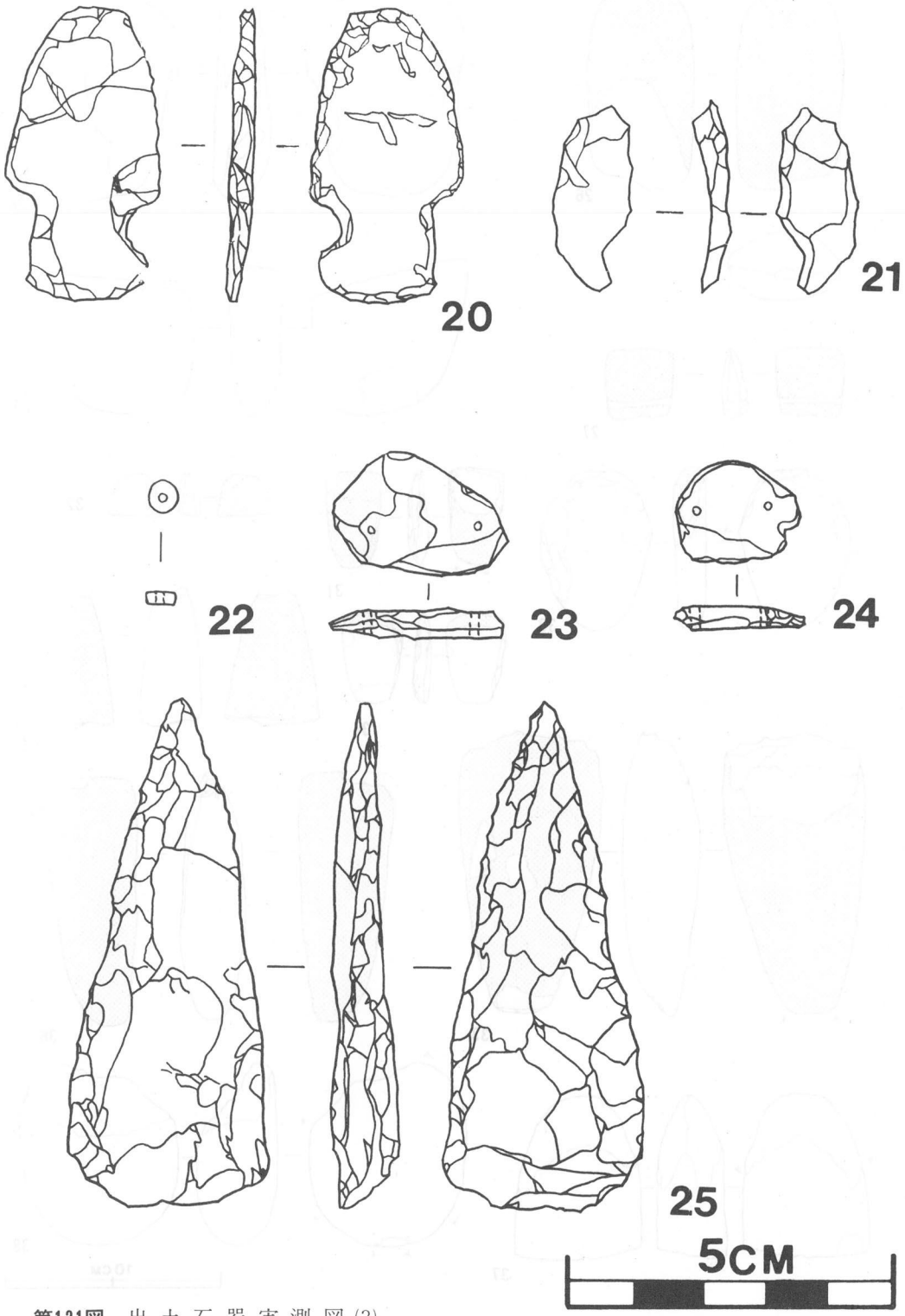
第128図　出土、土製品、鉄製品実測図



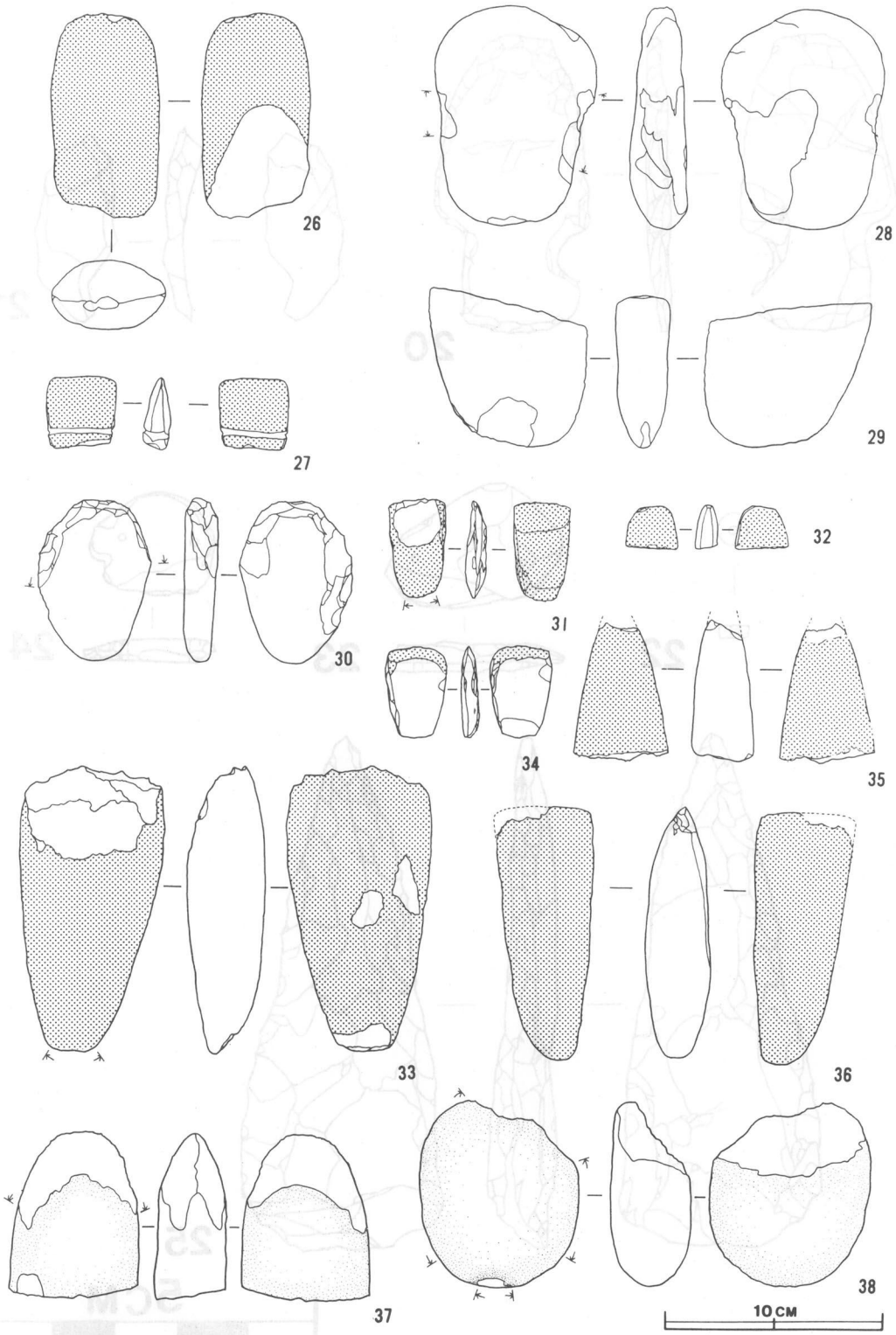
第129図　出土石器実測図(1)



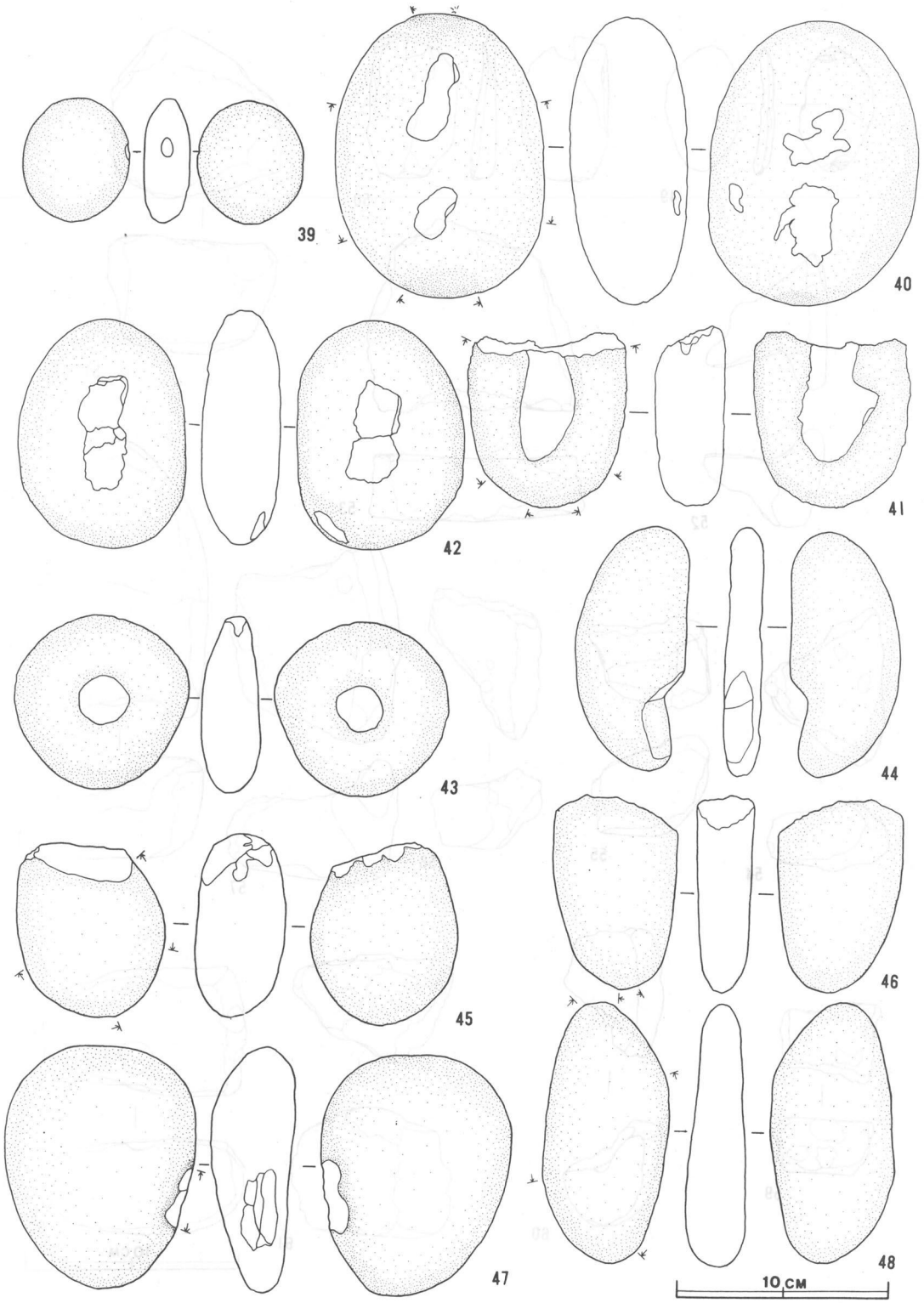
第130図　出土石器実測図(2)



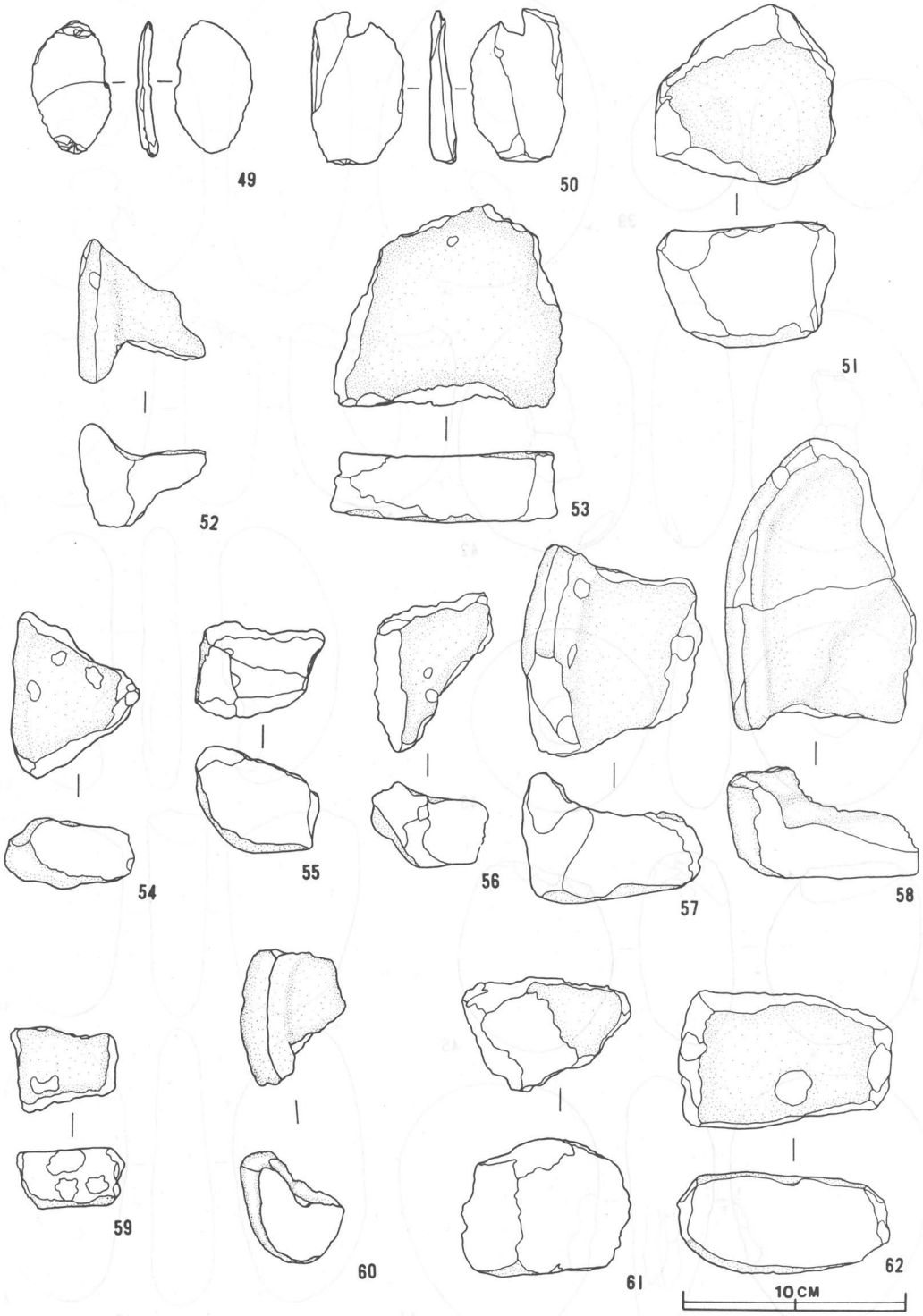
第131図 出土石器実測図(3)



第132図　出土石器実測図(4)



第133図 出土石器実測図(5)



第134図 出土石器実測図(6)

石 器 一 覧 表

No.	器　種	出土地	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　質	挿図番号
1	石　鏃	SI－5	2.4	1.6	0.6	4	チャート	第129図
2	〃	SI－6	2.1	1.4	0.5	1	黒曜石	〃
3	〃	〃	2.5	1.8	0.7	4	チャート	〃
4	〃	〃	2.2	1.4	0.5	1	〃	〃
5	〃	SI－27	(2.1)	1.7	0.4	3	〃	〃
6	〃	SI－32	1.8	1.7	0.3	0.3	頁　岩	〃
7	〃	SI－36	3.0	2.3	0.5	3	輝緑凝灰岩	〃
8	〃	Sk－21	(1.3)	1.3	0.4	0.5	シルト	〃
9	〃	$D1c_7$	2.9	1.6	0.8	2	チャート	〃
10	〃	$D1a_6$	1.9	1.3	0.3	1	黒曜石	〃
11	〃	$E1a_0$	2.6	1.9	0.5	2	蛇紋岩	第130図
12	〃	$D2g_3$	2.2	1.5	0.5	1	チャート	〃
13	〃	$D1h_0$	(1.3)	1.7	0.4	1	〃	〃
14	剝　片	SI－26	3.5	3.4	1.0	7	蛇紋岩	〃
15	〃	〃	2.6	1.4	0.4	0.5	チャート	〃
16	〃	SI－43	2.3	1.3	0.5	1	黒曜石	〃
17	〃	$C2i_0$	3.7	1.6	0.6	2	頁　岩	〃
18	石　匙	SI－5	2.2	1.7	0.7	1	チャート	〃
19	〃	SI－6	3.1	2.1	0.6	6	蛇紋岩	〃
20	〃	SI－36	4.4	2.2	0.4	5	チャート	第131図
21	〃	$B2e_0$	2.8	1.2	0.6	1	〃	〃
22	臼　玉	SI－26	0.4		0.2	0.5	滑　石	〃
23	石製模造品	〃	1.7	2.6	0.3	1.5	〃	〃
24	〃	〃	1.5	1.9	0.3	1	〃	〃
25	石　槍	$D2f_1$	7.7	3.1	1.1	21	頁　岩	〃
26	石　斧	SI－15	9.0	4.9	3.1	234	流紋岩	第132図
27	〃	SI－28	3.1	3.2	1.2	20	頁　岩	〃
28	〃	SI－38	9.9	7.3	2.6	241	流紋岩	〃
29	〃	SK－65	6.7	7.3	2.5	127	班励岩	〃
30	〃	SX－4	7.2	5.1	1.5	76	砂　岩	〃

No.	器　種	出土地	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石　質	挿図番号
31	石　斧	C2g4	4,4	2.6	0.9	18	流紋岩	第132図
32	〃	D2d3	(1.9)	2.4	1.1	10	〃	〃
33	〃	D1a7	13.0	6.6	3.6	423	砂　岩	〃
34	〃	D1a8	4.1	2.8	0.8	15	流紋岩	〃
35	〃	D1b8	(6.3)	4.4	2.8	111	安山岩	〃
36	〃	C2f2	11.4	4.5	3.0	225	流紋岩	〃
37	〃	B2j0	7.5	5.8	3.1	205	砂　岩	〃
38	高支　石	SI－6	8.1	7.2	3.7	262	両雲母花崗石	〃
39	磨　石	SI－36	5.6	5.0	2.1	90	砂　岩	第133図
40	高支　石	SI－38	13.3	9.8	5.5	1016	〃	〃
41	〃	SI－40	8.1	7.5	3.3	230	安山岩(溶岩)	〃
42	〃	SK-43	10.7	7.8	3.7	346	安山岩	〃
43	磨　石	SX－1	8.0		2.8	364	硬砂岩	〃
44	高支　石	〃	8.3	7.9	4.1	233	砂　岩	〃
45	磨　石	C1h9	11.3	5.1	1.7	150	〃	〃
46	高支　石	C1h1	8.9	5.9	2.7	200	〃	〃
47	〃	C2e1	11.3	8.8	3.9	502	〃	〃
48	磨　石	C1j7	12.2	5.9	2.9	235	〃	〃
49	石　核	SI -37	6.7	4.2	1.2	30	泥　岩	第134図
50	〃	SX－4	5.8	3.5	0.8	15	〃	〃
51	石　皿	SI－21	8.0	7.9	5.2	333	安山岩(溶岩)	〃
52	〃	SI－37	6.2	5.6	4.6	62	〃	〃
53	〃	SI－38	9.8	8.9	3.1	250	〃	〃
54	〃	〃	7.4	6.7	3.1	60	〃	〃
55	〃	〃	4.2	5.5	4.7	68	〃	〃
56	〃	SI－40	7.0	5.3	3.7	61	〃	〃
57	〃	〃	8.0	9.3	5.7	260	〃	〃
58	〃	〃	12.8	8.6	4.9	275	安山岩	〃
59	〃	SI－43	4.7	3.6	2.5	37	安山岩(溶岩)	〃
60	〃	SK-61	4.7	6.0	5.0	63	〃	〃
61	〃	C1i7	6.1	9.5	4.4	346	砂　岩	〃
62	〃	〃	7.5	5.0	6.1	192	安山岩(溶岩)	〃